

伊丹市埋蔵文化財調査報告書

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

2003年3月

伊丹市教育委員会

序

平成7年1月17日の阪神・淡路大震災によりまして、市内の文化財にも大きな被害が生じました。重要文化財旧岡田家住宅は、屋根が落下し建物全体が大きく傾くなど、全面解体修理を余儀なくされました。こうした文化財建造物への被害は、清酒発祥の地伊丹の酒蔵のほか、市内に所在します神社や寺院に対しても同様で、奈良時代創建の行基ゆかりの昆陽寺をはじめ、有岡城と関係の深い伊丹郷町の各寺院では本堂の建替えや大規模な補修が必要となりました。

この報告書は、震災により本堂などが建替えられた寺院の発掘調査の記録をまとめたものであります。本市では、その場所が遺跡に該当しております寺院につきましては事前に発掘調査を行い、文化財の保護を図ってまいりました。再建にご苦勞されていたご多忙の折、文化財保護の主旨をご理解され、調査の実施にご協力いただきましたご住職ほか関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

本書所収の調査成果のうち、万徳寺の調査と一乗院の発掘調査につきましては、全国の都道府県や政令指定都市から派遣されました支援職員により行われたものであります。震災直後の本市では、震災復興事業に伴います文化財の保存や調査に追われておりました。そうした中、派遣職員の方々の支援は大変心強いものでした。

最後に、本書がより多くの方々に活用されることを祈念し、また発掘調査から本書の刊行に至るまでの間、ご協力いただきました多くの方々に感謝申し上げまして巻頭の挨拶といたします。

平成15年3月

伊丹市教育委員会
教育長 脇本 芳夫

例 言

1. 本書は、平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」の震災復旧・復興事業に伴う緊急調査として実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 本書に収めた調査成果及び調査期間は下記のとおりである。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第153次調査	平成7年5月22日～6月21日
〳 第154次調査	平成7年6月7日～8月4日
〳 第160次調査	平成7年10月30日～12月13日
〳 第165次調査	平成7年11月13日～平成8年1月26日
〳 第170次調査	平成8年6月20日～8月12日
昆陽寺境内遺跡第8次調査	平成9年4月30日～6月19日
〳 第18次調査	平成11年11月22～11月29日

3. 発掘調査及び整理作業は伊丹市教育委員会生涯学習部で行った。組織は次のとおりである。

整理作業（平成14年度）

生涯学習部長 石割 信雄
次長 加藤 哲三
副主幹 福井 収
主査 大路 和彦
主査 小長谷正治
佐藤 友治
中畔明日香
嘱託 細川 佳子

調査補助員

岡野理奈 瀬川眞美子 三輪隆子 村下佳子 高須賀由美 沖高広子 木村雅之 上谷浩司
中畔明日香（旧姓・上村）

4. 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第165次、昆陽寺境内遺跡第8次調査については「阪神・淡路大震災に関わる埋蔵文化財調査の支援に関する協定」に基づき、兵庫県教育委員会より埋蔵文化財職員の派遣を得て実施した。県派遣職員は、他府県の教育委員会からの支援職員を主体に構成されている。

- ・有岡城跡・伊丹郷町遺跡第165次調査 斎藤吉弘（兵庫県教育委員会・宮城県派遣）
谷口哲一（兵庫県教育委員会・山口県派遣）
- ・昆陽寺境内遺跡第8次調査 藤井保夫（兵庫県教育委員会・和歌山県派遣）
船越重伸（兵庫県教育委員会・三重県派遣）

5. 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第153次・170次については、法巖寺敷地内での隣接する調査区であることから、まとめて報告している。

6. 整理作業は、発掘担当者の下、伊丹市埋蔵文化財臨時職員が遺物の実測・トレースなどを行った。但し、遺物実測は瀬川眞美子、三輪隆子、岡野理奈、高須賀由美、丸岡タカミ、吉川敬子、岩田朱美、遺物・遺構のトレースは丸岡タカミ、三輪隆子、出土遺物観察表は吉川敬子、写真図版の作成は小長谷正治、瀬川眞美子、吉川敬子が行った。

7. 報告書の執筆は各々の発掘担当者が分担して行った。執筆者の氏名は文末に記した。なお、昆陽

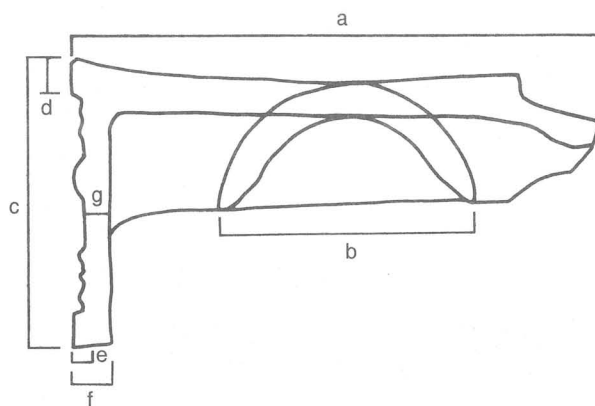
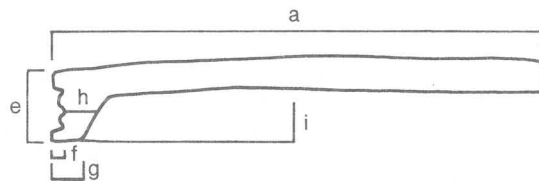
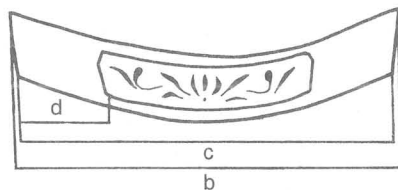
寺境内遺跡第8次調査の遺物については瀬川眞美子が担当した。

8. 本書の編集作業は小長谷正治が行った。

9. 出土遺物及び発掘調査資料は伊丹市教育委員会にて保管している。広く利用されたい。

凡 例

1. 遺構実測には、国土座標第V系を使用した。水準高は有岡城跡・伊丹郷町遺跡第160次調査では大阪湾平均海水値（O.P.）を使用し、その他の調査においては東京湾平均海水値（T.P.）を用いている。
2. 現地の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」を準拠した。
3. 遺物の挿図番号は、写真図版番号と一致させている。
4. 土器実測において、中心線を一点破線で示しているものは、反転復元していることを表す。
5. 瓦の計測箇所は次のとおりである。



軒平瓦

- a. 長さ
- b. 上弦幅
- c. 下弦幅
- d. 脇区幅
- e. 瓦当幅
- f. 外縁高
- g. 瓦当側面厚
- h. 瓦当厚
- i. 顎深

軒丸瓦

- a. 長さ
- b. 幅
- c. 瓦当径
- d. 外縁幅
- e. 外縁高
- f. 瓦当側面厚
- g. 瓦当厚

参考文献

- 稲原昭嘉 「明石播鉢の編年について」 『近世の実年代資料』 関西近世考古学研究会 2000年
- 江戸遺跡研究会編 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房 2001年
- 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」 『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会 1982年
- 大橋康二 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1993年
- 大橋康二他 『別冊太陽 実物大そば猪口事典』 平凡社 2002年
- 大橋康二他 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会 2000年
- 大橋康二他 『国内出土の肥前陶磁』東日本の流通をさぐる 九州近世陶磁学会 2001年
- 大橋康二他 『国内出土の肥前陶磁』西日本の流通をさぐる 九州近世陶磁学会 2002年
- 大平茂 「近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年」 『下相野窯址』 兵庫県教育委員会 1992年
- 岡崎正雄他 『中尾城跡』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XI 兵庫県教育委員会 1989年
- 小野正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」 『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会 1982年
- 尾崎葉子・村上伸之・野上建紀 『赤絵町』 有田町教育委員会 1990年
- 川口宏海 「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」 『榑崎彰一先生古希記念論集』 1998年
- 川口宏海 「兵庫県伊丹郷町遺跡出土の煙管について」 『大手前大学社会文化学部論集』第1号 大手前大学 2001年
- 関西陶磁史研究会 『近世信楽焼をめぐって』研究集会資料集 2001年
- 古代の土器研究会編 『古代の土器1—都城の土器集成』 古代の土器研究会 1992年
- 『千駄ヶ谷五丁目遺跡』2次調査報告書 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998年
- 『汐留遺跡I』旧汐留貨物駅跡地内の調査 東京都埋蔵文化財センター 1997年
- 菅原正明 「西日本における瓦器生産の展開」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989年
- 武内雅人 「丸瓦製作技術からみた近世瓦の生産と流通」 『ヒストリア』第173号 大阪歴史学会 2001年
- 田口昭二 『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニュー・サイエンス社 1983年
- 田中一廣 「泉州名産『焼塩壺』の足跡」 『関西近世遺跡の在出土器の生産と流通』 関西近世考古学研究会 1992年
- 福澤邦夫 『千早赤阪の石造文化財I』千早赤阪村文化財調査報告書 第4集 千早赤阪村教育委員会 1994年
- 坪井利弘 『図鑑瓦屋根』 理工学社 1977年
- 中島由美 『古伊万里 蕎麦猪口・酒器1000』 講談社 2001年
- 中西通 『古丹波』 丹波古陶館 1971年
- 中村浩他 『陶邑Ⅲ』 大阪府教育委員会 1978年
- 中村瑞隆・石村喜英・三友健容 『梵字事典』 雄山閣 1993年
- 難波洋三 「徳川氏大坂城期の炮烙」 『難波宮址の研究 第九』 (財)大阪市文化財協会 1992年
- 日本貨幣商協同組合 『日本貨幣カタログ』 1996年版
- 乗岡実 「備前焼播鉢の編年について」 『第3回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会 2000年
- 乗岡実 「備前焼大甕編年レクチャー資料」 『関西近世考古学研究Ⅸ』 関西近世考古学研究会 2001年
- 長谷川真 「近世丹波系播鉢の変遷とその系譜関係」 『関西近世考古学研究会Ⅷ』 2000年
- 藤井直正・藤本史子他 『大坂城三の丸跡の調査Ⅲ』 大手前女子大学史学研究所 1988年
- 藤澤良祐他 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤澤良祐他 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- 藤澤良祐他 『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジア的視野から—』資料集 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2000年
- 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
- 山崎敏昭・石神由貴他 『三田焼の研究 三輪明神窯跡出土土型①』 ふるさと三田第21集 三田市教育委員会 1999年

目次

序文
例言
凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 震災被害と発掘調査に至る経過	1
第2節 遺跡の概要	2
第2章 発掘調査の成果	7
第1節 法巖寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第153・170次調査—	7
第2節 正善寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第154次調査—	45
第3節 大蓮寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第160次調査—	69
第4節 万徳寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第165次調査—	87
第5節 一乗院の調査—昆陽寺境内遺跡第8次調査—	131
第6節 成就院の調査—昆陽寺境内遺跡第18次調査—	159

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第18図 石組遺構、溝1、土坑21・39平面・断面図	24
第2図 有岡城跡・伊丹郷町遺跡、昆陽寺境内遺跡調査箇所位置図	4	第19図 井戸1平面・断面図	25
第3図 第153・170次調査区位置図	7	第20図 井戸1、土坑1出土遺物	26
第4図 調査区設定図	8	第21図 瓦溜まり1平面・断面図	27
第5図 第153次調査平面図・土層図	9	第22図 瓦溜まり1出土遺物	28
第6図 井戸2、土坑8・58平面・断面図、井戸2出土遺物	11	第23図 土坑84、埋桶1平面・断面図	29
第7図 溝5・11平面・断面図	12	第24図 土坑84・85・94、P34、水琴窟2出土遺物	30
第8図 土坑17・29・30平面・断面図	13	第25図 埋甕2・水琴窟1、埋甕5～7平面・断面図	31
第9図 土坑17・29・30出土遺物	14	第26図 埋甕8、水琴窟3平面・断面図	32
第10図 土坑124・125平面・断面図	15	第27図 埋甕2、水琴窟1、埋甕5～7出土遺物	33
第11図 土坑5・45・124、P92出土遺物	16	第28図 埋甕8、包含層出土遺物	34
第12図 溝3出土遺物(1)	17	第29図 土坑24、礎石1・2出土遺物	35
第13図 溝3出土遺物(2)	18	第30図 第153・170次調査区の集成図	37
第14図 第170次調査平面図・土層図	19	第31図 第154次調査区位置図	45
第15図 溝7・8、SX1平面・断面図	21	第32図 調査区設定図	46
第16図 溝7出土遺物	22	第33図 第1・2遺構面平面図・土層図	47
第17図 溝7・8、SX1、土坑21・39・93、石組遺構出土遺物	23		

第34図	土坑33・58平面・断面図	49	土坑1・第2トレンチ溝5出土遺物	95
第35図	土坑33出土遺物(1)	50	第69図	焼土土坑1・2、土坑11平面・断面図
第36図	土坑33出土遺物(2)	51	第70図	第2遺構面平面図
第37図	土坑33出土遺物(3)	52	第71図	焼土土坑1出土遺物(1)
第38図	土坑58・73出土遺物	53	第72図	焼土土坑1出土遺物(2)
第39図	土坑42・44・47平面・断面図	54	第73図	焼土土坑1出土遺物(3)
第40図	土坑42・44・47・52・62出土遺物	55	第74図	焼土土坑2出土遺物
第41図	井戸1平面・断面図	56	第75図	第2トレンチ土坑1・6出土遺物
第42図	井戸1出土遺物(1)	56	第76図	土坑9出土遺物(1)
第43図	井戸1出土遺物(2)	57	第77図	土坑9出土遺物(2)
第44図	井戸1出土遺物(3)	58	第78図	土坑10・11出土遺物
第45図	礎石建物跡平面・断面図	59	第79図	土坑12・19・33出土遺物
第46図	土坑1・礎石6・7、P24・25・31出土遺物	60	第80図	土坑47・49、P70・72出土遺物
第47図	土坑11平面・断面図、出土遺物	61	第81図	P74平面・断面図、出土遺物
第48図	土坑21、瓦溜まり5平面・断面図、出土遺物	62	第82図	第1遺構面平面図
第49図	第160次調査区位置図	69	第83図	礎石建物跡出土遺物
第50図	調査区設定図	70	第84図	井戸1平面・断面図
第51図	第1・2遺構面平面図・土層図	71	第85図	井戸1出土遺物
第52図	井戸1平面・断面図	73	第86図	水琴窟1平面・断面図、出土遺物
第53図	礎石建物跡平面・断面図	74	第87図	池1平面・断面図
第54図	土坑21・23平面・断面図	75	第88図	池1・2、埋桶1出土遺物
第55図	土坑21・23・34・35・37・38・45出土遺物	76	第89図	昆陽寺境内遺跡第8次調査区位置図
第56図	溝1・2平面・断面図	77	第90図	調査区設定図
第57図	溝1・2、土坑7・43出土遺物	78	第91図	土坑27・28・29出土遺物
第58図	埋甕出土遺物	79	第92図	土層図
第59図	竈平面・断面図	80	第93図	平面図
第60図	土坑2・竈・焼土土坑、礎石1出土遺物	81	第94図	土坑1平面・断面図、出土遺物
第61図	土坑1・2平面・断面図	82	第95図	土坑2平面・断面図、出土遺物
第62図	第165次調査区位置図	87	第96図	土坑3・4・5・6遺物出土状況
第63図	調査区設定図	88	第97図	土坑3・4・5・6・7・8・9・10・12・13・14・19出土遺物
第64図	土層図	89	第98図	埋甕遺構平面・断面図
第65図	第3遺構面平面図	91		
第66図	掘立柱建物跡平面・断面図	93		
第67図	土坑50・51、P120出土遺物	94		
第68図	第1トレンチ土坑1平面・断面図、			

第99図	埋甕遺構出土遺物	142
第100図	土坑22出土遺物	143
第101図	土坑22・23・24・25・26出土遺物	144
第102図	溝1・2平面図、溝1出土遺物(1)	145
第103図	溝1出土遺物(2)	146
第104図	溝1出土遺物(3)	147
第105図	溝1出土遺物(4)	148
第106図	溝2出土遺物	149
第107図	包含層出土遺物(1)	150
第108図	包含層出土遺物(2)	151

第109図	昆陽寺境内遺跡第18次調査区位置図	159
第110図	調査区設定図	160
第111図	第1トレンチ上・下面遺構平面図・土層図	161
第112図	第2トレンチ上・下面遺構平面図・土層図	162
第113図	第3トレンチ上・下面遺構平面図・土層図	163
第114図	出土遺物	164
第115図	「攝津名所圖會」下巻	165

図版目次

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第153次調査

図版1-1	調査区遠景
図版1-2	遺構面全景
図版2-1	溝5
図版2-2	溝5断面
図版2-3	溝11
図版3-1	溝11断面
図版3-2	土坑17 甕出土状況
図版3-3	溝3
図版4	出土遺物

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第170次調査

図版5-1	遺構面全景
図版5-2	溝7・8
図版5-3	溝7・8断面
図版6-1	溝1、石組遺構
図版6-2	石組遺構
図版6-3	溝1断面
図版7-1	埋桶1検出状況
図版7-2	埋甕2・水琴窟1検出状況
図版7-3	埋甕6 甕出土状況
図版8-1	埋甕7 甕出土状況
図版8-2	水琴窟2
図版8-3	水琴窟3
図版9	出土遺物(1)
図版10	出土遺物(2)

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第154次調査

図版11-1	第1遺構面全景
図版11-2	第2遺構面全景
図版12-1	土坑33
図版12-2	土坑73断面
図版12-3	土坑58
図版12-4	土坑44断面
図版13-1	井戸1
図版13-2	土坑1、礎石1
図版13-3	礎石5
図版13-4	礎石6
図版14-1	土坑11断面
図版14-2	土坑21
図版14-3	石仏検出状況
図版14-4	石仏検出状況
図版15	出土遺物(1)
図版16	出土遺物(2)

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第160次調査

図版17-1	第1遺構面全景
図版17-2	土坑35
図版17-3	埋甕出土状況
図版18-1	第2遺構面全景
図版18-2	竈
図版18-3	礎石1
図版18-4	礎石3

図版18-5 礎石 9
 図版19 出土遺物 (1)
 図版20 出土遺物 (2)
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第165次調査
 図版21-1 第3遺構面全景
 図版21-2 第2トレンチ第3遺構面全景
 図版21-3 第1トレンチ第3遺構面全景
 図版22-1 掘立柱建物跡
 図版22-2 第1トレンチ 土坑1
 図版22-3 第2トレンチ 溝5
 図版23-1 第2遺構面全景
 図版23-2 第2遺構面北側
 図版23-3 第2遺構面南側
 図版24-1 土坑10
 図版24-2 土坑11断面
 図版24-3 土坑19断面
 図版24-4 土坑33断面
 図版25-1 土坑47
 図版25-2 P74 甕出土状況
 図版25-3 丸瓦組み暗渠
 図版25-4 土坑23 石造品出土状況
 図版26-1 第1遺構面全景
 図版26-2 第1遺構面北側
 図版26-3 第1遺構面南側
 図版27-1 礎石5断面
 図版27-2 礎石3断面
 図版27-3 P26断面
 図版27-4 井戸1
 図版28-1 水琴窟1断面
 図版28-2 水琴窟2断面
 図版28-3 池1

図版28-4 池2
 図版29 出土遺物 (1)
 図版30 出土遺物 (2)
 図版31 出土遺物 (3)
 図版32 出土遺物 (4)
昆陽寺境内遺跡第8次調査
 図版33-1 遺構面全景
 図版33-2 第1トレンチ東側全景
 図版33-3 第1トレンチ西側全景
 図版34-1 土坑1 土師皿出土状況
 図版34-2 土坑2 土師皿出土状況
 図版34-3 土坑3 土師皿出土状況
 図版34-4 土坑4 遺物出土状況
 図版35-1 土坑7
 図版35-2 土坑22
 図版35-3 第1トレンチ 溝1断面
 図版36-1 溝2
 図版36-2 溝2断面
 図版36-3 石敷き参道
 図版36-4 石敷き参道
 図版37 出土遺物 (1)
 図版38 出土遺物 (2)
昆陽寺境内遺跡第18次調査
 図版39-1 第1トレンチ上面遺構全景
 図版39-2 第2トレンチ下面遺構全景
 図版39-3 第2トレンチ上面遺構全景
 図版40-1 第3トレンチ下面遺構全景
 図版40-2 第3トレンチ上面遺構全景
 図版40-3 土坑2
 図版41 出土遺物

表 目 次

有岡城跡・伊丹郷町遺跡

第1表	第153次調査遺物観察表 (1) ……	38
第2表	〃 遺物観察表 (2) ……	39
第3表	〃 遺物観察表 (3) ……	40
第4表	第170次調査遺物観察表 (1) ……	41

第5表	第170次調査遺物観察表 (2) ……	42
第6表	〃 遺物観察表 (3) ……	43
第7表	〃 遺物観察表 (4) ……	44
第8表	第154次調査遺物観察表 (1) ……	64
第9表	〃 遺物観察表 (2) ……	65

第10表	第154次調查遺物觀察表 (3) ……	66
第11表	ゝ 遺物觀察表 (4) ……	67
第12表	第160次調查遺物觀察表 (1) ……	83
第13表	ゝ 遺物觀察表 (2) ……	84
第14表	ゝ 遺物觀察表 (3) ……	85
第15表	第165次調查遺物觀察表 (1) ……	120
第16表	ゝ 遺物觀察表 (2) ……	121
第17表	ゝ 遺物觀察表 (3) ……	122
第18表	ゝ 遺物觀察表 (4) ……	123
第19表	ゝ 遺物觀察表 (5) ……	124
第20表	ゝ 遺物觀察表 (6) ……	125
第21表	ゝ 遺物觀察表 (7) ……	126

第22表	第165次調查遺物觀察表 (8) ……	127
第23表	ゝ 遺物觀察表 (9) ……	128
第24表	ゝ 遺物觀察表 (10) ……	129

昆陽寺境内遺跡

第25表	第8次調查遺物觀察表 (1) ……	153
第26表	ゝ 遺物觀察表 (2) ……	154
第27表	ゝ 遺物觀察表 (3) ……	155
第28表	ゝ 遺物觀察表 (4) ……	156
第29表	ゝ 遺物觀察表 (5) ……	157
第30表	ゝ 遺物觀察表 (6) ……	158
第31表	第18次調查遺物觀察表 ……	166

第1章 調査の概要

第1節 震災被害と発掘調査に至る経過

この報告書は、阪神・淡路大震災で被災し本堂等が建替えになった各寺院の発掘調査成果を収載したものである。被災した寺院は市内全域にわたり、被害の大小はあったものの、多くの寺院で建替えや大規模な改修が行われた。とくに、市域の中央部から西部・北部にかけては被害の度合いが大きい。県指定有形文化財の昆陽寺山門や観音堂、同じく県指定の鴻池神社のように文化財指定された建造物は補助金を得て元のとおり復旧されたが、未指定の場合には建替えの方法がとられた。以下に報告する6箇寺は後者の例で、法巖寺は本堂と庫裏、正善寺は本堂、大蓮寺は庫裏、万徳寺は本堂と庫裏、一乗院は本堂と庫裏、成就院は本堂と庫裏が建替えられた。

発掘調査にいたる経過について、寺院毎に説明を加えておきたい。

法巖寺（有岡城跡・伊丹郷町遺跡第153・170次調査）

法巖寺の各建物は老朽化が著しく、震災前から全面改築の計画が進められていたところであるが、震災により本堂倒壊の危険が生じるなどの決定的な被害となったため、全面改築工事が促進されることになった。全面改築にあたっては、先に本堂を解体してその跡地に庫裏を建設し、後に庫裏を解体した跡地に本堂を建設するという2段階の工事計画がとられ、この計画に合わせて発掘調査が実施されることになった。

平成7年4月20日付けで、庫裏建設に関する埋蔵文化財発掘届出が市教育委員会に提出され、具体的な協議に入った。法巖寺は、文献などによると大永2年（1522）に昆陽（伊丹市昆陽）より移転した寺院で、その場所は有岡城惣構えのうち外構えにあたることから、本発掘調査の必要があった。この点については、ご住職はじめ檀家役員の方々のご理解を得られた。発掘調査は、5月22日から6月21日までの1ヶ月間実施した。有岡城跡・伊丹郷町遺跡第153次調査である。本堂建設に関する埋蔵文化財の届出は、平成8年2月1日付けで市教育委員会に提出され、新庫裏が完成した後の6月20日に発掘調査を開始し、8月12日まで行った。この調査が、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第170次調査である。

正善寺（有岡城跡・伊丹郷町遺跡第154次調査）

正善寺は、震災により本堂が全壊したため、同位置に鉄骨コンクリート造り2階建てで建替えられることになった。庫裏についても少し傾斜するなどの被害が生じたが、現状で使用されることになった。本堂が解体された後、平成7年4月25日付けで埋蔵文化財発掘届出が市教育委員会に提出された。7月下旬には工事に着手したいとのことであり、急ぎ6月7日に発掘調査に着手し8月4日に完了した。

大蓮寺（有岡城跡・伊丹郷町遺跡第160次調査）

大蓮寺は、震災により本堂と庫裏などに被害が生じたが、建替えとなったのは庫裏のみである。庫裏は半壊の判定を受けている。平成7年9月11日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出された。届出によると10月中旬に工事を着手する内容であったが、市教委では他の震災関係の発掘調査が多発しており、結果的には10月30日に発掘調査を着手することになった。調査の終了は12月13日である。庫裏は元の場所に再建されることになったが、狭小な敷地に制約され全面的な発掘調査を実施することが出来なかった。

万徳寺（有岡城跡・伊丹郷町遺跡第165次調査）

万徳寺は、震災により本堂と庫裏が半壊となり、全面的に建替えられることになった。平成7年10月13日付けで埋蔵文化財発掘届出が市教育委員会に提出された。届出によると、建設される建物は、鉄筋コンクリートおよび鉄骨造り、一部2階建てである。協議の結果、事前に確認調査を行わず、最初から全面的に発掘調査を実施することになった。発掘調査に際しては、兵庫県教育委員会に対し復興班職員の派遣を依頼した。派遣された職員は、宮城県教育委員会の斎藤吉弘氏と山口県教育委員会の谷口哲一氏である。発掘調査は、平成7年11月13日～翌年1月26日まで続けられた。

一乗院（昆陽寺境内遺跡第8次調査）

一乗院は、本堂が被災し解体となったため建替え工事が進められることになった。埋蔵文化財発掘届出は、平成9年2月21日付けで市教育委員会に提出された。この届出によると、本堂は1階部分が鉄筋コンクリート造り一部鉄筋造りで、2階は木造の計画であった。協議の結果、先に確認調査を実施して遺跡の状況を把握し、本調査の有無も含めて検討することにした。確認調査は3月26日～28日までの3日間行い、中世末から江戸時代にかけての遺構と遺物を検出した。この調査結果から全面発掘の必要があると判断し、4月30日～6月19日までの間で本発掘調査を実施した。実施に際しては、兵庫県教育委員会に対し復興調査班の派遣を依頼した。調査を担当した派遣職員は、和歌山県教育委員会の藤井保夫氏と三重県教育委員会の船越重伸氏である。

成就院（昆陽寺境内遺跡第18次調査）

成就院は、震災以前に無住寺院となっていたもので、震災により本堂が被災し解体された。解体は震災後の平成7年3月2日に行われたが、再建計画がまとまり、埋蔵文化財発掘届出が市教育委員会に提出されたのは震災から4年半を経過した平成11年9月13日である。届出によると、建設される本堂と庫裏は木造で、庫裏が2階建てである。

届出に基づき、11月22日～29日までの期間で確認調査を実施し、中世から近世にかけての遺物および遺構を検出した。この調査結果をもとに本調査の実施について協議を始めたところ、事業者から現設計の基礎を浅くして工事による遺跡への影響をなくし、本調査の実施を避けたいとの提案が示されることになった。この変更案では、基礎は現状地盤から25cm程度しか入らないことになり、本調査を実施する必要がなくなった。

第2節 遺跡の概要

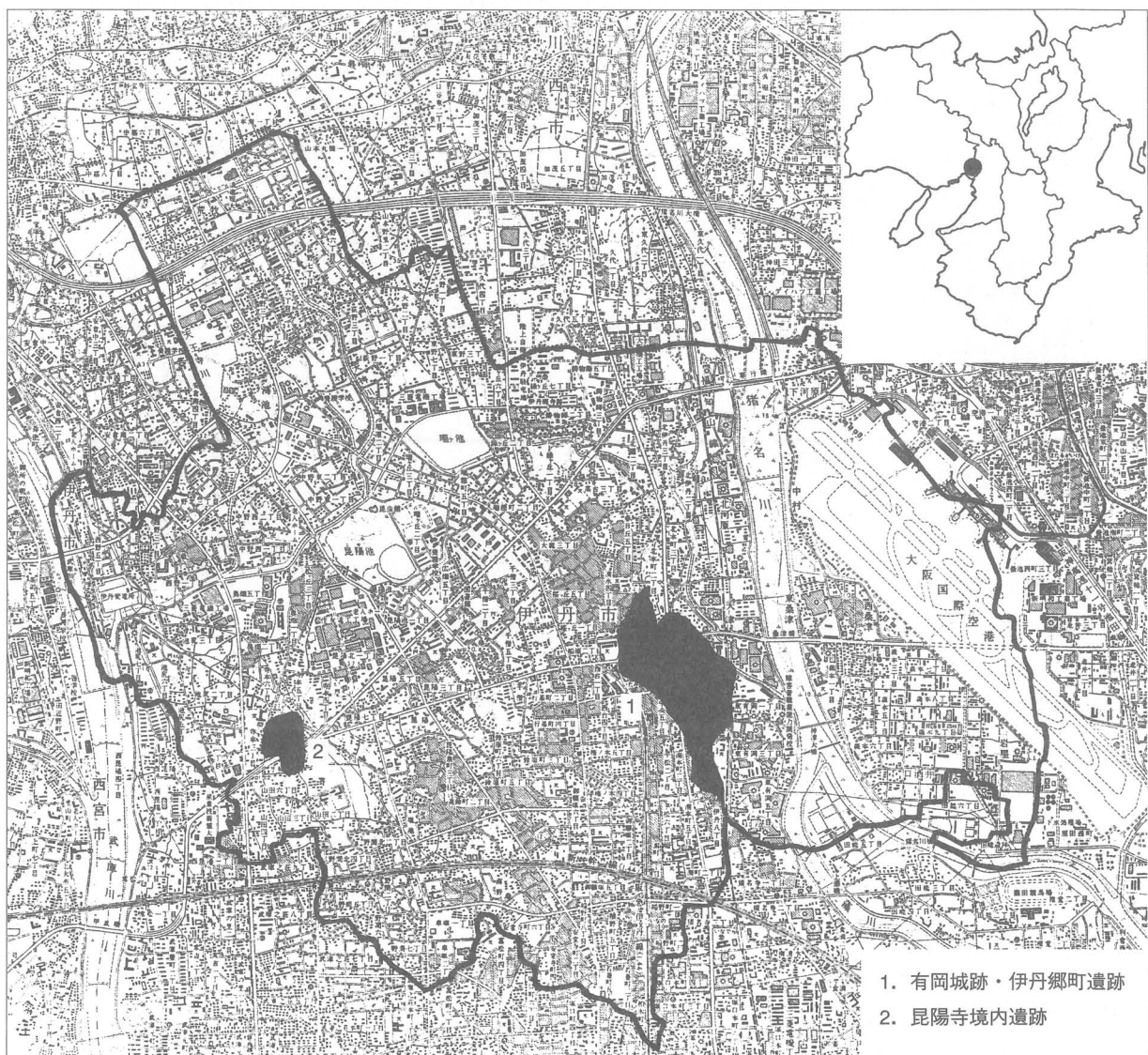
有岡城跡・伊丹郷町遺跡

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、中世の有岡城跡（伊丹城）と廃城後に在郷町として発展した伊丹郷町の遺跡である。有岡城は初め伊丹城といい、鎌倉幕府創設当初からの御家人伊丹氏の居城である。伊丹城の初見は、南北朝時代の文和2年（1353）（「森本基長軍忠状」北河原森本文書）で、この時、南朝方が伊丹城まで攻め寄せているが追い返しており、既に相当の防御施設が備わっていたものと見られる。室町時代には、伊丹のある川辺郡は細川家の管轄となり、伊丹氏も細川家の被官として活動している。その関係から応仁の乱後に発生した細川家の内紛に巻き込まれ、伊丹氏は城とともに激動の時代を迎える。細川家の対立は、細川政元が養子澄元に暗殺されたことが発端となり、家督を継いだ澄元に対し、一門の高国が挙兵したことに始まる。伊丹元扶一族とともに高国方として戦い、伊丹城も度々攻撃の矢面となっている。永正17年（1520）には、澄元方の攻撃に遭って伊丹城は落城し、城にいた伊丹但馬守と野間豊前守の二人は四方の木戸を閉じて家々に火をかけ天守において切腹し（細

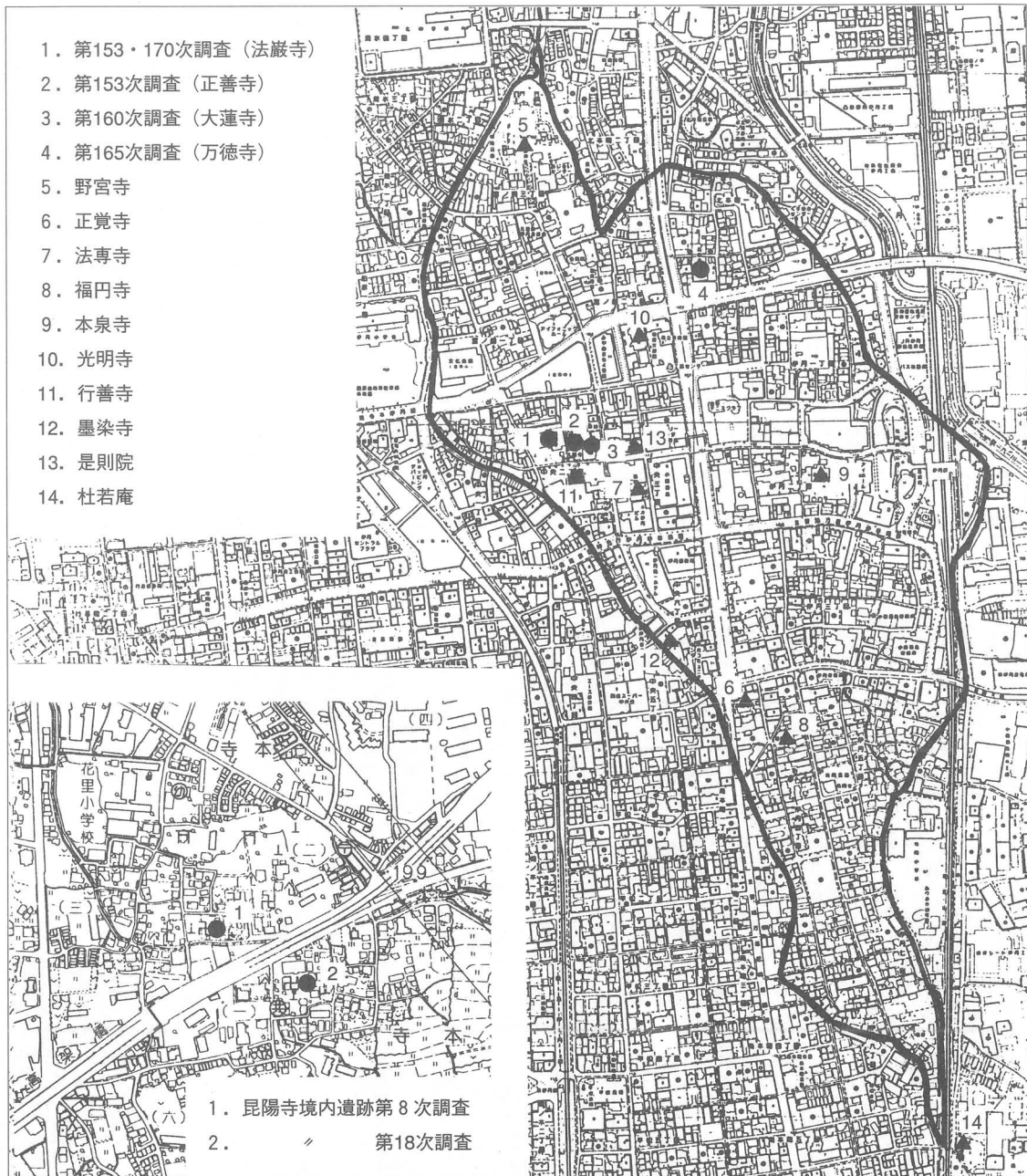
川両家記)、また、享禄2年(1529)にも柳本賢治らの包囲攻撃の前に落城し、元扶らが自刃している。しかし、天文2年(1533)には一向一揆の猛攻に耐え、また同18年の三好長慶の攻撃を前に伊丹城のみ頑強に抵抗するなど堅城を誇っている。

永禄11年(1568)、織田信長が足利義昭を奉じて入京すると、伊丹氏はかねてよりの将軍家との関係から信長方につき、芥川城の和田惟政、池田城の池田勝正とともに「摂津の三守護」として摂津の支配を任されている。しかし、この体制は長く続かず、元亀4年(1573)になって信長が将軍義昭を追放して幕府が崩壊すると、摂津では池田勝正の家臣荒木村重が頭角を現し、主君勝正を高野山に追放し、次いで和田惟政を摂津国郡山で敗死させた。天正2年(1574)、ついに伊丹城の伊丹親興を攻め滅ぼしている。村重は伊丹城の重要性から、池田から伊丹に居城を移し本格的な城作りに着手する。城内に天正年間開基の寺院が多いことはこれを裏付けている。惣構えの完成時期も村重の時代と考えられ、土塁や堀で外構えを整備したほか、町場と侍町の間堀を設けて区画している。

村重は、信長方の家臣として各地に転戦するが、天正6年になって、村重に異心ありという風聞が広がり、釈明のために村重は安土に向け出発するが、中川清秀の進言により安土行きを留まり信長に



第1図 遺跡位置図(1/50,000「大阪西北部」) 平成14年



第2図 有岡城跡・伊丹郷町遺跡、昆陽寺境内遺跡調査箇所位置図（1/10,000） 平成14年

対し反旗を翻す。同年より始まった有岡城の総攻撃も、1年余りを経て村重が尼崎に逃れて落城する。天正8年に池田信輝の嫡子之助が城主となるが、同11年に美濃国岐阜城に移封されて廃城となった。廃城後は、豊臣の直轄領となったと考えられる。江戸時代になると、有岡城の範囲は初め幕府の直轄領、寛文元年（1661）からは近衛家の領地になっている。近衛家の領地は、初め伊丹村など10箇村、延宝3年（1675）には6箇村が幕府に返上されたが最終的に11箇村が近衛家領となった。領主の近衛家の保護もあり酒造業が栄えた。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の寺院

有岡城跡・伊丹郷町遺跡に所在する寺院は、現状では11箇寺である。江戸時代には13箇寺（杜若庵は遺跡外であるため除く。）あったことが「丹丘寺院開基年考」（古野将盈編 京都大学文学部所蔵。

以下「開基年考」という。)に記されている。開基年考は、江戸後期の伊丹の郷土史家古野将盈が編纂した有岡庄年代秘記に記載されたもので、伊丹郷町に所在する寺院の開基年代を記している。しかし、当時既に廃寺となった寺院については対象となっていないため、荒木村重が元の居城の池田から移転させ、落城後に戻った大広寺と本養寺の2箇寺については記載されていないし、また、最近の発掘調査(第231次)で、少なくとも16世紀中に廃滅した寺院跡が旧侍町で発掘されるなど、有岡城期(伊丹城期)の寺院すべてが江戸時代まで存続しているわけではない。

今回報告する4箇寺の開基年は開基年考によると、法巖寺が最も古く大永2年、大蓮寺が天正4年、正善寺が天正17年、万徳寺は正確な建立年が示されず天正中と記載されている。しかし、各寺院に伝わる資料によると、開基年代が一致していない場合もある。その点と火災による焼失や再建の記録も含めて紹介しておきたい。

万徳寺

万徳寺の開基年代については、住職よりいただいた「亀井山万徳寺由緒沿革畧記」(以下「沿革畧記」という。)にさらに詳しく記されている。この沿革畧記は、当寺4世了願筆をもとに現住職(17世)がその後の寺歴を加えてまとめられたもので、それによると、万徳寺は初め正覚山真光寺と号し、親鸞末流の念仏弘通の道場であったが、住職の了秀は村重の茶友であったことから仏像・宝物とともに有岡城に立て籠もり、落城とともに一族もろとも誅され真光寺は廃寺となったという。その後、了秀の伯父宗慶が寺跡に草庵を建て本尊を安置して再興し、寛永4年に了願によって寺号を万徳寺に改めている。この通りとすれば、開基年考にいう天正中の開基年は、前身の真光寺の時代のことになるが、沿革畧記では宗慶を中興の開基といい、その年を天正8年3月1日と記しながら、開基については「万徳寺は往昔何れの人の開基であったか不詳で」として明らかにしていない。

開基年考では天正年間の開基としているが、開基年考をまとめるにあたり古野は、当時この記録に接して開基年が明らかではないことを知りながらも、真光寺住職了秀と村重の関係から天正年間の開基と推測したのかも知れない。2世は宗慶の甥壽専、3世は壽専の兄了専が継いでいる。

万徳寺は度々火災によって焼失している。記録(古野将盈編「有岡庄年代秘記」)によると、貞享元年5月、元禄12年11月、宝永3年12月の3回で、現本堂(震災により解体)は、正徳元年の再建である。

法巖寺・正善寺

法巖寺の開基年については、震災後に行われた落慶法要を期に編纂された「法巖寺誌」(平成10年)に古記録を踏まえて詳述されているので引用すると、昆陽(現伊丹市昆陽)から当地へ移転した大永2年(1522)を開基年とし、開山を岌辨上人としている。初代岌辨上人は、元亀3年(1572)に80歳で亡くなっている。この開基年は開基年考の記述と一致しているが、しかし本書では、境内にある歴代上人の墓碑の調査から、二代目岌誉上人の墓碑に「当寺開山俊蓮社岌誉和尚」「慶長四年正月十六日」と書かれていることがわかり、岌辨上人を勧請開山、岌誉上人を創建開山と捉えて、事実上の開山は岌誉上人ではないかと推測されている。「当寺歴代記」によると、岌誉上人は「元亀三年十二月入院」と記されている。

火災の記録はないが、有岡庄年代秘記によると「宝永五年六月法巖寺上棟」と記されていることから、元禄12年の天王町出火の大火、元禄15年の法巖寺南側中少路村出火の大火の何れかにより類焼したものと推定されていた。しかし、震災後の本堂解体中に外陣正面上部の墓股に「頂蓮社灌誉代令建立之 貞享五戊辰年(1688)」と墨書されていたことがわかった。この結果、元禄の大火で焼失は免れたことになるが、「有岡庄年代秘記」宝永5年の法巖寺上棟との関係は明らかではない。

法巖寺歴代記によると、6代心誉上人は寛永7年に住職を継ぎ、同9年（1632）に隠居して正善寺を開山したとある。正善寺は法巖寺と路地を挟んで隣接する同じ浄土宗の寺院である。開基年考では天正17年（1589）となっており、43年の開きがある。正善寺側でも寛永9年を開基年とされているので、これ以上確かめようがないが、あるいは法巖寺のように勧請開山と創建開山があったのかも知れない。過去帳によると、享保9年（1724）誓誉上人によって本堂が再建されている。

大蓮寺

大蓮寺は、開基年考によると天正4年（1576）の開基とされているが、寺伝では天正15年（1587）専蓮社岌念把公上人の開山となっており（「伊丹の寺院」）、11年の開きがある。また、本堂は、元禄12年（1699）に元禄の大火で焼失し、その後再建されたとされている。しかし、最近行った歴史的建造物の調査の結果では、17世紀中期の建築と推定されており（「伊丹の歴史的建造物」）、その通りとすれば、焼失を免れたことになる。

昆陽寺境内遺跡

昆陽寺境内遺跡は、昆陽寺を中心とした古代から中世・近世にかけての遺跡である。昆陽寺は、天平3年（731）に僧行基が建てた昆陽施院の法灯を継ぐ寺院とされており、現在の宗派は古義真言宗である。広大な境内には、江戸中期の朱塗りの山門（県指定有形文化財）や江戸前期の観音堂（県指定有形文化財）のほか、仏像では平安中期の二天立像（県指定有形文化財）などの文化財がある。平安時代の説話集「今昔物語」に登場する昆陽寺の鐘が盗まれた話は有名である。

昆陽寺の周囲には塔頭が建ち並んでいた。江戸時代には一乗院、成就院、正覚院、寶持院、勧請院、遍照院の6院があったが、寶持院と勧請院が廃絶して現在は4院となっている。一乗院東側の墓地には歴代僧侶の墓が並んでいるが、これによると各塔頭とも17世紀後半～18世紀初頭には存在していたことがわかる。

昆陽寺の前身である昆陽施院は、当時都に調庸を運ぶ農民の窮状を救うために設けられたもので、近くには昆陽布施屋もあり、西国街道を行き来する農民に宿泊場所や食料を提供する役割があった。これまでの発掘調査では、奈良時代の礎石や瓦などは発掘されていないが、当時の施設は古代寺院の伽藍とは異なる簡易なものであったかもしれない。（小長谷）

第2章 発掘調査の成果

第1節 法巖寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第153次・170次調査—

所在地	伊丹市中央2丁目6-16
調査面積	第153次・180m ² 第170次・270m ²
調査期間	第153次・平成7年5月22日～平成7年6月21日 第170次・平成8年6月20日～平成8年8月12日
調査担当	小長谷正治・細川佳子

1. 遺跡の概要

本調査地点は、有岡城期には惣構えの西側に位置する。有岡城の主郭部は惣構えの東端にあり、それを取り囲むように侍町、侍町の西側に城下町が配置されている。当地点は城下町側にあたる。当地点の法巖寺と西側の正善寺、大蓮寺はともに浄土宗の寺で、寺町を構成し、有岡城惣構えの中では要所であったと考えられている。

江戸時代の伊丹郷町では昆陽口村にあたる。昆陽口村は有岡城の廃城後、文禄年間（1592～96）にはすでに成立していた。

法巖寺の歴史は寺伝^{註1)}によると、大永2年（1522）に昆陽村の方から移ってきたとある。また、平成7年に発見された享保8年（1723年、第9世英誉上人）の木版によると、永禄年間（1558～70）に荒木村重の請いにより開山巖辨上人が寺をこの地に移したとある。他に、『有岡庄年代秘記』^{註2)}の「丹丘寺院開基年考」によると「大永第二年」とある。

法巖寺の再建については、『有岡庄年代秘記』によると、「宝永五年（1708）六月法巖寺上棟」と記されている。これは、それより以前の「元禄十二年（1699）十一月四日 天之町より出火、札之辻迄飛火ニテ下市場村焼亡、寺院六ヶ寺、酒家十六軒 其外数不知」とあり、また、「元禄十五年（1702）三月三日 中少路村より出火北之口町焼抜、竈数及四百三十九軒」とあり、この文献史料によると、元禄12年か15年の大火で法巖寺が焼失し、宝永5年に再建されたことが考えられる。しかし、震災後の本堂の解体工事時に「頂蓮社灌誉代令建立之 貞享五年（1688）」と書かれた墓股（外陣正面上部）が見つ



第3図 第153・170次調査区位置図（1/2,500）平成10年

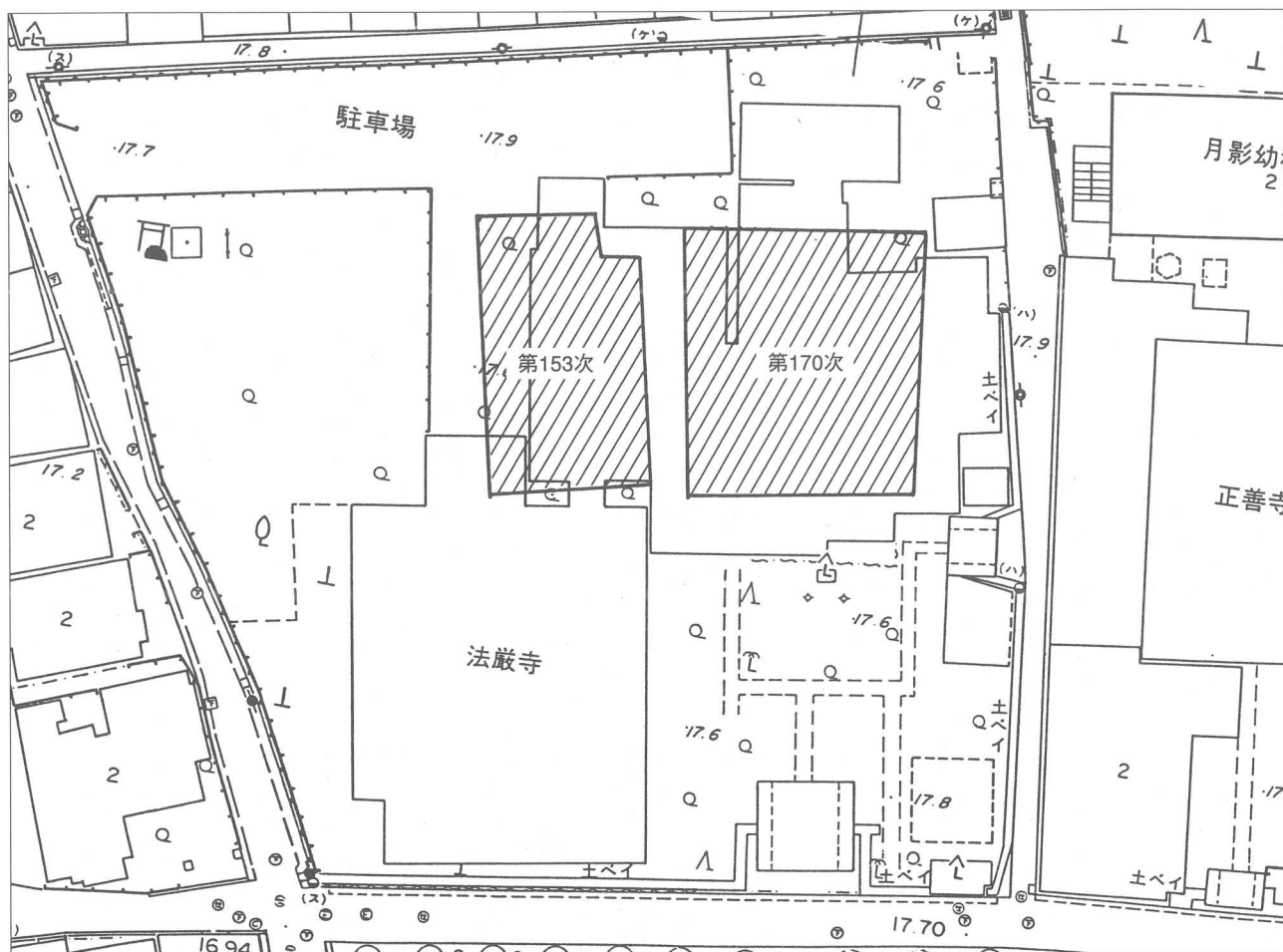
かり、貞享5年は元禄元年でもあり、元禄の大火で焼失したとされる本堂は焼けていなかったということがわかった。「宝永五年六月法巖寺上棟」は本堂以外の他の建物であった可能性が考えられる。

境内には天然記念物のクスノキがあり、昭和40年に兵庫県の文化財に指定された。このクスノキは昭和39年（1964）の鑑定によると推定樹齢500年、幹周囲6m、樹高28mの大木である。この寺は「クスノキ寺」とも呼ばれている。また、墓地には無縫塔という石造物^{註3)}があり、花崗岩製で、基礎・請花・塔身よりなる完全な単制塔で、総高1mである。基礎には「慶長四年（1599）当寺開山俊蓮社炭誉和尚 五月十六日」の銘があり、全国的に見ても在銘のものは数少ない貴重な資料である。この他に、本尊の阿弥陀如来坐像は快慶作と伝えられている。

2. 調査の概要

本件は阪神・淡路大震災により被災した法巖寺の庫裏（153次）及び、本堂（170次）の再建に伴う発掘調査である。本件の寺院庫裏の建設は「個人被災者自らが使用する住宅の再建」に該当し、また、本堂建設は「法人被災者が自ら所有又は使用する店舗・事務所・宿舍等の建物の設置」に該当するため、震災復旧・復興事業の適用を受け、国庫補助事業として発掘調査を実施したものである。

被災以前の建物の配置は、敷地の南西側に本堂、北東側に庫裏、庫裏に続けて西側に書院があったが、再建後は北西側に庫裏、庫裏の東側に本堂、南側に墓地が配置された。庫裏再建に伴う発掘調査は平成7年度に行い、その後、平成8年度に本堂再建に伴う発掘調査を行った。



第4図 調査区設定図（1/500） 昭和60年



第5図 第153次調査平面図・土層図 (1/100)

1. 表土
2. 10YR5/8明黄褐色砂礫層
3. 10YR5/6黄褐色粘土層
4. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層 (炭混じり)
5. 2.5Y5/6黄褐色粘質土層
6. 10YR4/6褐色粘質土層
7. 2.5Y6/4にぶい黄色砂層
8. 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土層
9. 10YR4/6褐色粘土層
10. 10YR6/8明黄褐色粘土層
11. 10YR4/6褐色粘質土層
12. 10YR6/8明黄褐色粘土層 (地山)
13. 2.5Y4/6オリーブ褐色粘土層……土坑132
14. 10YR5/8黄褐色粘土層 (焼土混じり)
15. 2.5Y5/6黄褐色砂質土層
16. 2.5Y5/6黄褐色粘土層
17. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土層……P128
18. 2.5Y6/8明黄褐色粘砂質土層……溝10
19. 炭層
20. 10YR4/6褐色粘砂質土層
21. 2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土層……溝11
22. 10YR5/8黄褐色粘砂質土層……P142
23. 2.5Y5/6黄褐色粘質土層……土坑12
24. 10YR5/8黄褐色粘質土層
25. 10YR6/8明黄褐色粘質土層
26. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土層
27. 10YR5/8黄褐色粘土層 (炭混じり) ……土坑50
28. 2.5Y5/6黄褐色砂層
29. 2.5Y6/8明黄褐色粘土層
30. 2.5Y5/6黄褐色砂層
31. 2.5Y6/8明黄褐色粘土層
32. 2.5Y5/6黄褐色砂質土層 (炭を多く含む)
33. 2.5Y6/6明黄褐色砂質土層
34. 10YR7/3黄褐色粘土層
35. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土層 (礫を多く含む)
36. 10YR7/6明黄褐色粘土層
37. 2.5Y6/4にぶい黄色粘砂質土層
38. 10YR4/6褐色粘砂質土層
39. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂層
40. 5Y5/4オリーブ色砂層
41. 2.5Y7/6明黄褐色砂層
42. 2.5Y6/8明黄褐色砂礫層
43. 2.5Y5/4黄褐色砂質土層
44. 2.5Y7/8黄色粘土層
45. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土層
46. 2.5Y5/4オリーブ褐色粘砂質土層
47. 10YR5/8黄褐色粘質土層……土坑99
48. 10YR4/6褐色砂質土層
49. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層
50. 10YR5/8黄褐色粘質土層 (炭・焼土混じり)
51. 礫層 (10~15cmの礫)
52. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層
53. 5YR6/8橙色粘土層
54. 2.5Y5/6黄褐色粘土層 (焼土混じり)
55. 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土層
56. 5YR6/8橙色粘土層
57. 10YR5/8黄褐色粘質土層
58. 2.5Y6/6明黄褐色粘土層
59. 2.5Y5/6黄褐色砂質土層 (5~10cmの礫を多く含む) ……土坑17
60. 10YR4/6褐色粘土層
61. 礫層
62. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土層
63. 7.5Y4/3オリーブ褐色粘質土層……P148
64. 炭層
65. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土層

0 5m

3. 第153次調査

敷地内の北西側に東西10m、南北18mの調査区を設定した。重機により表土を取り除き、すべての遺構を地山面で検出した。

基本的な層序は、明黄褐色粘土層（12）の地山の上にオリーブ褐色砂質土層（4）が約20cm堆積し、その上に表土（1）が10~40cm堆積している。表土から地山までの深さは調査区東側では約30cm、西側では約50cmを測る。表土と第2層との間に炭層が調査区全体で所々に見られる。また、下層にも炭層があり、何度か火災があったことがうかがえる。

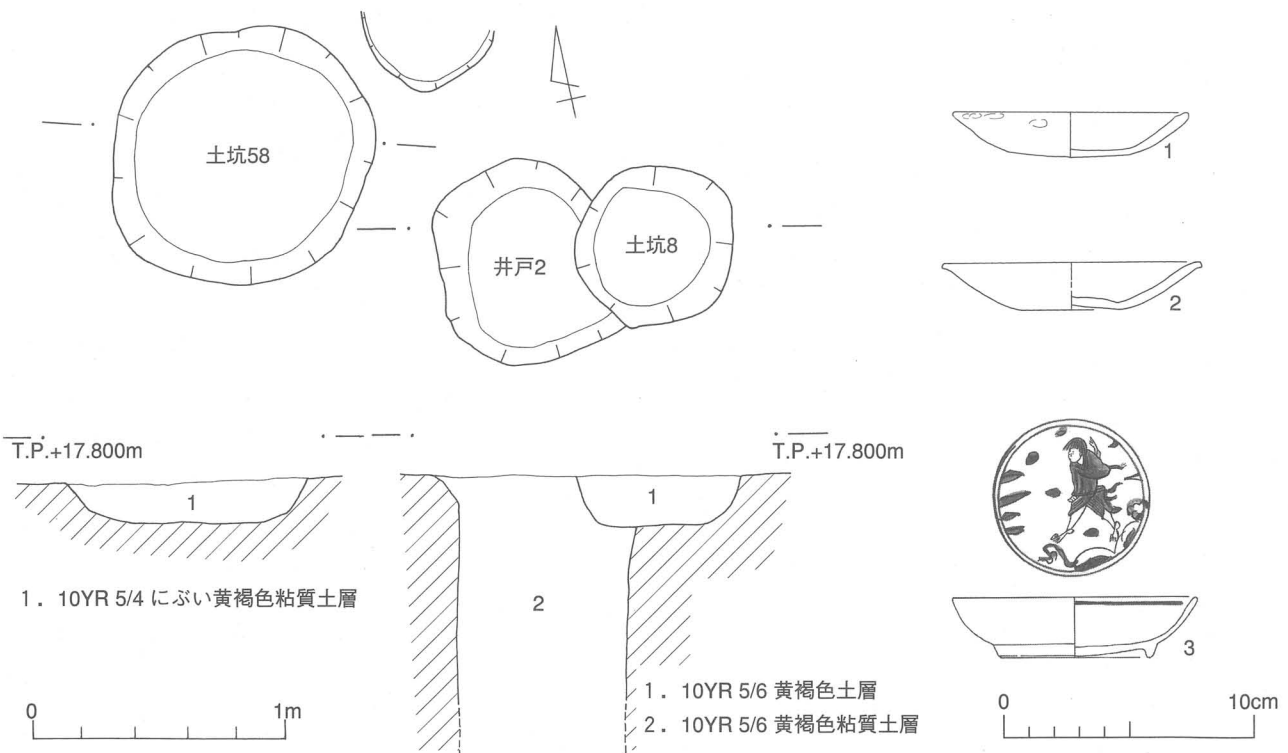
検出した遺構は井戸2基、溝11条、土坑152基、小穴（P）148基である。検出した遺構の時期は江戸時代前期と中期のものが大半を占め、有岡城期に遡ると考えられるものもわずかに検出された。出土遺物は遺物整理箱に9箱である。時代の古いものから主要遺構について説明することにする。

井戸2（第6図、図版4）

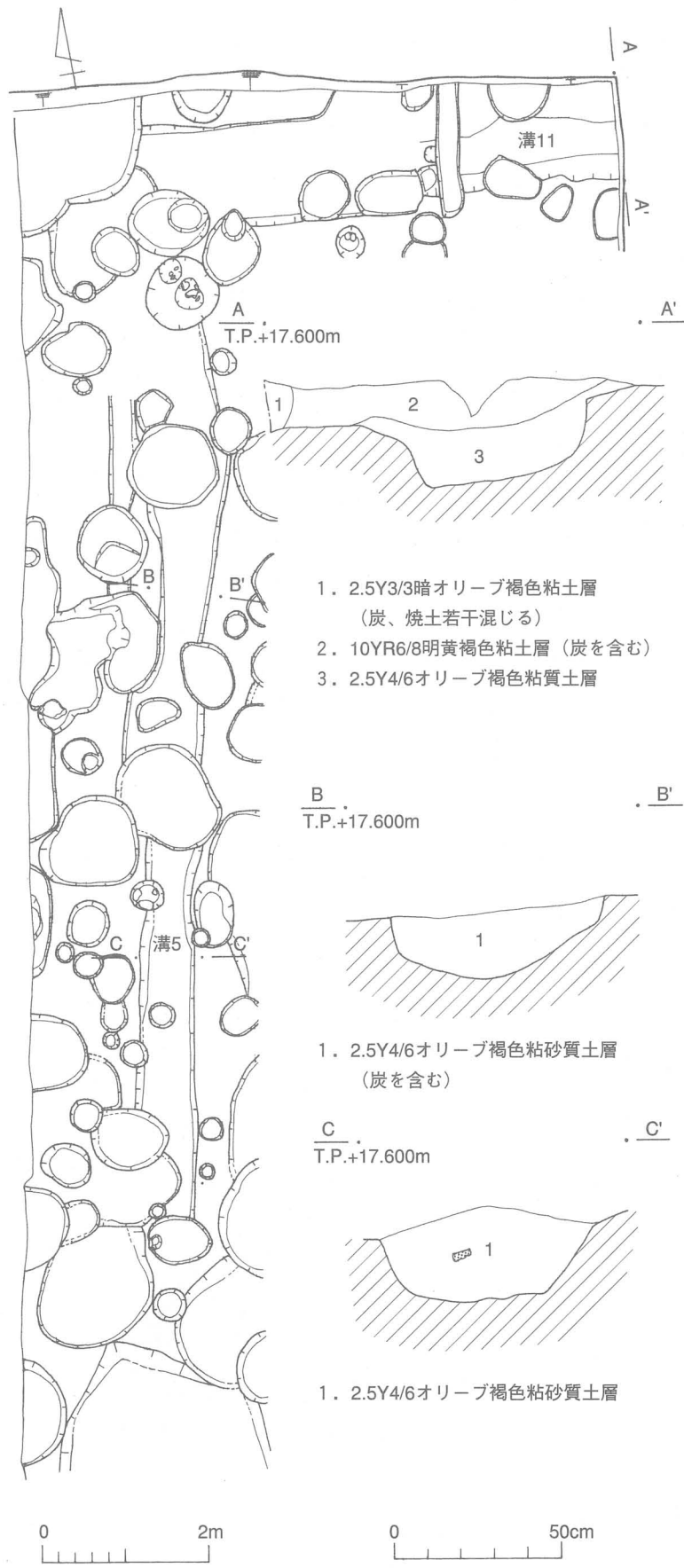
調査区の北東に位置し、円形で素掘りの井戸である。東側を土坑8に切られている。径70cm、検出面から下に約1mのところまで掘削した。出土遺物には薄手の土師皿（1・2）、1は内外面に煤が付着し、2は底部の中央に凹みがあるタイプ、中国製（景德鎮窯）青花皿（3）は見込みに人物文が描かれ、小野正敏氏分類^{註4}のE類で、その他に図示はしていないが備前焼播鉢の小片などがある。

井戸1

調査区の南側に位置し、円形で素掘りの井戸である。径は1.1m、検出面から下に約1mのところまで掘削した。埋土は上層が礫を多く含む黄褐色砂質土層、下層が瓦と焼土を含む明黄褐色粘土層である。



第6図 井戸2、土坑8・58平面・断面図（1/30）、井戸2出土遺物（1/3）



1. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土層
(炭、焼土若干混じる)
2. 10YR6/8明黄褐色粘土層 (炭を含む)
3. 2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土層

土坑58 (第6図)

調査区の北東に位置する。円形で、規模は径1m、深さ18cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土層である。出土遺物には図示はしていないが唐津焼碗、備前焼播鉢などがある。この播鉢は乗岡実氏^{註5)}によると15世紀後半のものである。

土坑7

調査区の北東に位置し、一部が北壁にかかっている。円形で、規模は径70cm、深さ12cmを測る。内部には10cm大の礫が敷き詰められている。これは土坑5と同じもので、建物の柱の礎石が据えられていたと考えられる。出土遺物には備前焼鉢の細片などがある。

土坑8 (第6図)

土坑7の南側に位置し、井戸2を切っている。円形で、規模は径65cm、深さ15cmを測る。出土遺物には土師皿、中国製青花皿の底部片、瓦などがある。

溝5・11 (第7図、図版2・3)

溝11は調査区北側に位置し東西方向に延び、東側は調査区外に延びている。遺構の規模は幅1.1m、深さ30cmを測る。断面はU字形をしている。溝の南側の掘り方は直線的であるが、北側の掘り方は北側に折れ、調査区外へと延びていく。埋土は上層が明黄褐色粘土層、下層がオリーブ褐色粘質土層である。溝11は調査区の北西隅で南側に折れ、西側を南北方向に延びる溝5とつながる。溝5の南側は土坑に切られている。規模は検出長13m、幅65~95cm、深さ30cmを測り、断面はU字形をしている。

第7図 溝5・11平面・断面図 (1/80・1/20)

埋土はオリブ褐色砂質土層である。出土遺物には図示はしていないが、丹波焼播鉢（7本単位のクシ目、体部に指オサエ痕あり）、肥前白磁染付碗などがある。

土坑29（第8・9図、図版4）

調査区中央部に位置し、円形で、規模は径1.15m、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土層で瓦と10cm大の礫を多く含む。出土遺物には備前焼鉢（4・5）・徳利（6）、その他に備前焼播鉢、瀬戸・美濃焼天目碗などがある。

土坑30（第8・9図、図版4）

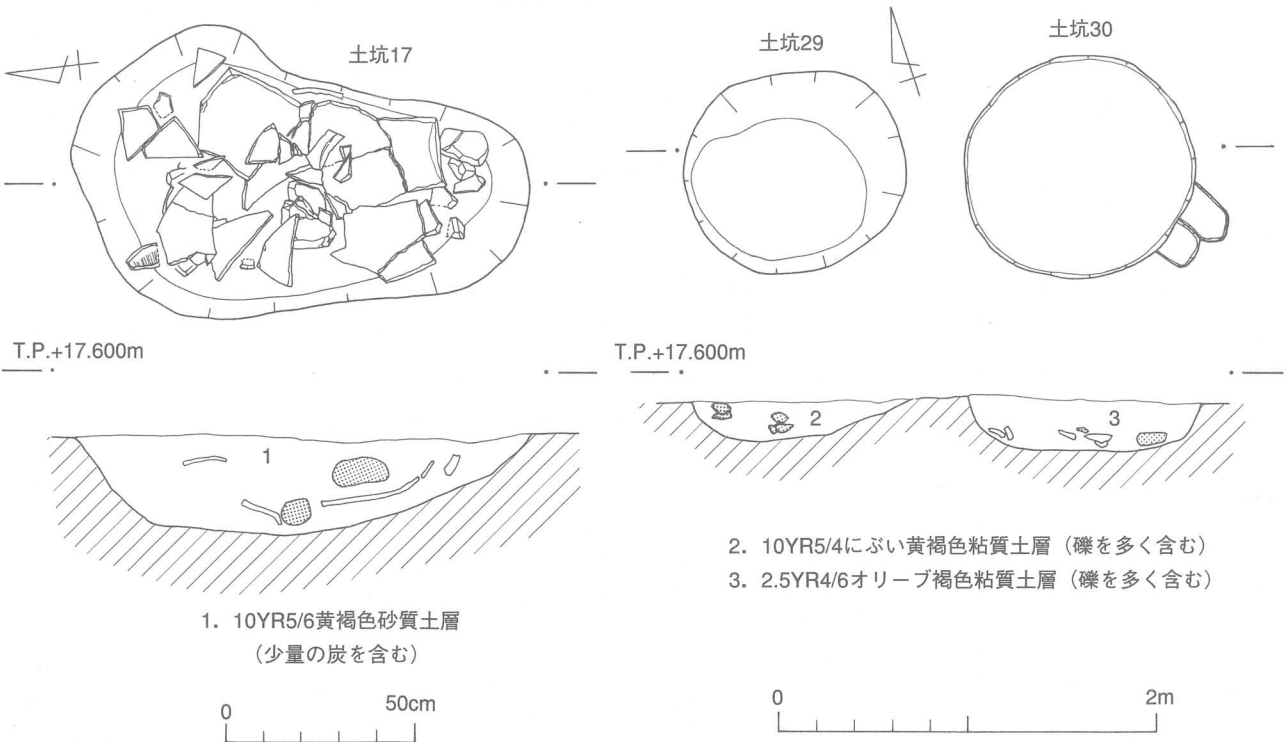
土坑29の東側に位置し、円形で底は平坦面をなし緩やかに立ち上がる。規模は径1.24m、深さ27cmを測る。埋土はオリブ褐色粘質土層で、瓦と10cm大の礫を含む。出土遺物には土師皿（7～9）で口縁部内外面に煤が付着し底部中央が凹んだタイプ、丹波焼播鉢（10）、陶器壺（11）、図示はしていないが備前焼徳利などがある。

土坑17（第8・9図、図版3・4）

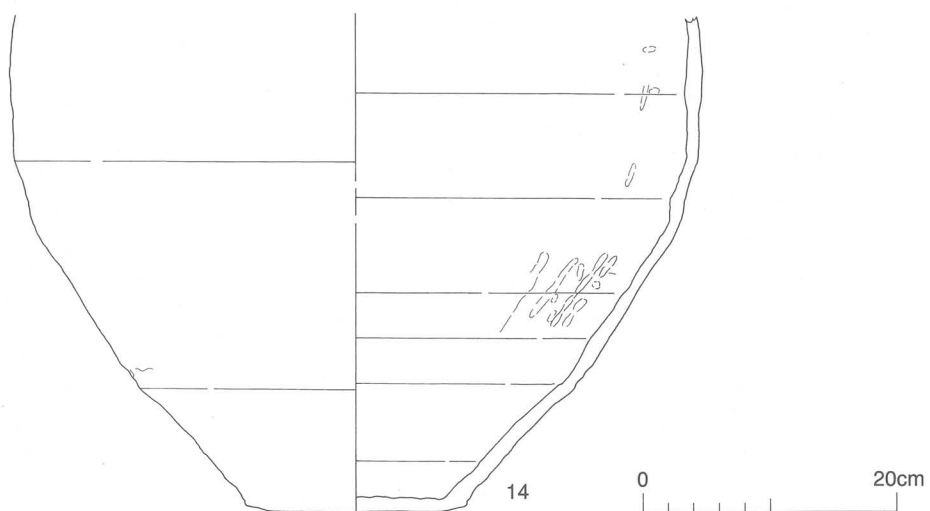
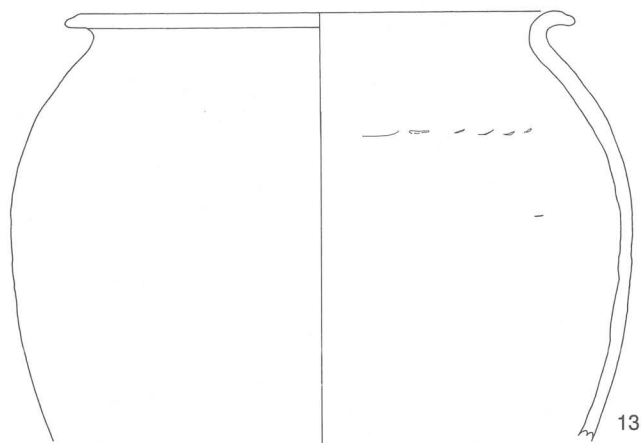
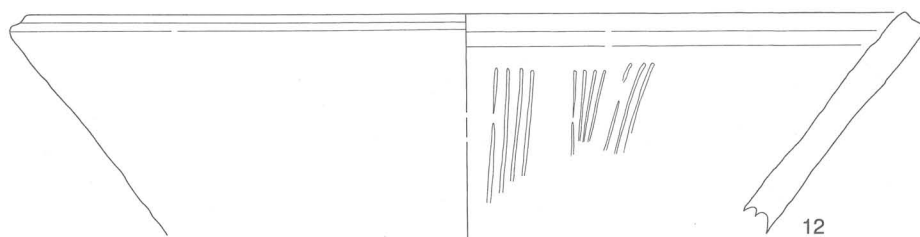
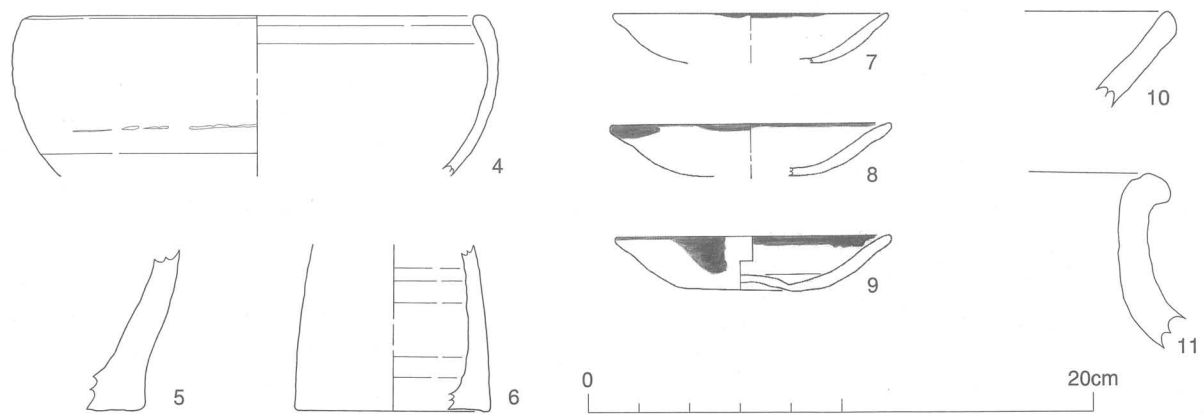
調査区の中央に位置し、南北を長軸にする楕円形である。規模は長軸1.2m、短軸77cm、深さ28cmを測る。埋土は10cm大の礫や瓦を含む黄褐色砂質土層である。出土遺物には丹波焼甕（13）と陶器甕が横になって割られた状態で2点出土した。13は頸部が短く大きく外反する口縁部をもち、14は底部から胴部で、13には表面に塗り土が施されている。丹波焼播鉢（12）は口縁端部が外傾する端面を持ち4本単位のクシ目があり、長谷川眞氏分類^{註6)}のIB類に属する。他には軒平瓦などがある。

土坑35

調査区の南側に位置し、一部を土坑29に切られている。南北に長軸をもつ長方形である。規模は長軸3.03m、短軸2.08m、深さ35cmを測る。埋土は上層が褐色土層、下層が黄褐色土層、両層とも炭と焼けた瓦を含む。出土遺物には唐津焼胎土目積皿、瓦などがあり、二次的な焼成を受けているものが



第8図 土坑17・29・30平面・断面図（1/20・1/40）



第9図 土坑17・29・30出土遺物 (1/3・1/6)

多い。このことから火災にあったものを埋めた焼土処理土坑と考えられる。

土坑5（第11図、図版4）

調査区のほぼ中央に位置する。円形で、規模は径80cm、深さ15cmを測る。埋土は黄褐色土層、内部には10cm大の礫と瓦が敷き詰められている。上部の礎石そのものは既に失われているが、建物の柱の礎石が据えられていたと考えられる。出土遺物には瓦質土器の香炉（15）（図示はしていないが三足がつく）、瓦当に離れ砂が多く付着している軒丸瓦（16）、図示はしていないが備前焼甕底部、肥前白磁仏飯具の脚部などがある。

土坑45（第11図）

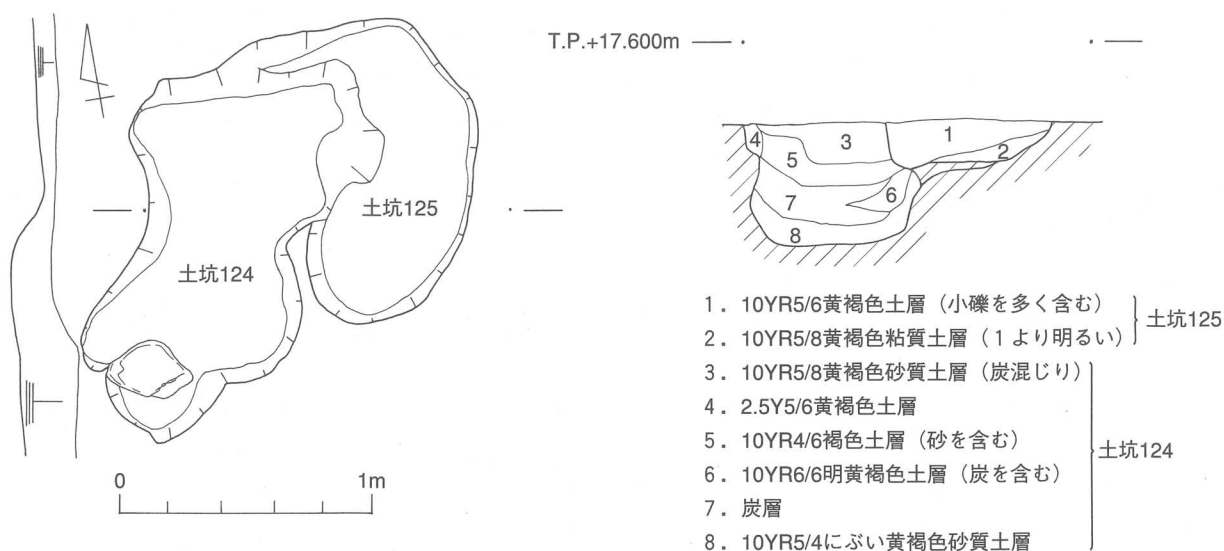
調査区の南壁際に位置し、遺構の一部が調査区外となっている。遺構の規模は東西1.4m、深さ75cmを測る。平坦な底面から斜め上方に立ち上がる。出土遺物には口縁部内外面に煤が付着した土師皿（17・18）、肥前白磁染付碗（19・20）と二次焼成を受けている白磁仏飯具（21）、瓦などがある。

土坑124（第10・11図、図版4）

調査区の西側に位置し、不整形で土坑125に切られている。遺構の規模は南北1.3m、東西55cm～1m、深さは40cmを測る。埋土には炭の層を含む。出土遺物には口縁部内外面に煤が付着している土師皿（24）、柿釉灯明皿（25）は右回転の糸切り底、陶器碗（26）、口禿げの肥前白磁小杯（27）、肥前白磁碗（28）、陶器鉄釉鍋（29）などがある。

溝3（第12・13図、図版3・4）

調査区の南壁際に位置し、遺構の南側と東側は調査区外となり、東側は第170次調査では検出されていない。西側は土坑45に切られている。遺構の規模は検出長7m、検出幅1.1m、深さ35cmを測る。埋土は粘土層と砂層が交互に堆積している。出土遺物は土師皿（30・31）、肥前白磁碗（32）・白磁染付碗（33・34・37・38）・蓋付鉢（36）・皿（39）、38は上物であり、刷毛目唐津碗（40）・刷毛目片口鉢（43）、唐津焼皿（41・42）、笹文の京焼皿（35）、備前焼船徳利（44）、7本単位のクシ目がある丹波焼播鉢（45・46）・火入れ（48）、柿釉水注（47）、瓦質三足付鉢（49）などの多量の陶磁器や瓦がある。45・46は同一固体の可能性も考えられるが接合部分がない。



第10図 土坑124・125平面・断面図（1/30）

P92 (第11図、図版4)

調査区の南側に位置し、溝3の北側にある。円形の小穴で、径24cm、深さ15cmを測る。出土遺物には高台内の圏線の中に「大明年製」くずしの銘のある肥前白磁染付碗(22)、京焼の金彩手平碗(23)などがある。

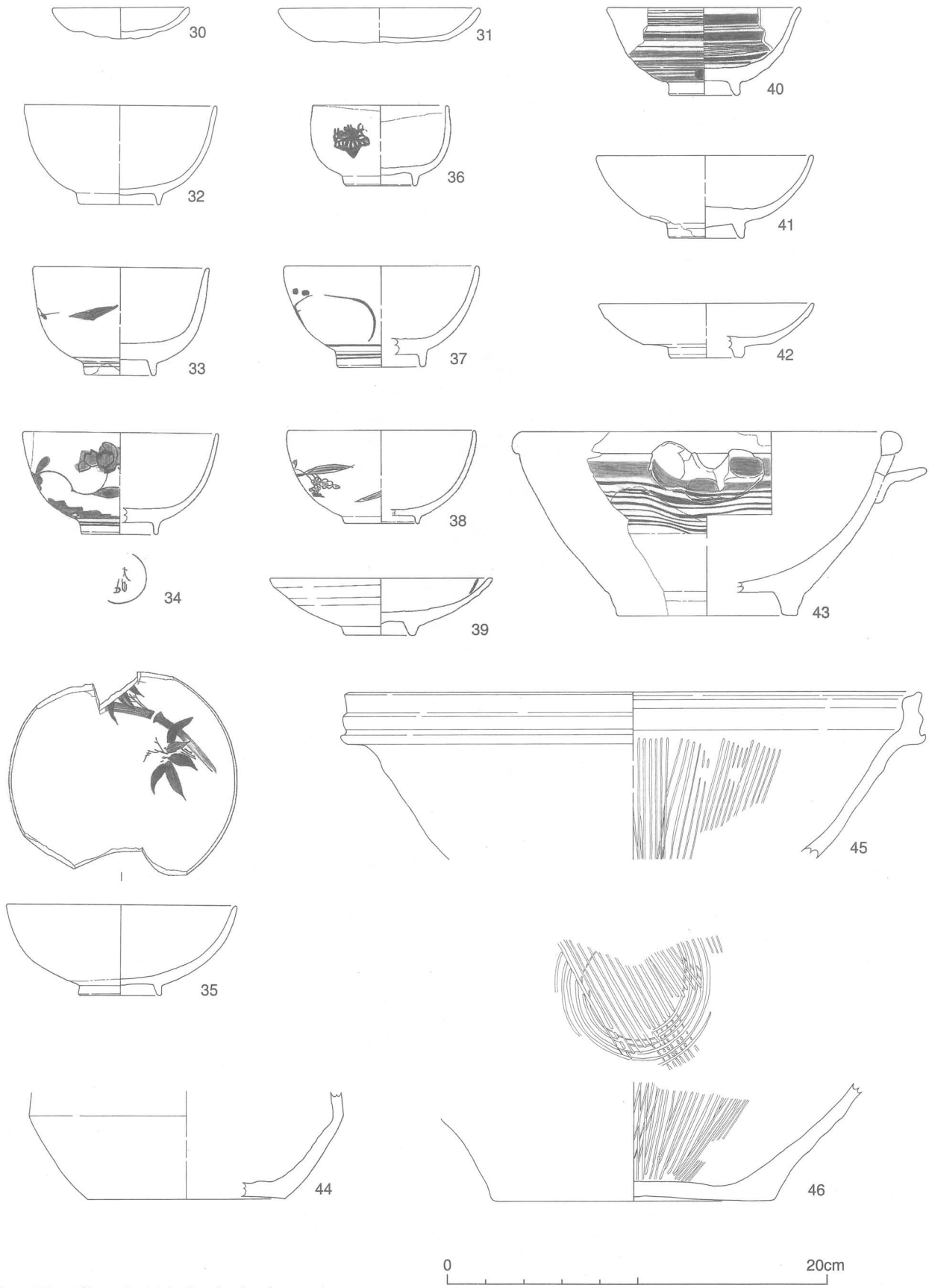
この他に、小穴(P)は148基検出され、このうち根石をもつものは18基ある。これ以外にも礎石の抜き取り穴と考えられるものや、土坑内に10cm大の礫が敷き詰められているもの(土坑5・7)もあり、これらは建物跡の礎石の可能性はある。

遺構の年代について

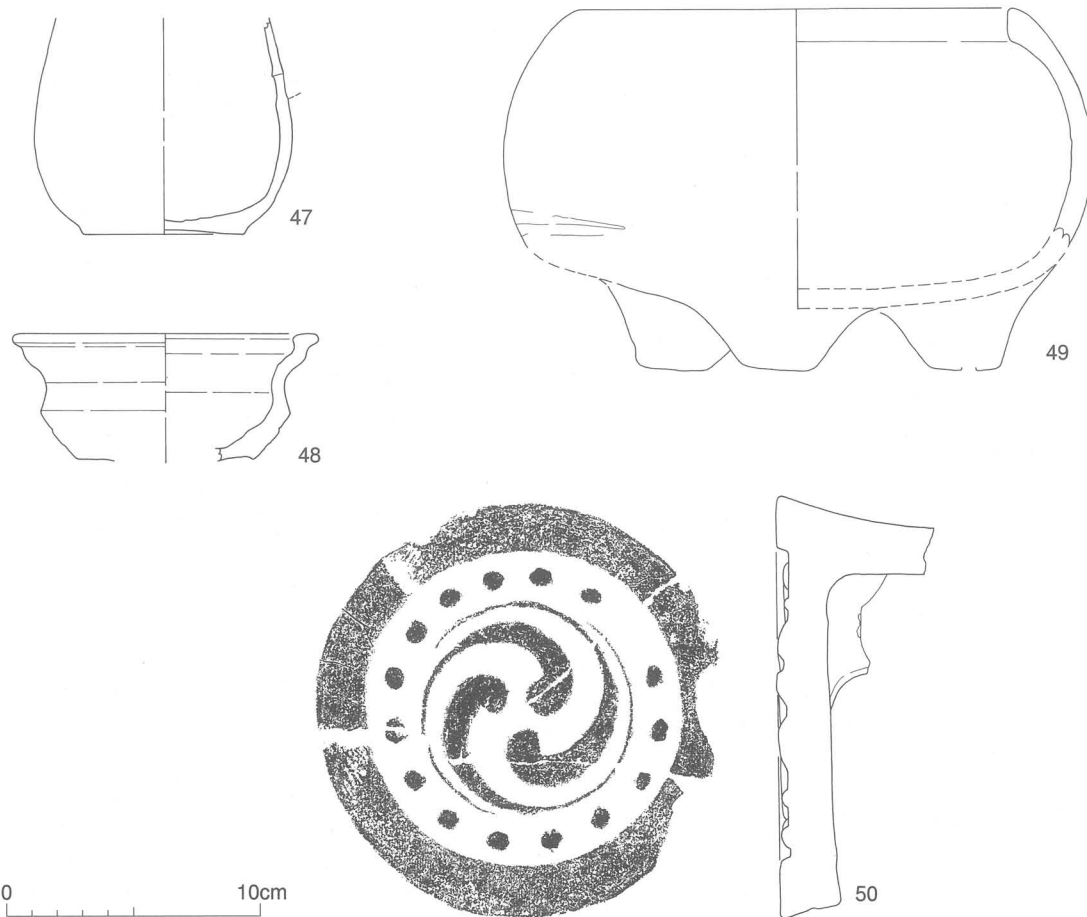
今回発見した最も古い時期の遺構は、井戸2で16世紀後半と考えられる。17世紀前半までの遺構は、土坑58、土坑7、土坑8、溝11、溝5、土坑29、土坑30、土坑17、土坑35などである。また、土坑45・P92は18世紀前半、土坑124は18世紀後半と考えられる。



第11図 土坑5・45・124、P92出土遺物(1/3)



第12図 溝3出土遺物(1)(1/3)



第13図 溝3出土遺物(2)(1/3)

4. 第170次調査

第153次調査区の東側で、敷地内の北東側に東西15m、南北18mの調査区を設定した。重機により表土を取り除き、すべての遺構を地山面で検出した。

基本的な層序は黄褐色粘土層(34)の地山の上にオリブ褐色砂質土層(6)が20cm程度堆積し、その上に南壁側では薄く炭層が堆積し、さらにその上に表土が10~40cm堆積している。表土から地山までは調査区の東側では30cm程度、西側では50cm程度を測る。

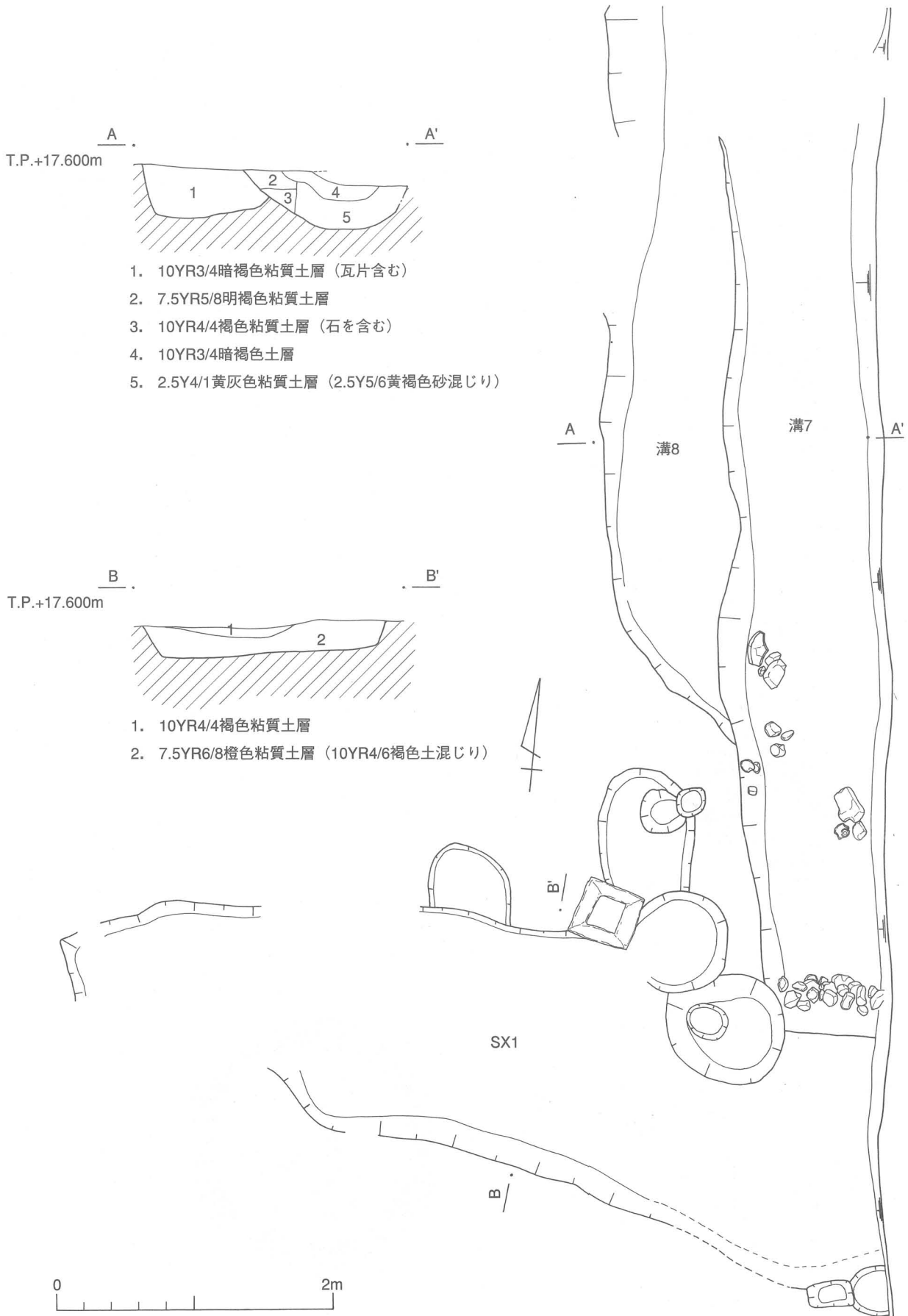
検出した遺構は井戸1基、溝8条、石組遺構1基、瓦溜まり2基、SX2基、埋甕11基、水琴窟3基、埋桶1基、礎石15基、土坑96基、小穴(P)232基である。これらの遺構は概ね3期に分けられると考えられる。I期の主な遺構は、石組遺構とそれに続く溝1、調査区東側を南北に走る溝7・溝8、この溝に直行するSX1などがあり、II期は瓦溜まり1と井戸1などがあり、III期は調査区北側の埋甕(便所遺構・水琴窟等)、南側の礎石などがある。出土遺物は遺物整理箱に17箱である。主要遺構について説明することにする。

溝7(第15・16図、図版5・9)

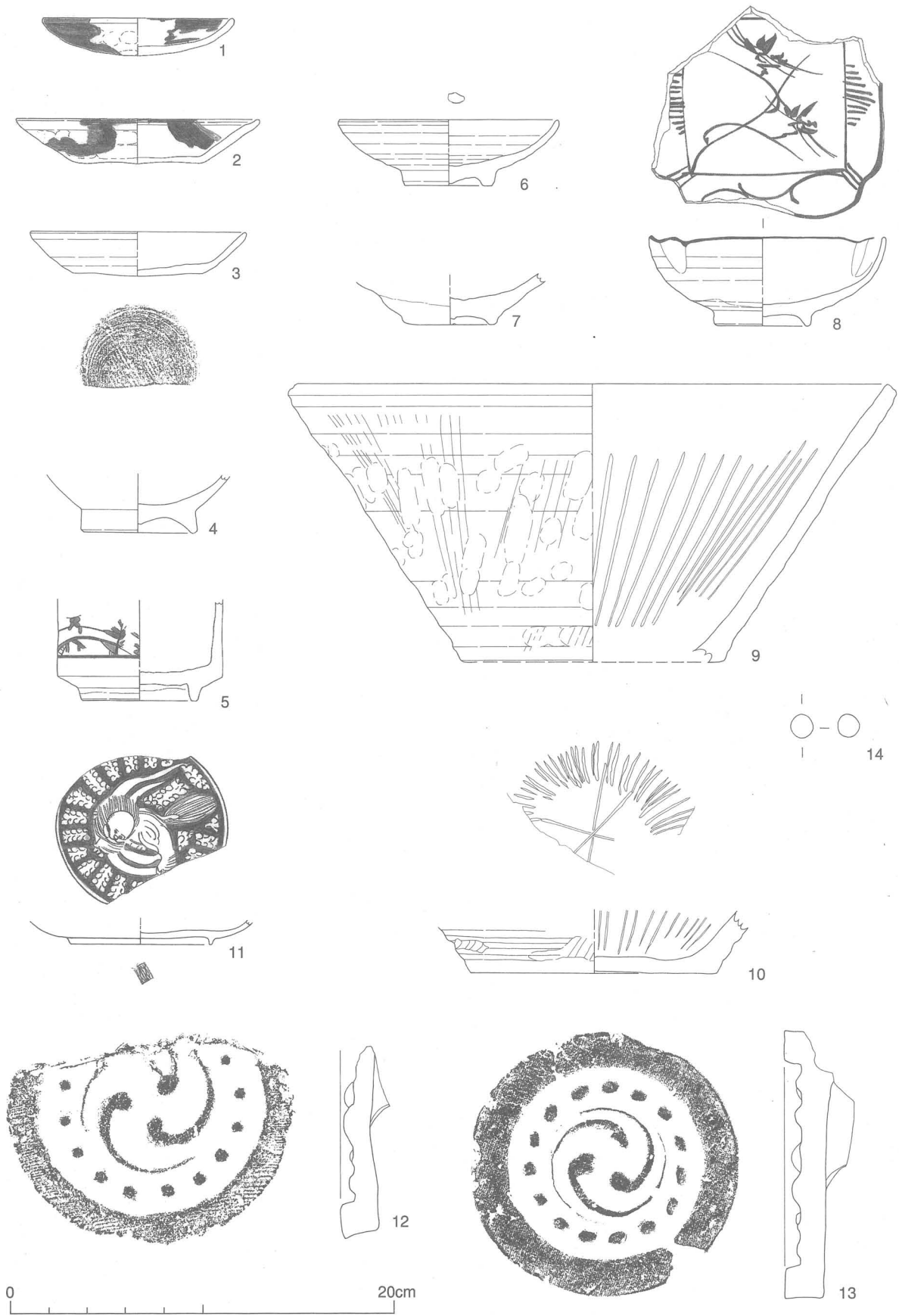
調査区東側を南北に延びる溝である。溝の東側の掘り方は調査区外となっている。検出幅1.2m、深さ42cmを測る。埋土には10~20cm大の礫を含む。出土遺物には土師皿(1~3)、1・2は内外面に煤が付着し、3は右回転の糸切り底、肥前陶器呉器手碗の底部(4)、肥前白磁染付筒形碗(5)、唐津焼砂目積の皿(6)、絵唐津向付(8)、播目がヘラ描きの丹波焼播鉢(9・10)、中国製(景德



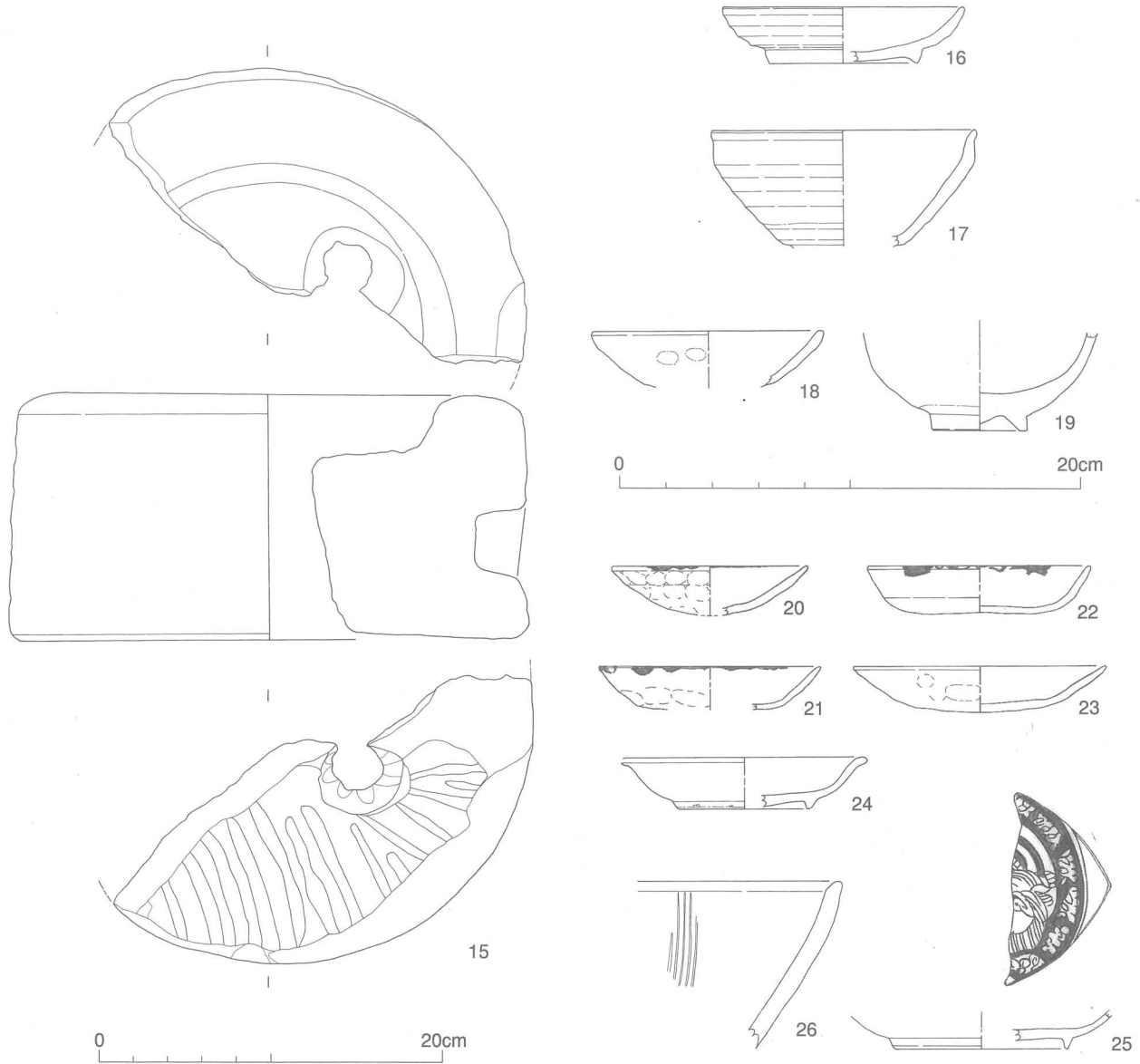
第14図 第170次調査平面図・土層図 (1/100)



第15図 溝7・8、SX1平面・断面図 (1/40)



第16図 溝7出土遺物 (1/3)



第17図 溝7・8、SX1、土坑21・39・93、石組遺構出土遺物（1/3・1/4）

鎮窯）青花皿（11）には見込みに獅子文が描かれ、高台内に銘があり、小野正敏氏分類^{註7)}のE類。12・13は離れ砂が多く付着した軒丸瓦の瓦当、白色に変色した球形の鉄砲弾（14）、石臼（15）などがある。溝7は第153次の溝5と平行し、出土遺物などから時期的に見ても同時期であることから、第153次の溝5・溝11は溝7と続き、方形区画を成すものと考えられる。

溝8（第15・17図、図版5・9）

調査区東側にあり、溝7と平行するように南北方向に延び、南側で溝7の方へ曲がる。掘り方の東側は溝7に切られている。遺構の深さは37cmを測り、埋土は上層が明褐色粘質土層で下層が瓦片を含む暗褐色粘質土層である。出土遺物には瀬戸・美濃焼灰釉丸皿（16）、図示はしていないが瀬戸・美濃焼天目碗などがあり、16世紀後半頃の遺構と考えられる。

SX1（第15・17図）

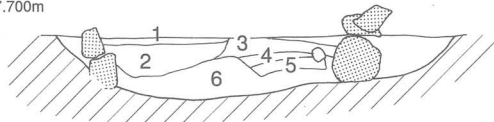
調査区東側に位置し、溝7と直交する方向、東西に延びる。遺構の規模は検出長6m、幅1.75m、

B B'
T.P.+17.600m

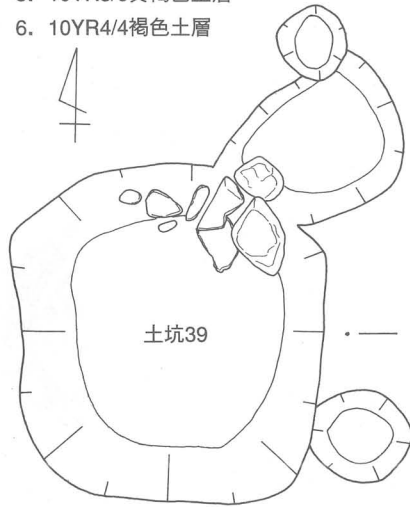


1. 7.5YR5/8明褐色土層
2. 10YR4/4褐色土層

A A'
T.P.+17.700m

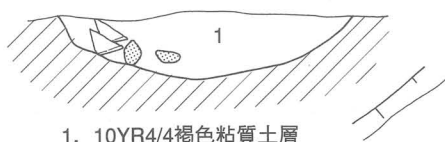


1. 7.5YR5/8明褐色土層
2. 10YR4/6褐色土層に7.5YR5/8明褐色土層が
多量に混じる（炭・砂利を含む）
3. 10YR4/6褐色土層
4. 10YR4/4褐色土層（焼土・炭混じり）
5. 10YR5/6黄褐色土層
6. 10YR4/4褐色土層



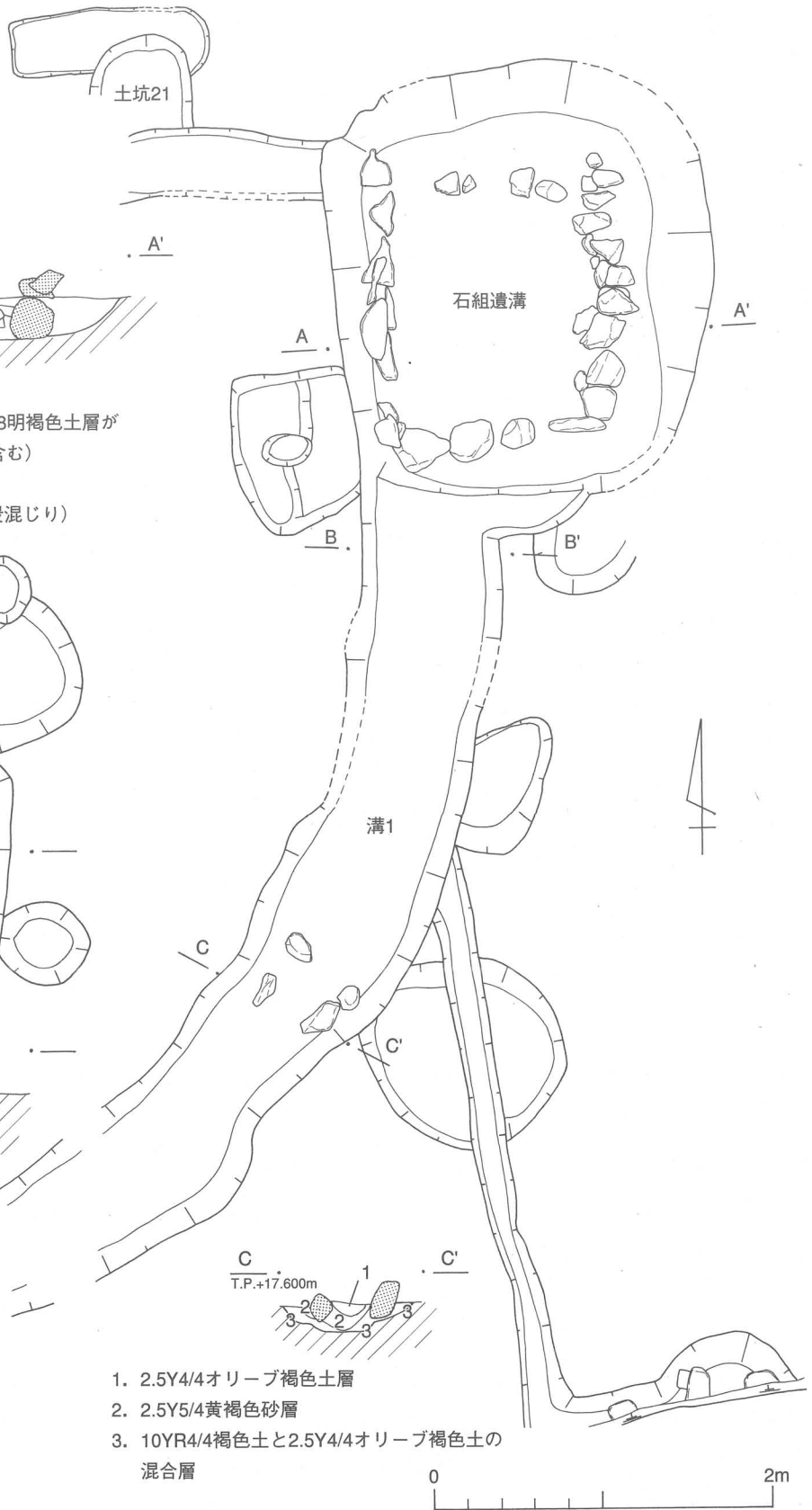
土坑39

T.P.+17.600m

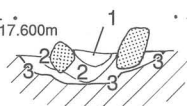


1. 10YR4/4褐色粘質土層

0 50cm



C C'
T.P.+17.600m



1. 2.5Y4/4オリーブ褐色土層
2. 2.5Y5/4黄褐色砂層
3. 10YR4/4褐色土と2.5Y4/4オリーブ褐色土の
混合層

0 2m

第18図 石組遺構、溝1、土坑21・39平面・断面図（1/40・1/20）

深さ22cmを測る。埋土は地山に近い橙色粘質土層と上層の一部で褐色粘質土層が堆積している。出土遺物には瀬戸・美濃焼天目碗（17）などがある。

土坑93（第17図）

調査区東側に位置し、遺構の西側は上面の礎石があり、東側のみの検出である。円形と考えられ、径75cm、深さ5cmを測る。出土遺物には土師皿（18）、唐津焼碗（19）などがある。

石組遺構（第17・18図、図版6）

調査区西側に位置する。掘り方は方形を呈し、底は平らになっていて、東西2.2m、南北2.55m、深さは35cmを測る。石組の内側に法面をもち、石組法面下方では東西1.1m、南北1.3mを測る。石組は北面以外2段積まれていて、北面は15～20cm大の石が間を空けた状態で残っている。また、西面と南面の石の大きさは20～30cm大であり、東側はやや小さく、5～20cm大である。石組遺構の上方は壊されたと考えられる。出土遺物には土師皿（20～23）、中国製（景德鎮窯）白磁端反皿（24）などがあり、20～22の土師皿の口縁部内外面には煤が付着している。出土遺物から16世紀後半と考えられる。

溝1（第18図、図版6）

溝1は石組遺構の南側から円弧を描くように南西方向へ延び、西側の調査区外へと延びる。遺構の規模は幅75cm～1m、深さ15～20cmを測る。埋土には10cm大の礫を多く含む。溝の底は北側が高く、南西側が低くなっていることにより、北側から南西側に流れると考えられる。図示はしていないが、出土遺物には中国製青花皿、瀬戸・美濃焼天目碗、土師皿などがあり、石組遺構と同じ時期であり、遺構の状態から石組遺構と溝1はつながっていて、石組遺構の中へ溜まった水が溝1を伝わって流れ出る可能性が考えられる。

土坑21（第17・18図）

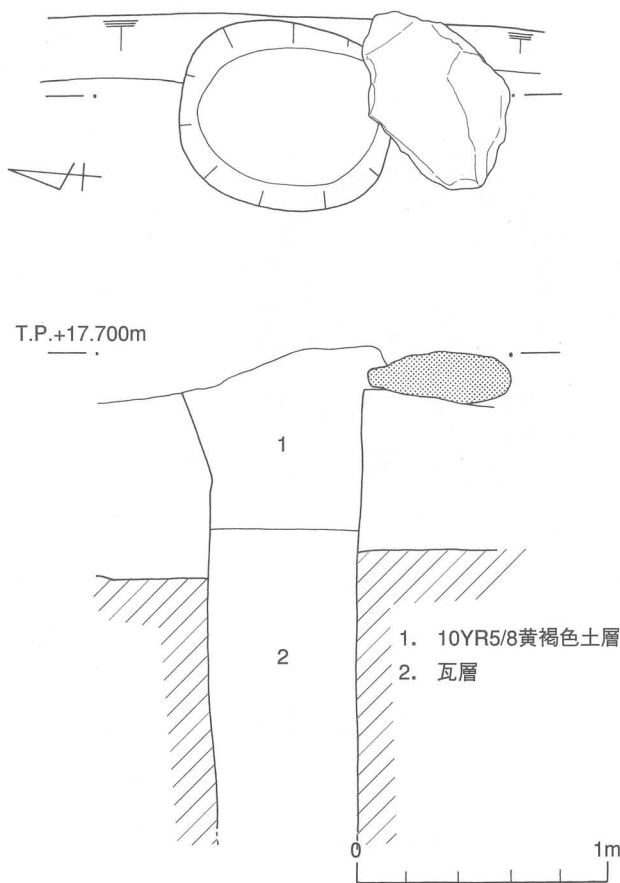
調査区中央西側に位置し、南側は溝4に切られている。遺構の規模は東西60cm、南北検出長55cm、深さ13cmを測る。埋土は粗砂が混じる暗灰黄色粘質土層である。出土遺物には中国製（景德鎮窯）青花皿（25）などがある。見込には獅子文が描かれていて、溝7から出土した11と同じタイプのものである。

土坑39（第17・18図）

調査区南側に位置し、一部をP130に切られている。隅丸方形を呈し、南北に長軸をもち、長軸90cm、短軸80cm、深さ18cmを測る。埋土は瓦や5cm大の礫を少量含む褐色粘質土層である。出土遺物には瓦質播鉢（26）の小片があり、播目単位は不明である。

井戸1（第19・20図、図版9）

調査区の東壁際にあり、ほぼ円形で素掘りの井戸である。遺構の規模は東西75cm、南北85cm、検出面から深さ1.5mのところまで掘削した。埋土は上層が黄褐色土層、下層が割られた瓦を多量に含む瓦層である。出土遺物に



第19図 井戸1平面・断面図（1/30）

は肥前白磁染付碗 (27・28)、28は薄手で模様も丁寧に描かれ、上物と考えられる。焙烙 (29) は口縁部外面に搔き上げ痕がなく、口縁部外面と底部の境の粘土を切り取って仕上げる難波洋三氏分類^{註8)}のD類である。瓦が多く、軒丸瓦の瓦当の径は30が14.2cm、31が17.7cmである。

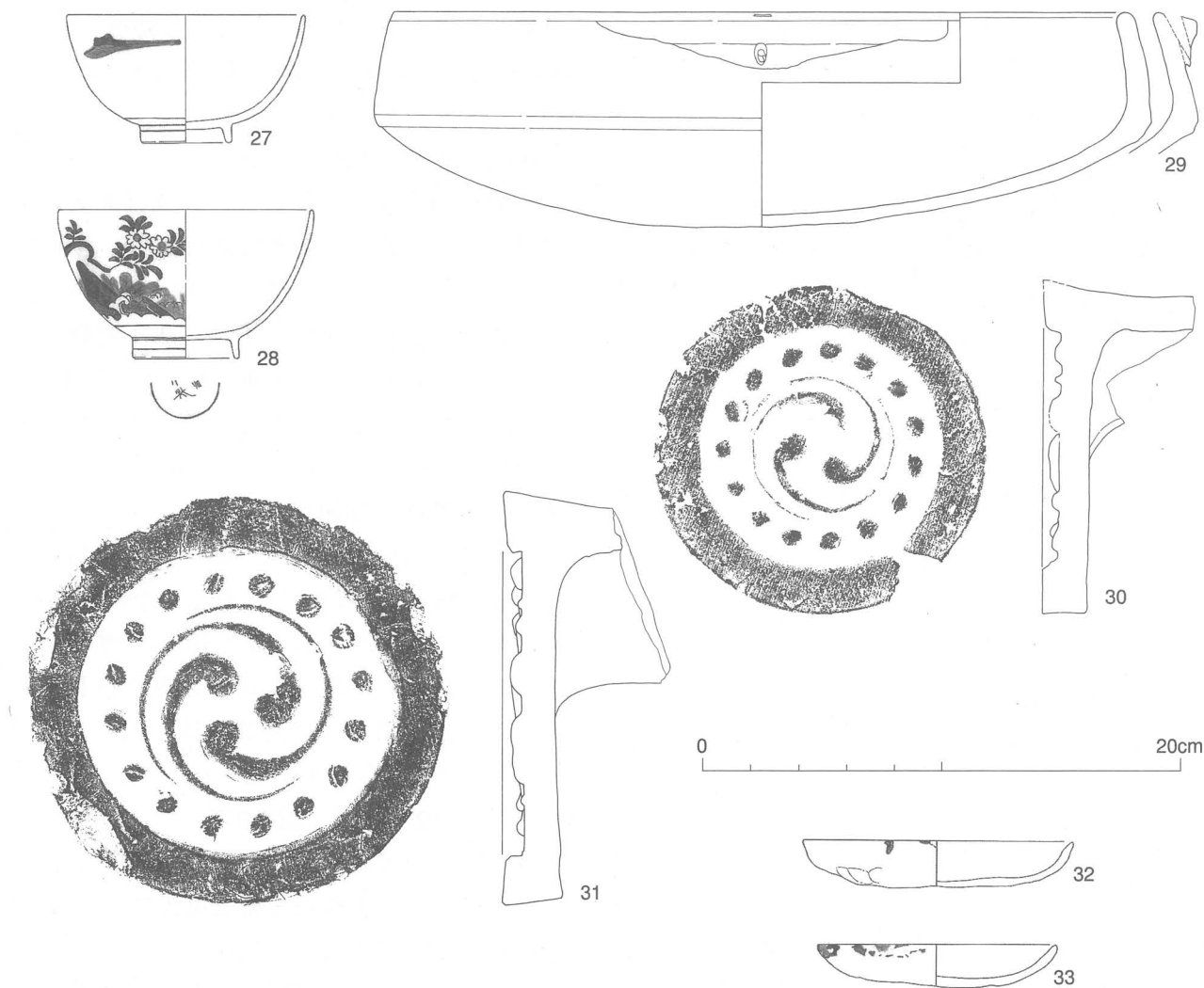
土坑1 (第20図、図版10)

調査区の北側に位置し、一部をP16に切られている。ほぼ円形を呈し、遺構内の西側は2段落ちとなっている。規模は径1m、深さ40cmを測る。埋土には5~20cm程度の礫を多く含む。出土遺物には土師皿 (32・33) などがあり、口縁部内外面に煤が付着していることから灯明皿として使用されていたと考えられる。

瓦溜まり1 (第21・22図、図版10)

調査区の中央に位置し、不整形の大型の土坑である。規模は東西5.4m、南北3.7m、深さ43cmを測る。埋土は焼けた瓦片を多く含む層と、土層が交互に積み重なった状態になっている。

出土遺物には口縁部内外面に煤が付着している土師皿 (34・35)、肥前白磁染付碗 (36・37)・大皿 (38)、37は高台内の圏線の中に「大明年製」くずしの銘がある。36・37は表面が焼けて変色している。また、軒平瓦 (39)・軒丸瓦 (40) など焼けた瓦が多く出土した。土層に焼けた瓦の層があることや出土遺物が焼けていることからこの遺構は火災の後始末をするために掘られた焼土処理土坑と



第20図 井戸1、土坑1出土遺物 (1/3)

考えられる。

土坑84 (第23・24図)

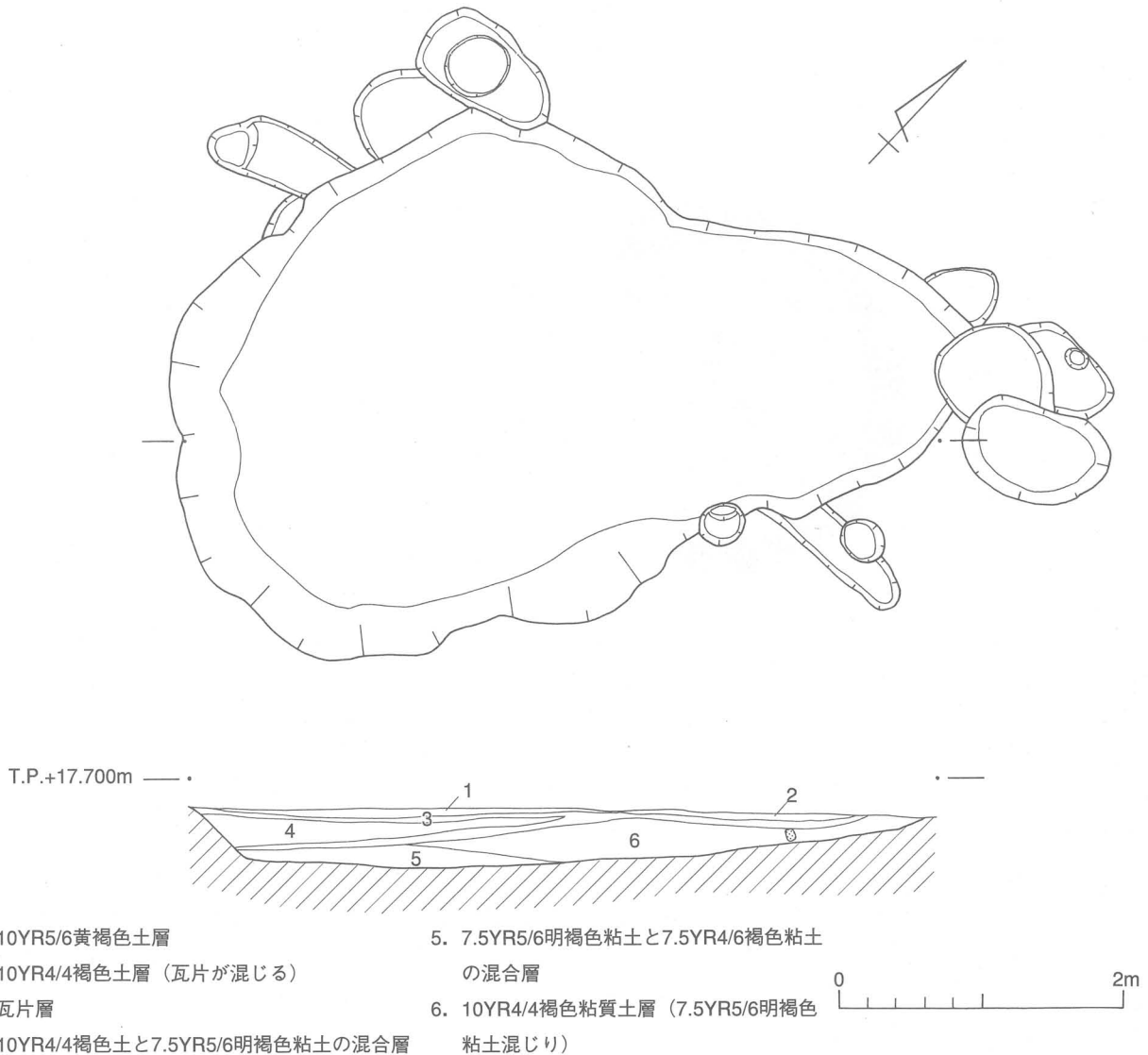
調査区の北側に位置し、一部を土坑86に切られている。円形の土坑である。規模は径95cm、深さ40cmである。埋土は粗砂が混じる暗灰黄色土層である。出土遺物には伊賀・信楽焼の片口行平鍋(41)があり、底部に短い三本の脚が付いていて、煤が付着している。

土坑85 (第24図、図版10)

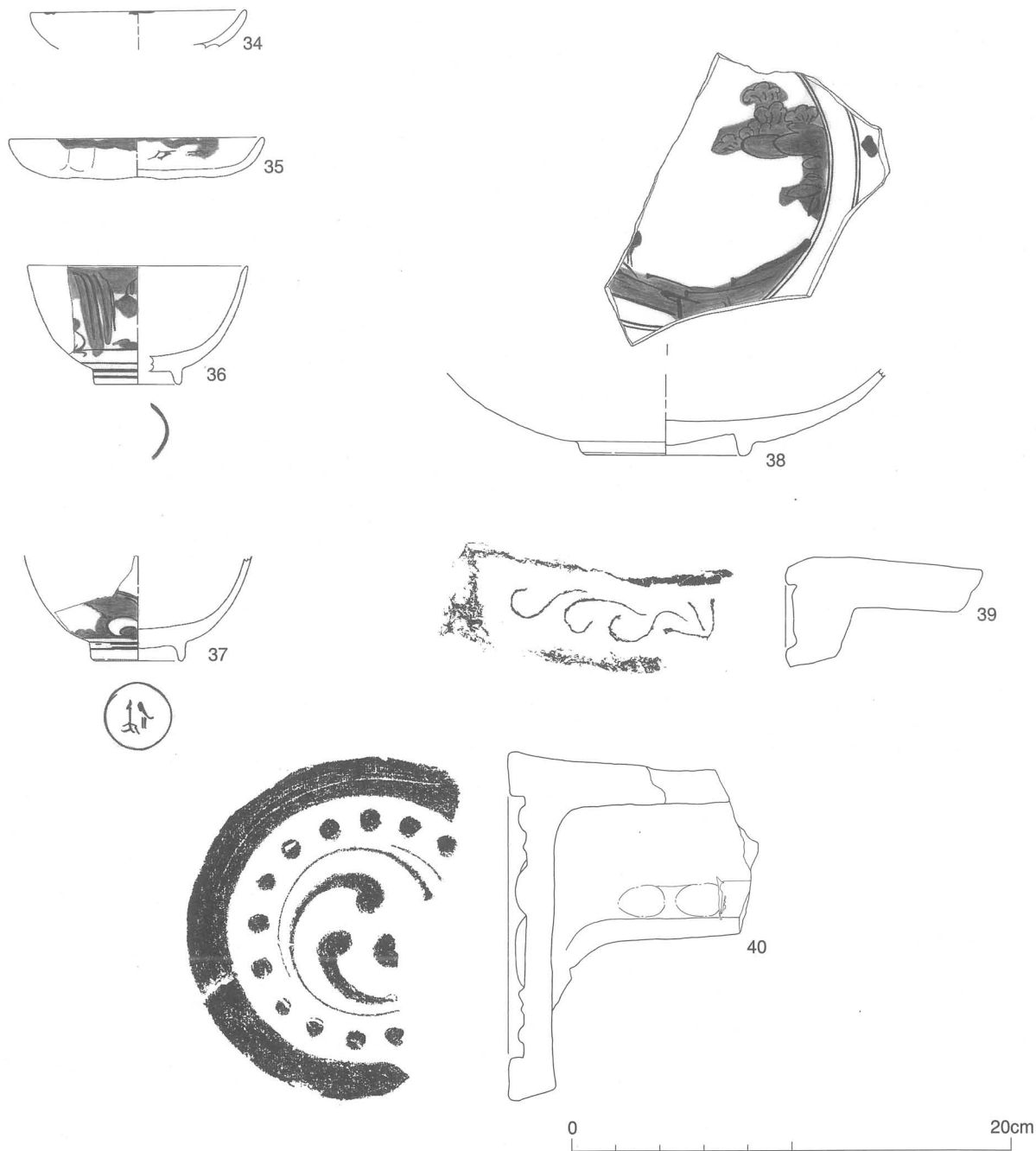
調査区の北壁際に位置し、遺構の北側は調査区外に延びる。遺構の規模は東西検出長1.45m、南北検出長50cm、深さ16cmである。埋土は下層が暗オリーブ褐色土層で礫と遺物を含み、上層が粗砂混じりのオリーブ褐色土層である。遺物には柿釉灯明皿(42)、全面に煤が付着している土師皿(43)、白磁端反碗(44)で蛇の目高台をしていて、片側の内外面に緑色釉が掛かっているもの、丹波焼甕(45)、9本単位のクシ目をもつ堺・明石焼播鉢(46)などの多量の遺物が出土した。

土坑94 (第24図、図版10)

調査区の北側に位置し、南側を水琴窟2に切られている。遺構の規模は東西50cm、深さ25cmを測る。出土遺物には京焼色絵蓋(47)、和泉津田産の花焼塩壺(48)があり、48は算盤玉型で底部は碁



第21図 瓦溜まり1平面・断面図 (1/50)



第22図 瓦溜まり1出土遺物（1/3）

筒底状^{註9)}であり、18世紀初頭の遺物である。他に丸瓦などが出土した。

P34（第24図、図版10）

調査区の北側、水琴窟3の北側に位置する。円形で、規模は径67cm、深さ53cmを測る。埋土は暗褐色土層で、上層には漆喰、瓦片が多く含まれ、下層には丹波焼甕片が多量に含まれる。埋土の状態から便所遺構と考えられる。出土遺物には和泉津田産の花焼塩壺の蓋（50）があり、上面中心部に「花焼□」の刻印がある。この他に図示はしていないが、白磁染付や柿釉灯明皿などの小片がある。

埋桶1（第23図、図版7）

調査区の北側に位置し、円形の掘り方をしている。掘り方は平坦な底からやや上方に開き、規模は

径70cm、深さ28cm測る。桶は側板の一部と底板が残っている。底板は3枚に分かれていて、径40cmを測る。桶内の埋土は、瓦や陶磁器の小片を少量含むオリブ褐色土層である。また、掘り方の埋土は暗灰黄色土層である。埋桶遺構は伊丹郷町では便所遺構としての例があり、その場合は大小並んで2基の埋桶遺構が検出されることが多い。

水琴窟1 (第25・27図、図版7・10)

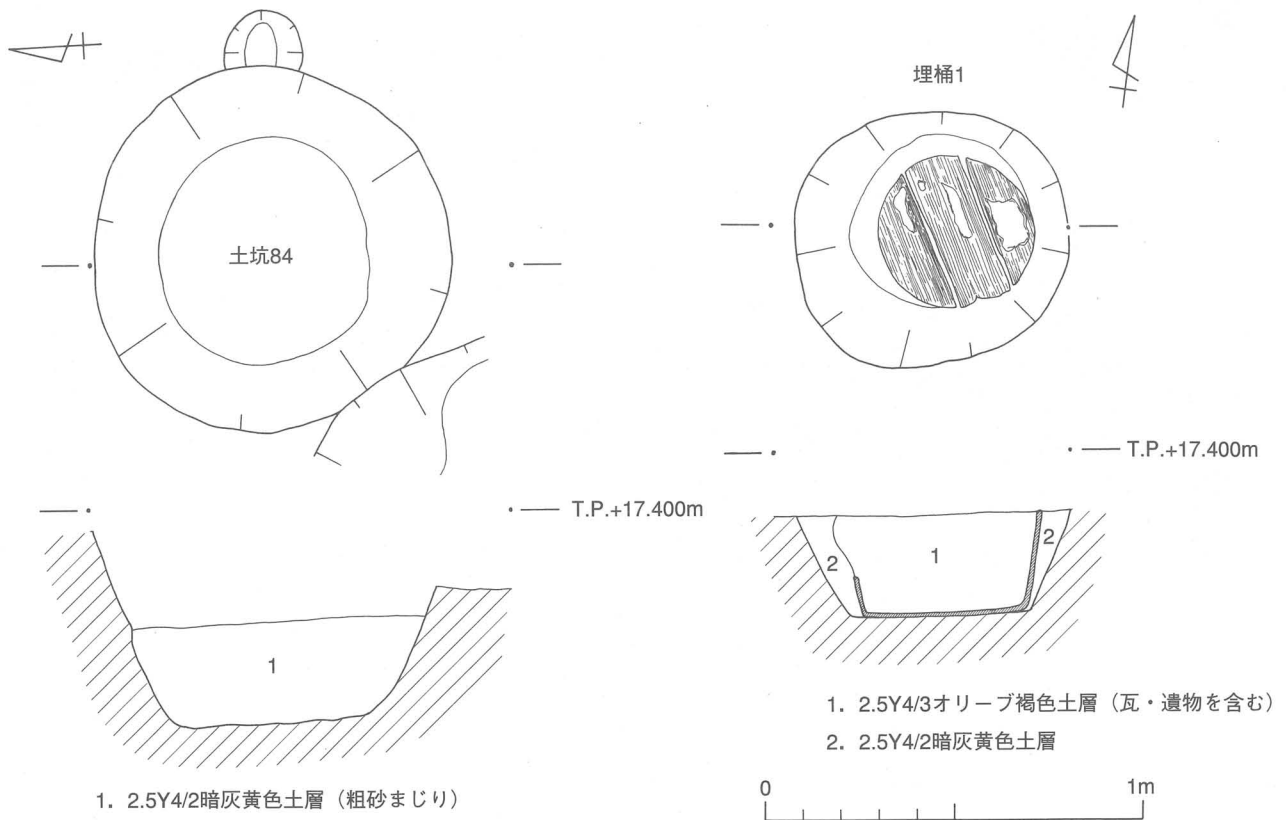
埋甕2の北東側に位置する。規模は径28cm、深さ11cmを測る。円形の掘り方の内部に丹波焼の植木鉢(53)が底部を逆にして設置されていた。鉢の底部の中央には径4cm大の孔が開けられ、水琴窟として使用されていたと考えられる。

水琴窟2 (図版8)

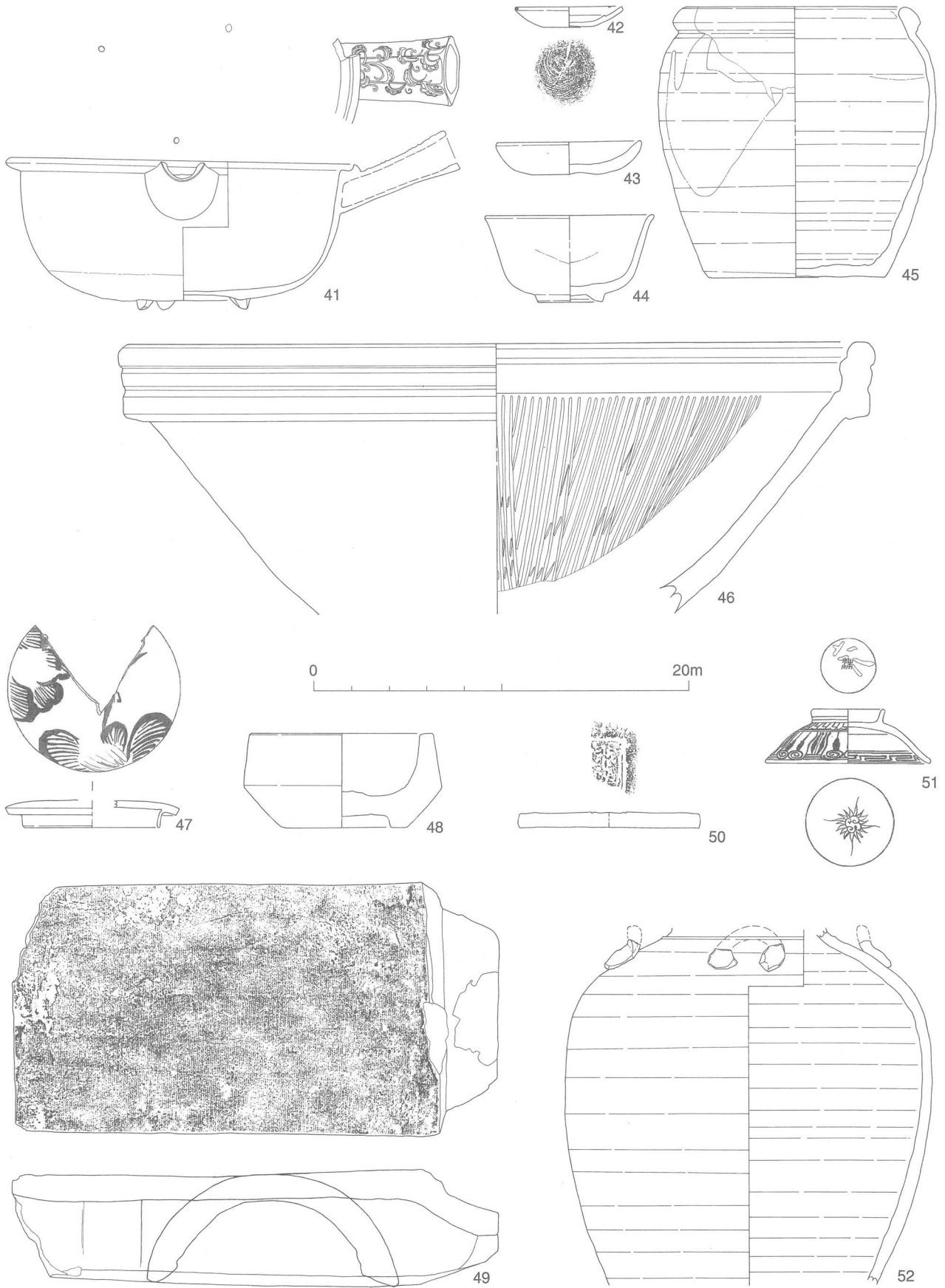
調査区の北西側に位置し、土坑94を切っている。水琴窟の上部構造は失われており、甕の底部は大きく欠損していた。径28cmの掘り方の中に信楽焼壺(52)が底部を逆にして設置されていた。この壺は四耳壺で、口頸部から四耳の上部までは打ち欠かれ、設置しやすい状態にしたと考えられる。壺の内部には焼継ぎされた端反り碗の蓋(51)がつまみ部分を下にして皿状になるように置かれている。これは音色がよく響くようにと考えられた水琴窟の内部構造の一つである。水琴窟1・水琴窟3の内部には皿は置かれていない。

水琴窟3 (第26図、図版8)

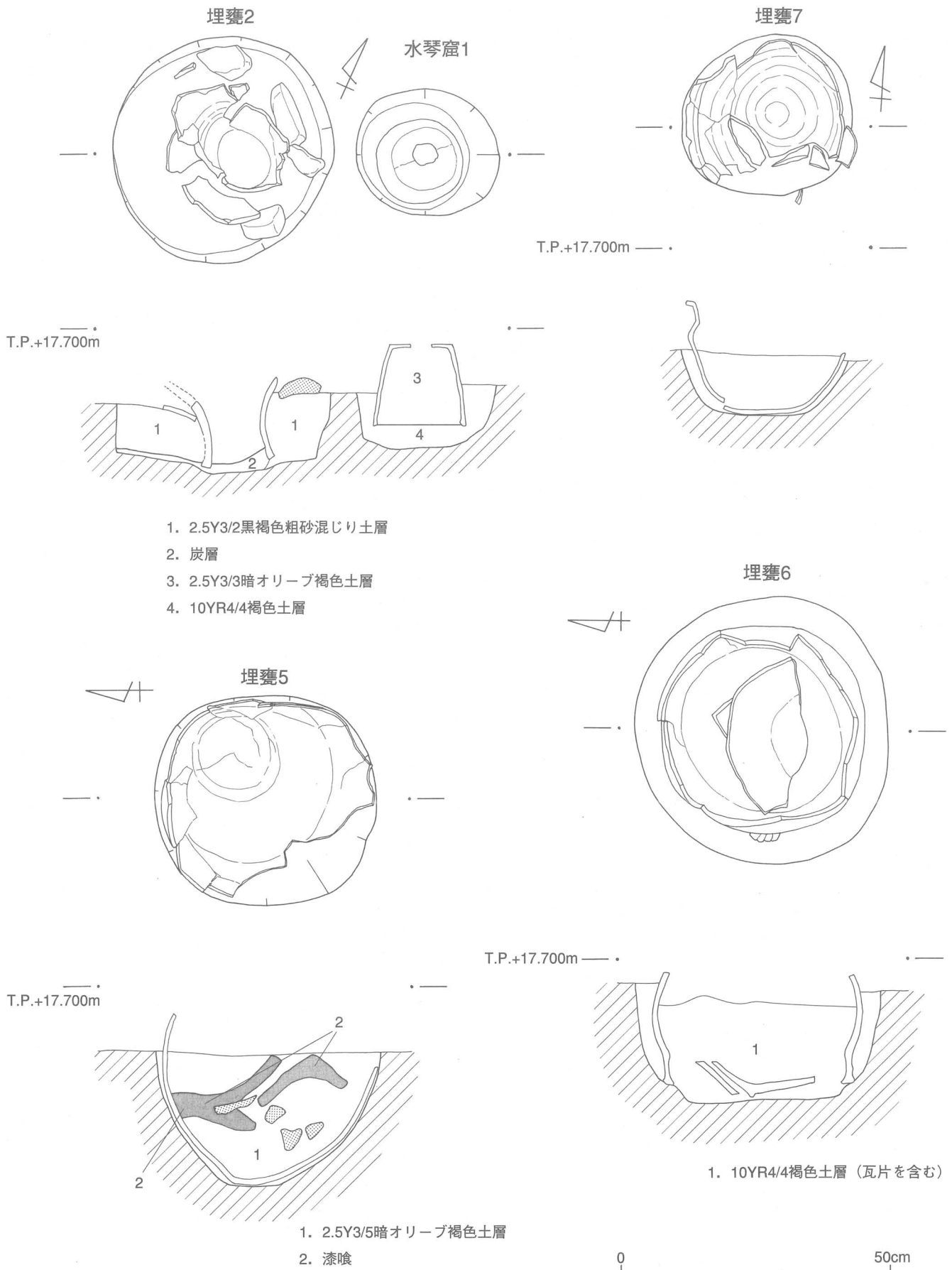
調査区の北西側、水琴窟2の南側に位置する。上部には漆喰が残っていた。この漆喰は播鉢状に開いている。その下には円形の掘り方をした土坑の中に丹波焼の甕が逆さに据えられていた。掘り方の埋土は明褐色粘質土層をしている。掘り方の底には5~10cmの角が丸くなった石が敷かれている。こ



第23図 土坑84、埋桶1平面・断面図 (1/20)



第24図 土坑84・85・94、P34、水琴窟2出土遺物（1/3）

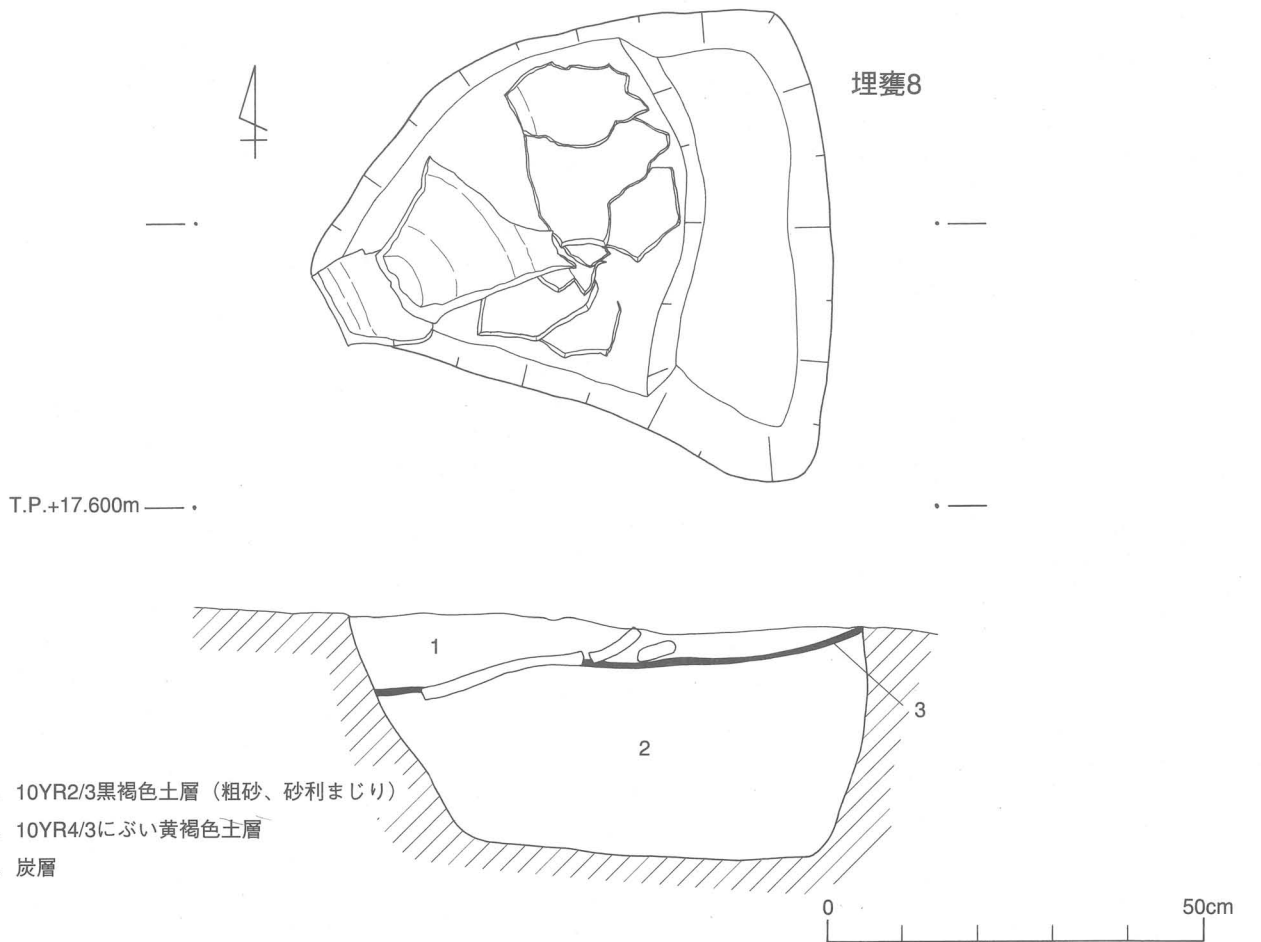


第25図 埋葬2・水琴窟1、埋葬5～7平面・断面図(1/10)

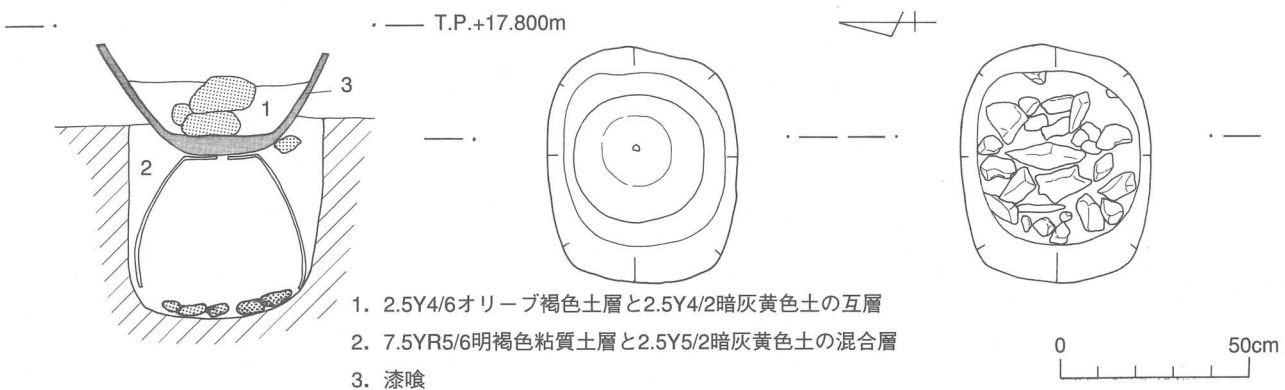
の甕の掘り方は径60cm、深さ58cmを測る。甕の胴部径は55cmを測り、大型のものである。甕の口縁部は打ち欠かれ、設置しやすい状態にしたと考えられる。甕の底部の中央には径3cm大の円形の孔が開けられている。

埋甕 2 (第25・27図、図版7・10)

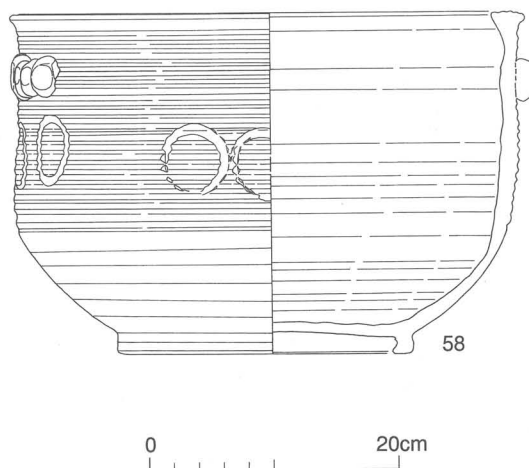
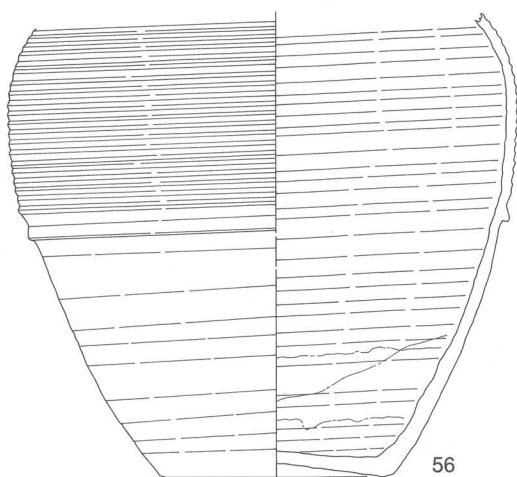
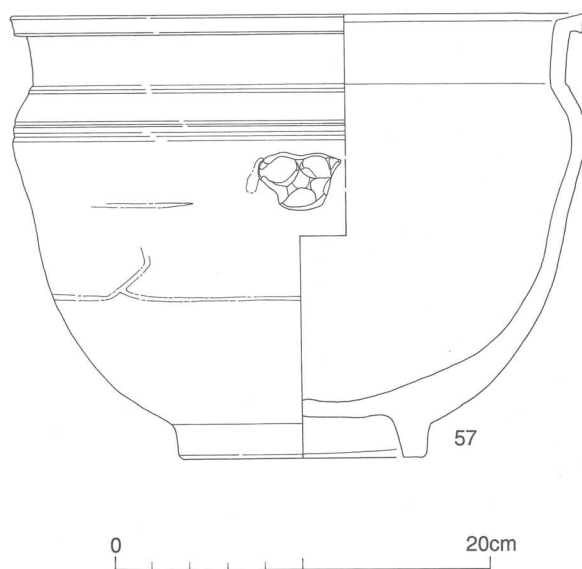
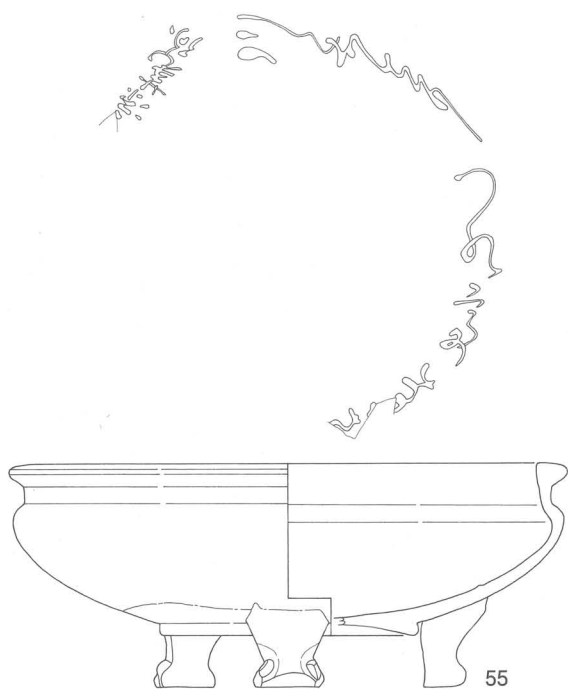
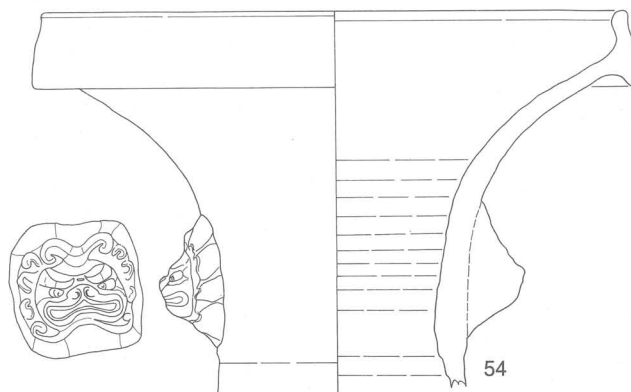
調査区の北側に位置し、水琴窟1の西側にある。円形の掘り方の内部に花器が口頸部を下にして置かれていた。掘り方の径は41cm、深さ15cmを測り、埋土は底面から1～4cm程度炭層で、その上層



水琴窟3



第26図 埋甕 8、水琴窟 3 平面・断面図 (1/10・1/20)



第27図 埋甕2、水琴窟1、埋甕5～7出土遺物（1/3・1/4・1/6）

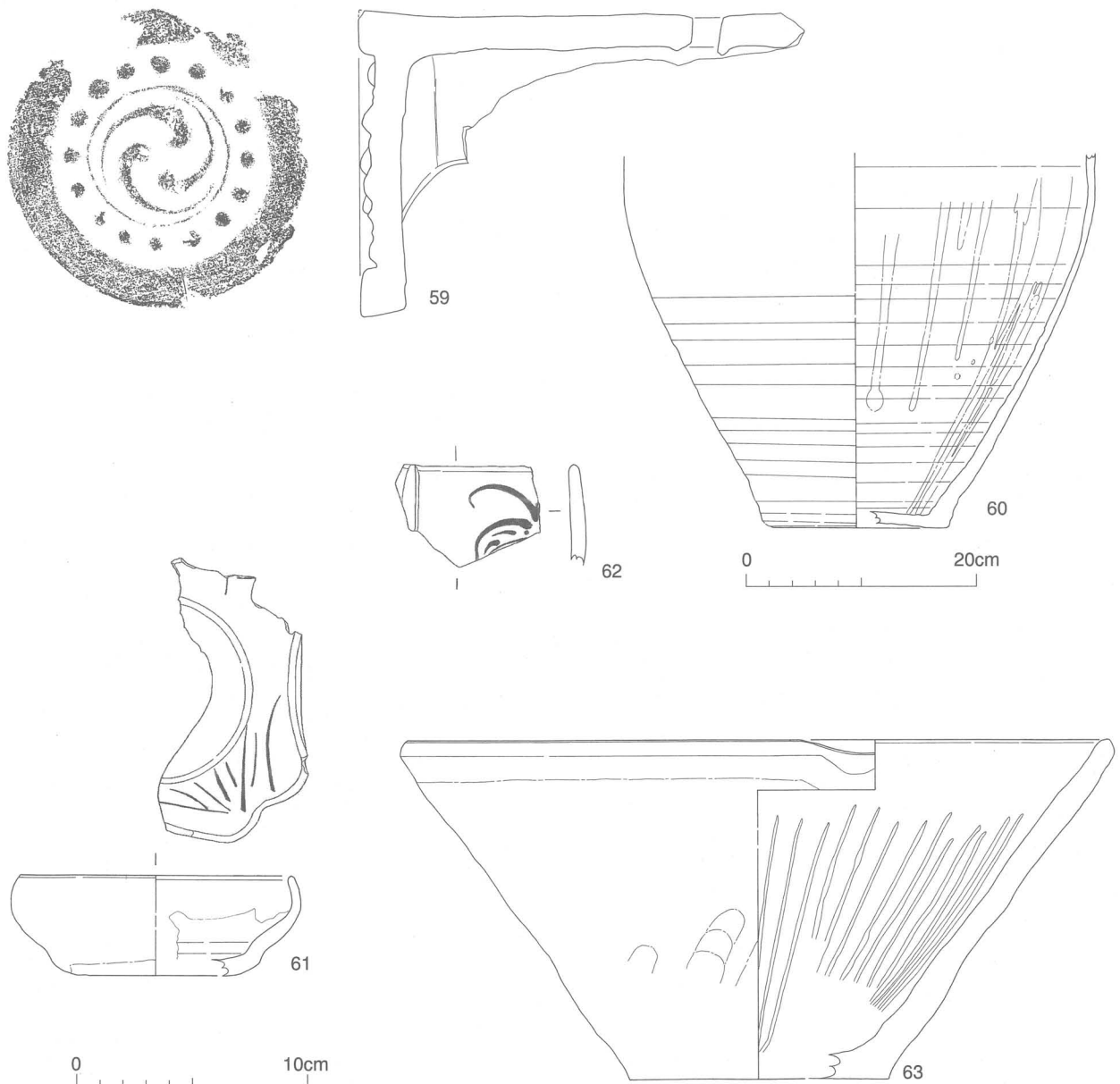
には粗砂が混じる黒褐色粘土層が堆積している。鉄釉の花器 (54) の頸部に獅子頭が付き、伊賀・信楽焼三足付きの鉢 (55) には、イッチン描きの文字が書かれている。

埋甕5 (第25・27図)

調査区北東に位置する。掘り方の規模は、径42cm、深さ25cmを測り、掘り方は甕の底部・胴部に沿うように曲線を描きながら立ち上がる。内部の丹波焼甕 (56) が上部を上にして設置されていた。甕の内部には漆喰があり、また、内面には白色のものが付着していることから、便所として使用されていたと考えられる。

埋甕6 (第25・27図、図版7・10)

中央より少し北寄りに位置する。円形の掘り方で、径は48cm、深さ20cmを測る。内部に甕 (58) が口縁部を下にして設置され、底部が甕の内部に落ち込んでいた。また、底部のほぼ中央に三角形の穴が開けられている。このことから水琴窟の可能性が考えられる。



第28図 埋甕8、包含層出土遺物 (1/6・1/3)

埋甕 7 (第25・27図、図版 8・10)

調査区の北東側に位置する。掘り方は円形を呈し、甕の形と同じように掘られている。掘り方の径は31cm、深さ11cmを測る。内部には口縁部を上にした大谷焼の甕(57)が設置されている。

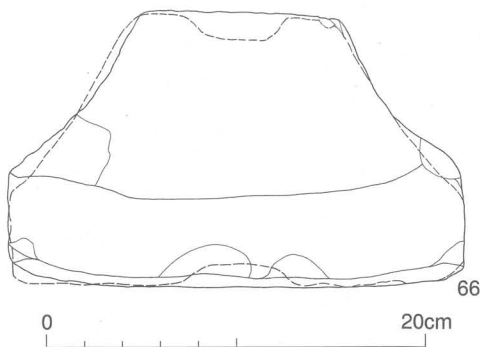
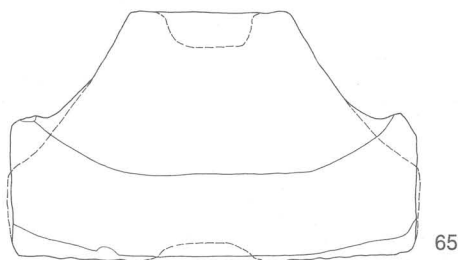
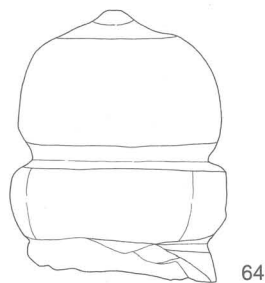
埋甕 8 (第26・28図)

調査区の北側に位置する。埋甕の掘り方は不整形で東西68cm、南北62cm、深さ30cmを測る。甕が東西方向に寝かされた状態で検出された。埋土は下層がにぶい黄褐色土層、上層は5~10cm程度の炭層が堆積し、この炭層の中に甕が埋まっていた。埋甕(60)は丹波焼で、内外面に鉄釉が施されている。軒丸瓦の瓦当には砂が付着している。図示していないが、17世紀前半の瀬戸・美濃焼天目碗もある。

その他の遺物

絵唐津四方向付(61)は南側の焼土より出土し、二次的な焼成を受けている。瀬戸・美濃焼の志野向付(62)は調査区北側より出土した。上面精査中に出土した丹波焼播鉢(63)はヘラ描きの播目である。

石造物も出土している。一石五輪塔の空風輪部(64)は土坑24より出土した。土坑24は調査区西側に位置し、円形の掘り方の土坑で、径75cm、深さ10cmを測り、拳大の礫を多く含む。礎石の根石の一部と考えられる。五輪塔の火輪部分(65・66)は礎石1・礎石2で、どちらも調査区南側にあり、上部を下に、平らな部分を上、上下逆にして設置されている。64~66は花崗岩である。

**遺構の年代について**

石組遺構とそれに続く溝1、溝8などは16世紀後半、調査区東側を南北に走る溝7、この溝に直行するSX1などは17世紀前半、瓦溜まり1と井戸1などは17世紀後半~18世紀初頭、調査区北側の埋甕(便所遺構・水琴窟等)、南側の礎石などは19世紀代の遺構と考えられる。

5. まとめ

今回の調査で最も古い遺構は、153次の井戸2と、170次の石組遺構とそれに続く溝1であり、16世紀後半の遺構であると考えられる。153次の井戸2、170次の石組遺構と溝1は遺構の性格上、建物の外にあったと考えられる。石組遺構と溝は、福井県の特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡^{註10}でも同様の石組遺構と溝が発見されている。大きさは1.5~2.4mの方形あるいは長方形で、深さ60cmを測り、石積みは2段から4段積みである。170次で発見されたものは東西2.2m、南北2.55m、深さ35cmを測り、石は2段積みである。この遺構は一乗谷

第29図 土坑24、礎石1・2出土遺物
(1/4)

浅倉氏遺跡では石積施設と暗渠のセットで水を溜めて排水するための施設と考えられているが、今回発見された石組遺構と溝1も同じような施設であったということが考えられる。

次に17世紀前半までの遺構は、153次の西側の溝5・北側の溝11とそれに続くと考えられる170次の東側の溝7がある。南側は検出されていないが、これらの溝は方形区画を成し、寺院の周囲を巡る溝と考えられる。また、153次で検出された多くの円形の土坑や土坑35（焼土処理土坑）のような長方形の土坑もこの時期のものと考えられる。17世紀後半から18世紀初頭の遺構としては、170次の瓦溜まり1（焼土処理土坑）、井戸1などがあり、18世紀前半の遺構としては153次の溝3や土坑45など、18世紀後半は153次の土坑124があり、それ以降のものとしては、170次の調査区北側の埋甕・水琴窟、調査区南側の礎石などがあり、19世紀代の遺構と考えられる。

寺院の遺構の変遷について

法巖寺の発掘調査では、第30図の「第153次・170次調査区の集成図」を見ると、153次の西側で検出された南北方向の溝5と、北側の東西方向の溝11、そして170次の東側で検出された南北方向の溝7が方形区画を成し、南側は検出されていないが、寺院の周囲に巡る溝と考えられる。溝の内側はほぼ水平になっている。これらの溝は、法巖寺の南側を東西方向に走る道路と溝11が平行し、また、東側の南北方向の道路と153次の溝5・170次の溝7が平行する。これらの溝は出土遺物から17世紀前半に埋められたことがわかる。同じ時代の遺構として、153次の円形の土坑などがあるが、これは礎石の抜き取り穴であると考えられる。153次の土坑5・29・30などのように10cm大の礫が敷き詰められたものや10cm大の礫を多く含むものは、礎石の下に敷かれた根石と考えられる。また、根石をもつ柱穴も多いが、出土遺物がないものも多く、時代は特定できない。このことから方形区画の溝の内側に建物が建っていたと想定されるが、建物の規模などはわからない。

また、153次の土坑35は焼土処理土坑で、埋土に焼けた瓦や炭を含み、出土遺物には二次的な焼成を受けた陶磁器などがあり、火災の後、残滓を処理するために掘られた土坑と考えられる。このような土坑は伊丹郷町各所で発見されている。出土遺物から17世紀前半であるということがわかる。遺跡の概要のところでも述べたが、震災後の本堂の解体工事時に「頂蓮社灌誉代令建立之 貞享五年（1688）」と書かれた墓股（外陣正面上部）が見つかり^{註11)}、この頃に本堂は再建されたと考えられる。検出された土坑35（焼土処理土坑）からいえるように、17世紀前半の頃に火災があり、この火災で焼けた建物が本堂であり、発見された墓股により、貞享5年（1688）に本堂が再建されたという可能性がある。

次に『有岡庄年代秘記』^{註12)}によると、「元禄十二年（1699）十一月四日 天之町より出火、札之辻迄飛火ニテ下市場村焼亡、寺院六ヶ寺、酒家十六軒其外数不知」とあり、また、「元禄十五年（1702）三月三日 中少路村より出火北之口町焼抜、竈数及四百三十九軒」とあり、この文献史料によると、火事の道筋から元禄12年か15年の大火で法巖寺が焼失したと考えられる。また、170次の南壁には炭層が検出され、南側には焼土面があり、瓦溜まり1は焼けた瓦や陶磁器などが出土し、153次の土坑35と同様に焼土処理土坑である。この遺構は出土遺物の様相から時期的に見てもこのどちらかの火災後に掘られた土坑と考えられる。同じ『有岡庄年代秘記』には「宝永五年（1708）六月法巖寺上棟」と記されている。元禄の大火で焼けた建物が宝永5年に建てられたが、本堂は墓股（外陣正面上部）によると貞享5年（1688）に再建され、阪神・淡路大震災時まで存続することから、この宝永5年に建てられた建物は本堂以外の建物であることがいえる。

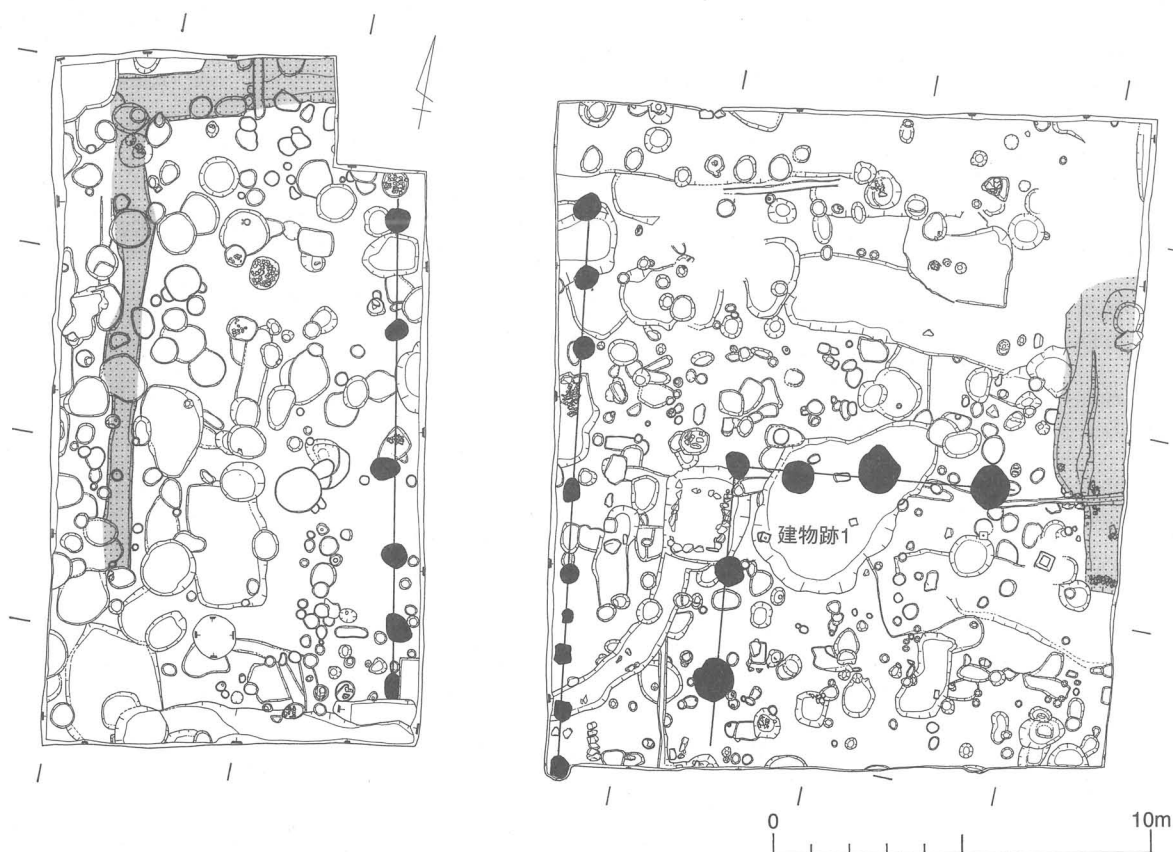
建物跡については、170次の調査区の南側で礎石の根石や抜き取り穴が検出された。建物跡1は南

北2間以上、東西3間以上の規模である。柱間は南北方向3m間隔で、東西方向1.5mと3m間隔である。この建物は第30図を見ると、瓦溜まり1の上に建てられたことから、元禄の大火の後、建てられたことがわかる。また、153次の東端、170次の西端にも南北方向に礎石列及び礎石の抜き取り穴が並んでいる。153次と170次がそれぞれ対応するように検出された。170次では建物跡が調査区南側にあり、調査区北側には埋甕・埋桶の便所遺構や、水琴窟が検出された。これはここが裏庭であることがうかがえる。便所遺構や水琴窟は、出土遺物から19世紀代と考えられる。特に水琴窟3は上部構造の漆喰が残っていて、水琴窟の構造がよくわかる遺構である。

最後に、法巖寺の開基年代は遺跡の概要のところでも述べたが、寺伝によると、大永二年（1522）に昆陽村の方から移ってきたとあり、『有岡庄年代秘記』の「丹丘寺院開基年考」にも「大永第二年」とある。また、平成7年に発見された享保8年（1723年、第9世英誉上人）の木版によると、永禄年間（1558～70）に荒木村重の請いにより開山岷辨上人が寺をこの地に移したとあるが、荒木村重が伊丹の有岡城の城主となったのは、天正2年（1574）のことである。

発掘調査では最も古いと考えられる遺構は153次の井戸2、170次の石組遺構・溝1・溝8などがあり、16世紀後半で、開基年代と考えられる大永2年頃に遡るものは発見されなかった。荒木村重が有岡城の城主となったのも16世紀後半であり、この頃が開基年代かと思われる。

しかし、今回調査したところは、敷地の北側部分のみであり、敷地の南西側にあった旧本堂にあたる部分の調査はされていない。このことから、今後、敷地の南側の調査が実施された時、開基年代頃の遺構が発見される可能性が考えられる。 (細川)



第30図 第153・170次調査区の集成図（1/200）

- 註 1) 浄土宗法巖寺 「法巖寺誌」 1998年
 2) 古野将盈 『有岡庄年代秘記』「伊丹市史第4巻」所収 伊丹市役所 1968年
 3) 伊丹市役所 「伊丹市史第6巻」 1968年
 4) 小野正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会 1982年
 5) 乗岡実 「備前焼播鉢編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000年
 6) 長谷川眞 「近世丹波系播鉢の変遷とその系譜」『関西近世考古学研究Ⅷ』関西近世考古学研究会 2000年
 7) 前掲註4と同じ
 8) 難波洋三 「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究 第九』(財)大阪市文化財協会 1992年
 9) (財)小谷城郷土館 関西近世考古学研究会 シンポジウム『焼塩壺の旅—ものの始まり堺—』
 -小谷方明の焼塩壺の研究から70年の時を経て- 2000年
 10) 福井県立朝倉氏遺跡資料館 「特別史跡 一条谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅱ 第10次・11次・54次調査」 1998年
 11) 前掲註1と同じ
 12) 前掲註2と同じ

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
井戸2	第6図-1 図版4-1	土師皿	素焼き	口 径 9.4 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 外面体部ヨコナデ 底部ナデ 内面ナデ	在地 90% 外面と内面 底部煤付着
	第6図-2	土師皿	素焼き	口 径 10.2 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 外面体部ヨコナデ 底部ナデ 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	45%
	第6図-3 図版4-3	青花皿	白磁	口 径 9.8 cm 器 高 2.4 cm 高台径 6.0 cm	内面口縁部界線有り 見込み人物文と二重圏線有り 高台畳付露胎 砂付着	中国製 80% 16c後～ 17c初
土坑29	第9図-4 図版4-4	鉢	陶器	口 径 (17.8) cm	内面と外面上半口ロク目残す 下半ケズリ 重ね焼き痕有り	備前 20%
	第9図-5 図版4-5	鉢	陶器		内外面ロク目残す	備前 1%
	第9図-6 図版4-6	德利	陶器	底 径 (7.8) cm	外面ロクロナデ 一部に黄ゴマ掛かる 内面ロク目残す 底部ナデ	備前 15%
土坑30	第9図-7	土師皿	素焼き	口 径 (11.0) cm	手捏ね成形 外面体部ヨコナデ 底部ナデ 内面ヨコナデ	在地 30% 口縁部煤付着
	第9図-8	土師皿	素焼き	口 径 (11.2) cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ 内面ナデ	在地 40% 口縁部煤付着
	第9図-9 図版4-9	土師皿	素焼き	口 径 11.0 cm 器 高 2.2 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ 内面ナデ	在地 90% 口縁部煤付着
	第9図-10	播鉢	陶器		内外面ロクロナデ	丹波 1%

第1表 第153次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑30	第9図-11	壺	陶器		灰釉 内面露胎	1%
土坑17	第9図-12	播鉢	陶器	口 径 (35.4) cm	クシ目一単位4本 外面ヨコナデ 内面口縁部ヨコナデ	丹波 5% 17c前半
	第9図-13 図版4-13	甕	陶器	口 径 (38.6) cm	内外面塗り土を施す	丹波 40% 外面口縁部 付近灰被り
	第9図-14	甕	陶器	底 径 17.8 cm	外面ロクロナデ 内面ナデアゲの後ロクロナデ	40%
土坑5	第11図-15 図版4-15	香炉	瓦質	口 径 (13.2) cm	口縁輪花 外面口縁下に粘土紐貼り付け 体部上半 ヨコナデ 下半ヨコ方向のケズリ 内面ヨコナデ	30%
	第11図-16 図版4-16	軒丸瓦	瓦	径 14.6 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 木範の跡有り 接合部 右上がりのカキメ有り	
土坑45	第11図-17	土師皿	素焼き	口 径 (9.4) cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部指頭圧痕 内面ナデ	在地 30% 口縁部煤付 着
	第11図-18	土師皿	素焼き	口 径 (10.4) cm 器 高 1.44 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 40% 口縁部煤付 着
	第11図-19	染付碗	白磁	口 径 (10.3) cm	外面花唐草文	肥前 30%
	第11図-20	染付碗	白磁	口 径 11.1 cm 器 高 5.5 cm 高台径 4.1	外面梅樹文 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量付露胎	肥前 70% 内外面貫入 入る 18c前半
	第11図-21	仏飯具	白磁	口 径 (5.8) cm 器 高 6.0 cm 高台径 3.8 cm	底部露胎	肥前 60% 17c末～ 18c後
P 92	第11図-22	染付碗	白磁	口 径 (9.8) cm 器 高 5.4 cm 高台径 4.0 cm	外面雪輪草花文 高台内崩れた「大明年製」銘と圈線 有り	肥前 30% 18c前半
	第11図-23 図版4-23	色絵碗	陶器	口 径 (12.0) cm 器 高 4.3 cm 高台径 4.1 cm	見込みに青・緑・金の上絵付けによる菊文 高台量 付露胎	京焼 60% 17c末～ 18c前
土坑124	第11図-24	土師皿	素焼き	口 径 (10.4) cm	ロクロ成形 内外面ロクロナデ	在地 30% 口縁部煤付 着
	第11図-25	皿	軟質施釉 陶器	口 径 (10.1) cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り 外面口縁部 より下露胎	40% 口縁煤付着
	第11図-26	鉄絵碗	陶器	口 径 (10.8) cm	外面文様有り 高台周辺露胎	40% 内外面貫入
	第11図-27	小杯	白磁	口 径 (6.7) cm 器 高 5.1 cm 高台径 (3.6) cm	口縁端反り 口鏝 高台量付露胎	肥前 50%
	第11図-28 図版4-28	碗	白磁	口 径 8.8 cm 器 高 5.2 cm 高台径 3.6 cm	高台量付露胎	肥前 90%
	第11図-29	鍋	陶器	口 径 (17.0) cm 器 高 8.1 cm 底径 8.0 cm	鉄釉 把手1ヶ所残存 脚1ヶ所残存 底部周辺露 胎	40%
溝3	第12図-30 図版4-30	土師皿	素焼き	口 径 7.4 cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ナデ	在地 97%

第2表 第153次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
溝3	第12図-31	土師皿	素焼き	口径 (10.6) cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭 圧痕残す) 内面ナデ	在地 45% 口縁部煤付 着
	第12図-32	碗	白磁	口径 (10.3) cm 器高 5.4 cm 高台径 4.2 cm	高台量付露胎	肥前 45% 17c後半
	第12図-33 図版4-33	染付碗	白磁	口径 (9.4) cm 器高 5.9 cm 高台径 3.6 cm	外面草花文 高台量付露胎	肥前 60% 18c前半
	第12図-34	染付碗	白磁	口径 (10.5) cm 器高 5.6 cm 高台径 4.0 cm	外面草花文 高台内崩れた「大明年〇」銘と圏線有り 量付露胎	肥前 40% 18c前半
	第12図-35 図版4-35	鉄絵皿	陶器	口径 12.3 cm 器高 4.9 cm 高台径 4.3 cm	見込み染付と鉄絵による竹文 高台周辺露胎	京焼 90% 内外面貫入 入る
	第12図-36	染付蓋付鉢	白磁	口径 (7.2) cm 器高 4.4 cm 高台径 (3.7) cm	外面コンニャク印判桐文 内外面口縁部露胎 高台 量付露胎	肥前 50% 18c前半
	第12図-37	染付碗	白磁	口径 (10.4) cm 器高 5.5 cm 高台径 (4.5) cm	外面草花文 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量付露胎	肥前 45% 18c前半
	第12図-38	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.1 cm 高台径 (4.0) cm	外面体部花文 高台量付露胎	肥前 40% 18c前
	第12図-39	染付皿	白磁	口径 11.8 cm 器高 3.1 cm 高台径 3.6 cm	内面文様有り 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗 布 高台露胎	肥前 90% 17c末～ 18c前
	第12図-40	碗	陶器	口径 (10.2) cm 器高 4.8 cm 高台径 3.5 cm	口縁若干端反り 内外面巻刷毛目文 見込み蛇の目 釉剥ぎ 高台量付露胎 離れ砂付着	唐津 70% 17c末～ 18c後
	第12図-41 図版4-41	皿	陶器	口径 (11.6) cm 器高 4.5 cm 高台径 4.0 cm	灰釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 重ね焼き痕有り 高台 露胎	唐津系 60% 内外面貫 入る 17c末～18c後
	第12図-42	皿	陶器	口径 (11.4) cm 器高 3.0 cm 高台径 (3.8) cm	灰釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎	唐津系 45% 内外面貫 入る 17c末～18c後
	第12図-43	片口鉢	陶器	口径 (19.3) cm 器高 10.0 cm 高台径 9.5 cm	外面上半巻刷毛目文の上から灰釉掛ける 下半鉄釉 内面灰釉 高台露胎	唐津 40% 17c末～ 18c前
	第12図-44	徳利	陶器		外面口クロナデ 内面口クロ目残す	備前 10%
	第12図-45	搦鉢	陶器	口径 (30.6) cm	クシ目一単位7本 外面口クロナデ 内面口縁部口 クロナデ	丹波 15% 18c前半
	第12図-46	搦鉢	陶器	底径 14.7 cm	見込みクシ目一単位7本 外面口クロナデ	丹波 20% 18c前半
	第13図-47	水注	軟質施釉 陶器	底径 6.4 cm	柿釉 体部1ヶ所孔有り 底部糸切痕有り(右巻き)	20%
	第13図-48	火入れ	陶器	口径 (11.4) cm	外面上半口クロナデ 下半ヘラケズリ 内面口 クロナデ	丹波 30% 外面体部と 底部自然釉掛かる
	第13図-49	鉢	瓦質	口径 (17.2) cm 器高 14.6 cm	外面体部横方向のミガキ 底部ナデ 内面ナデ 底 部3ヶ所に脚有り	50%
	第13図-50	軒丸瓦	瓦	径 17.0 cm 周縁厚 2.4 cm 瓦当厚 1.8 cm	左巻き三巴文 珠文数16個	30%

第3表 第153次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
溝7	第16図-1 図版9-1	土師皿	素焼き	口径 10.0 cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 50% 内外面煤付着
	第16図-2 図版9-2	土師皿	素焼き	口径 12.8 cm 器高 2.4 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭 圧痕残す) 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 80% 内外面口縁 から体部にかけて煤付着
	第16図-3 図版9-3	土師皿	素焼き	口径 11.4 cm 器高 2.4 cm 底径 6.9 cm	ロクロ成形 底部糸切り痕(右巻き)と中心部にハケ メ有り 内外面ロクロナデ	45%
	第16図-4	碗	陶器	高台径 5.8 cm	呉器手 全釉 高台量付砂目有り	肥前 40% 内外面貫入 入る
	第16図-5	染付碗	白磁	高台径 6.0 cm	筒形 外面体部風景文 高台量付露胎	肥前 30% 二次焼成受 ける 17c前~中
	第16図-6 図版9-6	皿	陶器	口径 (11.6) cm 器高 2.5 cm 高台径 (4.6) cm	灰釉 見込み砂目有り 高台露胎	唐津 45% 17c前半
	第16図-7	皿	陶器	高台径 4.9 cm	灰釉 外面高台周辺露胎	唐津 20%
	第16図-8 図版9-8	絵唐津向付	陶器	口径 12.3 cm 器高 4.8 cm 高台径 4.7 cm	入隅四方形 見込み草花文 高台露胎	唐津 60% 16c末~ 17c初
	第16図-9	播鉢	陶器	口径 (31.3) cm 器高 14.8 cm 底径 (14.0) cm	播目へラ描き 外面口縁部ナデ 体部ナデアゲ	丹波 30%
	第16図-10	播鉢	陶器	底径 (13.0) cm	播目へラ描き 底部周辺ナデアゲとヨコナデ	丹波 10%
	第16図-11 図版9-11	青花皿	白磁	高台径 7.4 cm	見込み獅子文 高台内銘有り 量付露胎	中国製 30% 16c後半
	第16図-12	軒丸瓦	瓦	径 (14.7) cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.0 cm	左巻き三巴文 復元珠文数16個 木範の跡有り 瓦 当面雲母粉付着	20%
	第16図-13 図版9-13	軒丸瓦	瓦	径 14.3 cm 周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 木範の跡有り 瓦当面 雲母粉付着	30%
	第16図-14 図版9-14	鉄砲弾	鉛	径 1.2 cm		100% 表面白く変色し ている
	第17図-15	石臼	石	径 (30.8) cm 厚み 14.5 cm	上臼 中央やや外側寄りに1ヶ所孔有り 側面に窪 み有り	花崗岩 30%
溝8	第17図-16 図版9-16	皿	陶器	口径 (10.6) cm 器高 2.5 cm 高台径 (6.6) cm	灰釉 高台内露胎	瀬戸・美濃 45% 16c 後半
SX1	第17図-17 図版9-17	天目碗	陶器	口径 (11.7) cm	内面から外面上半部まで鉄釉 外面下半部錆釉	瀬戸・美濃 15% 16c 中頃
土坑93	第17図-18	土師皿	素焼き	口径 (10.2) cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ナデ	在地 20%
	第17図-19	碗	陶器	高台径 4.0 cm	灰釉 高台周辺露胎	唐津 40% 内外面貫入 入る
石組遺構	第17図-20	土師皿	素焼き	口径 8.6 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 口縁端部ヨ コナデ 内面ヨコナデ	在地 30% 口縁部煤付 着

第4表 第170次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
石組遺構	第17図-21	土師皿	素焼き	口 径 (9.8) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭圧痕残す) 内面体部ヨコナデ	在地 15% 口縁部煤付着
	第17図-22	土師皿	素焼き	口 径 (9.8) cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 外面体部ヨコナデ 底部ナデ 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 40% 口縁部煤付着
	第17図-23	土師皿	素焼き	口 径 11.2 cm 器 高 2.1 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ヨコナデ	在地 30%
	第17図-24	皿	白磁	口 径 (10.4) cm 器 高 2.3 cm 高台径 (5.8) cm	口縁端反り 高台量付露胎 量付周辺砂付着	中国製 30% 16c
土坑21	第17図-25	青花皿	白磁	高台径 (7.6) cm	見込み獅子文 高台内ケズリ 量付露胎	中国製 20% 16c後半
土坑39	第17図-26	播鉢	瓦質		クシ目単位不明 外面口縁部ロクロナデ 体部ナデ(指頭圧痕残す) 内面ロクロナデ	10%
井戸1	第20図-27 図版9-27	染付碗	白磁	口 径 10.1 cm 器 高 5.5 cm 高台径 3.7 cm	外面文様有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 60% 17c末~18c前
	第20図-28 図版9-28	染付碗	白磁	口 径 10.8 cm 器 高 6.4 cm 高台径 4.4 cm	外面風景文 高台内「〇明〇製」銘と圏線有り 量付露胎	肥前 60% 内外面貫入 17c末~18c前
	第20図-29	焙烙	素焼き	口 径 31.2 cm 器 高 9.2 cm	底部外型成形 外面体部ヨコナデ 内面体部ヨコナデ 底部ナデ 把手2カ所貼り付け 孔あり(貫通する)	80% 外面体部煤付着
	第20図-30 図版9-30	軒丸瓦	瓦	径 14.2 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 珠文数15個	35%
	第20図-31 図版9-31	軒丸瓦	瓦	径 17.7 cm 周縁厚 2.5 cm 瓦当厚 1.5 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 瓦当面に雲母粉付着	30%
土坑1	第20図-32 図版10-32	土師皿	素焼き	口 径 11.5 cm 器 高 2.1 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面底部指頭圧痕 内面底部ナデ	在地 85% 口縁部煤付着
	第20図-33 図版10-33	土師皿	素焼き	口 径 10.2 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 98% 口縁部煤付着
瓦溜まり 1	第22図-34	土師皿	素焼き	口 径 (10.0) cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ	在地 20% 口縁部煤付着
	第22図-35	土師皿	素焼き	口 径 (11.8) cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 30% 口縁部煤付着
	第22図-36	染付碗	白磁	口 径 (10.2) cm 器 高 5.6 cm 高台径 (4.0) cm	外面柳文 高台内圏線有り 量付露胎 離れ砂付着	肥前 30% 18c前半
	第22図-37 図版10-37	染付碗	白磁	高台径 4.0 cm	外面草花文 高台内崩れた「大明年製」銘と圏線有り 量付露胎	肥前 30% 18c前半
	第22図-38	染付大皿	白磁	高台径 7.4 cm	見込み松文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 30% 内外面貫入
	第22図-39	軒平瓦	瓦	瓦当高 5.0 cm 周縁厚 2.4 cm	均整唐草文	5% 二次焼成受ける
	第22図-40	軒丸瓦	瓦	径 16.2 cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 巴の尾部は圏線と接する 復元珠文数16個	20%

第5表 第170次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑84	第24図-41	片口行平鍋	陶器	口径 18.6 cm 器高 9.7 cm 底径 6.4 cm	灰釉 受け部と底部露胎 把手部型押し成形による陽刻の唐草文 見込み目跡3ヶ所有り 底部に脚3ヶ所有り	伊賀・信楽 95% 内外面貫入する 外面底部焼けている
土坑85	第24図-42	受皿	軟質施釉陶器	口径 5.8 cm 器高 1.1 cm 底径 2.5 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外面口縁部より下露胎	100% 口縁部煤付着
	第24図-43	土師皿	素焼き	口径 7.8 cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 100% 内外面焼けている
	第24図-44	碗	白磁	口径 9.0 cm 器高 4.8 cm 高台径 3.5 cm	口縁端反り 口縁部に厚く青磁釉を掛ける 蛇の目高台 量付露胎	60%
	第24図-45 図版10-45	甕	陶器	口径 11.9 cm 器高 14.8 cm 底径 9.6 cm	外面灰釉と鉄釉を掛ける 内面口縁より下露胎	丹波 70%
	第24図-46	播鉢	陶器	口径 40.0 cm	クシ目一単位9本 内外面口縁部ロクロナデ 外面体部ロクロヘラケズリ	堺・明石 20%
	土坑94	第24図-47	色絵蓋	陶器	口径 7.3 cm	白色釉 上面青・緑の花文 下面露胎
P 34	第24図-48 図版10-48	花焼塩壺	素焼き	口径 9.8 cm 器高 5.2 cm 高台径 6.9 cm	板作り成形 外面丁寧なナデ 内面縄目跡有り 高台内ナデ	和泉津田 100% 18c 初頭
	第24図-49	丸瓦	瓦	全長 26.4 cm 横幅 13.7 cm 厚み 1.4 cm	凸面縦方向のナデ 凹面コビキB 玉縁部に布目痕有り	98%
	第24図-50 図版10-50	花焼塩壺蓋	素焼き	径 9.9 cm 厚み 0.9 cm	上面ナデ 中心に「花焼○」の刻印有り 下面丁寧なナデ	和泉津田 30% 18c初頭
水琴窟2	第24図-51	染付碗蓋	白磁	口径 8.8 cm 器高 3.0 cm つまみ径 3.8 cm	口縁端反り 外面羊歯文 内面口縁部雷文 見込み火宝珠文と圏線有り つまみ内銘と圏線有り	肥前 100% 焼き継ぎ痕有り つまみ内朱書きで「六八」の文字有り
	第24図-52	壺	陶器		四耳壺	信楽 70%
水琴窟1	第27図-53 図版10-53	植木鉢	陶器	口径 17.2 cm 器高 14.5 cm 底径 12.0 cm	外面口縁部から底部際まで鉄釉 一部灰釉掛かる 底部灰釉 内面露胎 一部鉄釉掛かる 口縁重ね焼き痕有り	丹波 100% 底部中央孔有り
埋壺2	第27図-54	花器	陶器	口径 31.1 cm	鉄釉 頸部2ヶ所獣面を貼り付ける	20%
	第27図-55 図版10-55	鉢	陶器	口径 20.0 cm 器高 9.0 cm 底径 10.1 cm	灰釉 外面底部と脚部露胎 見込みイッチン掛けの文字有り 底部2ヶ所脚残存	伊賀・信楽 60%
埋壺5	第27図-56	甕	陶器	底径 18.8 cm	外面体部塗り土(赤土部釉) 底部露胎 離れ砂付着 内面露胎	丹波 70% 内面下部に白色の付着物有り
埋壺7	第27図-57 図版10-57	甕	陶器	口径 30.8 cm 器高 23.9 cm 高台径 12.8 cm	内外面鉄釉 外面体部1ヶ所耳残存 見込み7ヶ所砂目有り 高台量付露胎	大谷 60%
埋壺6	第27図-58 図版10-58	甕	陶器	口径 39.5 cm 器高 27.5 cm 高台径 22.7 cm	内外面鉄釉 外面体部輪型のスタンプ文 把手2ヶ所貼り付け 高台内露胎	90% 高台内に墨書有り
埋壺8	第28図-59	軒丸瓦	瓦	径 14.0 cm 周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 圏線有り 丸瓦部に孔1ヶ所有り 凹面コビキB	85%
	第28図-60	甕	陶器	底径 16.7 cm	内外面鉄釉	丹波 30%

第6表 第170次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
包含層	第28図-61	絵唐津向付	陶器	口 径 (12.2) cm	入隅四方形 内面草文 外面底部周辺露胎	唐津 30% 二次焼成受ける 16c末~17c初
	第28図-62	向付	陶器		入隅四方形 長石釉 外面鉄絵の文様有り	瀬戸・美濃(志野) 10%
	第28図-63	播鉢	陶器	口 径 (31.4) cm 器 高 15.3 cm 底 径 (11.6) cm	撞目へら描き 片口有り 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデアゲとナデ 底部周辺へらケズリ	丹波 25% 口縁部灰被りと自然釉掛かる
土坑24	第29図-64	一石五輪塔	石	幅 11.6 cm		花崗岩 30% 空・風輪残存
礎石1	第29図-65	五輪塔	石	高 さ 13.5 cm 幅 22.0 cm	火輪部 上面と下面の中央に窪み有り	花崗岩 100%
礎石2	第29図-66	五輪塔	石	高 さ 14.8 cm 幅 24.3 cm	火輪部 上面と下面の中央に窪み有り	花崗岩 100%

第7表 第170次調査遺物観察表(4)

第2節 正善寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第154次調査—

所在地 伊丹市中央2丁目420

調査面積 170m²

調査期間 平成7年6月7日～8月4日

担当者 小長谷正治・細川佳子

1. 遺跡の概要

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、鎌倉時代の伊丹氏の居館に始まる中世城郭と近世の酒造業を生業とした在郷町の遺跡である。正善寺は有岡城惣構えの西端部に位置し、法巖寺、大蓮寺などとともに寺町を形成している。江戸時代には南側に行善寺があった。

正善寺の開基については、江戸時代の伊丹郷町所在寺院の開基について記した「丹丘寺院開基年考」によると天正17年（1590）の開基となっている。しかし、寺の記録によると、西隣の法巖寺第6世心誉上人が寛永9年（1632）に正善寺を開き隠居したことになる。

いずれの開基・開山年代にしたがっても、天正7年（1579）の荒木村重の有岡城落城以降の開基・開山となることから、有岡城との関係はない。

阪神・淡路大震災により解体された本堂は、過去帳によれば享保9年（1724）誓誉上人により再建されている。再建に至った経緯は明らかではないが、元禄年間に発生した3回（元年、12年、15年）の伊丹郷町大火のいずれかに罹災した可能性がある。この点については調査成果を検討した上で後述する。また、薬医門の山門は、切妻造本瓦葺で、2度の修理が行われているが、当初部分は慶長頃まで遡ると推定されている（「伊丹の歴史的建造物」）。

2. 調査の概要

正善寺の本堂は、阪神・淡路大震災で被災したため、ほぼ同位置に鉄骨造り2階建に再建されることになった。再建にあたっては本地点が有岡城跡・伊丹郷町遺跡に該当することから、工事前に発掘調査を実施することになった。発掘調査は、地震で被災した本堂の撤去が完了した後、本堂再建予定地を対象に実施した。調査に際しては、現本堂の礎石及び外周部の石積を残したまま、再建以前の遺構面まで重機掘削し、それ以下の層については人力によって掘り下げた。掲載した遺構全体図は、第1遺構面、第2遺構面の2面に分けて図示し、発掘調査の順序と異なり下層遺構面を第1遺構面、上層遺構



第31図 第154次調査区位置図（1/2,500） 平成10年

面を第2遺構面と呼称している。第1遺構面は所謂地山面、第2遺構面は、享保9年再建直前の遺構面に現本堂の礎石および本堂基壇外周の石積を加えている。しかし、実際には調査区北側では遺構面を厳密に分けることができず、両遺構面の遺構が混同している。

調査区には土層観察用の畔を十字に設定し、寺院創建以降の変遷を確認することにし、最終段階まで残した。

3. 調査成果

第1遺構面

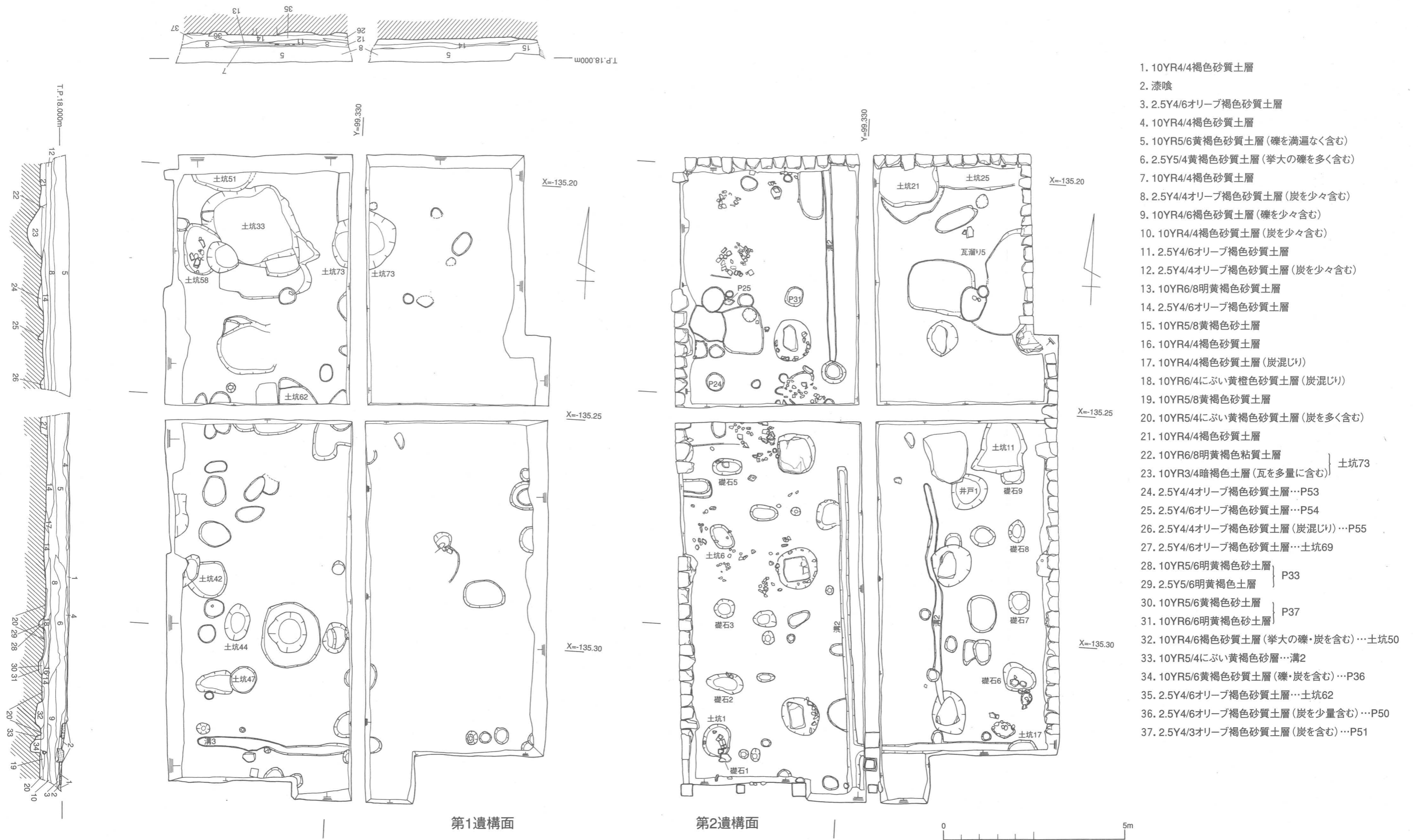
第1遺構面には、建物跡など性格の知れる遺構が少ない。ただ、五輪塔の火輪を伏せて設置した遺構（礎石12）は、伊丹郷町遺跡で江戸初期以前の礎石建物によく見られる石仏転用礎石と共通した特長をもっており、これを含めた礎石建物が存在した可能性もある。

第2遺構面

第2遺構面の新旧2時期のうち、古い段階の遺構には、調査区の中央部から南側にかけて享保9年以前の建物跡、その北側には瓦溜まりと土坑がある。礎石建物跡は、礎石のすべてが抜き取られ浅い



第32図 調査区設定図 (1/500) 昭和60年



1. 10YR4/4褐色砂質土層
2. 漆喰
3. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層
4. 10YR4/4褐色砂質土層
5. 10YR5/6黄褐色砂質土層(礫を満遍なく含む)
6. 2.5Y5/4黄褐色砂質土層(拳大の礫を多く含む)
7. 10YR4/4褐色砂質土層
8. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土層(炭を少々含む)
9. 10YR4/6褐色砂質土層(礫を少々含む)
10. 10YR4/4褐色砂質土層(炭を少々含む)
11. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層
12. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土層(炭を少々含む)
13. 10YR6/8明黄褐色砂質土層
14. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層
15. 10YR5/8黄褐色砂土層
16. 10YR4/4褐色砂質土層
17. 10YR4/4褐色砂質土層(炭混じり)
18. 10YR6/4にぶい黄褐色砂質土層(炭混じり)
19. 10YR5/8黄褐色砂質土層
20. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土層(炭を多く含む)
21. 10YR4/4褐色砂質土層
22. 10YR6/8明黄褐色粘質土層
23. 10YR3/4暗褐色土層(瓦を多量に含む) } 土坑73
24. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土層…P53
25. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層…P54
26. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土層(炭混じり)…P55
27. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層…土坑69
28. 10YR5/6明黄褐色砂土層 } P33
29. 2.5Y5/6明黄褐色土層 } P33
30. 10YR5/6黄褐色砂土層 } P37
31. 10YR6/6明黄褐色砂土層 } P37
32. 10YR4/6褐色砂質土層(拳大の礫・炭を含む)…土坑50
33. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土層…溝2
34. 10YR5/6黄褐色砂質土層(礫・炭を含む)…P36
35. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層…土坑62
36. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土層(炭を少量含む)…P50
37. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土層(炭を含む)…P51

第33図 第1・2遺構面平面図・土層図(1/100)

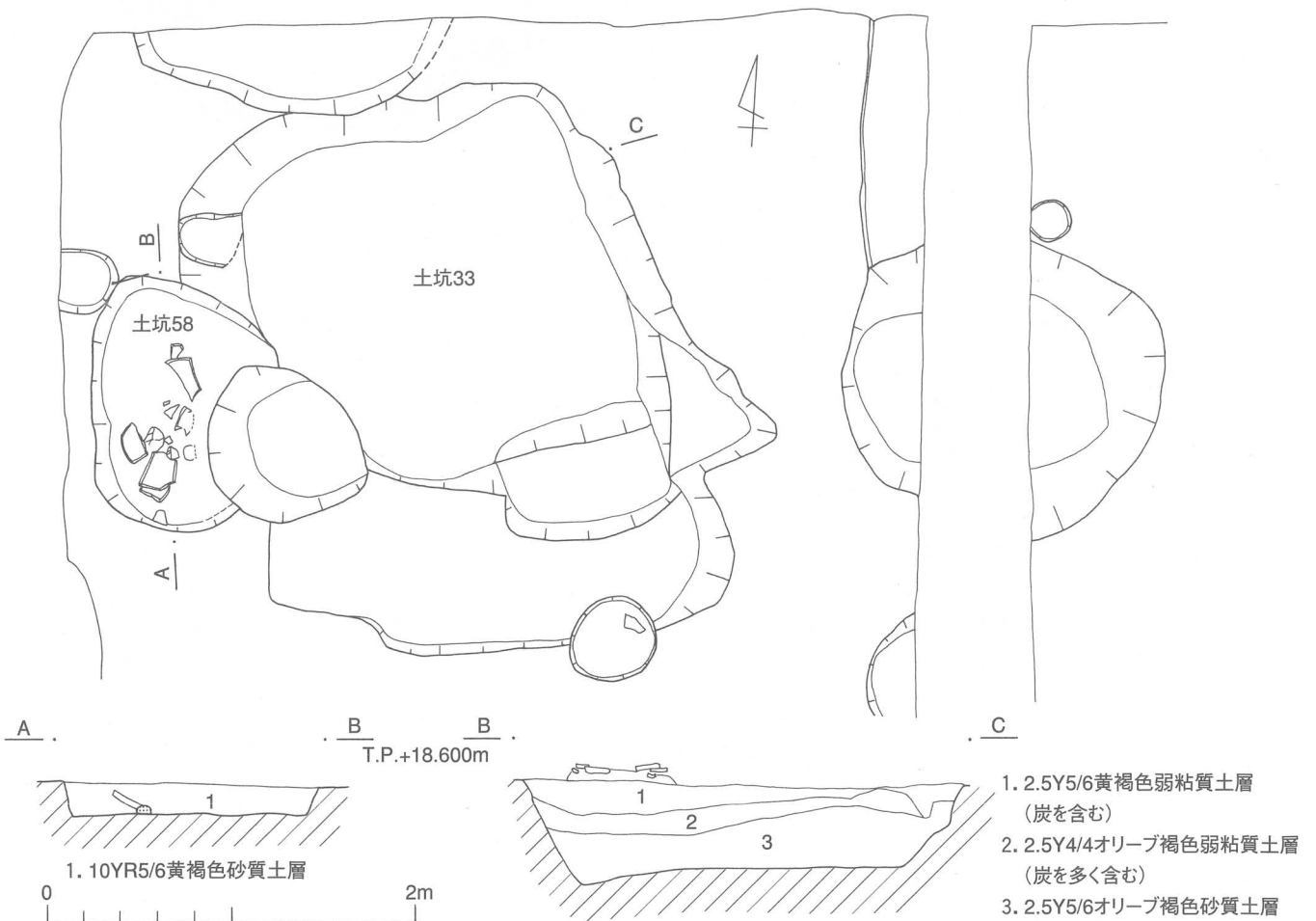
土坑として残っていた。抜き取り穴は南北方向に2列、4基～5基が並ぶ。調査範囲に限られており、本来の規模は明らかではない。この礎石建物が寺院創建期の建物である可能性がある。礎石建物の北側には瓦溜まりが広がっている。

新期の遺構には享保9年再建の現本堂の礎石と基壇周囲の石積がある。礎石は2列計8個、すべて自然石で奥から2石目に特別大型の石が用いられている。基壇外周の石積は検地石の一段積みであるが、東西礎石列上の検地石の下にはさらに1石が設置されていた。

現本堂は建築学的な調査が行われないうまま解体されたため、建物の構造など詳細は明らかではないが、正善寺に残る年代不明の境内見取り図によれば、入母屋造りで、建坪は51坪9畝余りとなっている。

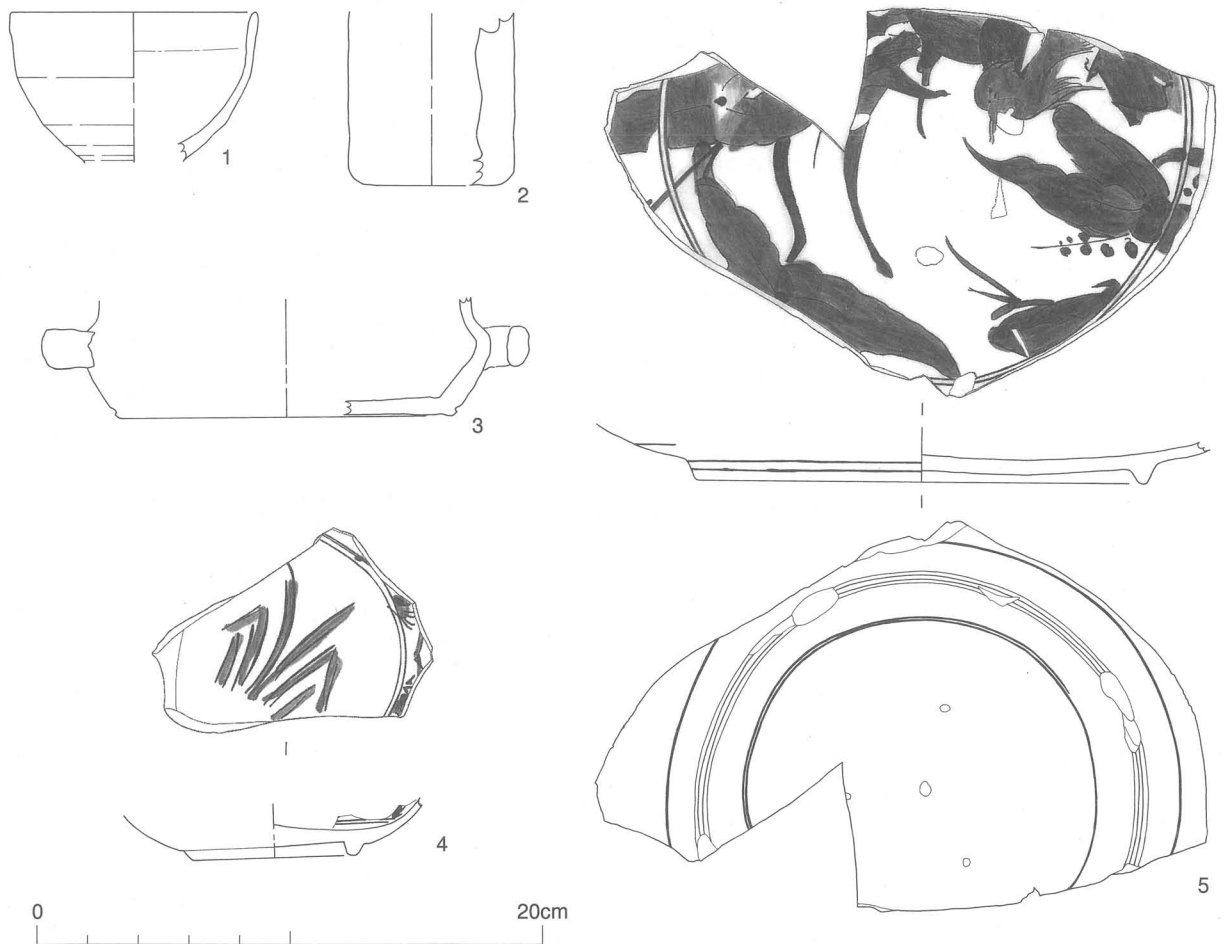
土坑33 (第34図、図版11・15)

この遺構は調査区の北側にあり、調査時には第1遺構面の遺構として調査を行ったが、土坑の上層部から出土した瓦などは第2遺構面の瓦溜まり3と同じであることがわかった。したがって、遺構の所属は第2遺構面とするべきである。遺構の規模は、長さ3.1m、幅2.4mの不整形、深さ40cmである。出土遺物のうち、瓦以外の遺物には肥前青磁碗(1)、肥前染付皿(4・5)や陶器では丹波焼の火入れ(3)、同じく丹波焼の播鉢(6・7)がある。瓦には三巴文軒丸瓦(8~10)、棟込瓦(11~14)、唐草文軒平瓦(15~20)などがある。軒丸瓦の巴文は何れも左巻きで、8には圏線がめぐっている。また、8・10は丸瓦部との接続部分にカキ目が施されている。棟込瓦のうち13と14は、凸弁

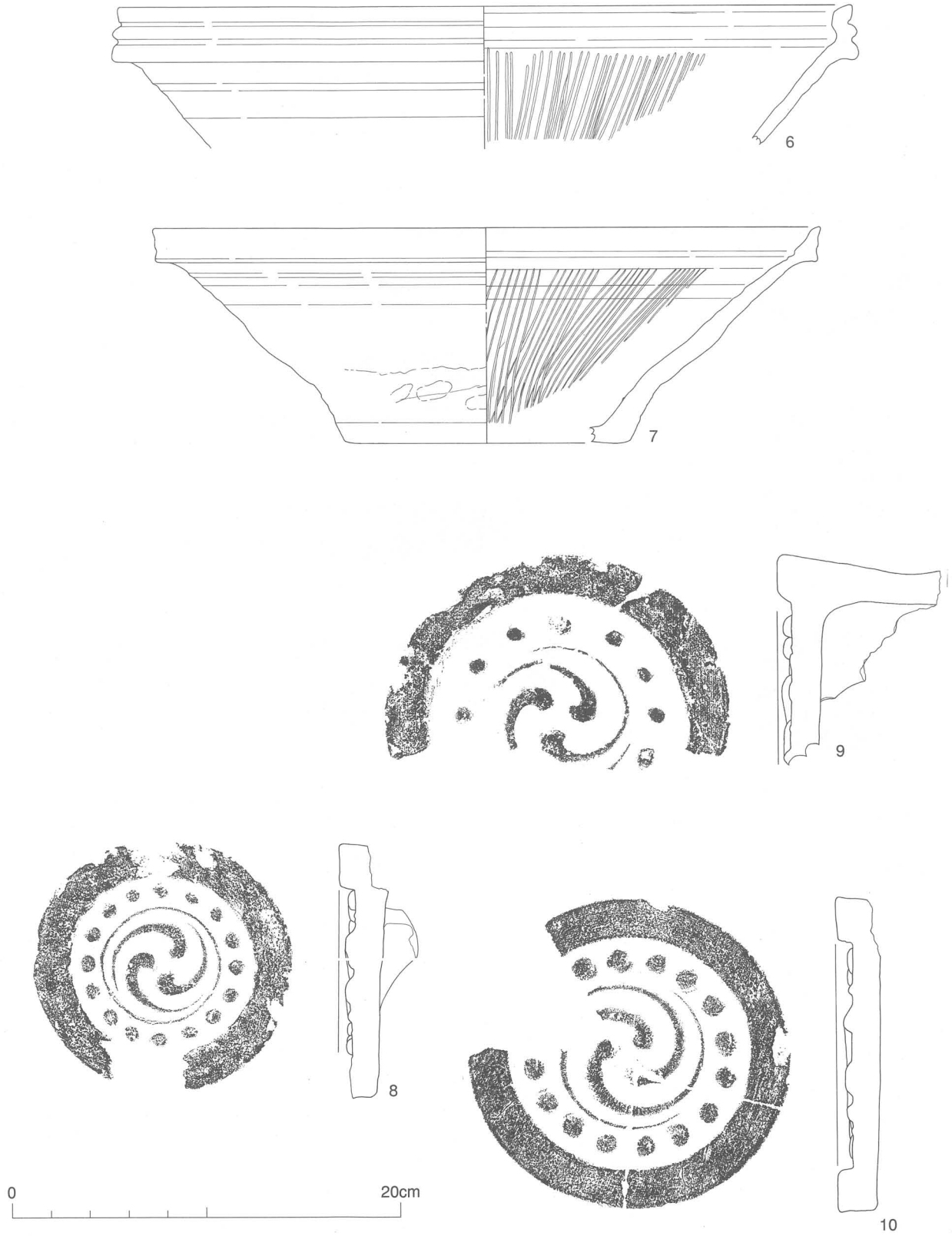


第34図 土坑33・58平面・断面図 (1/40)

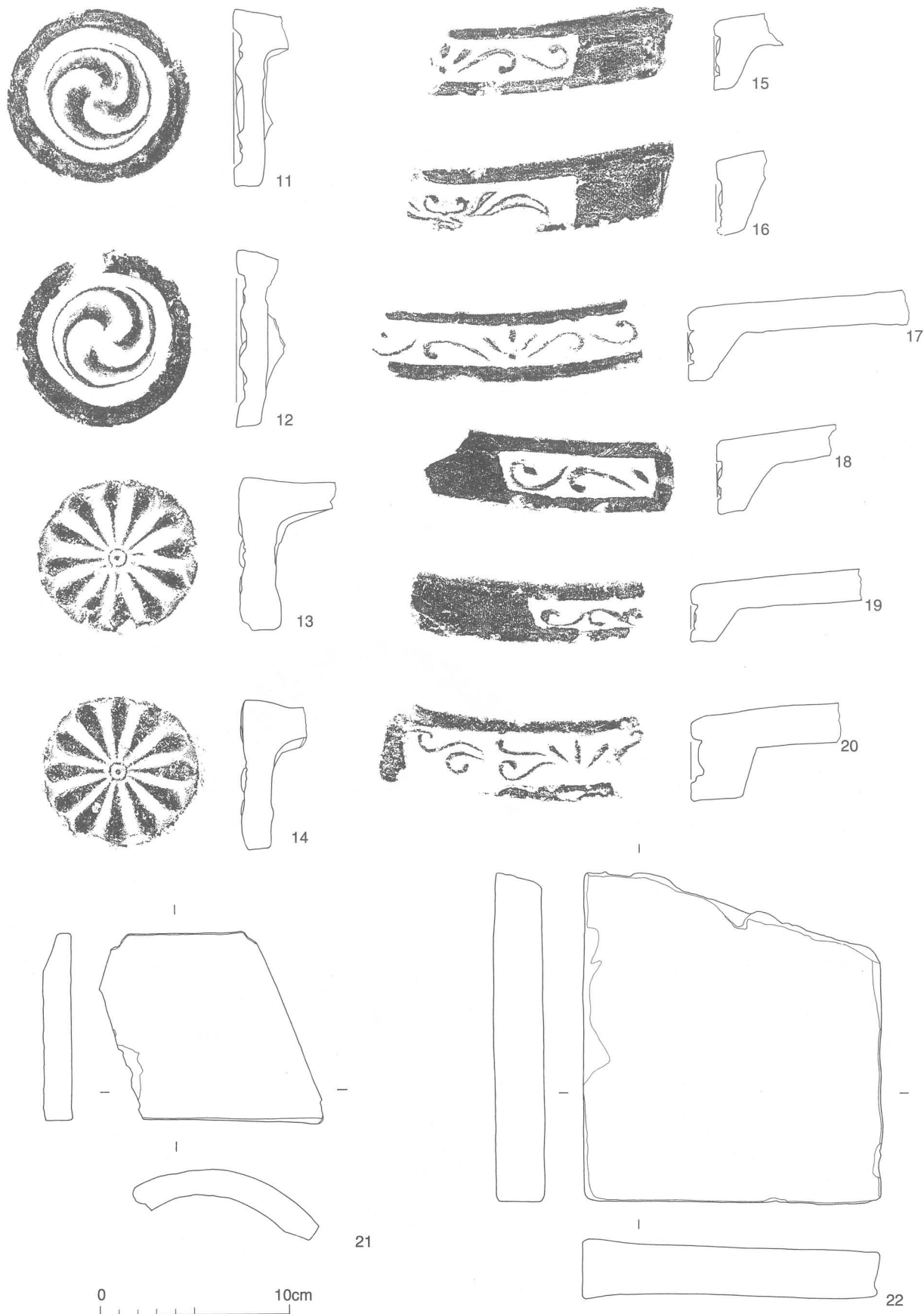
12弁で、中房に圈線がめぐるタイプである。11・12の丸瓦部との接合部分にはカキ目が施されている。15～17・20は均整唐草文で、15・17・20は三葉の中心飾をもち、17は下向きの支葉が長く、20は脇区が狭い特徴がある。これらの遺物の年代は、概ね17世紀前半に比定されるが、6の丹波焼播鉢は、口縁部の縁帯が発達しており後出のものである。混入の可能性が高い。



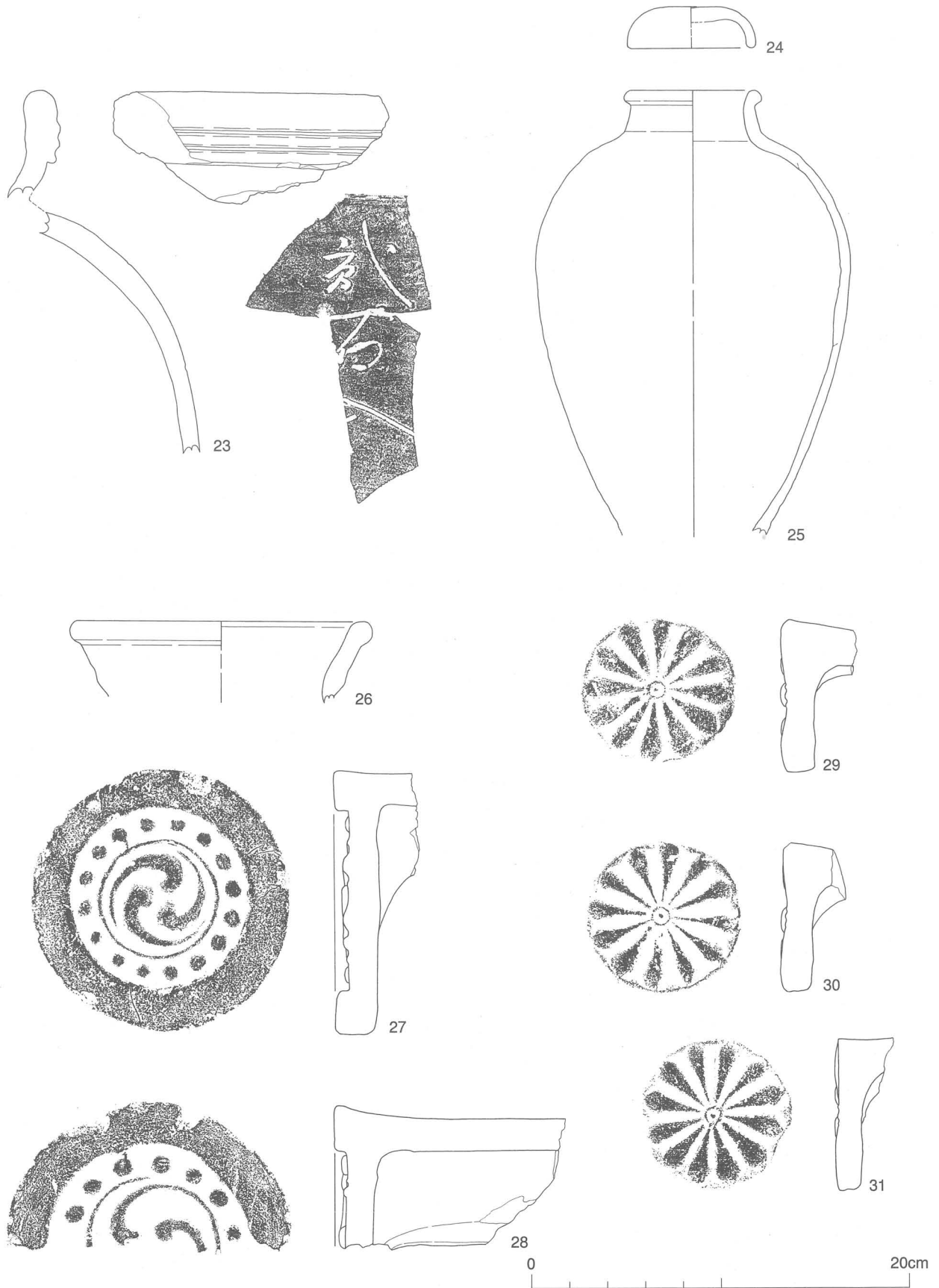
第35図 土坑33出土遺物（1）（1/3）



第36図 土坑33出土遺物(2)(1/3)



第37图 土坑33出土遺物 (3) (1/3)



第38図 土坑58・73出土遺物（1/3、23は1/4、25は1/6）

土坑42 (第39図)

規模は97cm×1.07mの円形、深さ10cmである。出土遺物には手捏ねの土師皿 (38) がある。

土坑44 (第39図)

楕円形の土坑で、内部に多くの小石を含んでいる。規模は長さ95cm、幅66cm、深さ31cmである。出土遺物には、土師皿 (32)、焼塩壺 (33・34)、火鉢 (35)、丹波焼の盤 (36) がある。

土坑47 (第39図)

直径70cmの円形の土坑で、深さは12cmである。出土遺物には、丹波焼播鉢がある。

土坑51 (第34図、図版15)

調査区の北隅に位置し、享保9年築造の本堂外周の石列に切られている。規模は明らかではない。出土遺物には、備前焼の二石入りの甕 (23) がある。甕の肩部にはヘラで「貳石入」と書かれている。

土坑52

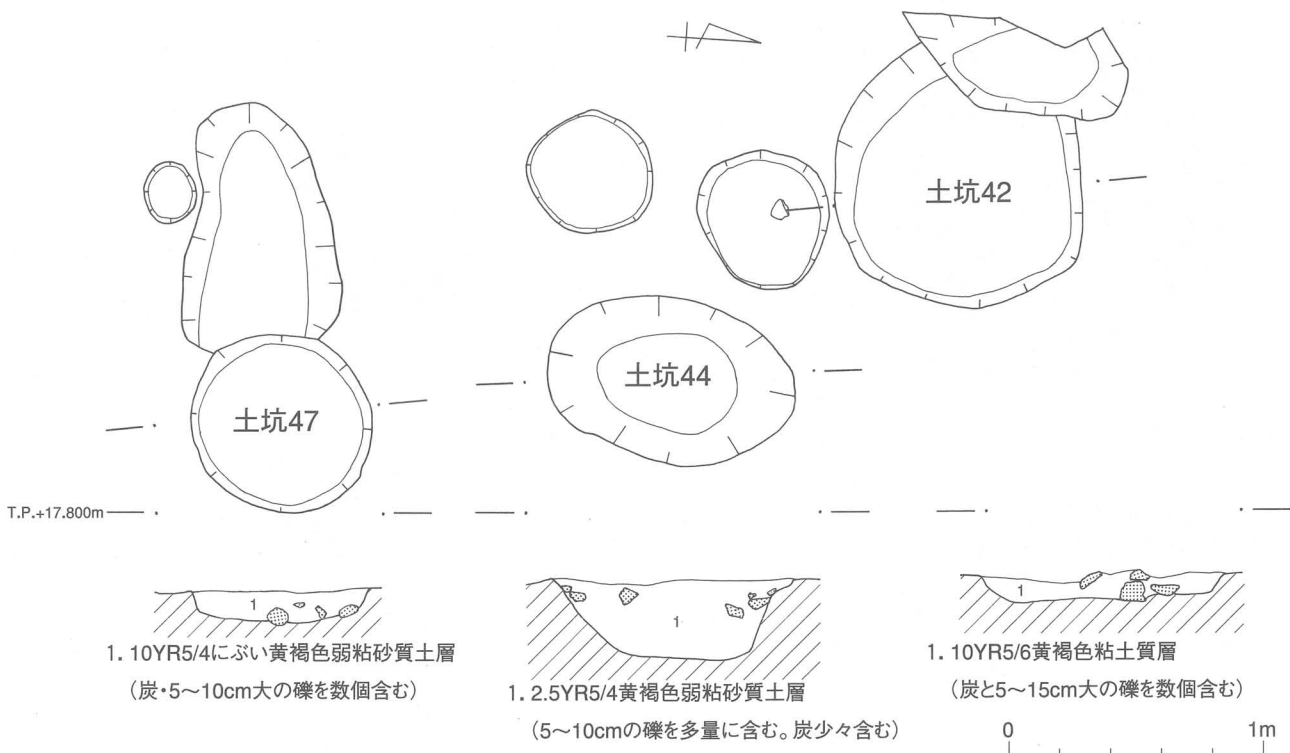
調査区中央部南側に位置する。規模は、長さ80cm、幅62cm、深さ18cmである。出土遺物には、手捏ねの土師皿 (39) がある。

土坑58 (第34図、図版12)

調査区の北側に位置し、土坑33を切っている。規模は、長さ70cm、深さ21cmである。土坑内部から丹波焼の自然釉壺 (25) が出土した。この壺は、底部を欠いているが全体の約半分が残っていた。紐造りで、頸部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁部は玉縁となる。肩部あたりに自然釉が厚く掛かる。胎土精良で焼きあがりはやや白っぽい。他に焼塩壺の蓋 (24) が出土した。

土坑73 (第34図、図版12・15)

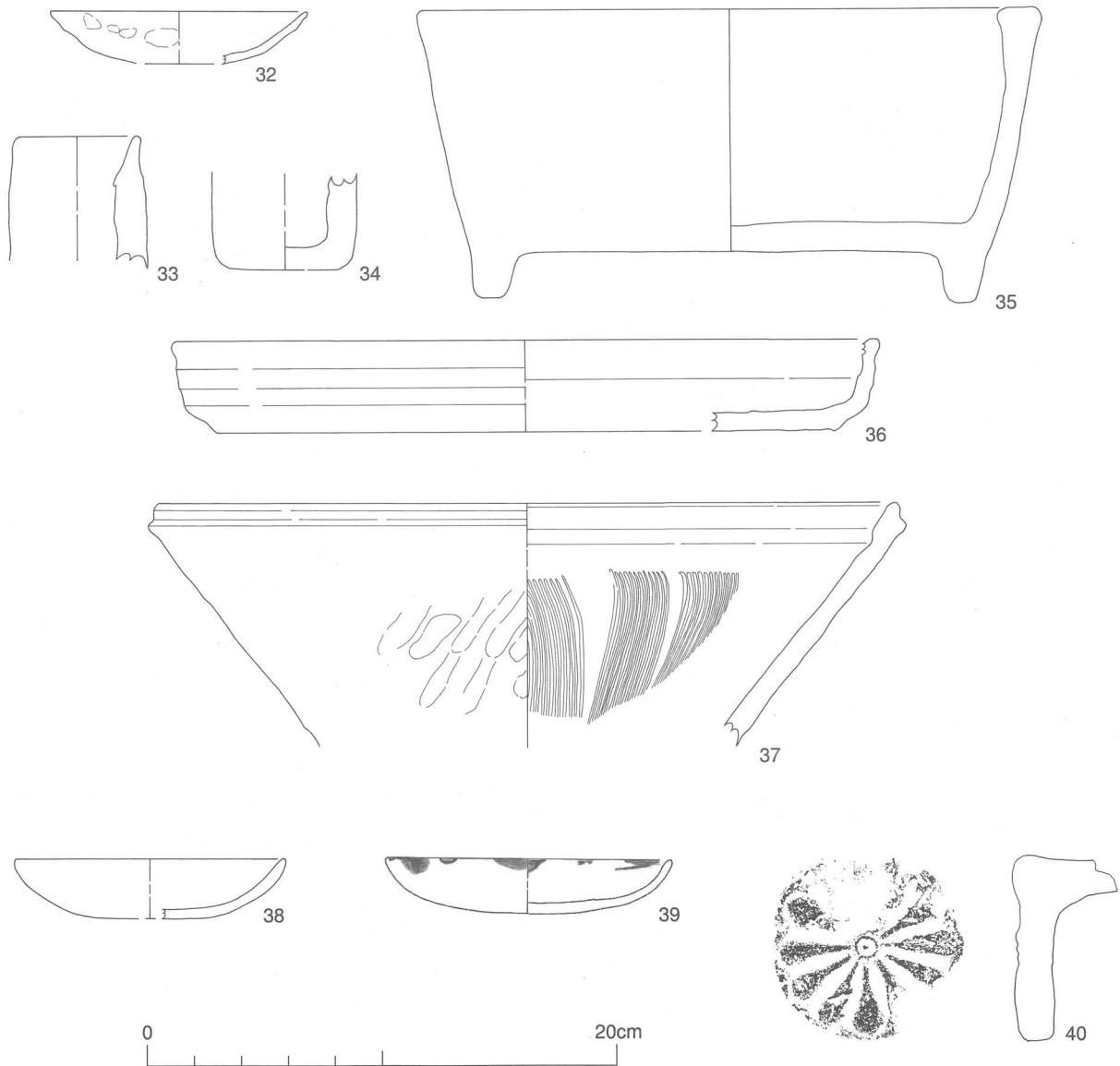
南北の土層観察用畔直下に位置する。規模は直径1.6~1.8m、深さ40cmである。出土遺物には、軒丸瓦 (27・28) と棟込瓦 (29~31) が出土した。27の軒丸瓦は左巻きの三巴文の周囲に圏線がめぐる



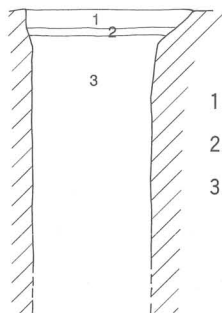
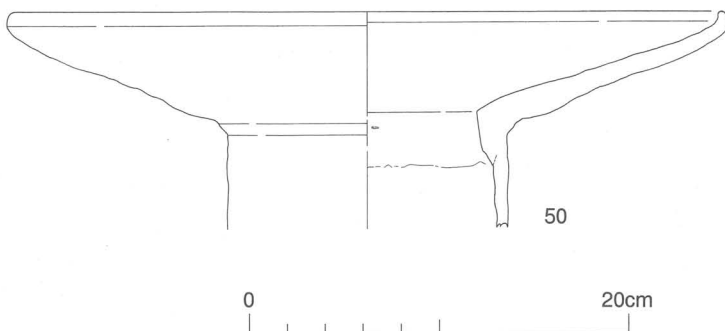
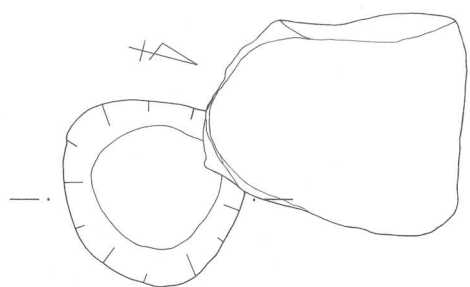
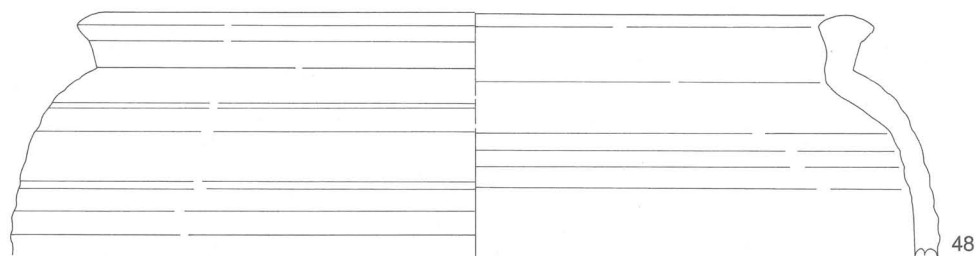
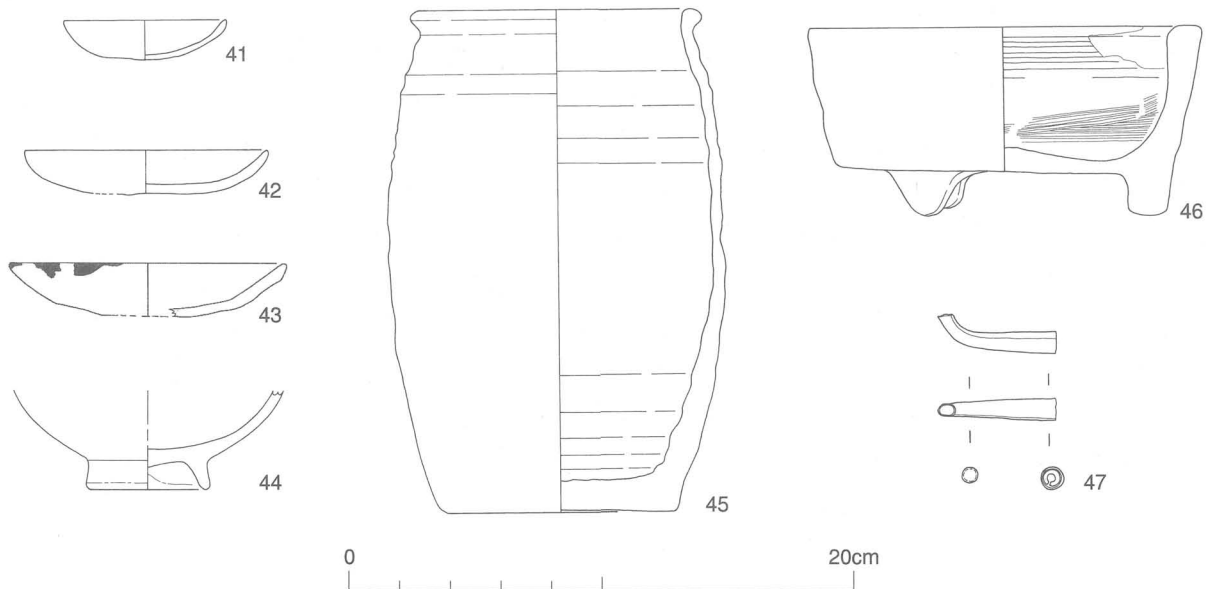
第39図 土坑42・44・47平面・断面図 (1/30)

もので、土坑33出土の軒丸瓦と同じタイプである。また、凸弁12弁棟込瓦も土坑33と同タイプである。
井戸1（第41図、図版13・16）

享保9年再建の本堂礎石下から発見された。直径96cm×98cmの素掘りの井戸である。40cm程度まで掘削したが、大型礎石の下に位置する関係から、それ以上の掘削は行っていない。井戸内部から多量の瓦や陶磁器が出土した。土師皿（41～43）は、何れも手捏ね製で、口縁部に煤の付着があり、灯明皿として使用されていたことがわかる。陶器碗（44）は肥前の呉器手の碗である。45は素焼きの蛸壺と考えられ、ロクロ製で、底部には糸切り痕が残る。口縁部には大きな牡蠣殻が付着している。丹波焼播鉢（49）は、口縁部内側に浅い段がめぐる。50は丹波焼の花器の口縁部である。瓦には、軒丸瓦（51・52）、棟込瓦（53・54）、鳥衾（55～58）、鬼瓦（59）がある。軒丸瓦は、51が左巻き三巴文で珠文16個、52は右巻き三巴文で珠文が12個である。棟込瓦は土坑33・62・73と同様の凸弁12弁である。鳥衾4点のうち、55は珠文の数が14個で他の3点と異なる。また、56～58は、瓦当の頂部に長方形の穴が3箇所穿たれている。



第40図 土坑42・44・47・52・62出土遺物（1/3）

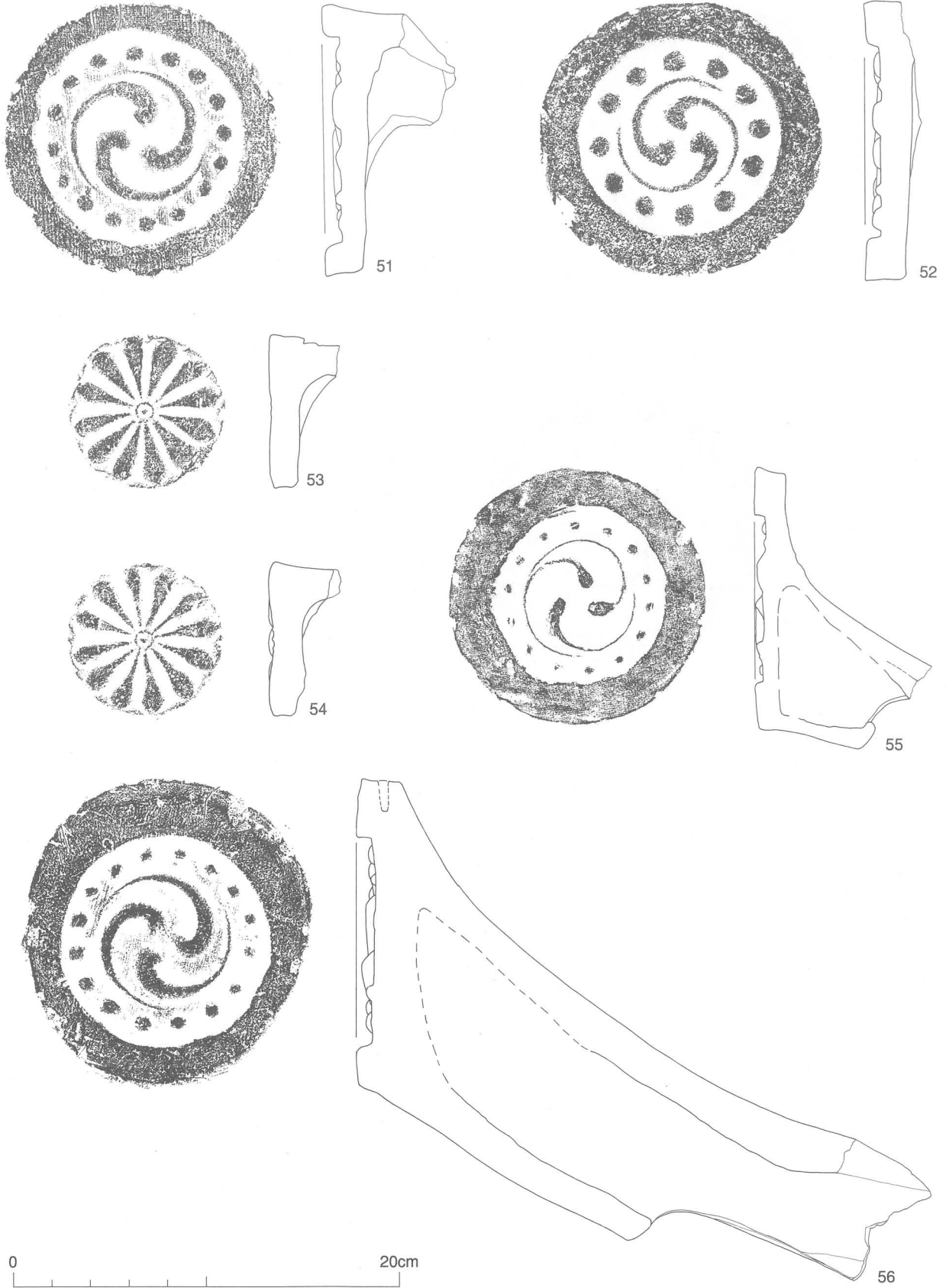


1. 10YR5/8黄褐色弱粘砂質土層
 2. 2.5Y6/8明黄褐色弱粘質土層
 3. 2.5Y5/6黄褐色弱粘質土層
 (瓦・5~20cm大の礫・炭を含む)

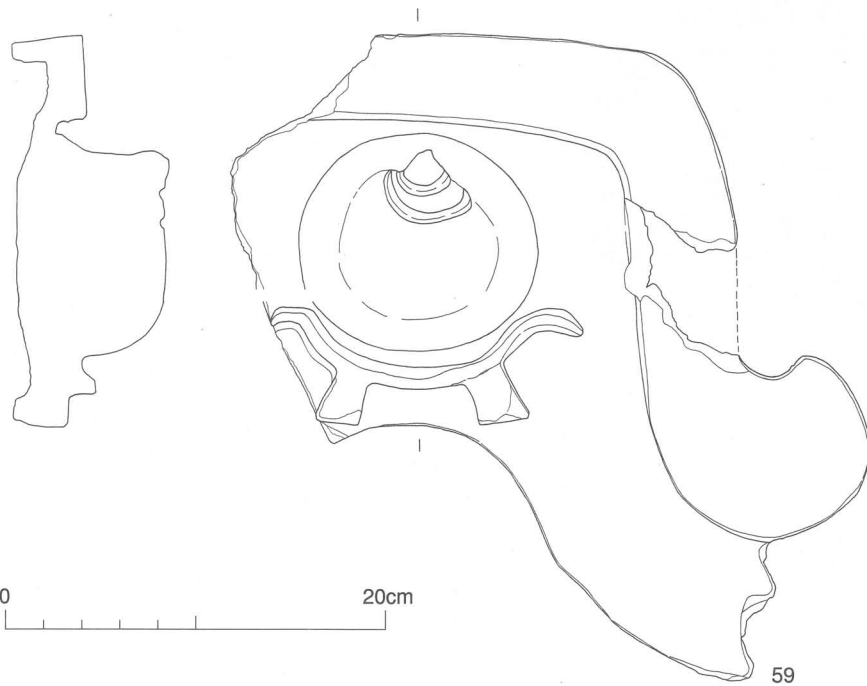
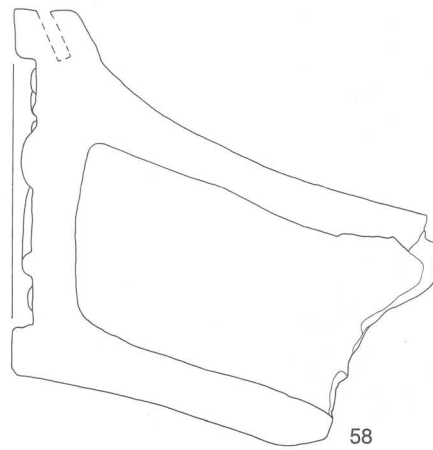
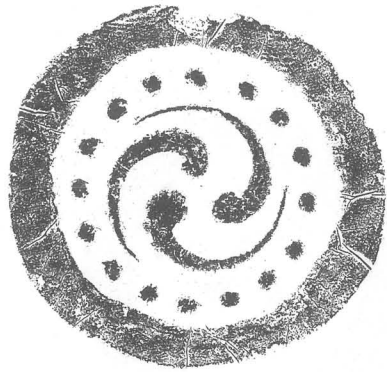
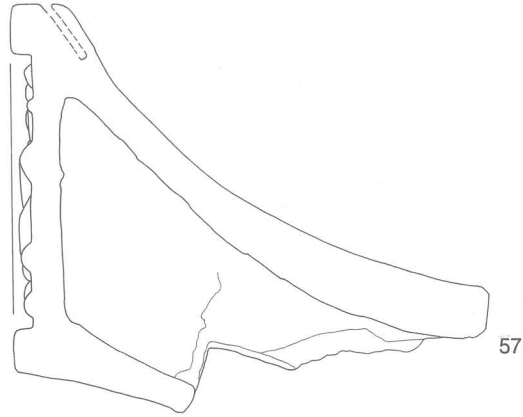
0 1m

第41図 井戸1平面・断面図 (1/40)

第42図 井戸1出土遺物(1) (1/3・1/4)



第43図 井戸1出土遺物(2)(1/3)

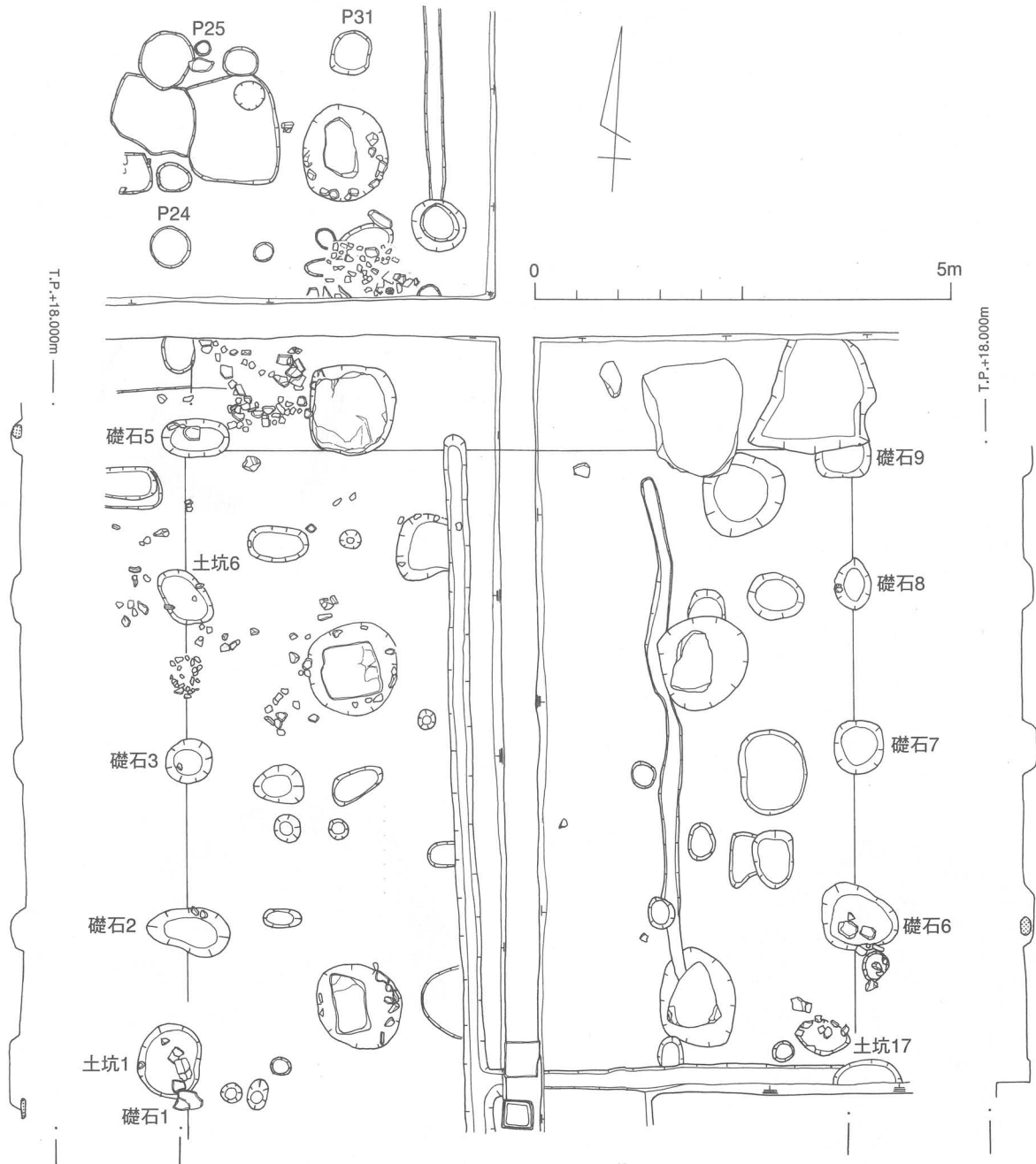


第44図 井戸1出土遺物(3)(1/3・1/4)

礎石建物跡 2 (第45図、図版13)

礎石建物跡 2 は、享保 9 年再建本堂下に重なる場所で検出された。礎石は既に抜き取られており、浅い掘り方の底に礫が残っていた。礎石跡は南北方向の 2 列が並んでおり、西側列が礎石 2～5、東側が礎石 6～9 である。礎石の間隔は、西側で礎石 2 と 3 が約 2 m、礎石 3 と 4 が約 2 m、礎石 4 と 5 がやや狭く 1.8 m で、東側では、礎石 6 と 7 が約 2 m、礎石 7 と 8 が約 2 m、礎石 8 と 9 はやや狭く 1.6 m となっている。すべて礎石の抜き取り穴であるため礎石の間隔は不正確である。礎石列の間隔は約 8 m の等間隔となっている。礎石の掘り方内から煙管が 2 点 (62・63) 出土している。

調査面積の関係から、建物の全体が調査できたわけではなく、北側には広がらないとしても東西及

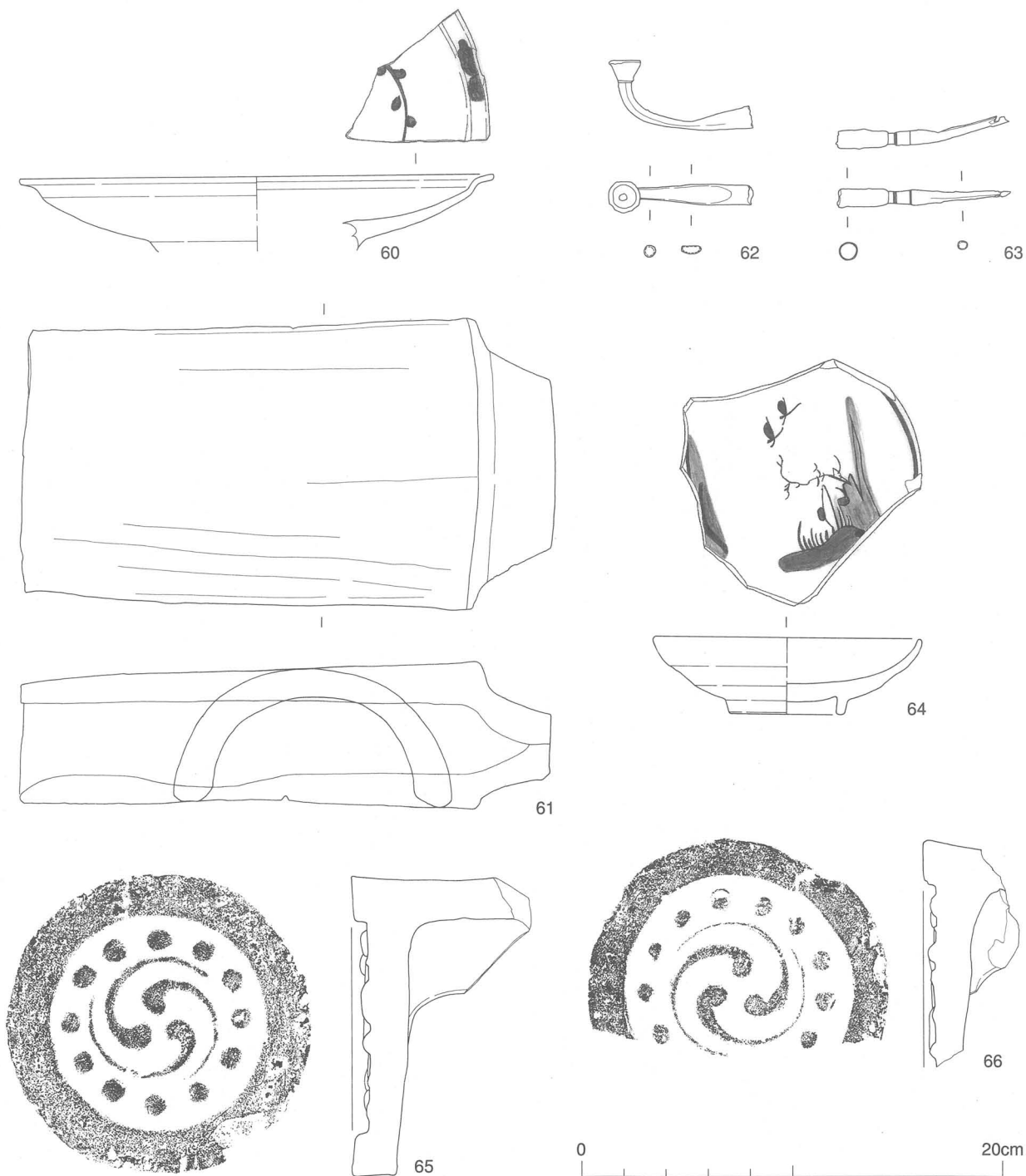


第45図 礎石建物跡平面・断面図 (1/80)

び南側に広がっている可能性がある。両礎石列の南側の土坑1と土坑17は、礎石列の延長上に位置するが、間隔が揃わないことなどから別の遺構の可能性が高い。土坑1からは、肥前染付皿(60)が出土している。

礎石建物跡1 (第45図)

震災で半壊し取り壊された本堂である。重機掘削の段階から原位置に残して調査を行った。礎石列は南北方向の2列があり、両礎石列とも奥から2石目が1mを越える自然石の大石で、他の礎石は長



第46図 土坑1、礎石6・7、P24・25・31出土遺物(1/3)

径70～80cmの自然石を用いている。礎石の間隔は、南側から1石目と2石目が約4m、2石目と3石目及び3石目と4石目が3mである。また、両礎石列の間隔は約4m、本堂周囲の列石との間隔は約3mとなっている。

土坑11（第47図、図版14）

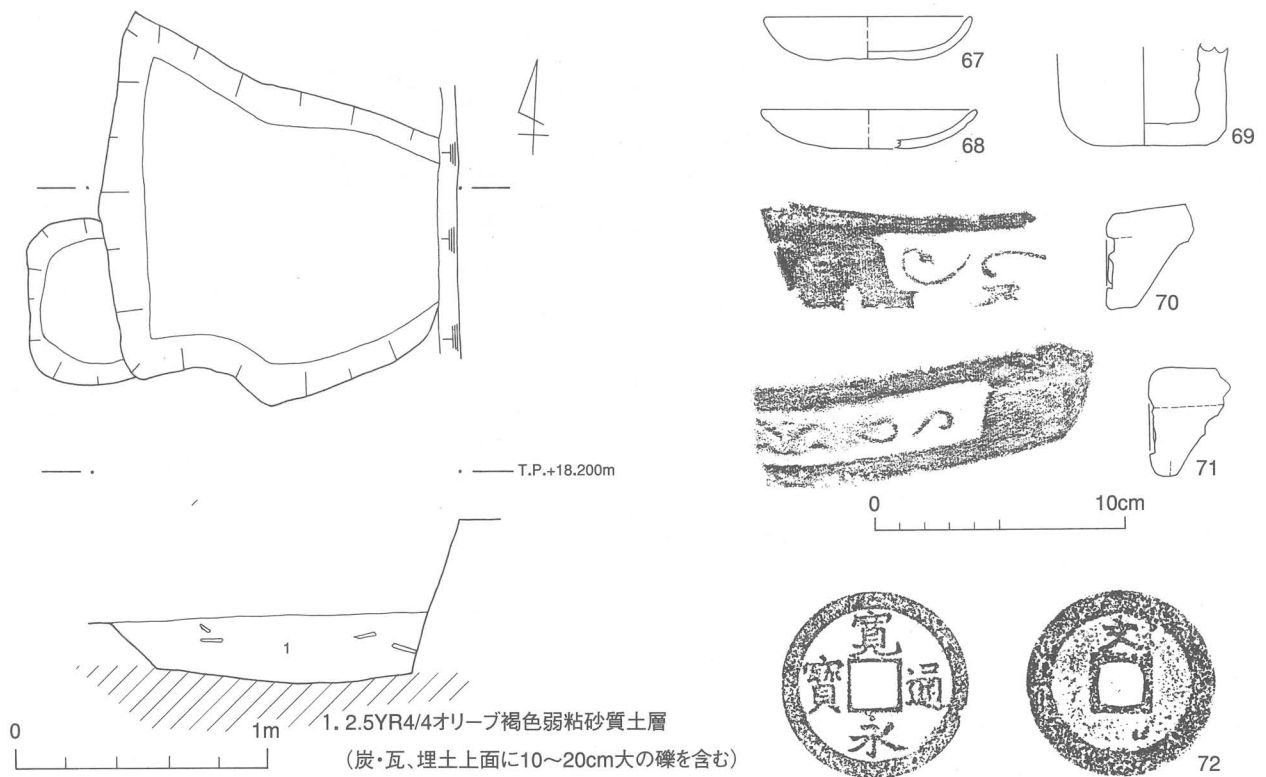
土坑11は、礎石建物跡2の礎石9を切っている。東西最大幅1.45m、深さ23cmの不整形の土坑である。出土遺物には、手捏ねの土師皿（67・68）、焼塩壺（69）、背文の寛永通宝（72）が出土している。

土坑21（第48図、図版14）

調査区北側の列石に切られている。規模は南北90cm以上、東西1.6m以上、深さは23cmである。出土遺物には、手捏ねの土師皿（73）と肥前白磁碗（74）が出土した。

瓦溜まり5（第48図）

調査区北側において瓦の広がり認められ、三巴文の鳥衾（75）と棧瓦（76）が出土した。

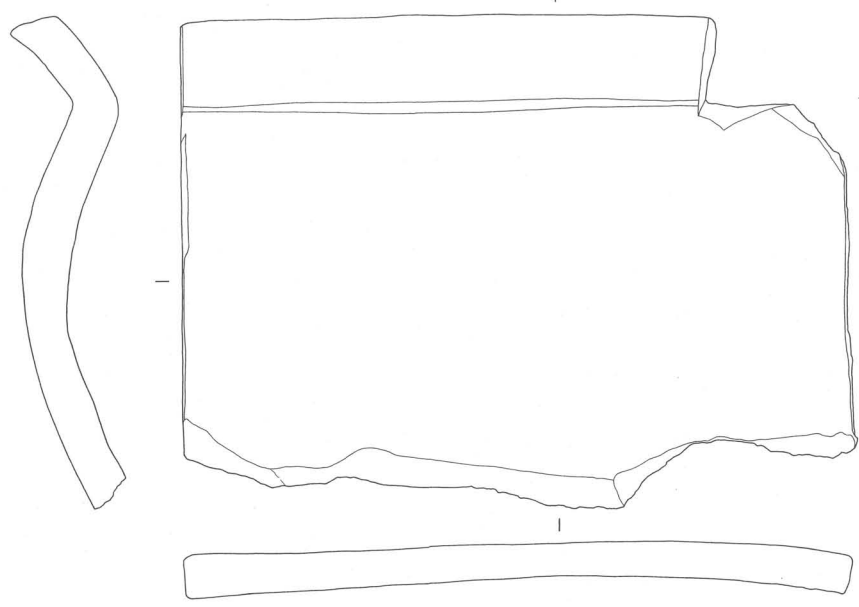
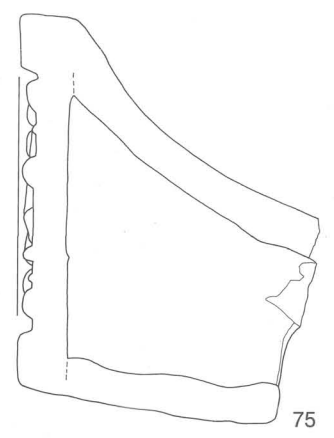
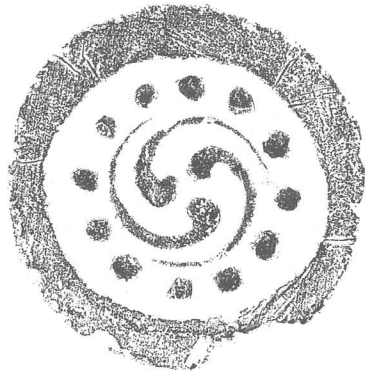
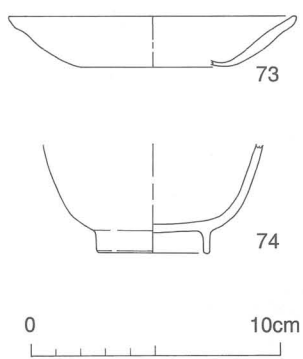
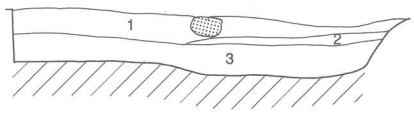


第47図 土坑11平面・断面図（1/30）、出土遺物（1/3・1/1）

- 1. 10YR3/4暗褐色弱粘砂質土層
(焼土・炭を含む)
- 2. 10YR4/6黄褐色弱粘砂質土層
(焼土・炭を多く含む)
- 3. 2.5Y4/6オリーブ褐色弱粘砂質土層
(焼土を多く含む)



T.P.+18.000m



第48図 土坑21、瓦溜まり5平面・断面図(1/30)、出土遺物(1/3)

4. まとめ

最後に、今回の発掘調査によって得られた知見を整理し、これまでの通説と合わせて検討しておきたい。その中で最も重要な点は開基年代であろう。先に触れているが、伊丹郷町所在の寺院については江戸時代後期に著された「丹丘寺院開基年考」では、天正17年（1579）に開基されたことが記されているが、今回の発掘調査を契機に改めて調べてみると、隣接する浄土宗法巖寺第6世安蓮社心誉上人長公和尚が、寛永9年（1632）に正善寺を開いて隠居したことがわかった。このことは、震災で被災した本堂等の落慶法要を機に刊行された「法巖寺誌」（平成10年11月）に詳しく触れられている。正善寺の資料でも、昭和54年に実施した兵庫県近世社寺建築緊急調査の調査表（正善寺により作成）によると、法巖寺6世心誉上人によって創建されることが明記されており、法巖寺の資料と一致している。さらに、発掘調査中の平成7年6月21日に現住職からいただいた資料に、戦時供出し現存しない梵鐘の銘文の記録がある。それによると、梵鐘は元禄13年（1700）、6世円誉萬及上人の時に铸造したもので、開山を安蓮社心誉長公和尚とし、6世萬及上人まで歴代上人の名前が記されていた。

以上、両寺院の記録を見る限り正善寺の開山は心誉上人で一致し疑いの余地がない。それでは、丹丘寺院開基年考を著した古野将盈は何を根拠に天正17年開基としたのであろうか、古野は江戸時代後期の郷土史家として、開基年考を取めた「有岡庄年代秘記」のほか「有岡古続語」などに伊丹郷町の事跡について事細かに調査し記録しており、全く根拠なしに開基年代を特定したとは考え難い。今は残っていない何らかの資料が当時に存在していたことは十分に考えられることである。この点について、発掘調査の考古資料によって検討してみたい。

発掘調査により、調査地点に新旧2時期の礎石建物跡が検出された。新期の礎石建物跡1は震災で解体された本堂で、寺の過去帳では、誓誉上人が享保9年（1724）に再建されたという。問題は古期の礎石建物跡2の年代であるが、同建物跡が検出された第2遺構面上には、建物跡の北側付近に瓦が多く堆積する状態で見つかった。とくに瓦溜まり3とそれに続く下層の土坑33、また井戸1からも多量の瓦が出土している。これらの瓦の中には、軒瓦のほか棟飾り瓦や鳥衾瓦など町屋建築ではあまり使用されない瓦が多く含まれており、寺院使用の瓦であると考えられる。これらの瓦を見てみると、軒丸瓦はすべて三巴文で、尾は長いものの周囲に圏線を持つものは少なく、珠文の数は12～16個で瓦当裏面の接合部にはカキ目が施されている。こうした特徴から室町時代後期末以降の所産と考えられる。また、土坑33や井戸1などから出土した棟飾り瓦は、中房に圏線が巡るタイプで、法隆寺では江戸時代前期の瓦とされている。また、これら瓦に共伴する遺物は、土坑33では肥前磁器などは概ね17世紀前半、丹波焼播鉢には18世紀前半まで降るものも含まれるが、全体としては17世紀中頃までの時期となる。鳥衾瓦や棟飾り瓦が出土した井戸1では、肥前陶器碗や丹波焼播鉢などは、やはり17世紀前半～中頃までの所産と考えられ、土坑33の年代とほぼ一致する。

瓦の年代は陶磁器などより年代の幅を考える必要があるが、陶磁器にも積極的に天正17年（1579）まで遡るものが見当たらない。礎石建物跡2が創建期の建物であるとしても、本堂であるのか不明で、広い敷地の別の場所に創建期の本堂跡が存在する可能性もあるが、今回の発掘調査の結果をみると寛永9年開基を否定する根拠は見出せなかった。（小長谷）

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑33	第35図-1	碗	青磁	口 径 (9.8) cm	内面口縁部から外面にかけて青磁釉が厚く掛かる	肥前 30% 17c前半
	第35図-2	焼塩壺	素焼き	底 径 (5.6) cm	輪積み成形 外面ナデ	40%
	第35図-3	火入れ	陶器	底 径 (13.4) cm	把手1ヶ所残存 内外面口クロナデ	丹波 30% 内外面底部 自然釉掛かる
	第35図-4 図版15-4	染付皿	白磁	高台径 6.6 cm	見込み草文と二重圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 17c中頃
	第35図-5	染付大皿	白磁	高台径 17.8 cm	見込み鳥と蓮の葉文と二重圏線有り 高台内圏線有り ハリ支え痕有り 量付露胎	肥前 25% 17c後半
	第36図-6	擂鉢	陶器	口 径 (38.4) cm	クシ目一単位7本 内外面鉄釉 内面口縁部から外面にかけてロクロナデ	丹波 10% 内面自然釉 付着 外面灰被り 18c 前半
	第36図-7 図版15-7	擂鉢	陶器	口 径 (34.8) cm 器 高 11.3 cm 高台径 (15.0) cm	クシ目一単位7本 内面から外面体部下半まで錆釉 外面下半ナデアゲ 底部周辺ヘラケズリ 内面口縁部から外面上半にかけてロクロナデ	丹波 40% 内面自然釉 掛かる 17c中頃
	第36図-8 図版15-8	軒丸瓦	瓦	径 13.4 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 巴文の周りに圏線巡る 珠文数16個 接合部に右上がりのカキメ有り	30%
	第36図-9	軒丸瓦	瓦	径 (17.6) cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.6 cm	左巻き三巴文 復元珠文数13個	20%
	第36図-10	軒丸瓦	瓦	径 16.6 cm 周縁厚 1.5 cm 瓦当厚 2.1 cm	左巻き三巴文 復元珠文数16個 接合部に右上がりのカキメ有り	30%
	第37図-11 図版15-11	棟込瓦	瓦	径 9.5 cm 周縁厚 1.5 cm 瓦当厚 1.0 cm	左巻き三巴文 巴の尾部は圏線と接する 接合部に縦方向のカキメ有り	30%
	第37図-12	棟込瓦	瓦	径 9.5 cm 周縁厚 1.3 cm 瓦当厚 1.1 cm	左巻き三巴文 巴の尾部は圏線と接する 接合部に縦方向のカキメ有り	30%
	第37図-13 図版15-13	棟込瓦	瓦	径 8.2 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.6 cm	菊花文(花卉数12枚) 周縁なし	50%
	第37図-14	棟込瓦	瓦	径 8.0 cm 周縁厚 1.6 cm 瓦当厚 1.3 cm	菊花文(花卉数12枚) 周縁なし	40%
	第37図-15	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.7 cm 周縁厚 1.1 cm	均整唐草文	5%
	第37図-16 図版15-16	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.0 cm	均整唐草文	15%
	第37図-17 図版15-17	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.9 cm 周縁厚 1.3 cm	均整唐草文	25%
	第37図-18	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.0 cm 周縁厚 1.5 cm	均整唐草文	20%
	第37図-19	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.1 cm 周縁厚 1.4 cm	均整唐草文	15%
	第37図-20	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.5 cm 周縁厚 2.8 cm	均整唐草文	20%

第8表 第154次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑33	第37図-21	面戸瓦	瓦	縦 10.0 cm 厚み 1.5 cm	凸面ナデ 凹面コビキBと布目痕あり	85%
	第37図-22	塙瓦	瓦	幅 15.7 cm 厚み 3.2 cm	上面縦方向のナデ 側面ヨコナデ	90%
土坑51	第38図-23 図版15-23	甕	陶器		内外面口縁部ロクロナデ 体部ナデ 肩部に「武石入」のヘラ描き有り	備前 5%
土坑58	第38図-24	焼塩壺蓋	素焼き	口 径 6.5 cm 器 高 2.3 cm	外面ナデ 内面ナデ 口縁部ヨコナデ	40%
	第38図-25	壺	陶器	口 径 (13.6) cm	内外面体部ロクロナデ 外面底部周辺指頭圧痕有り	丹波 45% 口縁部から 肩部にかけて自然釉掛か る
土坑73	第38図-26	壺	陶器	口 径 (15.6) cm	口縁黄ゴマ掛かる 内外面ロクロナデ	5%
	第38図-27 図版15-27	軒丸瓦	瓦	径 14.1 cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.6 cm	左巻き三巴文 巴文の周りに圏線巡る 珠文数16個	30% 二次焼成受ける
	第38図-28	軒丸瓦	瓦	径 15.0 cm 瓦当厚 1.5 cm	右巻き三巴文 残存珠文数7個	20% 範傷有り
	第38図-29 図版15-29	棟込瓦	瓦	径 8.2 cm 瓦当厚 1.5 cm	菊花文(花卉数12枚) 周縁なし 表面に雲母粉付着	35%
	第38図-30	棟込瓦	瓦	径 8.0 cm 瓦当厚 1.4 cm	菊花文(花卉数12枚) 周縁なし 表面に雲母粉付着	35%
	第38図-31	棟込瓦	瓦	径 8.2 cm 瓦当厚 1.3 cm	菊花文(花卉数12枚) 周縁なし 表面に雲母粉付着	35%
	土坑44	第40図-32	土師皿	素焼き	口 径 (11.2) cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ナデ
第40図-33		焼塩壺	素焼き	口 径 5.1 cm	輪積み成形 外面ナデ 内外面口縁丁寧なナデ	40% 全体に黒斑有り
第40図-34		焼塩壺	素焼き	底 径 4.8 cm	輪積み成形 外面ナデ	30% 全体に黒斑有り
第40図-35		火鉢	瓦質	短 辺 26.7 cm 器 高 12.8 cm	方形 外面口縁から体部ヨコナデ 底部ナデ 内面ナデ 脚2ヶ所残存	70%
第40図-36		盤	陶器	口 径 (30.6) cm 器 高 4.0 cm 底 径 (27.1) cm	内外面ロクロナデ 底部ヘラ切り	丹波 10%
土坑47	第40図-37	播鉢	陶器	口 径 (32.2) cm	クシ目一単位12本 外面口縁より下ナデアゲ 内外面口縁ロクロナデ	丹波 15% 部分的に自然釉掛かる 17c前半
土坑42	第40図-38	土師皿	素焼き	口 径 (11.8) cm 器 高 2.6 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面丁寧なナデ	在地 40% 口縁煤付着
土坑52	第40図-39	土師皿	素焼き	口 径 12.4 cm 器 高 2.4 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	在地 45% 口縁部煤付着
土坑62	第40図-40	棟込瓦	瓦	径 8.1 cm 瓦当厚 1.7 cm	菊花文(花卉数12枚) 周縁なし 表面に雲母粉付着	35%

第9表 第154次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
井戸1	第42図-41 図版16-41	土師皿	素焼き	口 径 6.5 cm 器 高 1.6 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 90% 全体に黒斑有り
	第42図-42 図版16-42	土師皿	素焼き	口 径 9.7 cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 口縁部下指頭圧痕 底部ナデ 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 70% 全体に黒斑有り
	第42図-43	土師皿	素焼き	口 径 11.2 cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 外面ナデ 口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 70% 口縁部煤付着
	第42図-44	碗	陶器	高台径 4.6 cm	呉器手 高台量付露胎	肥前 50% 内外面貫入 内面一部煤付着
	第42図-45 図版16-45	蛸壺	素焼き	口 径 (11.1) cm 器 高 20.3 cm 底 径 9.2 cm	ロクロ成形 底部糸切り痕有り 外面錆釉を塗布	70% 内外面煤付着 口縁牡蠣付着
	第42図-46 図版16-46	浅鉢	素焼き	口 径 15.4 cm 器 高 7.7 cm	外面ナデ 内面ハケメ 三足	在地 85% 内面煤付着
	第42図-47	煙管(雁首)	銅	接合部径 0.9 cm	首部の合わせ目は火皿に向かって左横	90% 緑青付着
	第42図-48	甕	陶器	口 径 (40.0) cm	内面口縁部から外面にかけて赤土部釉 内外面ロクロナデ	丹波 10%
	第42図-49 図版16-49	播鉢	陶器	口 径 (28.6) cm 器 高 11.5 cm 底 径 11.3 cm	クシ目一単位9本 外面下半ナデアゲ 底部周辺ヘラケズリ 内面口縁部から外面上半にかけてロクロナデ	丹波 40% 17c前半
	第42図-50 図版16-50	花器	陶器	口 径 (37.5) cm	内面露胎 内外面ロクロナデ	丹波 20% 傘部上面自然釉掛かる
第43図-51 図版16-51	軒丸瓦	瓦	径 14.3 cm 周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 木範の跡有り 瓦当面に雲母粉付着	30%	
第43図-52	軒丸瓦	瓦	径 14.6 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.6 cm	右巻き三巴文 珠文数12個 接合部に縦方向のカキメ有り 表面に雲母粉付着	30%	
第43図-53	棟込瓦	瓦	径 8.1 cm 瓦当厚 1.5 cm	菊花文(花弁数12枚) 周縁なし 表面に雲母粉付着	30%	
第43図-54	棟込瓦	瓦	径 8.1 cm 瓦当厚 1.5 cm	菊花文(花弁数12枚) 周縁なし 表面に雲母粉付着	30%	
第43図-55 図版16-55	鳥衾瓦	瓦	径 14.0 cm 周縁厚 1.6 cm	左巻き三巴文 巴の尾部はつながり圏線状を成す 珠文数14個	40%	
第43図-56 図版16-56	鳥衾瓦	瓦	径 16.1 cm 周縁厚 2.6 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 木範の跡有り 頭頂部に3ヶ所孔有り 表面に雲母粉付着	90%	
第44図-57	鳥衾瓦	瓦	径 14.9 cm 周縁厚 2.6 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 木範の跡有り 頭頂部に3ヶ所孔有り 丸瓦部に釘穴有り 表面に雲母粉付着	80%	
第44図-58	鳥衾瓦	瓦	径 14.8 cm 周縁厚 2.6 cm 瓦当厚 1.7 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 木範の跡有り 頭頂部に3ヶ所孔有り 表面に雲母粉付着	80%	
第44図-59 図版16-59	鬼瓦	瓦	縦 34.8 cm	宝珠付跨瓦	70%	
土坑1	第46図-60	染付皿	白磁	口 径 (22.8) cm	内面梅花文	肥前 10% 17c前半

第10表 第154次調査遺物観察表表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑1	第46図-61	丸瓦	瓦	全長 25.8 cm 横幅 14.2 cm 厚み 2.0 cm	凸面縦方向のケズリ 凹面コビキBと布目痕有り 玉縁部に布目痕有り	98%
礎石7	第46図-62	煙管(雁首)	銅	火皿径 1.5 cm 長さ 7.0 cm 接合部径 1.1 cm	首部中央凹んでいる	100% 緑青付着
礎石6	第46図-63	煙管(吸口)	銅	長さ 8.4 cm 接合部径 0.9 cm	肩と狭義の吸口の接合部に横線が刻まれている	100% 緑青付着
P 25	第46図-64	染付皿	白磁	口径 (12.8) cm 器高 3.7 cm 高台径 5.4 cm	見込みに山水文 内面口縁部圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 80%
P 24	第46図-65	軒丸瓦	瓦	径 14.5 cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.9 cm	右巻き三巴文 珠文数12個 表面に雲母粉付着	35%
P 31	第46図-66	軒丸瓦	瓦	径 (14.8) cm 周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.7 cm	左巻き三巴文 復元珠文数13個	20%
土坑11	第47図-67	土師皿	素焼き	口径 (8.3) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ナデ	在地 45%
	第47図-68	土師皿	素焼き	口径 (8.6) cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 30%
	第47図-69	焼塩壺	素焼き	底径 3.9 cm	輪積み成形 外面ナデ	30% 内面黒色の付着物有り
	第47図-70	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.9 cm 周縁厚 1.2 cm	均整唐草文	5%
	第47図-71	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.4 cm 周縁厚 1.1 cm	均整唐草文	10%
	第47図-72	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通宝 背文「文」	100% 緑青付着 寛文8年(1668)初鋳
土坑21	第48図-73	土師皿	素焼き	口径 (11.6) cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ	在地 20%
	第48図-74	碗	白磁	高台径 (4.4) cm	高台量付露胎	肥前 25%
瓦溜まり 5	第48図-75	鳥衾瓦	瓦	径 14.9 cm 周縁厚 2.3 cm	左巻き三巴文 珠文数12個	50%
	第48図-76	棧瓦	瓦	長さ 26.7 cm 厚み 2.0 cm	凹面ミガキ 凸面ナデ 表面に雲母粉付着	80%

第11表 第154次調査遺物観察表(4)

第3節 大蓮寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第160次調査—

所在地 伊丹市中央2丁目8-24
 調査面積 100m²
 調査期間 平成7年10月30日～12月13日
 担当者 小長谷正治・岡野理奈

1. 遺跡の概要

浄土宗大蓮寺は、有岡城跡惣構の西縁に形成された寺町に位置し、西隣には天正17年（1590）開基の正善寺、その西側には大永2年（1522）開基の法巖寺が並ぶ。いずれも浄土宗寺院である。大蓮寺の開基は、「丹丘寺院開基年考」（以下「開基年考」という）によると天正4年（1576）とされている。天正4年は、伊丹氏を滅ぼして城主となった荒木村重が入城した2年後にあたり、村重が行った有岡城惣構の整備とともにこの場所に配置したと考えられる。ところが、昭和54年9月18日付けにて大蓮寺より提出された「兵庫県近世社寺建築緊急調査表」（以下「緊急調査表」という）によると、開創は天正15年（1587）10月、元禄12年の大火により全焼し、その後再建されたとされている。また、今回の調査対象となった庫裏については、明治10年に改築されたとされている。

このように、江戸時代にまとめられた開基年考と現在寺に伝わる開基年代とに齟齬が生じている。両者の年代に11年の開きがあるが、このことは単に年代の違いに留まらず、天正7年の有岡城落城の前か後かで寺院建立の意義が大きく異なってくる。緊急調査表にある天正15年では有岡城との関係は生じてこない。

開基年考は、江戸後期の伊丹の郷土史家古野将盈が編纂した「有岡庄年代秘記」（京都大学文学部所蔵）に収められたもので、伊丹郷町内に所在する寺院の開基年代が記されている。各寺院の開基年代には、大永第二年、天正十七年のように年代を明記したものと、文明中、天正中、文禄中などと年代に幅をもたせたものがある。古野は、編纂当時既に開基年代の詳細が明らかではない場合は幅をもたせ、年代が明らかな場合は年代を明記して正確を期したものと見られ、その点では、大蓮寺の開基年代を天正第四年としていることは、当時開基年代を記した資料が存在していたものと見ることができる。

現在の大蓮寺本堂は入母屋造妻入の建物で、建築時期は17世紀中頃と考えられている（「伊丹の歴史的建造物」）。



第49図 第160次調査区位置図（1/2,500）平成10年

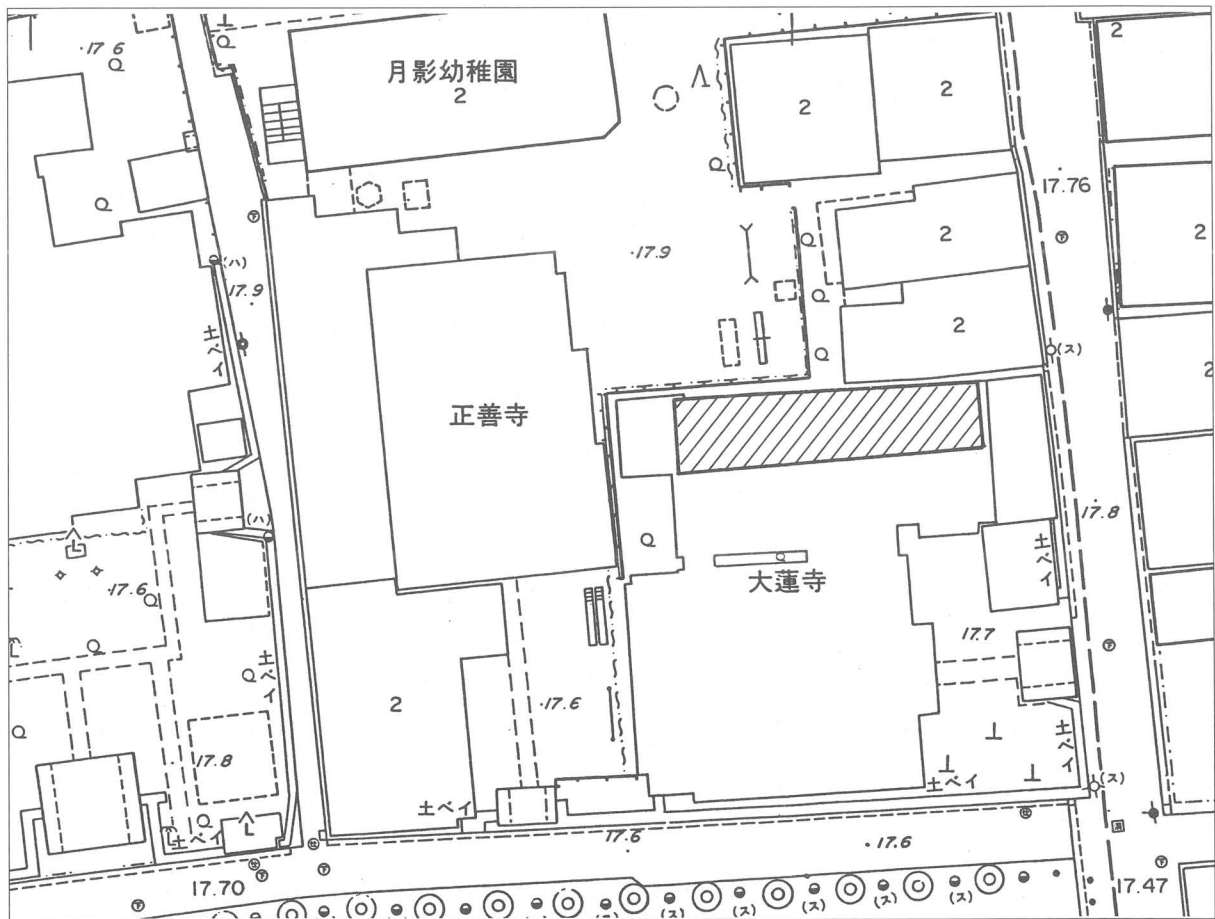
2. 調査の概要

今回の発掘調査は、平成7年の阪神・淡路大震災で解体された庫裏の再建工事に伴い実施した。庫裏は本堂の北側に位置し、東西に長い建物である。緊急調査表によると庫裏の建築は明治10年の建築となっている。

調査範囲は再建範囲とし、東西に長い調査区を設定した。上層部は重機を用いて掘削し、それ以下は人力掘削に切り替えた。本項では、寺院の変遷を考慮し、下層遺構面を第1遺構面と呼び、上層遺構面を第2遺構面とした。

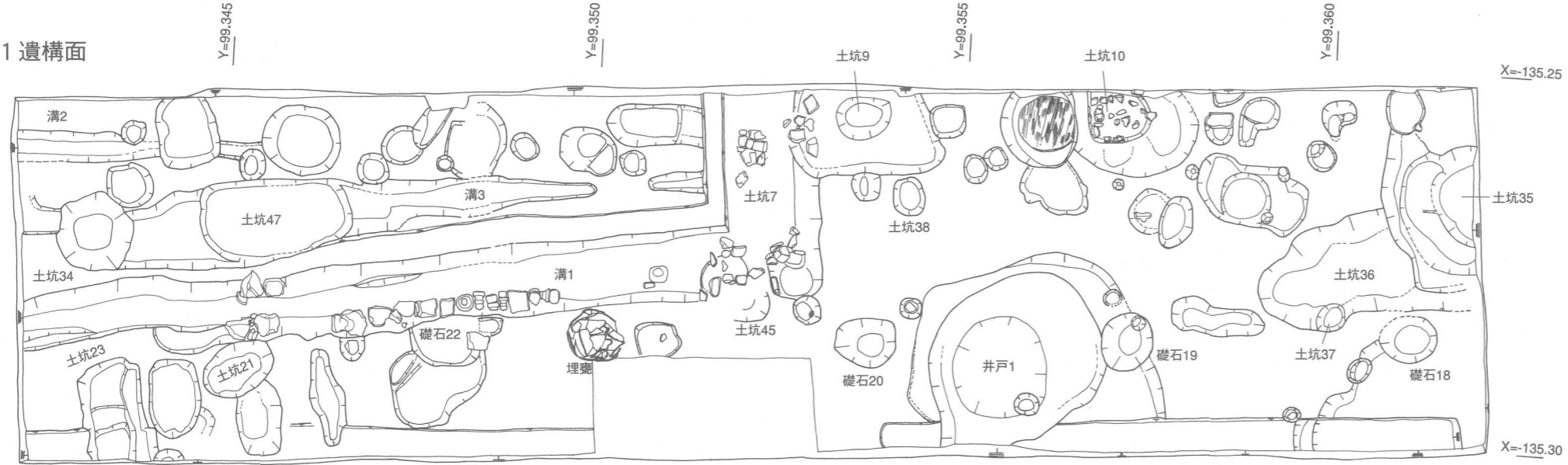
第1遺構面の遺構は、地山面上ですべて検出した。したがって、検出した遺構の時期には幅がある。主な遺構としては、溝と井戸および礎石建物跡がある。溝1は、調査区の中央部でカギ型に折れ、一方は北に延び、一方は西へ延びている。北側では寺の隣接地の地境と一致することから、当時の地割溝の可能性が高い。溝の護岸石に五輪塔などの石仏を転用している。礎石建物跡の礎石はすべて抜き取り穴であり、礎石は遺存していなかったが小石が土坑の底に堆積していた。この礎石建物が寺院創建期の建物と考えられる。

第2遺構面は、焼土と炭が広がる火災面とその上に整地して再建された新古2時期の遺構が存在する。第2遺構面の新期の遺構には、竈と礎石（礎石1～11、13、14）および土坑1・2がある。古期の遺構には、火災面と焼土土坑、礎石12・15・16がある。火災面は、焼け面が広がり所々で炭の堆積が認められ、その状況から火災の痕跡と考えられる。火災の時期は、焼土土坑から出土した遺物から、元禄時代に発生した3回（元年、12年、15年）の大火に相当すると推定される。緊急調査表には元禄

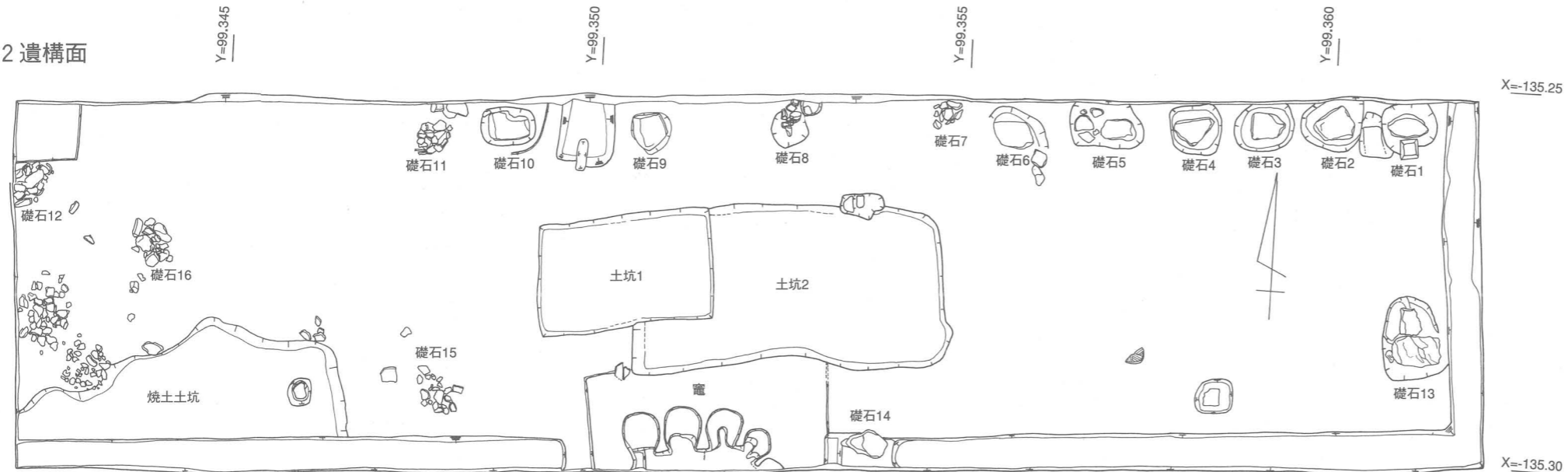


第50図 調査区設定図 (1/500) 昭和60年

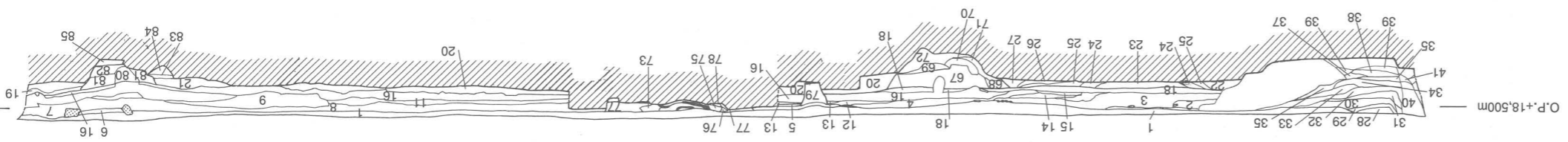
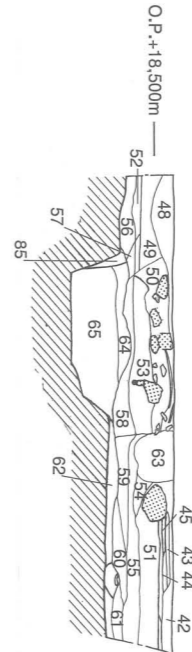
第1遺構面



第2遺構面



- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 表土 | 44. 白色粘土層 |
| 2. 黄褐色砂質土層 | 45. 暗茶色砂質土層 |
| 3. 明赤茶色砂層 | 46. 黄褐色粘土層 |
| 4. オリブ褐色粘質土層 | 47. 灰色砂質土層 |
| 5. 赤茶褐色砂質土層 (炭混じり) | 48. 褐色砂礫層 (平瓦・礫を多く含む) |
| 6. 暗茶灰色砂質土層 | 49. 黄褐色粘質土層 |
| 7. 黄緑茶色砂質土層 (砂利混じり) | 50. 灰色砂礫層 (平瓦・礫を多く含む) |
| 8. 黄赤褐色粘質土層 | 51. 赤茶褐色粘土混じり砂質土層 |
| 9. 赤茶褐色砂質土層 (灰・瓦を含む) | 52. 暗オリブ褐色粘質土層 |
| 10. 灰黄白色砂礫層 (拳大の石も含む) | 53. 褐色粘質土層 |
| 11. 暗黄色粘質土層 | 54. 淡灰色砂質土層 |
| 12. 淡黄灰色砂質土層 | 55. 暗灰色粘土混じり砂質土層 |
| 13. 明黄茶褐色粘質土層 | 56. オリブ褐色砂質土層 |
| 14. 灰黄褐色粘質土層 | 57. 暗茶褐色粘質土層 |
| 15. 明褐色粘質土層 | 58. 灰褐色粘質土層 |
| 16. 黄茶褐色砂質土層 | 59. 青灰色砂質土層 |
| 17. 黄灰色粘質土層 | 60. 淡黄灰色粘土混じり砂質土層 |
| 18. 淡黄茶白色砂質土層 | 61. 紫灰色砂質土層 |
| 19. 淡灰青褐色粘質土層 | 62. 黄灰色粘土混じり砂質土層 |
| 20. 赤黄色粘質土層 | 63. オリブ色砂質土層 |
| 21. 灰青黄色砂質土層 | 64. オリブ褐色粘質土層 |
| 22. 橙色粘土混じり砂質土層 | 65. 黄灰色粘土混じり砂質土層 |
| 23. オリブ色砂質土層 | 66. 灰色粘質土層 |
| 24. 灰褐色砂質土層 | 67. 暗黄茶褐色粘土混じり砂質土層 |
| 25. 淡黄色砂質土層 | 68. 緑灰黄褐色粘質土層 (砂利を含む) |
| 26. 黄褐色粘質土層 | 69. 黄白褐色粘土混じり砂質土層 |
| 27. 明黄色粘質土層 | 70. 黄灰褐色粘質土層 (灰を含む) |
| 28. 灰色粘土混じり砂層 | 71. 淡茶灰色粘質土層 |
| 29. 淡灰色粘質土層 | 72. 赤黄灰色粘質土層 |
| 30. 淡茶色砂層 | 73. 暗茶赤褐色粘質土層 |
| 31. 黄灰色粘土混じり砂層 | 74. 暗茶青褐色粘質土層 |
| 32. 暗茶灰赤色砂層 | 75. 灰緑色砂質土層 |
| 33. 緑茶色砂層 | 76. 明黄色砂質土層 |
| 34. 淡灰茶色砂層 | 77. 黄緑褐色粘質土層 |
| 35. 暗灰色砂層 | 78. 橙色砂質土層 |
| 36. 黄褐色粘土混じり砂質土層 | 79. 淡黄灰色砂質土層 (遺構埋土) |
| 37. 黒色砂層 | 80. 明灰褐色粘質土層 |
| 38. 灰赤色砂層 | 81. 灰青褐色粘質土層 |
| 39. 灰色砂層 | 82. 淡灰白色砂質土層 (砂利を含む) |
| 40. 灰色砂層 | 83. 黄灰青色粘質土層 (遺構埋土) |
| 41. 灰黄色砂層 | 84. 暗灰青色砂質土層 (遺構埋土) |
| 42. 灰色砂質土層 | 85. 明黄褐色粘質土層 (地山) |
| 43. 黄褐色粘土混じり砂質土層 | |



第51図 第1・2遺構面平面図・土層図 (1/80)

12年に全焼したことが記されている。

3. 調査成果

第1遺構面（第51図）

第1遺構面は、地山面まで掘り下げて確認した。この面の遺構には礎石建物跡と地割溝、土坑、埋甕などがある。土坑は多数検出されているが、出土遺物を図示した土坑のみ説明を加えておきたい。

礎石建物跡2（第53図）

礎石建物跡2の礎石は8箇所を確認されたが、調査範囲が狭いため全体の規模は明らかにできなかった。礎石の配置をみると、地割溝（溝1）の手前で入り隅になっている。このことから、地割溝と礎石建物跡2は同時に存在していたことがわかる。

礎石は、すべて抜き取られて掘り方のみ遺存していた。抜き取り穴の底面には、地固め用の礫が残っていた。礎石は東西方向に北側で2間分、南側で4間分あり、その礎石間の距離は、南側で礎石18と19が3.9m、礎石19と20が3.5m、礎石20と21が2.9m、礎石21と22が2.9mである。北側2間分の距離もこれと一致している。東西2列の距離は、3.1mである。

礎石建物跡2の時期は、礎石20の掘り方から出土した肥前磁器片からみると、その建築時期は江戸時代に入ってからと考えられ、天正15年まで遡らないことになる。

井戸1（第52図）

南壁沿いに位置する。井戸の上部は別の土坑と重複している。当初は土坑として掘削を始めたが、1.1mの深さで底に到達しないため井戸と判断した。井戸枠は用いられない素掘りの井戸で、直径は1.1m前後と推定される。

出土遺物には、土師皿、土製羽釜、染付磁器碗が出土した。

土坑21（第54図、図版19）

土坑20を切っている。形状は楕円形で、長さ1.03m、幅58cm、深さ12cmである。出土遺物には、唐津焼碗（1）と唐津焼胎土目積み皿（2）が出土した。

土坑23（第54図）

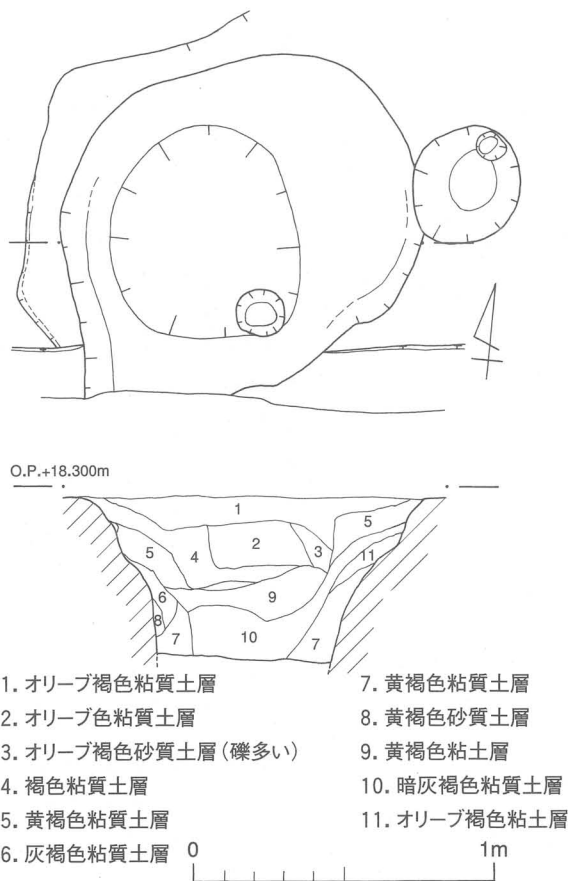
土坑22の西側に位置し、土坑の南側は調査区外に続いている。規模は、長さ1.4m以上、幅85cm、深さ22cmである。出土遺物には、陶器碗（3）がある。

土坑34（第55図）

土坑34は、溝1の北側に位置し、溝3を切っている。規模は直径1.1mの円形で、深さは中央部で15cmである。出土遺物には、唐津焼砂目積み皿（4）がある。

土坑35（第55図、図版17・19）

土坑35は、調査区の東端に位置し、土坑36を切っている。土坑の東側は調査区外となってい



第52図 井戸1平面・断面図（1/25）

る。規模は、南北1.75m、深さ41cmである。

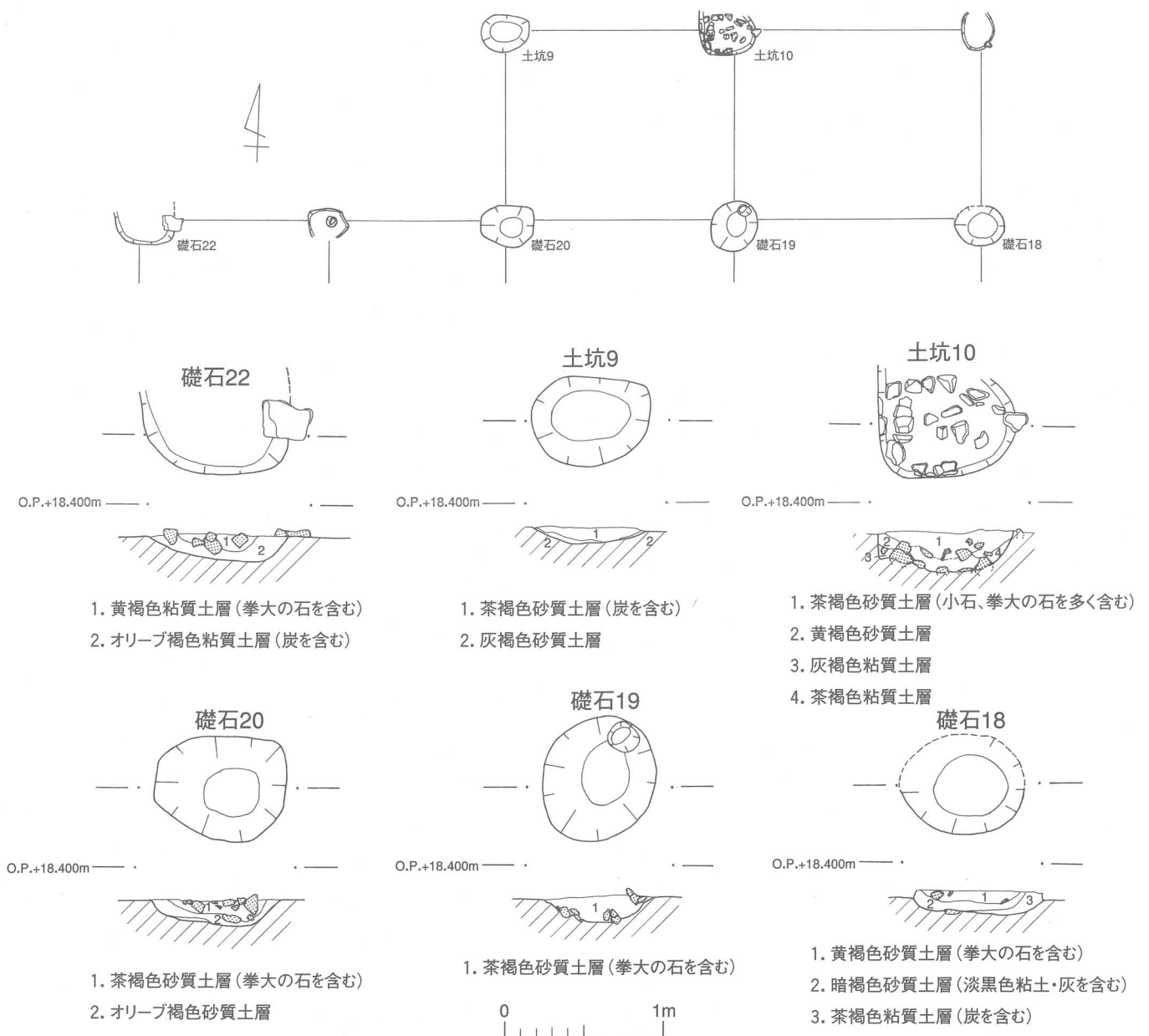
土坑内部から、比較的多くの遺物が出土した。中でも志野向付（12）は、伊丹郷町での出土事例が少なく貴重な発見となった。この向付は入隅四方形で、四隅の角は丸ノミで縦彫りされている。外面には、山水文と草文が描かれている。この他に、焙烙（8）、肥前磁器染付碗（9・10）、肥前陶器碗（11）、丹波焼壺（13）がある。

土坑37（第55図、図版19）

土坑37は、土坑36を切っている。規模は、長さ46cm、幅30cm、深さ33cmである。遺物には、手捏ね製の土師皿（5）がある。

土坑38（第55図、図版19）

調査区中央部に位置する小規模な土坑である。規模は、長さ51cm、幅42cm、深さ15cmである。遺



第53図 礎石建物跡平面・断面図（1/100・1/40）

物に天目碗（6）がある。この天目碗は、内反り高台で、高台周辺部には銹釉が施されている。

土坑45（第55図、図版19）

調査区の中央部に位置している。溝1に切られている。規模は、直径55cmの円形で、深さは26cmである。遺物には唐津焼の灰釉皿（7）がある。

溝1（第56・57図、図版19）

溝1は、北側の寺域外から南に向かって延びてきて、調査区の中央部で直角に折れて西に方向を変えている。溝の南岸には割石と一石五輪塔を並べて護岸を行っていた。この護岸は本来両側に設けられていたと考えられるが、大半は取り除かれ、一部は溝内部に落ち込んでいた。一石五輪塔は、大きさを揃えるため、各部位の境目で切断されている。

溝の規模は、護岸石を取り除いた掘り方の状態でみると、東西溝で幅95cm～1m、深さ18～24cm、南北溝では幅1.3m、深さ17cmである。溝の両側に護岸石が残る溝の西側部分の規模は、幅35cm、深さ20cmとなる。

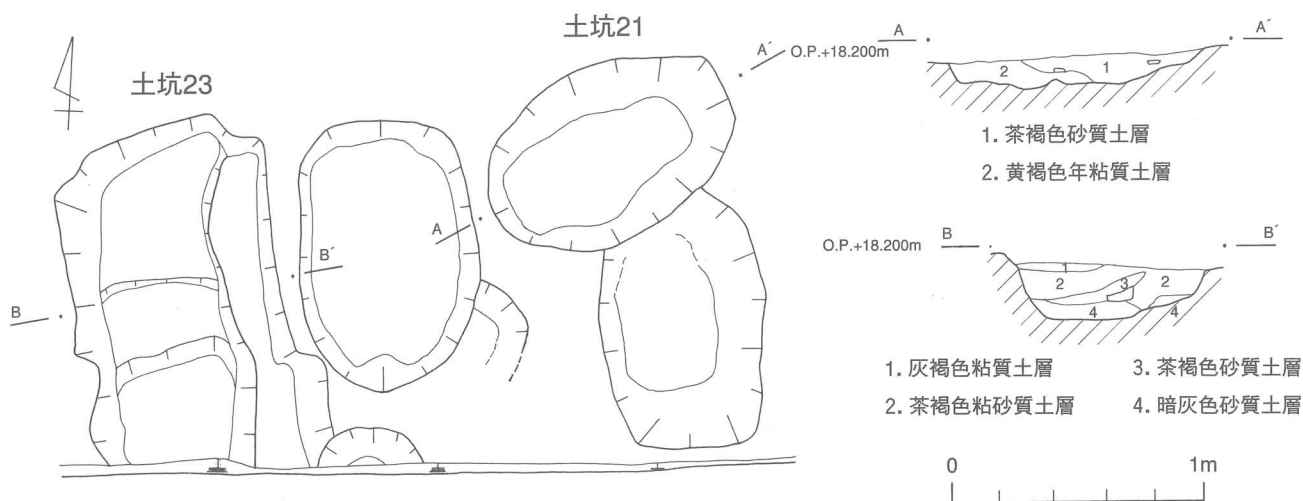
遺物には、肥前染付磁器蝶文碗（15）、土師皿（14）など一石五輪塔（19～21）がある。出土遺物の状況からみると、17世紀中頃までには溝が埋没したと考えられる。

溝2（第56・57図）

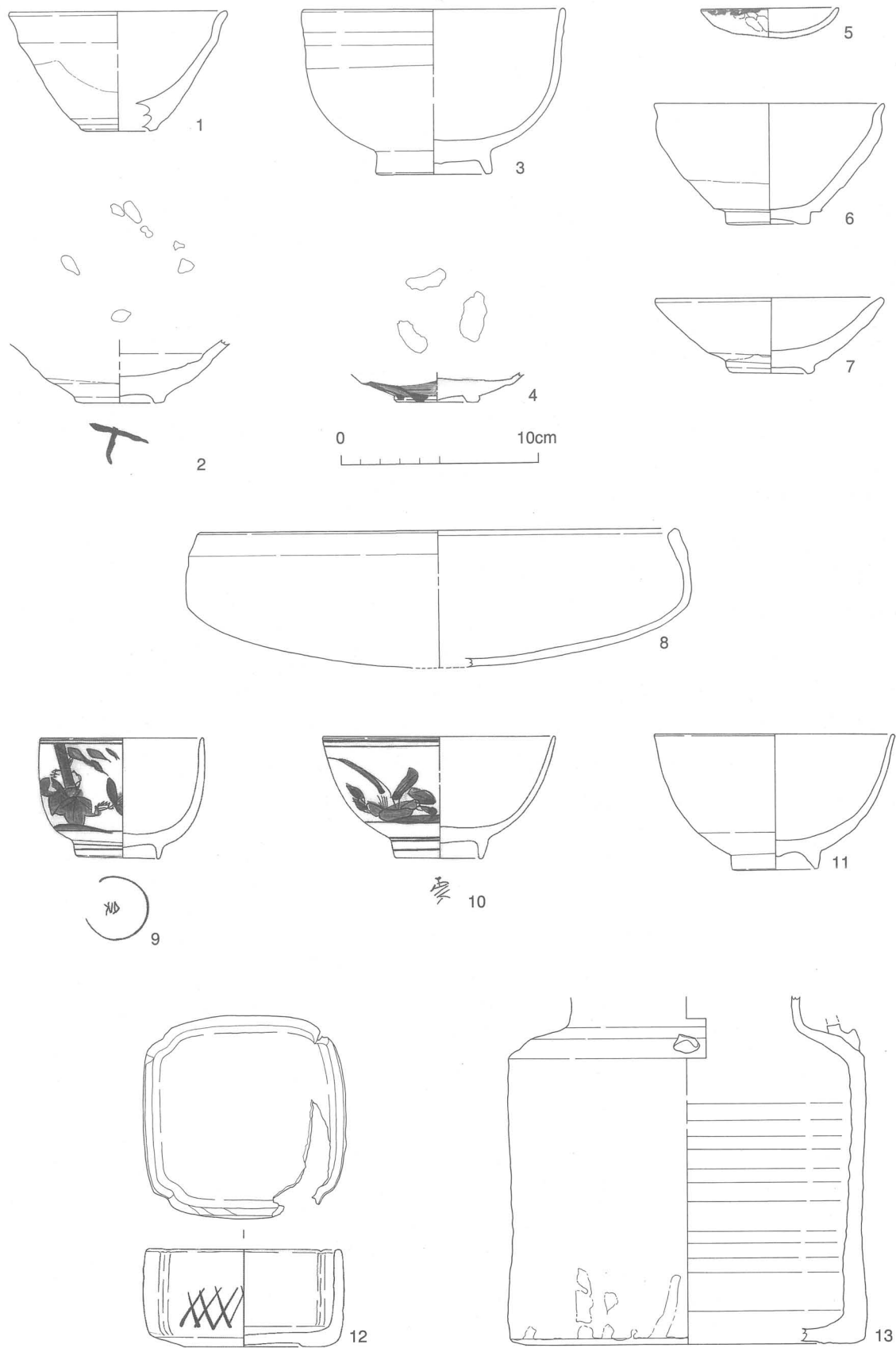
溝2は、溝1の北側に位置する小規模な溝で、土坑41・42・33に切られている。規模は、幅23～42cm、深さ6～19cmである。遺物には、絵唐津の皿（22）がある。

埋甕（第58図、図版20）

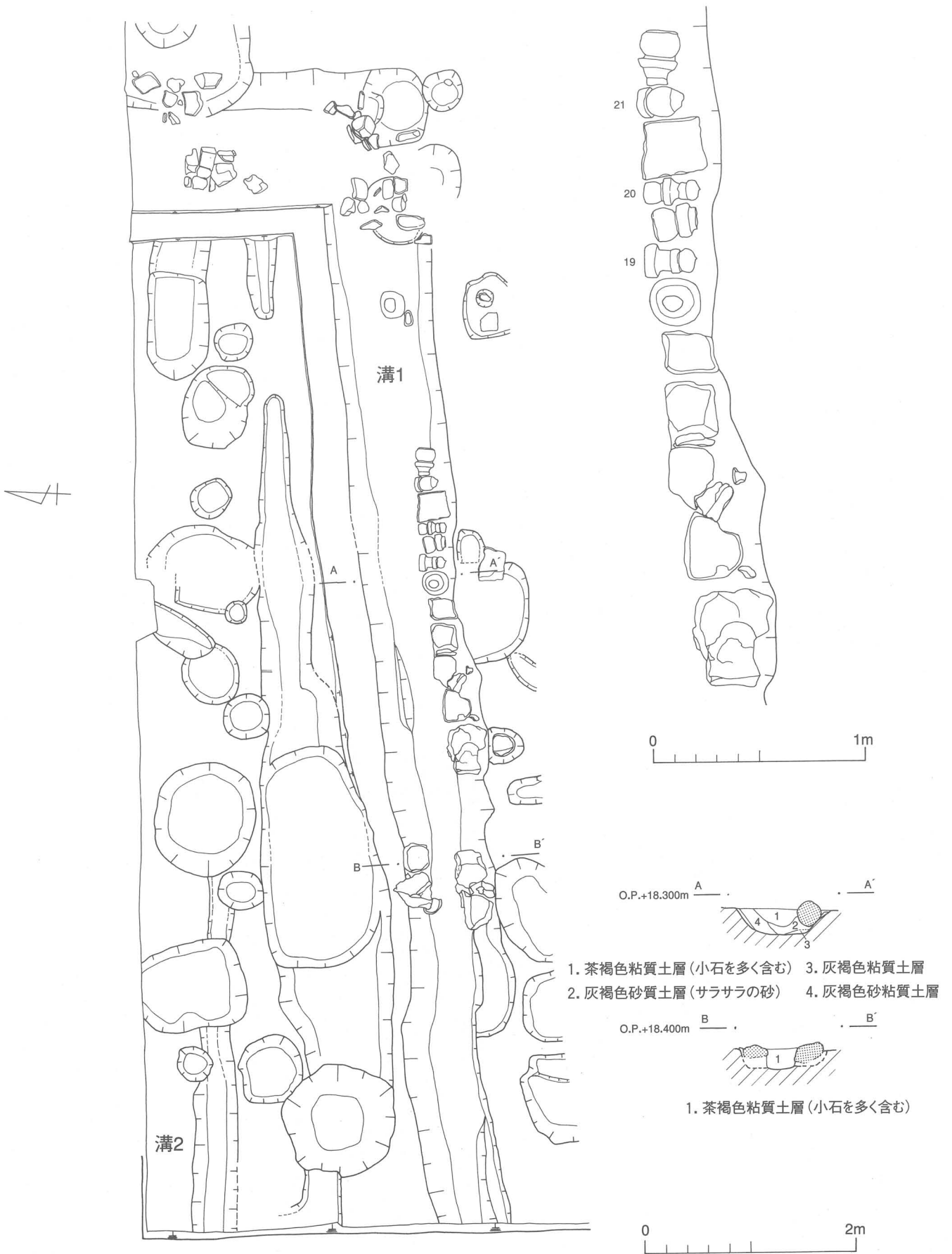
口を上にして埋め込まれていた。発掘時には胴部上半は割れて内部に落ち込んでいた。口縁部の破片がまったく認められないので、口縁部を打ち欠いて使用していたと考えられる。用途については明らかではない。遺構名を埋甕としたが、埋まっていたものは丹波焼自然釉の壺である。胴部上半部に最大径を有する肩の張った形態で、口縁部は欠いているが、頸部の形状から口縁部は反口であったと考えられる。紐造りで、肩部から胴部中央にかけて自然釉が厚く掛かっている。



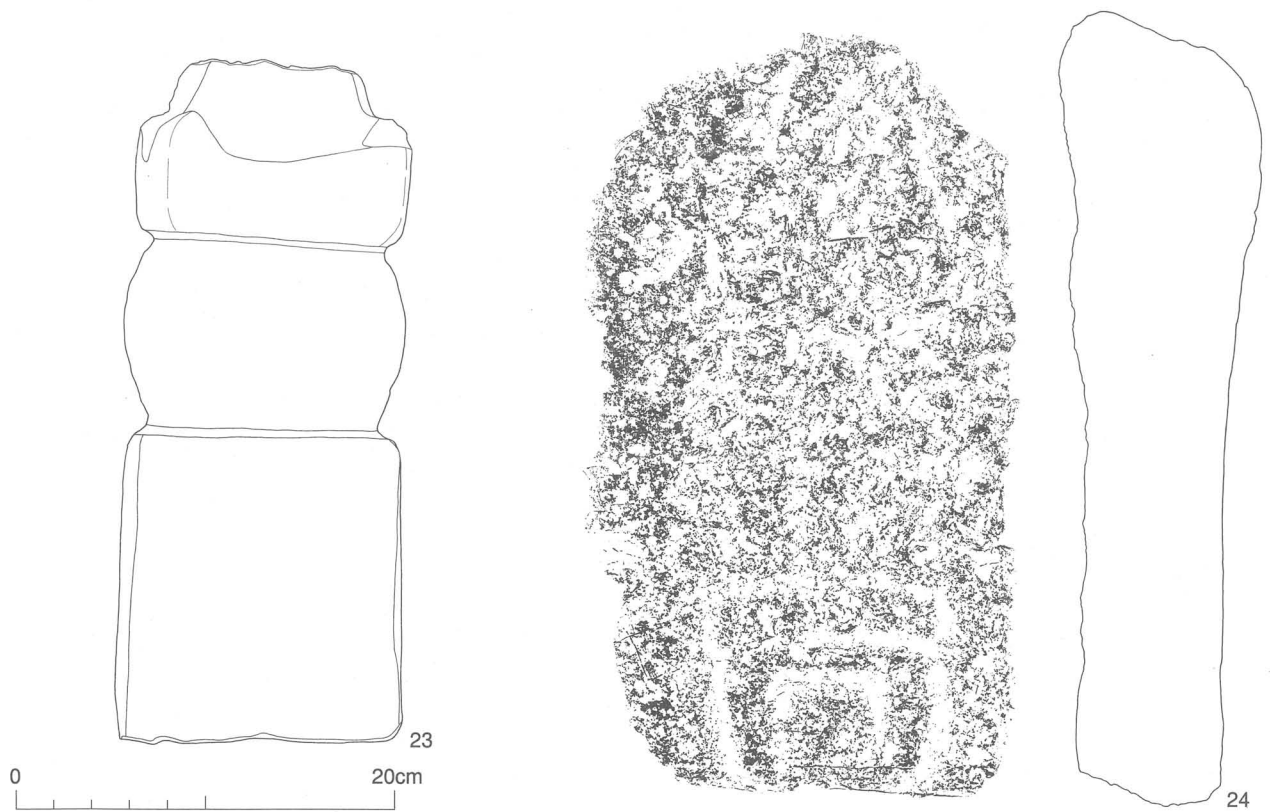
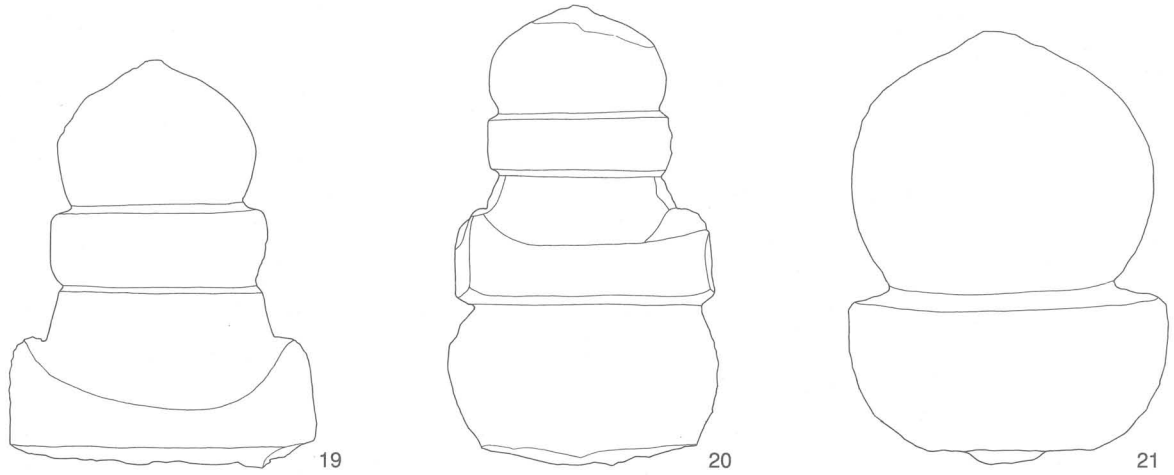
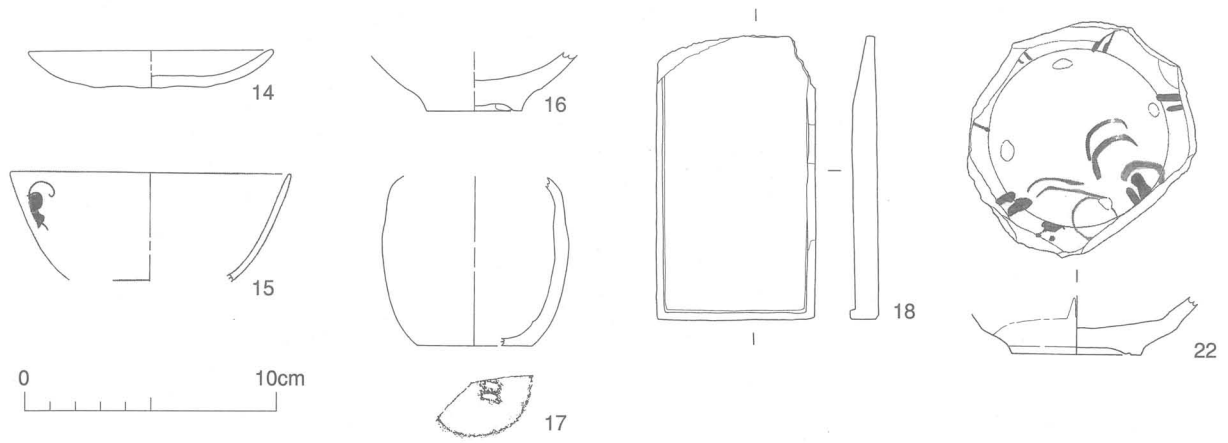
第54図 土坑21・23平面・断面図（1/30）



第55図 土坑21・23・34・35・37・38・45出土遺物（1/3）



第56図 溝1・2平面・断面図 (1/50・1/25)



第57図 溝1・2、土坑7・43出土遺物(1/3・1/4)

第2遺構面（第51図）

第2遺構面には、大きく2時期の遺構が存在する。古い段階の遺構に火災に関係する遺構がある。火災によってどのような被害が発生したか明らかではないが、地面が火熱によって赤く変化し、炭化物の広がりや認められるところを見ると、建物に被害が生じた可能性は高いと考えられる。火災の後、整地されて礎石建物（礎石1～11・13）が建てられている。南壁際で発見された竈は、この礎石建物の内部施設である。しかし、方形の土坑1・2については、礎石建物に関係する遺構であるのか、あるいは礎石建物解体後の遺構であるのか明らかではない。

焼土土坑（図版20）

調査区の中ほどに焼土と炭の広がりや認められ、その西側の浅い落ち込みには焼土の堆積が認められた。この落ち込みは、東西4.5m、南北1.65mの範囲で確認され、深さは7～20cmである。焼土に混じって、土師皿2点（39・40）、肥前青磁鉢（41）、鉄釉と灰釉の掛け分けの大皿（42）などが出土した。出土遺物の年代から、焼土が堆積した時期は、17世紀後半頃と推定される。

礎石建物跡1（第60図、図版18）

この建物跡は、調査区の北壁際に並んで検出された礎石（礎石1～11・13）によって構成される。建物の範囲および規模の検討をすると、建物の北端は、寺の敷地際に並ぶ礎石1～11の通りと考えられ、南端については竈より南で本堂までの範囲と推定される。また、東端は礎石1と13を結んだ通りの可能性がある。

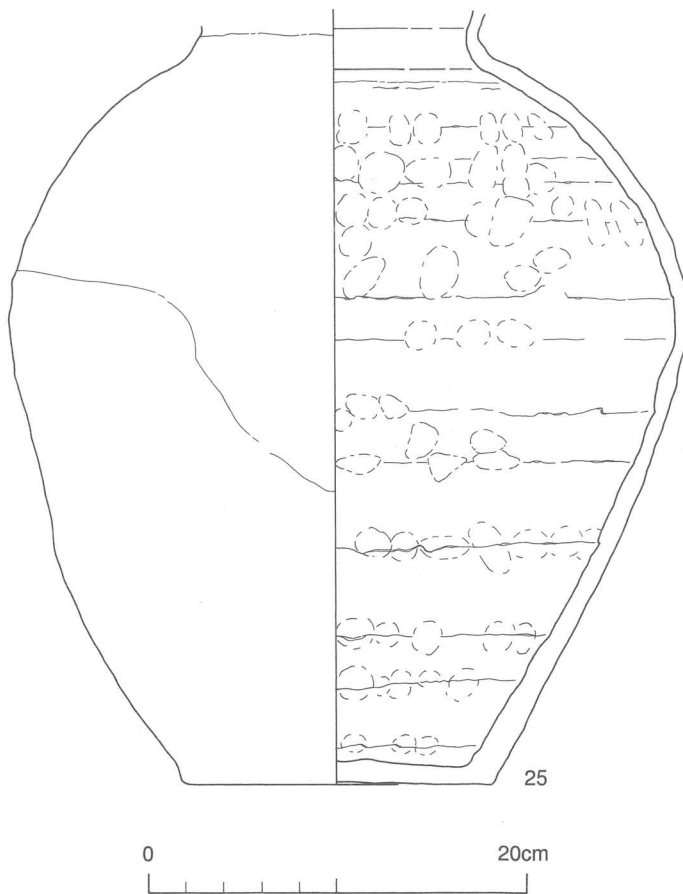
この建物の用途については、建物内部に厨房施設があることから庫裏と考えることができよう。建

物の年代については、礎石8の掘り方から出土した肥前青磁染付碗蓋片からみて18世紀後半以降の建立と推定される。

竈（第59・60図、図版18）

調査区の南壁際にあり、焚口部などが未検出である。竈の構造は、火床と焚口床面が土間より一段下がり、竈の上部は土間より高く築かれるという半地下式である。検出した竈は4基で、一つの焚口に複数の竈が設けられた連基式である。竈は、焚口方向から見て左側が大きく、右側に向かって規模が小さくなっている。竈の規模は、左側から順に奥行き60cm・幅50cm、奥行き62cm・幅50cm、奥行き55cm・幅48cm、奥行き40cm・幅40cmである。竈の上部構造は既に破壊され残っていない。また、竈の数も5基以上の可能性もある。

遺物には、煙管の雁首（38）と土師皿（37）がある。



第58図 埋竈出土遺物（1/4）

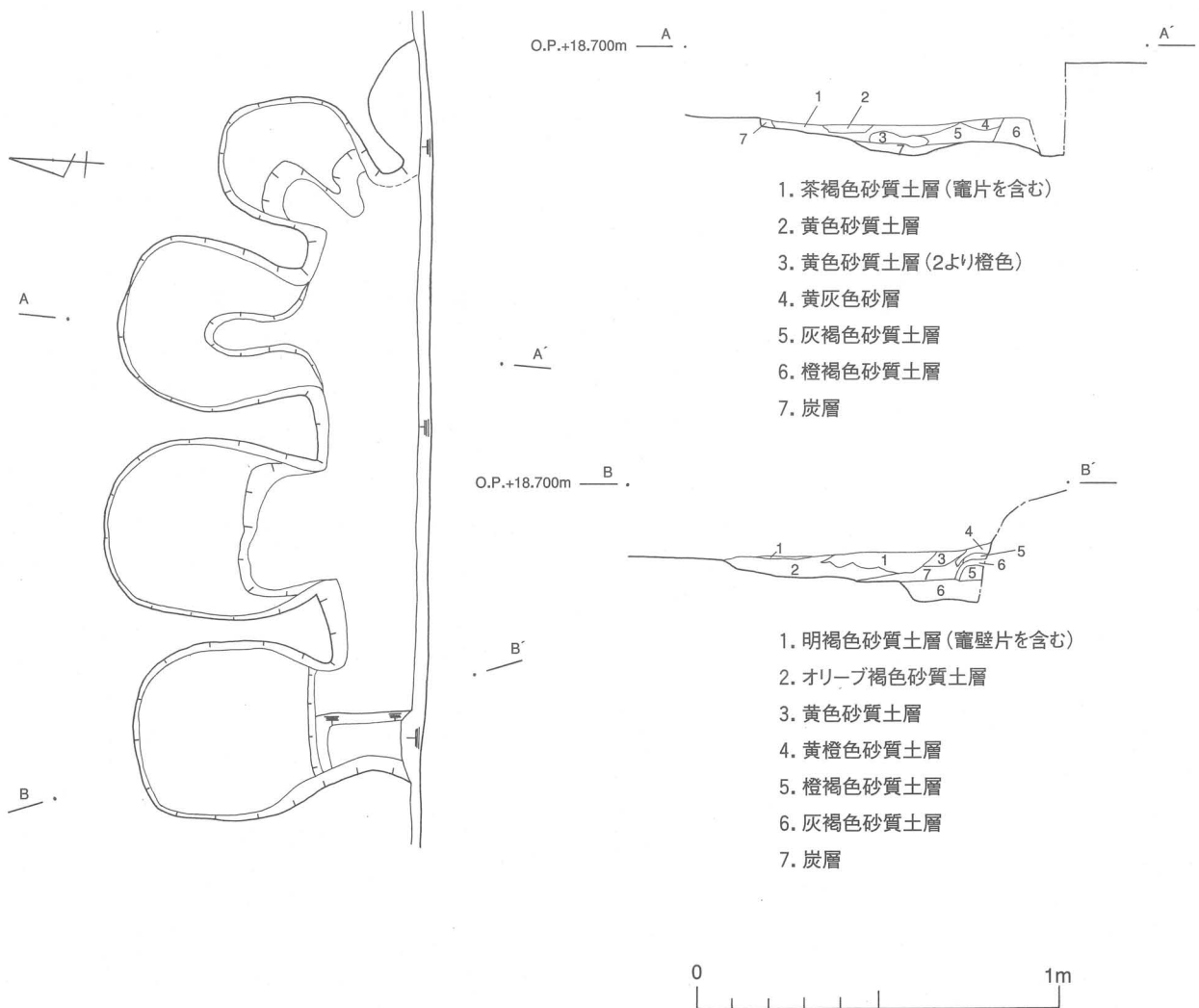
土坑 1 (第61図)

土坑 1 は、調査区の中央部に位置する方形の土坑で、土坑 2 を切っている。規模は、長さ2.4m、幅1.5m、深さ20cmである。

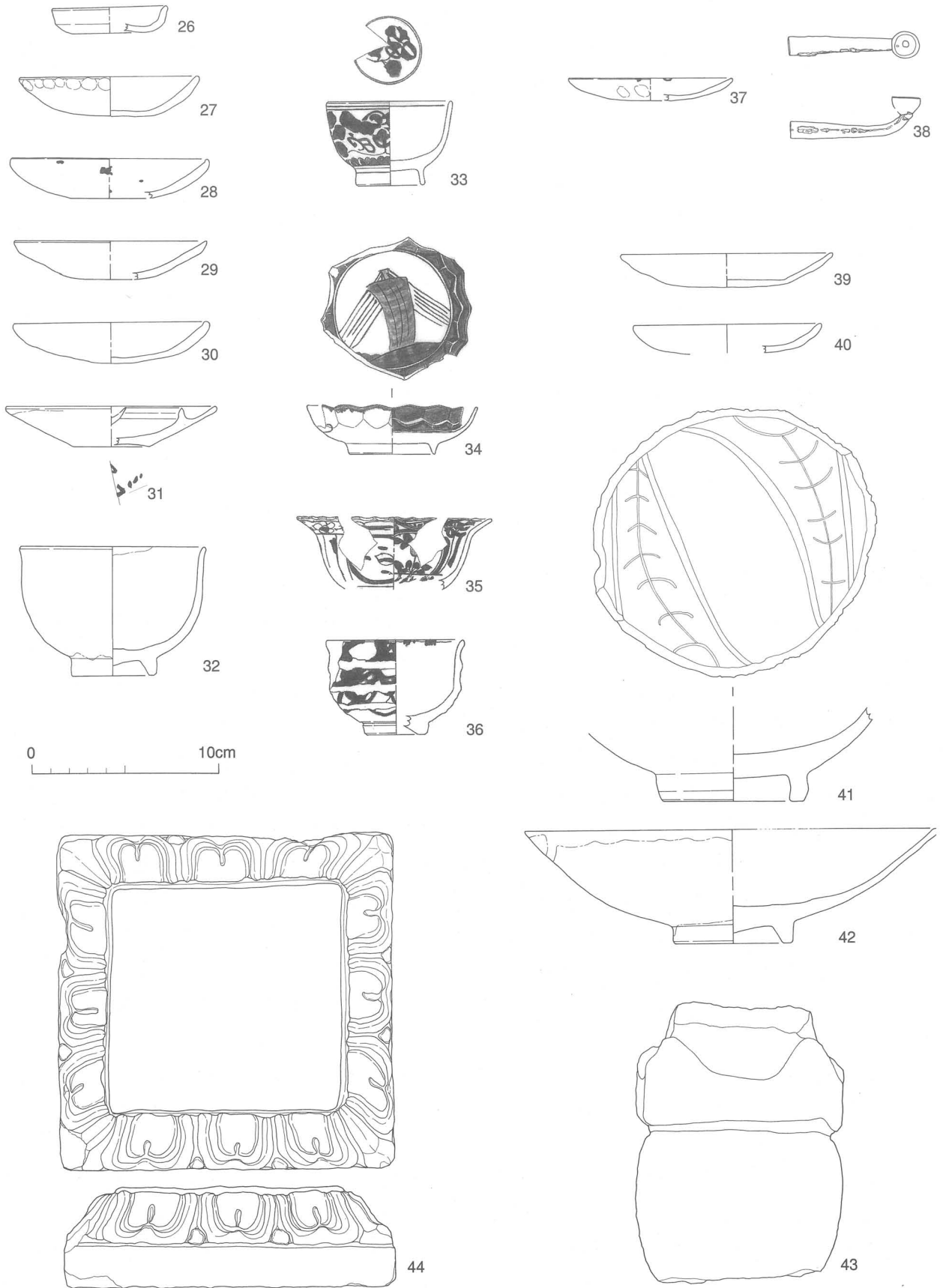
土坑 2 (第60・61図、図版20)

土坑 1 に土坑の西側を切られている。底が平坦な長方形の土坑である。規模は、長さ4.36m、幅2.15m、深さ25cmである。礎石建物跡 1 の範囲に位置することから、建物内部の施設の可能性があるが、同建物廃滅後の可能性もある。

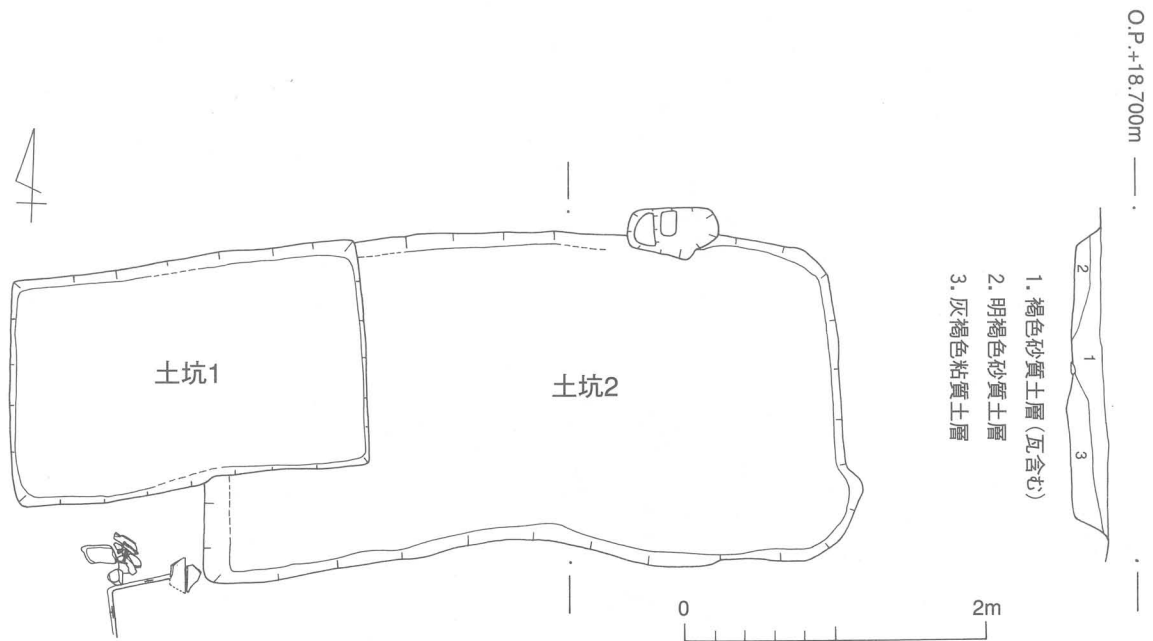
遺物は比較的豊富に出土し、伊賀・信楽焼灯明受皿 (31)、萩焼ピラ掛け碗 (36)、肥前磁器碗 (33・34)、土師皿 (26~30) などがある。遺構の年代は、出土遺物から判断して19世紀前半頃と考えられる。



第59図 甕平面・断面図 (1/20)



第60図 土坑2、竈、焼土土坑、礎石1出土遺物（1/3・1/4）



第61図 土坑1・2平面・断面図（1/50）

4. まとめ

今回の発掘調査は庫裏の建替に伴うもので、本堂北側の一画で行った。調査面積も残土置き場の関係から十分な広さで実施できなかったため、本書所収の他寺院の調査報告に比べ、寺院の創建からの変遷が辿れるほどの資料を得ることはできなかった。しかし、少ないけれども寺院の創建年代や再建時期などを示唆する考古資料も得られたので、その点について問題点も含め整理しておきたい。

前述したように大蓮寺の創建時期は、開基年考では天正4年（1576）、寺伝では同15年（1587）と喰い違ふ。発掘調査で確認した遺構をみると、古い段階の寺院に係る遺構に礎石建物跡2と溝1がある。礎石建物跡2は庫裏と推定されるが、礎石掘り方から出土した肥前磁器の破片から江戸時代に入ってからのものである。また、溝1は礎石建物跡2と同時に存在したと推定されるが、溝の埋土から出土した遺物は17世紀前半の遺物が多く含まれているので、その頃まで存続していたとしても構築年代は明らかではない。その他、胎土目積みの唐津焼皿を出土した土坑21や志野向付などを出土した土坑35についても、天正4年まで遡らない。しかし、それほど大きな年代差があるわけでもないし、本堂のある中心部分の発掘調査が行えていない現在、創建時期の結論は下し難い。

次に火災について述べておきたい。寺伝では元禄12年（1699）の大火で焼失したことになる。発掘調査でも火災面が検出され、焼土土坑からは17世紀後半の肥前青磁の鉢や17世紀末以降の肥前陶器の皿などが出土し、大火による焼失を裏付ける結果となった。この大火は、元禄時代にあった3回の大火（元年・12年・15年）の一つで、郷町内13箇寺の半数に相当する6軒が焼け、その他の町家は酒家16軒を含め多数に上っている。被災した6軒の寺院名が記録に伝わっていない。今回の調査結果から、元禄12年大火で大蓮寺が被災した可能性は極めて高いが、本堂の建築学的調査結果が17世紀中頃の建築と推定されており、被災後の本堂の再建記録が伝わっていない以上、慎重な判断が必要となってくる。

（小長谷）

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑21	第55図-1 図版19-1	天目碗	陶器	口 径 (10.8) cm 器 高 6.1 cm 高台径 (3.2) cm	鉄釉 外面体部下半露胎	唐津 40% 二次焼成受ける
	第55図-2	皿	陶器	高台径 4.5 cm	灰釉 外面体部下半露胎 見込みに胎土目有り	唐津 60% 高台内に墨書有り 16c末~17c初
土坑23	第55図-3	碗	陶器	口 径 (13.2) cm 器 高 8.4 cm 高台径 5.8 cm	灰釉 高台量付露胎	80% 内外面細かい貫入
土坑34	第55図-4	皿	陶器	高台径 4.2 cm	高台周辺露胎 見込み砂目3ヶ所有り 高台砂目3ヶ所有り	唐津 40% 17c前半
土坑37	第55図-5 図版19-5	土師皿	素焼き	口 径 6.9 cm 器 高 1.5 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 底部ナデ 内面ナデ	在地 100% 口縁煤付着
土坑38	第55図-6 図版19-6	天目碗	陶器	口 径 11.6 cm 器 高 6.2 cm 高台径 4.2 cm	内面から外面体部上半鉄釉 外面下半錆釉	瀬戸・美濃 50% 16c中頃
土坑45	第55図-7 図版19-7	皿	陶器	口 径 11.4 cm 器 高 3.9 cm 高台径 3.8 cm	灰釉 外面体部下半無釉	唐津 80% 16c後半
土坑35	第55図-8	焙烙	素焼き	口 径 (23.9) cm	外面体部ヨコナデ 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 30% 外面と内面底部煤けている
	第55図-9 図版19-9	染付碗	白磁	口 径 8.2 cm 器 高 6.1 cm 高台径 4.1 cm	外面草花文 高台内銘と圏線有り 量付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 17c中頃
	第55図-10 図版19-10	染付碗	白磁	口 径 11.7 cm 器 高 6.2 cm 高台径 4.3 cm	外面草花文 高台内銘有り 量付露胎 離れ砂付着	肥前 80% 内外面細かい貫入
	第55図-11	碗	陶器	口 径 12.0 cm 器 高 6.9 cm 高台径 4.3 cm	口縁若干端反り 透明釉 全釉 高台量付砂目3ヶ所有り	肥前 80% 全体に細かい貫入 17c初頭
	第55図-12 図版19-12	向付	陶器	口 径 9.8 cm 器 高 5.0 cm 高台径 6.0 cm	入隅四方形 長石釉 外面文様有り	瀬戸・美濃(志野) 70% 16c末~17c初
	第55図-13	壺	陶器	底 径 18.0 cm	灰釉 内面露胎 肩部に把手1ヶ所残存	丹波 20%
溝1	第57図-14	土師皿	素焼き	口 径 9.8 cm 器 高 1.5 cm	手捏ね成形 外面体部ナデ 底部指頭圧痕 内面ナデ	在地 20%
	第57図-15	染付碗	白磁	口 径 (11.3) cm	外面蝶文	肥前 20%
	第57図-16	碗	陶器	高台径 3.9 cm	灰釉 外面露胎 高台離れ砂付着	唐津 20% 17c前半
	第57図-17	小徳利	陶器	底 径 (4.6) cm	内外面ロクロナデ 底部刻印有り	30%
	第57図-18	硯	石	高 さ 1.2 cm 幅 6.4 cm		70%
	第57図-19 図版19-19	一石五輪塔	石	幅 16.5 cm		花崗岩 50% 空・風・火輪残存
	第57図-20 図版19-20	一石五輪塔	石	幅 14.5 cm		花崗岩 70% 空・風・火・水輪残存

第12表 第160次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
溝1	第57図-21 図版19-21	五輪塔	石	幅 17.1 cm	空・風輪のみの一石作り 風輪の下に突起有り	花崗岩 40%
溝2	第57図-22 図版19-22	絵唐津皿	陶器	高台径 5.2 cm	灰釉 見込み文様と胎土目4ヶ所有り 高台周辺露胎	唐津 50% 16c末～17c初
土坑7	第57図-23 図版20-23	一石五輪塔	石	幅 15.0 cm	花崗岩 50% 火・水・地輪残存	
土坑43	第57図-24	石仏	石	幅 21.4 cm		花崗岩 50%
埋甕	第58図-25 図版20-25	壺	陶器	底径 16.8 cm	紐造り成形 体部指頭圧痕有り	丹波 90% 口縁部から肩にかけて自然釉掛かる
土坑2	第60図-26 図版20-26	土師小皿	素焼き	口径 (6.2) cm 器高 1.4 cm	外面体部ヨコナデ 底部ナデ 内面口ロナデ	在地 60%
	第60図-27 図版20-27	土師皿	素焼き	口径 9.5 cm 器高 2.1 cm	外面口縁部指頭圧痕有り 体部ナデ(指頭圧痕若干残る) 口縁端部ヨコナデ 内面ナデ	在地 90%
	第60図-28	土師皿	素焼き	口径 (10.5) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 30% 黒色の付着物有り
	第60図-29	土師皿	素焼き	口径 (10.3) cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭圧痕残る) 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 30%
	第60図-30	土師皿	素焼き	口径 10.4 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭圧痕残る) 底部へら切り痕有り 内面ナデ	在地 85% 黒色の付着物有り
	第60図-31	受皿	陶器	口径 11.3 cm 器高 2.2 cm 底径 4.1 cm	灰釉 外面露胎 受部に1ヶ所切り込み有り	伊賀・信楽 40% 内面貫入する 受部煤付着 底部墨書有り 18c後～19c前
	第60図-32 図版20-32	碗	陶器	口径 9.8 cm 器高 7.0 cm 高台径 4.4 cm	口縁端反り 掛け分け 外面藁灰釉 内面鉄釉 高台露胎	60%
	第60図-33 図版20-33	染付小碗	白磁	口径 6.5 cm 器高 4.6 cm 高台径 3.5 cm	外面花唐草文 内面口縁部圏線有り 見込み花文と二重圏線有り	肥前 60%
	第60図-34 図版20-34	染付皿	白磁	口径 9.1 cm 器高 2.6 cm 高台径 4.5 cm	型打ち成形 口縁輪花 外面文様有り 見込み帆掛け舟文と二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 60%
	第60図-35	染付碗	白磁	口径 (10.4) cm	口縁輪花 外面花文 内面窓絵に宝文と花文を交互に描く	20% 焼き継ぎ痕有り
竈	第60図-37	土師皿	素焼き	口径 (8.7) cm 器高 1.2 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭圧痕残る) 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 20% 口縁部煤付着
	第60図-38	煙管(雁首)	銅	火皿径 1.5 cm 長さ 7.0 cm 接合部径 0.9 cm	首部の合わせ目は火皿に向かって右横 火皿に孔有り	100%
焼土土坑	第60図-39	土師皿	素焼き	口径 (11.3) cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ(指頭圧痕残る) 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 50%
	第60図-40	土師皿	素焼き	口径 (10.1) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕有り 内面体部ヨコナデ	在地 40%

第13表 第160次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
焼土土坑	第60図-41 図版20-41	鉢	青磁	高台径 7.4 cm	見込み線刻で片切り彫りの葉文 高台壘付露胎 重ね焼き痕有り	肥前 40% 内外面貫入 入る
	第60図-42 図版20-42	皿	陶器	口径 (22.2) cm 器高 6.2 cm 高台径 6.2 cm	掛け分け 外面灰釉 内面鉄釉 見込み蛇の目軸刺ぎ 高台露胎	肥前 70% 17c末～ 18c後
	第60図-43	一石五輪塔	石	幅 14.8 cm		花崗岩 40% 火・水輪 のみ残存
礎石1	第60図-44	五輪塔基壇	石	高さ 7.3 cm 幅 23.7 cm		花崗岩 98%

第14表 第160次調査遺物観察表（3）

第4節 万徳寺の調査—有岡城跡・伊丹郷町遺跡第165次調査—

所在地 伊丹市北本町1丁目13番地
 調査面積 290m²
 調査期間 平成7年11月13日～平成8年1月26日
 調査担当 齊藤吉弘（宮城県教育委員会派遣）
 谷口哲一（山口県教育委員会派遣）

1. 遺跡の概要

調査地は、県道尼崎・池田線と県道伊丹・豊中線の交差点の北東約20mに位置する。江戸時代の旧町名は綿屋町にあたる。調査地の万徳寺は浄土真宗の寺院で、寺史によれば天正年間の創建であり、現在の地には寛永4年（1627）に建立したとされる。江戸時代を通じて3度の火災によって建物が焼失しているが、正徳元年（1711）に再建された記録が残っている。また「寛文九年伊丹郷町絵図」（1669）にも当地に「万徳寺」の記載があることから、江戸時代前期から続く寺院地であったことがうかがえる。

平成7年1月の震災で本堂、庫裏が被災し、寺の再建に伴い全面調査を実施した。

2. 調査の概要

調査は、旧庫裏が位置していた部分の約235m²について（以下調査区と呼ぶ）全面調査を行い、旧本堂および庫裏の一部については2つのトレンチ（北から第1トレンチ、第2トレンチとする）による調査を実施した。調査面積はあわせて約290m²となる。

遺構面は3面検出された。表土を除去した面で旧庫裏に関連する礎石、池、井戸、水琴窟、土坑が検出されたことから、これを第1遺構面とした。遺構面の時期は、震災前に現存していた本堂の建立が正徳元年（1711）であることや出土遺物から18世紀以降とみられる。第2遺構面は第1遺構面の下層から検出された焼土層と火災処理土坑とみられる焼土土坑1・2、その他の遺構からなる。遺構面の時期は、当地での万徳寺の創建が17世紀前半であること、17世紀末から18世紀初頭にかけて火災によって焼失していること、出土遺物の年代観などから、17世紀から18世紀初頭とみられる。第3遺構面は地山面からなり、掘立柱建物跡、土坑などの遺構が検出され、遺物から中世の遺構面と考えられる。なお『平成7年度 年報』^{註1)}の概要報告では遺構面を4面として報告しているが、ここでは3面と4面をあわせて第3遺構面としている。

なお第1トレンチ、第2トレンチで検出



第62図 第165次調査区位置図（1/2,500）平成4年



第63図 調査区設定図 (1/500) 昭和60年

した遺構名については、遺構名の前に第1トレンチまたは第2トレンチを付することで区別する。

3. 調査成果

検出された遺構面ごとに代表的な遺構遺物を以下に取り上げる。

第3遺構面 (第65図、図版21)

この面では掘立柱建物跡1棟、土坑12基、溝状遺構5条、柱穴が検出された。このうち掘立柱建物跡、土坑52・53・55、溝5などの溝状遺構は、主軸が東西方向であることから、集落内での規則性が見いだせる。時期は出土遺物から13～14世紀とみることができる。

掘立柱建物跡 (第66図、図版22・29)

調査区の北側で5個の柱穴が検出された。柱穴の配置から棟方向が東西となる建物の一部とみられる。南北方向の梁行は2間で4.3m。柱間は2.15m。桁行方向の間数は不明であるが柱間は2.05m。柱穴はいずれも隅丸方形で、径60～80cm、深さは20～30cm。

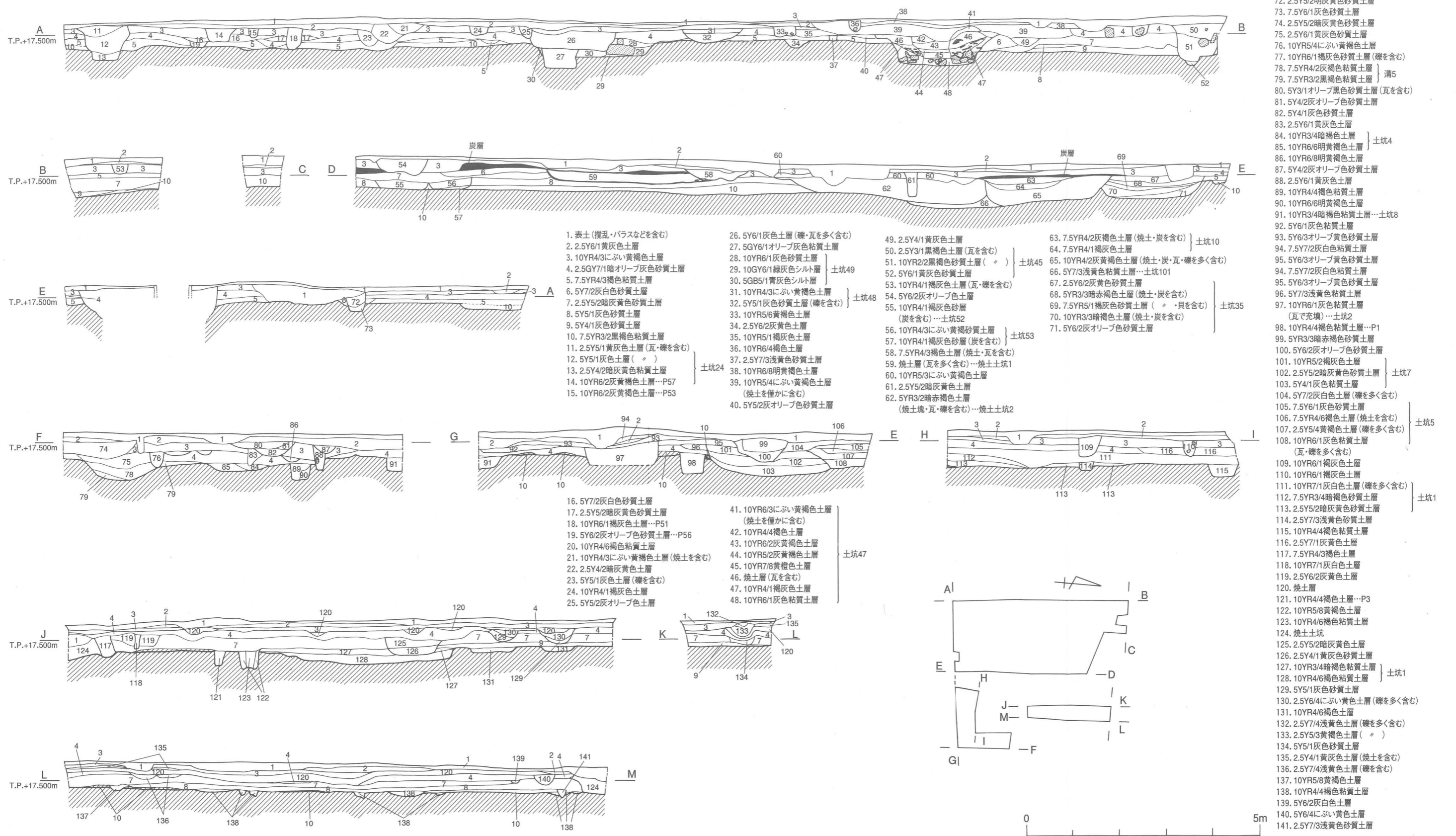
柱穴内出土遺物

P120からは第67図1の瓦器椀が出土している。和泉型の瓦器椀で、内面に数条の連続圏線状ミガキと、見込みに4条ほどの平行線状ミガキを施す。低く、形骸化した高台を有する。外面には指頭圧痕が良く残っている(尾上編年IV-1期)^{註2)}。13世紀前半頃の所産である。

土坑50 (第67図、図版29)

調査区西側に位置し、土坑51と重複している不整形な土坑である。長軸82cm、短軸77cm。深さ19cm。

出土遺物は2から9である。2は瓦器椀。和泉型で、内面のミガキの残りが悪いが、見込みに平行線状ミガキを施している。高台の貼り付け痕が僅かに残っている(尾上編年IV-2期)。3は摂津型の



第64図 土層図 (1/80)



第65図 第3遺構面平面図 (1/100)

瓦質羽釜。短く立ち上がる口縁部に、短い鑿が廻る。内面は丁寧にハケメ調整をする。4は瓦質三足羽釜で、球体の体部から口縁部が内湾して立ち上がる。外面は丁寧に指オサエを施している。

5・6は瓦質三足羽釜の脚部。7は龍泉窯系の青磁椀。外面は鎬蓮弁文で、見込みに印刻花文を施す。13世紀中頃の所産であろう。

土坑51（第67図、図版29）

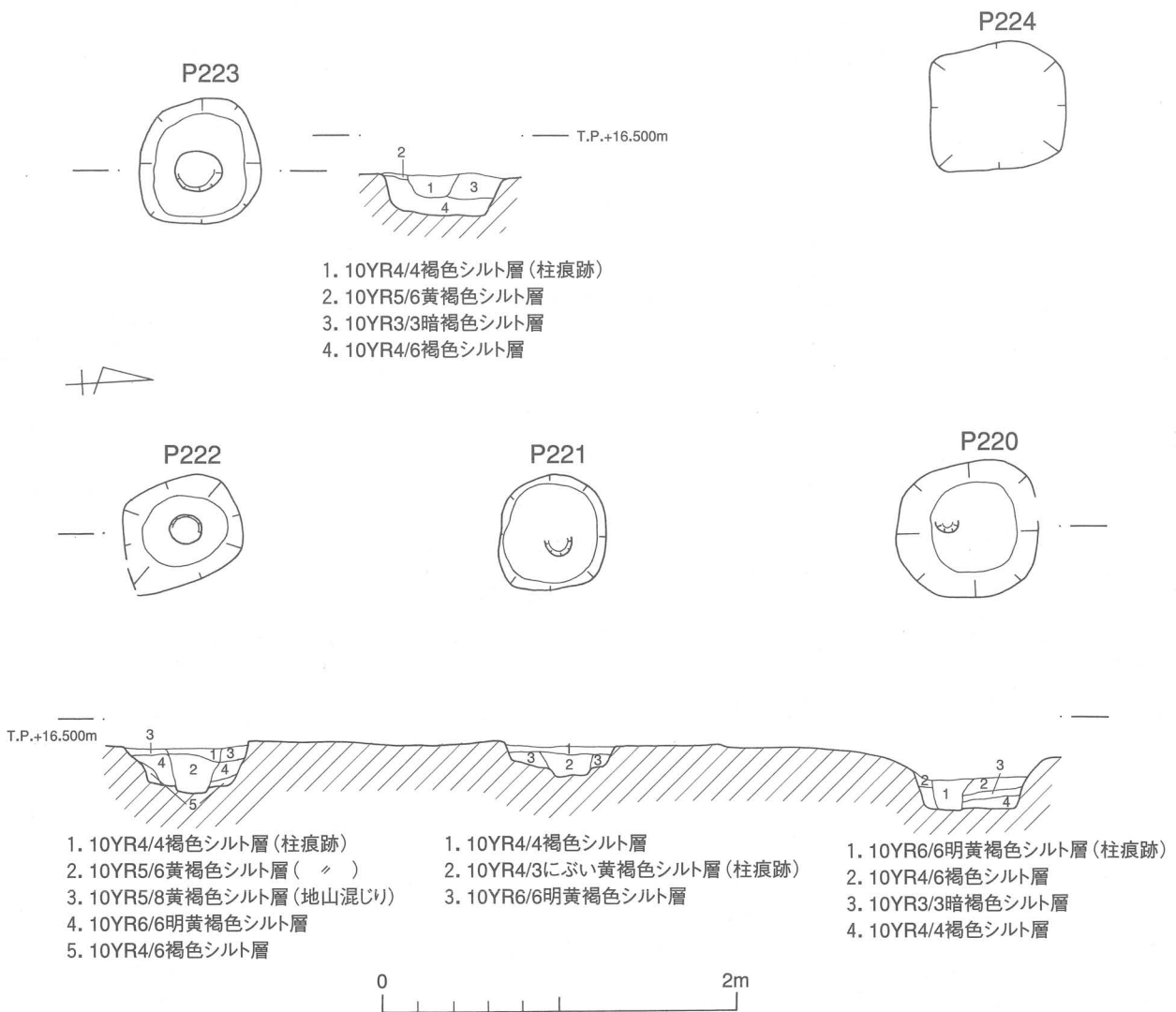
土坑50の東側に接する長方形土坑。主軸方向は南北で、長軸140cm、短軸44～64cm、深さ17cm。

出土遺物は8・9である。8は瓦質三足羽釜。9は瓦質羽釜。撰津型で、鑿直上の口縁に沈線が巡る。13～14世紀頃のものである。

第1トレンチ土坑1（第68図、図版22・29）

第1トレンチのほぼ中央に位置する土坑で、全体の約1/2が検出された。長軸の長さは412cm、短軸は検出された部分で154cm、深さは32cm。平面形は不明。

出土遺物は10から17である。10・11は手捏ねの土師皿。平底気味の底部に外反して開く口縁部が続く。12・13は瓦器椀。いずれも和泉型で、内面に4～5条の連続圏線状のミガキを施している。13は粘土紐を貼り付けただけの、低い小さな高台を持つ。外面には指頭圧痕が良く残っている（尾上編年



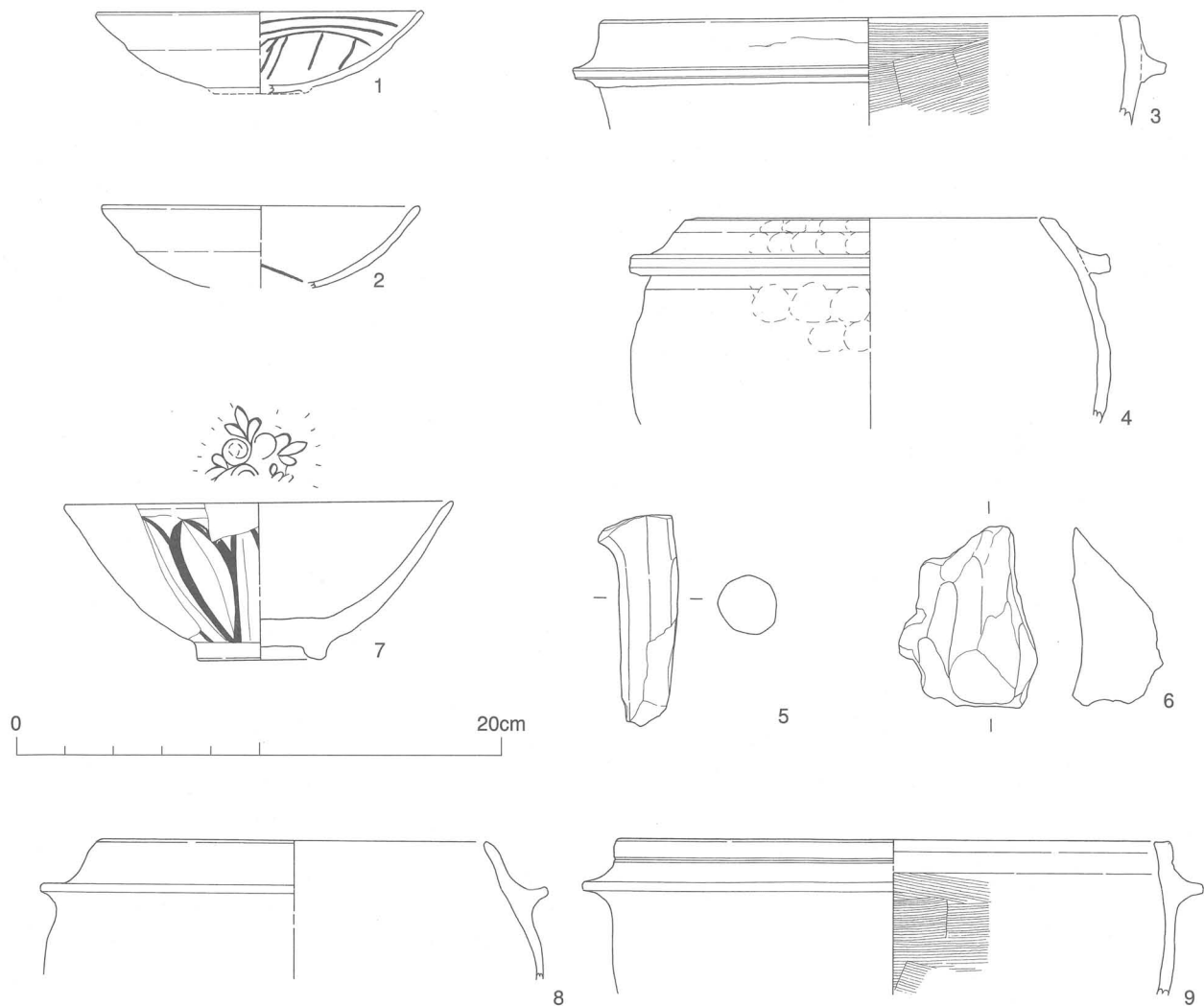
第66図 掘立柱建物跡平面・断面図（1/40）

IV-1期)。13世紀前半～中頃のものである。14は瓦質の大型羽釜である。大きく内傾する口縁部には凹線状の沈線が廻る。15は東播系須恵器の片口鉢で、口縁部が断面三角形に拡張されている。12世紀末～13世紀初頭。16も東播系須恵器の甕。17は滑石製の石鍋。短く立ち上がる口縁に、台形状の鍔が廻る。内面は丁寧にヘラミガキされ、外面は縦方向に細かな面取り状のケズリ調整をしている。外面に煤が付着している。

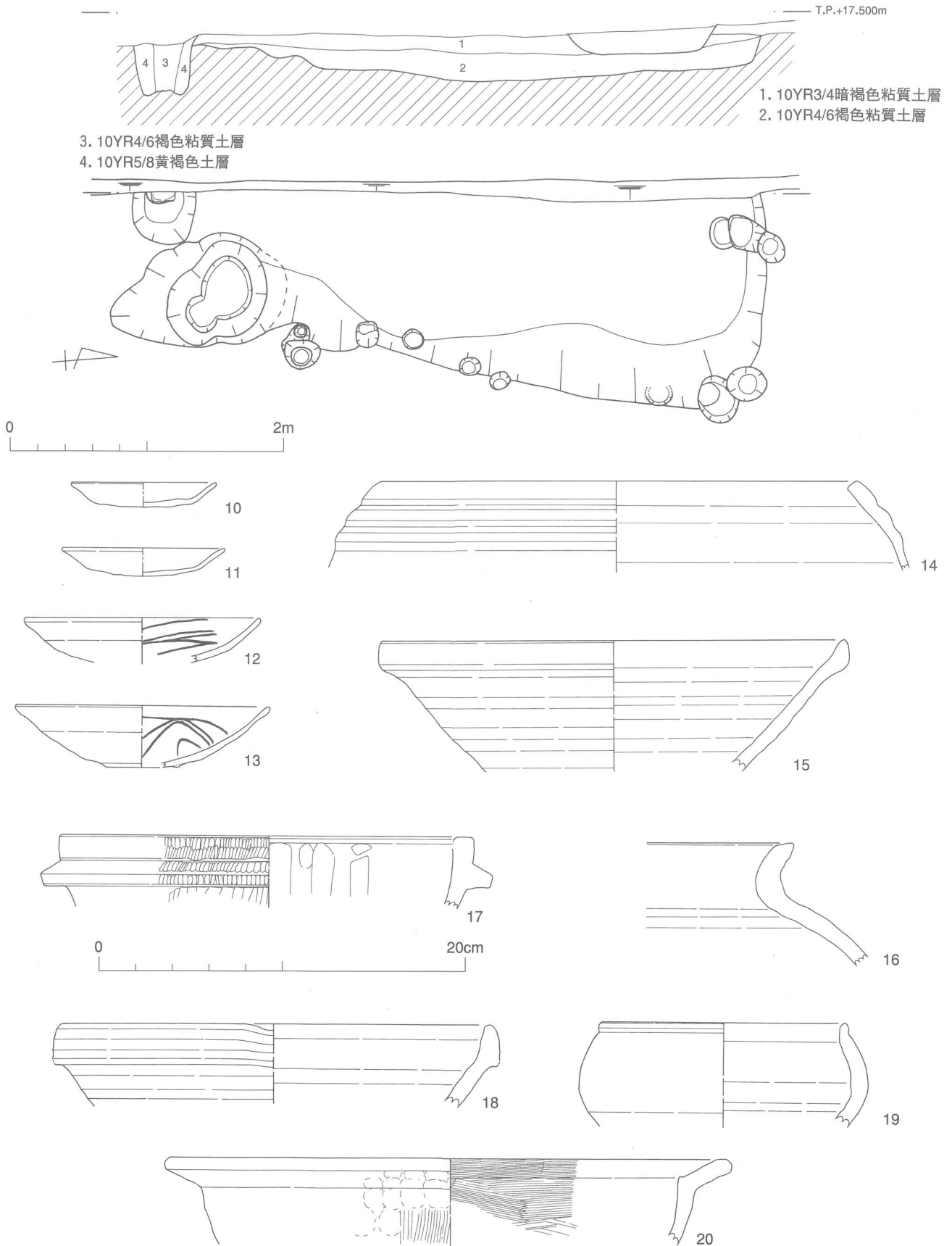
第2トレンチ溝5 (第68図、図版22・29)

第2トレンチの北側で検出された南北に走る溝状遺構。幅80～89cm。深さ5～20cmをはかる。北側斜面の立ち上がりは急であるが、南側の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物は18から20である。18は東播系須恵器の片口鉢である。口縁端部が上方に拡張されて、内傾する幅広の口縁帯となっている。14世紀初頭頃のものである。19は備前焼の鉢。半球形の体部に小さく立ち上がる口縁部がつく。外面には自然釉が掛かっている。20は土師質の埴。半球形の体部から「く」の字状に屈曲して口縁部が延びる。内面は細かなヨコハケを施し、外面は指オサエとタテハケ調整する。



第67図 土坑50・51、P120出土遺物 (1/3)



第68図 第1トレンチ土坑1平面・断面図（1/40）、土坑1、第2トレンチ溝5出土遺物（1/3）

第2遺構面（第70図、図版23）

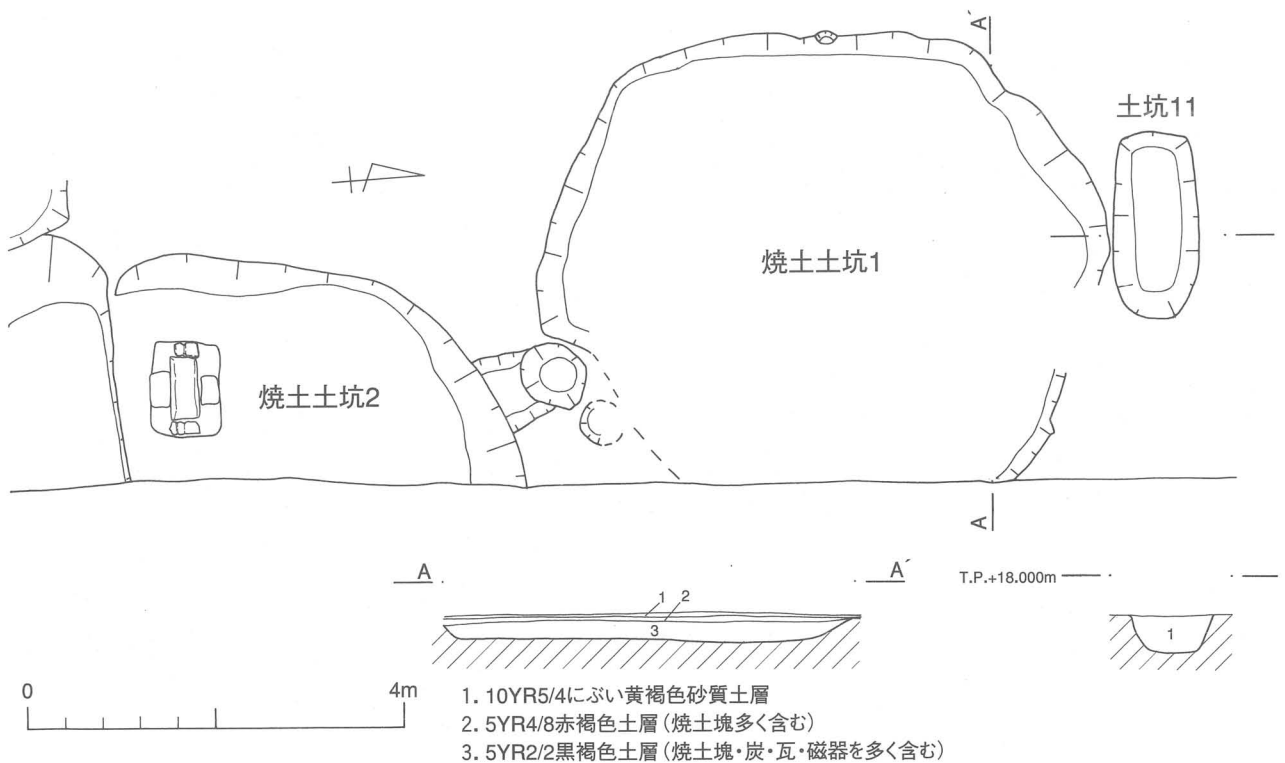
焼土層の広がり北東と南西の2か所に認められ、その間に火災残土を廃棄したとみられる火災処理土坑が13基検出された。おそらく万徳寺が17世紀末から18世紀初頭にかけて3度焼失していることから、その時期の整地層であろう。また焼土層下からも遺構が検出されたことから、火災以前の万徳寺にかかわる遺構とみられる。万徳寺が当地に建立されたのは17世紀前半（寛永4年、1627年）とされることから、この時期の遺構とみてよいだろう。以上のことから、第2遺構面の時期は17世紀から18世紀初頭と考えられる。検出された遺構は火災処理土坑、石積み土坑（土坑47）、柱穴、溝状遺構、瓦組暗渠（丸瓦を組み合わせた暗渠排水溝）などがある。

焼土土坑1・焼土土坑2（第69図、図版29・30・31）

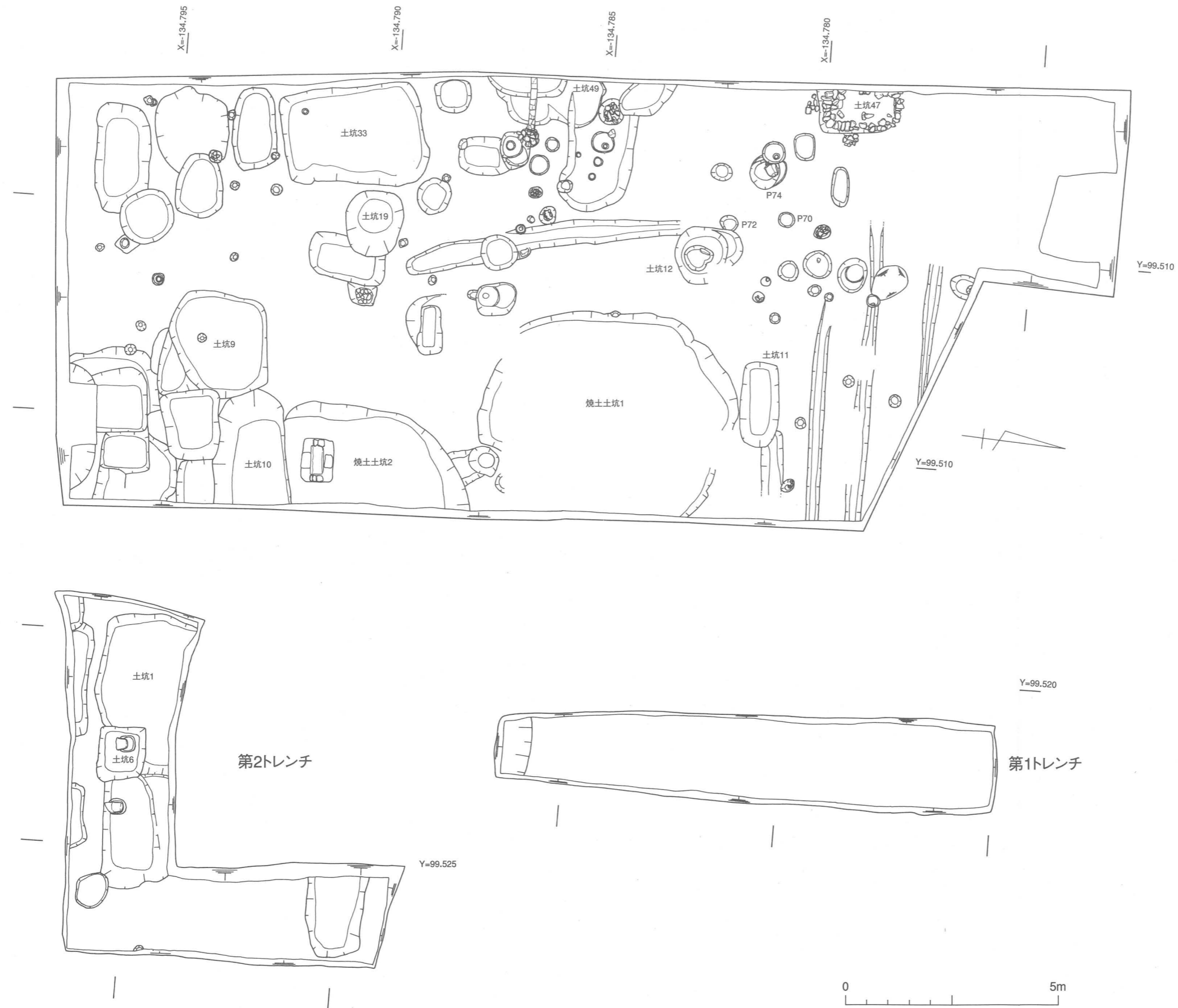
第2遺構面でもっとも大型の火災処理土坑である。焼土土坑1は円形の土坑で、規模は長径310cm、深さ32cm。焼土土坑2は他の土坑と重複し、一部調査区外に広がることから規模は明らかでないが、ほぼ焼土土坑1と同規模のものであろう。いずれも坑内には焼土とともに、火災によって焼けた瓦片、陶磁器片、壁土などが大量に堆積していた。

焼土土坑1の出土遺物は第71図21から第73図57である。このうち21～46・51～53・56は肥前磁器。47～50・54・55は陶器。57は土師質土器である。

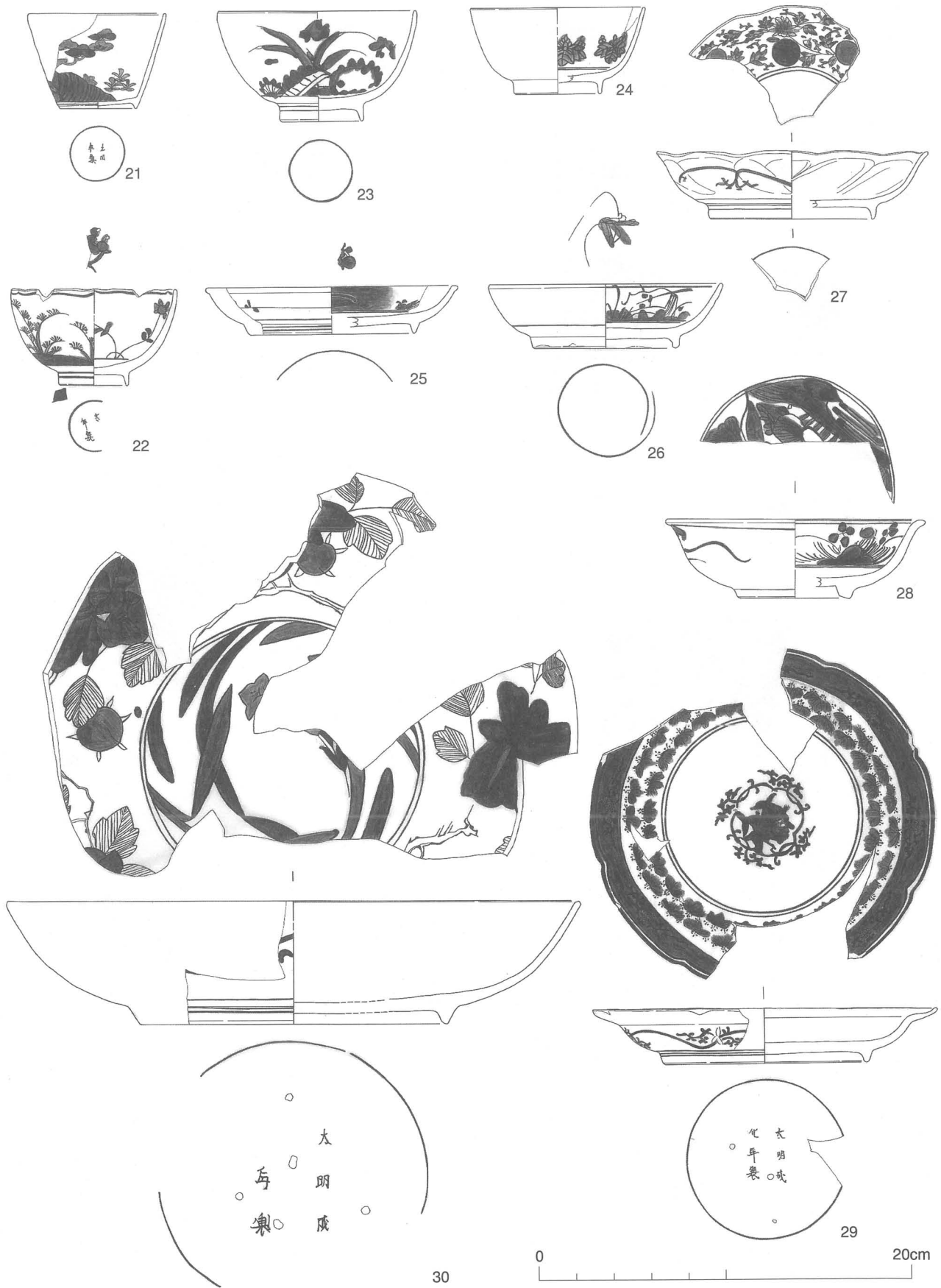
21は染付蕎麦猪口。22～24は染付碗。24はコンニャク印判の桐文を施す。25～29、31は染付皿。27は型打ち成形で、内面丸文と牡丹唐草文を配する。30は染付の大皿。「大明成□年製」銘にハリ支え痕がある。32は型打ち成形の染付皿。33・34は染付蓋物の蓋。35は染付蓋物。36は型打ち成形の染付碗。37は青磁鉢でへら彫り文様を施す。38は青磁染付鉢。39は青磁色絵皿。へら彫り草花文の上に色絵付けを施す。高台畳付けは釉剥ぎ後、鉄銹を施釉。40～43は白磁で、何れも型打ち成形。40は陽刻文のある猪口。41は口縁輪花の碗。42は口縁輪花の鉢。43は陽刻文のある鉢。44は色絵碗。45は色絵



第69図 焼土土坑1・2、土坑11平面・断面図（1/80）



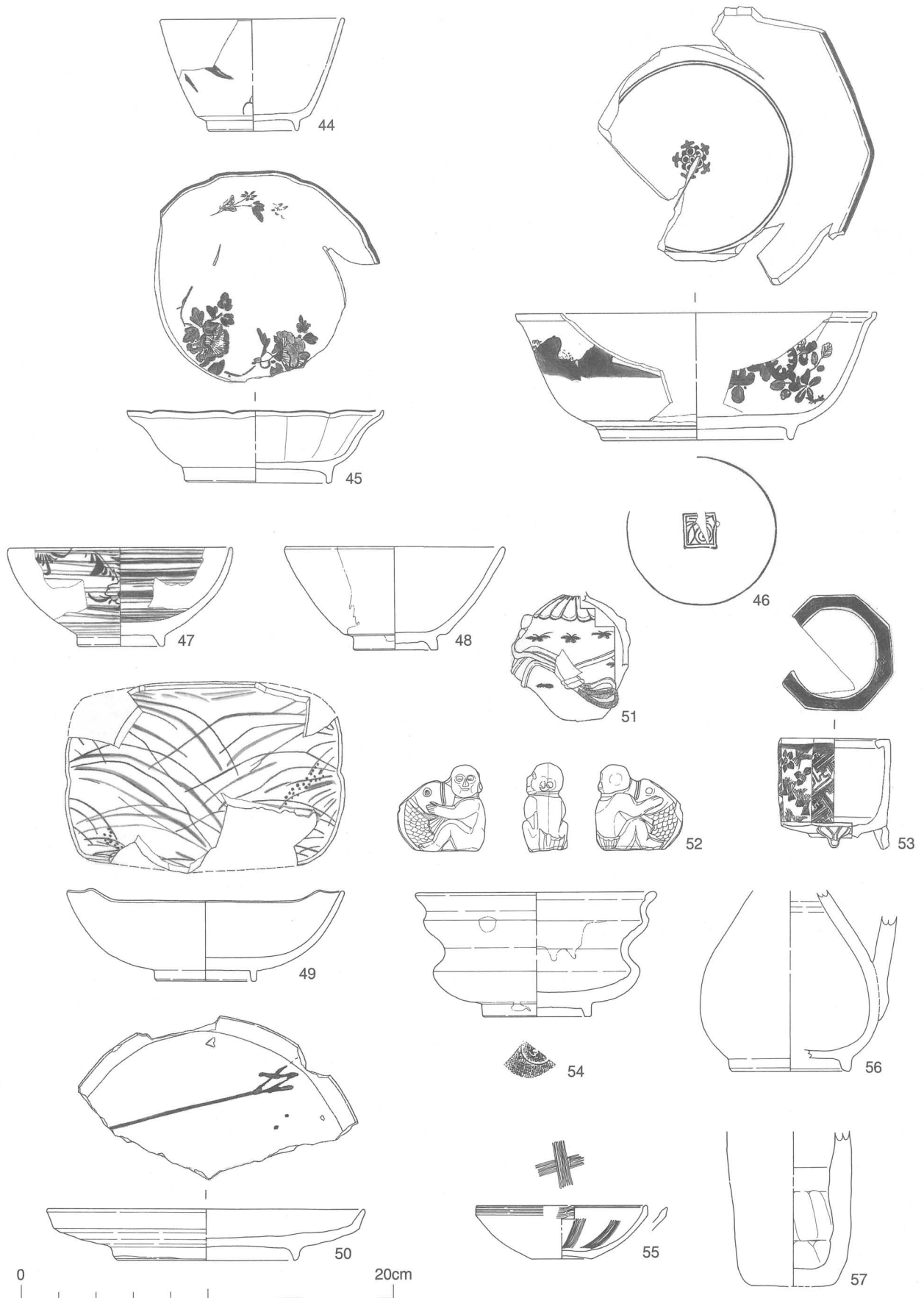
第70図 第2遺構面平面図 (1/100)



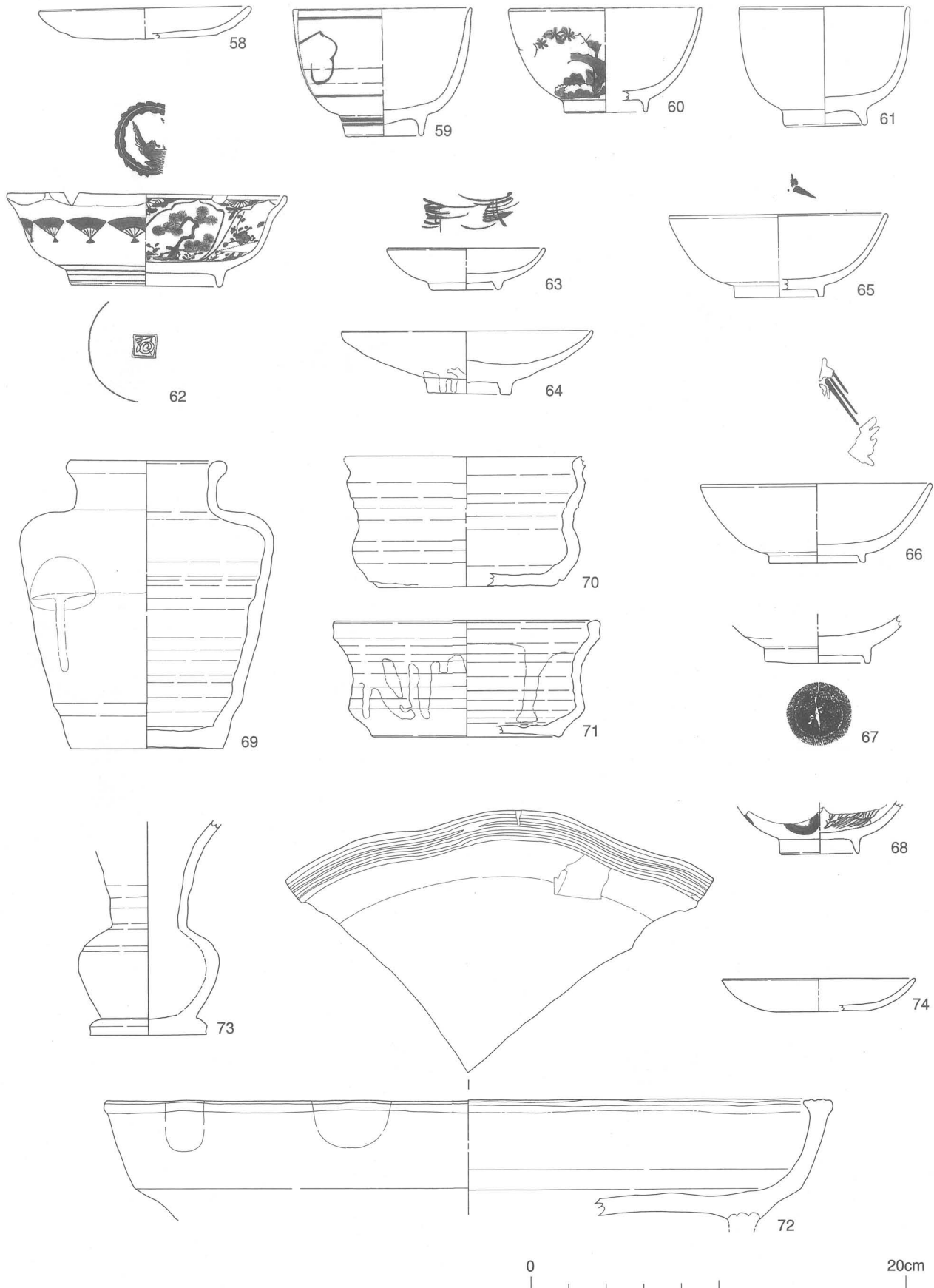
第71図 焼土土坑1出土遺物(1)(1/3)



第72図 焼土土坑1出土遺物(2)(1/3)



第73図 焼土土坑1出土遺物(3)(1/3)

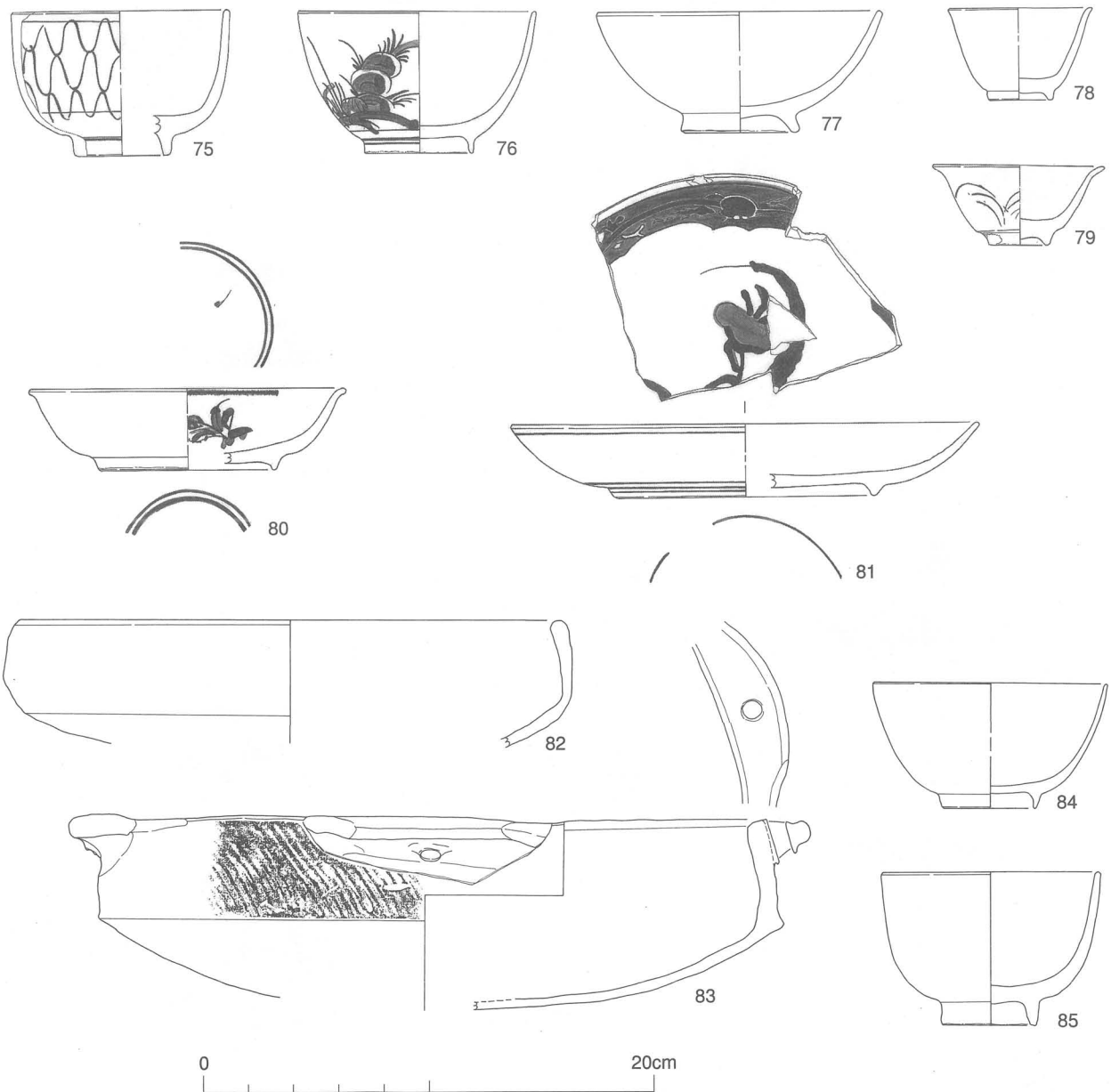


第74图 烧土土坑 2 出土遗物 (1/3)

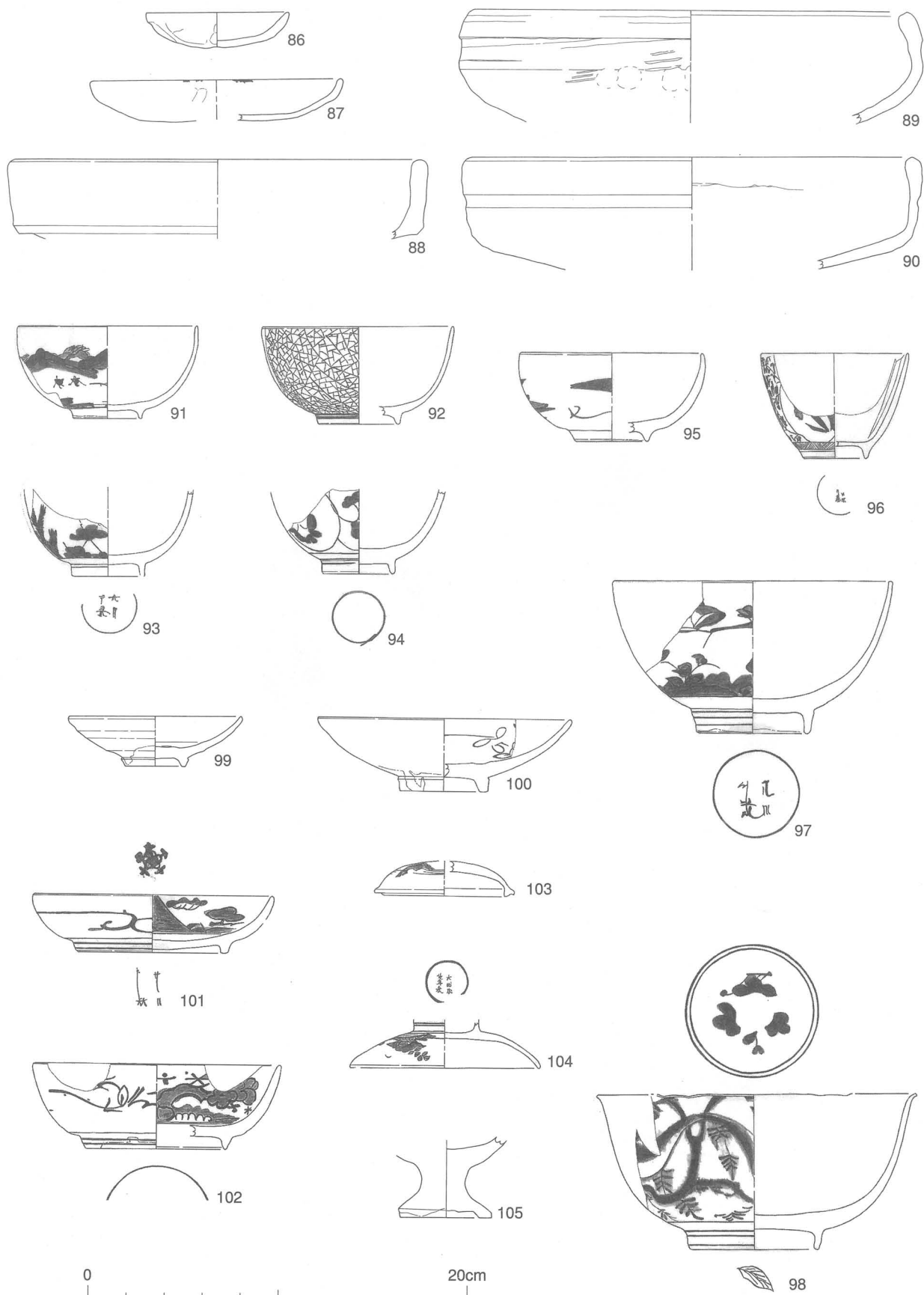
皿で、型打ち成形に口鏤を施す。46は色絵鉢で、型打ち成形に口鏤を施す。見込みに色絵五弁花を施し、高台内に二重方形枠の渦福がある。47は肥前の刷毛目碗で、呉須による草花文を施す。48は灰釉と飴釉を掛け分けた碗。49は京焼の皿で、呉須、鉄絵、白土による草花文を描く。50は伊賀・信楽の鉄絵皿。54は京焼の灰釉香炉。高台内に刻印あり。51は染付水滴。52は鯛を抱える子供形の白磁水滴。53は小型の染付香炉。55は片口小皿で内面にクシ目がある。餌摺り鉢。56は青磁の水注。57は輪積み成形の焼塩壺。

焼土土坑2の出土遺物は第74図58から74である。このうち58は土師器、59～60、62～64が肥前磁器で、61・65～74は陶器である。

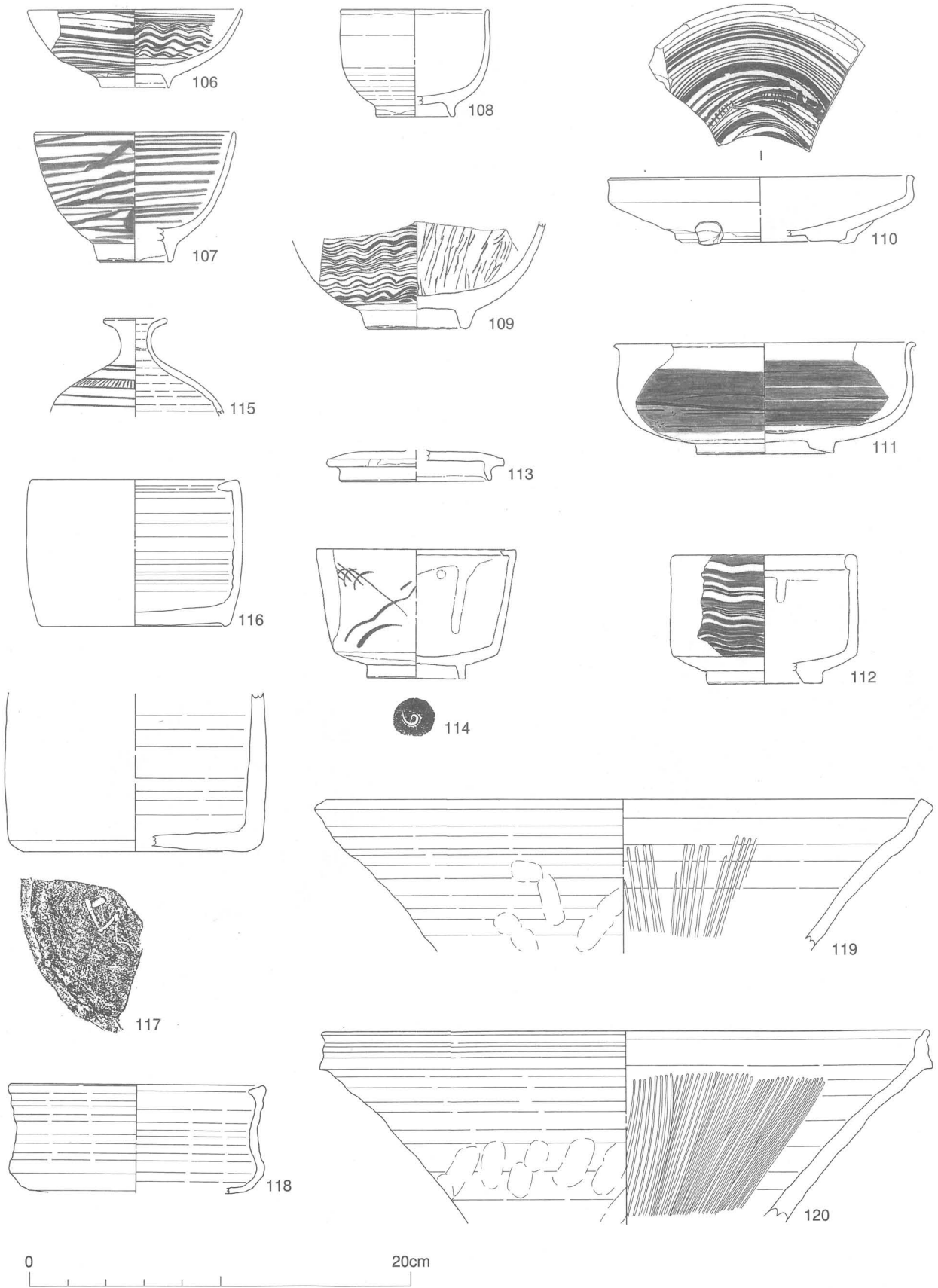
58は手捏ね成形の土師皿。59・60は染付碗。61は呉器手碗。62は八角形の染付皿。高台内に二重方形枠の渦福を持つ。63は白磁小皿。64は蛇の目釉剥ぎのある青磁皿。65・67は肥前の京焼風陶器皿。65は見込みに鉄絵があり、67は高台内に刻印を持つ。66は京焼の色絵皿。68は肥前の蛸手の碗。内面



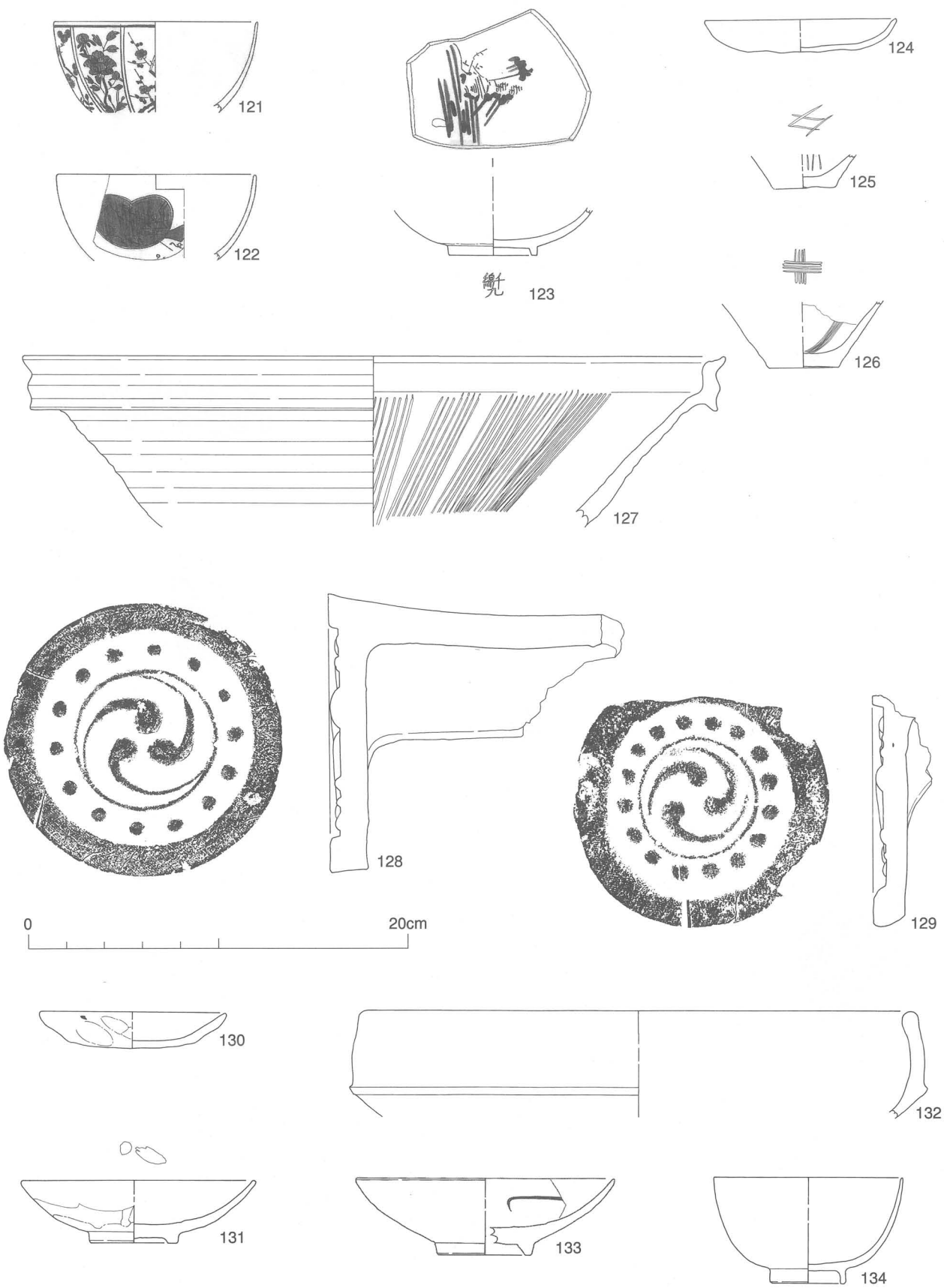
第75図 第2トレンチ土坑1・6出土遺物(1/3)



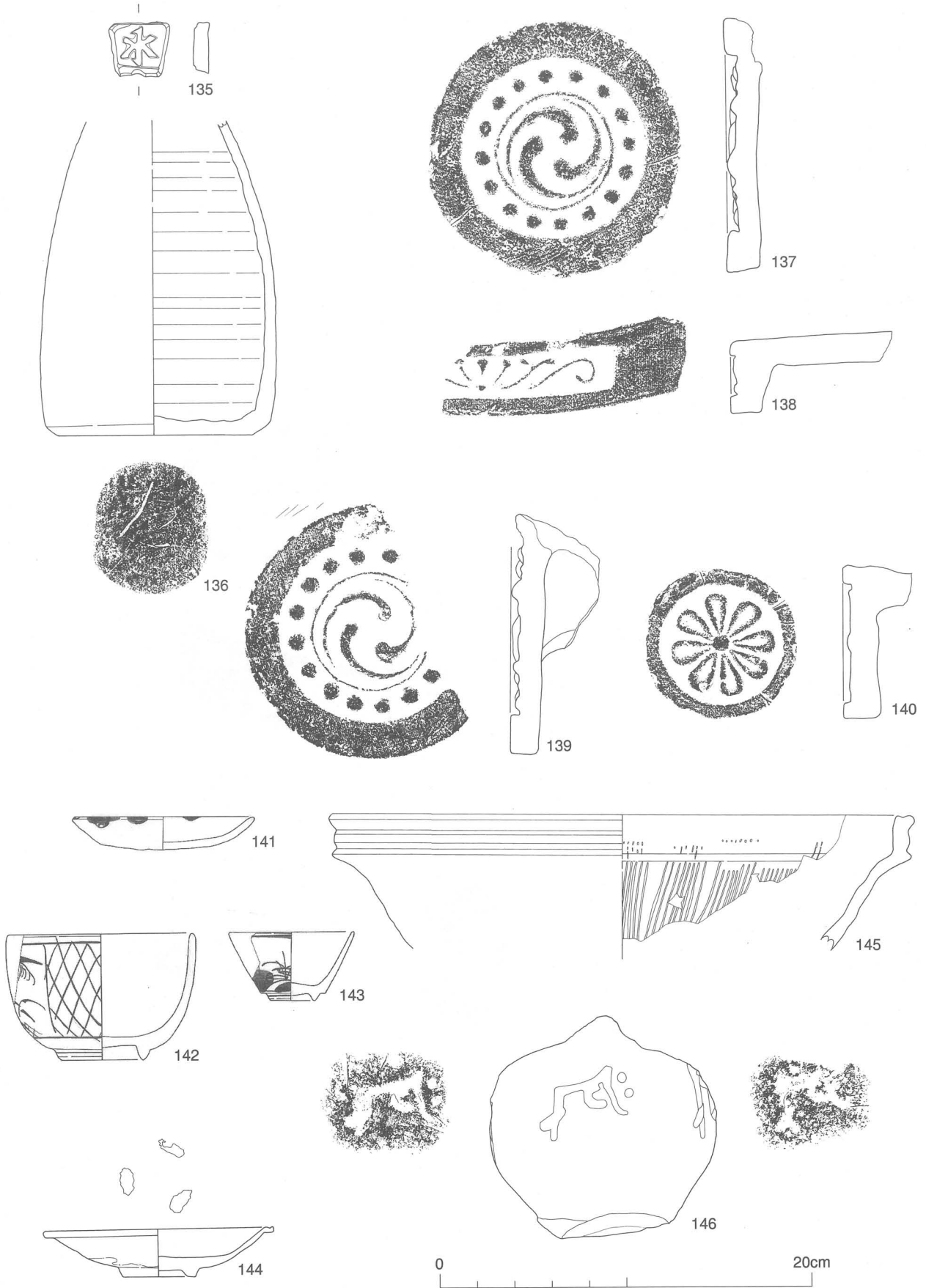
第76図 土坑9出土遺物(1)(1/3)



第77図 土坑9出土遺物(2)(1/3)



第78图 土坑10·11出土遗物 (1/3)



第79図 土坑12・19・33出土遺物（1/3）

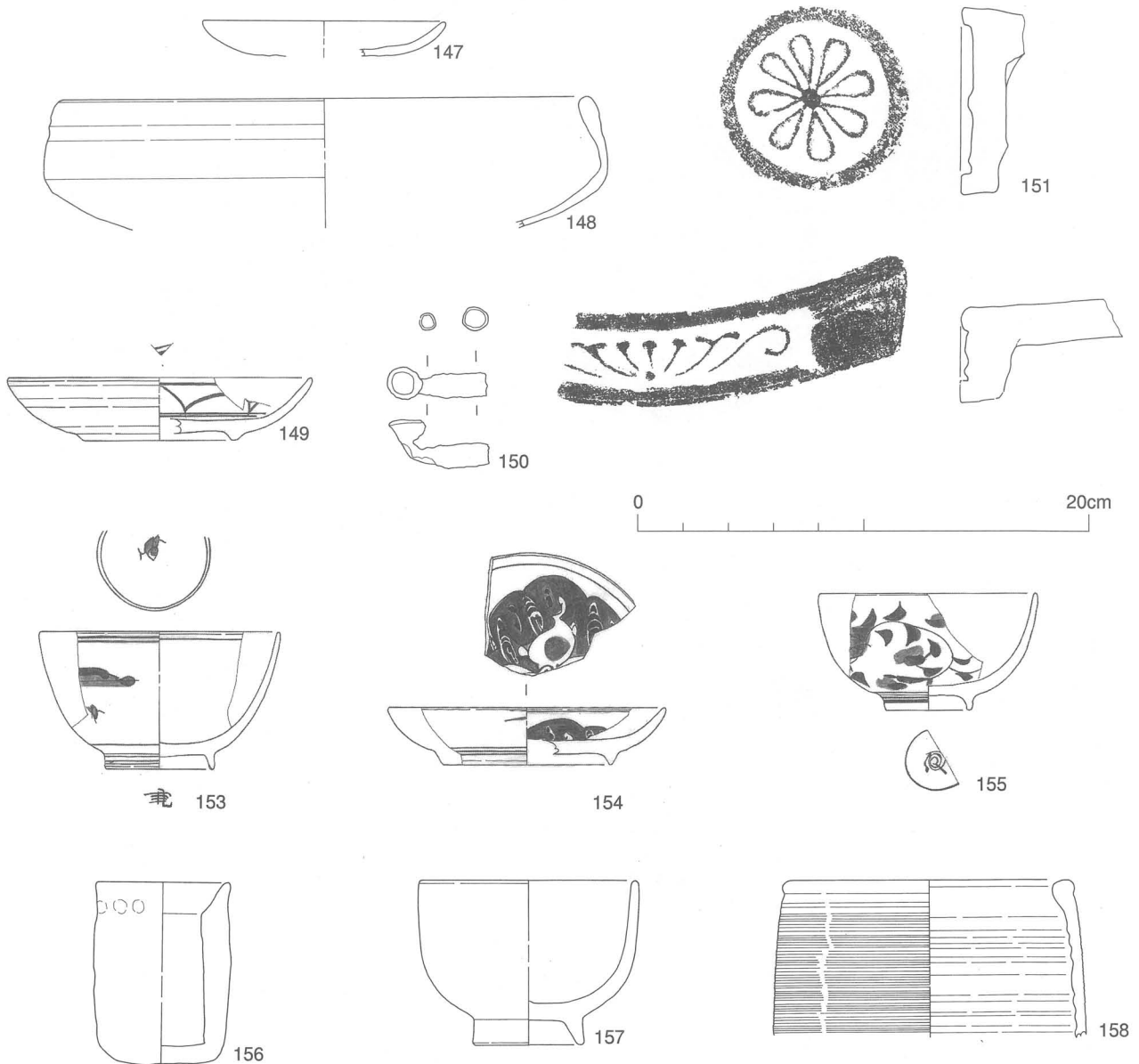
打刷毛目。69～72は丹波焼の製品である。69は灰釉甕、70・71は火入れで、71の口縁部には敲打痕がある。72は鉄釉の水盤。73は柿釉を施す軟質施釉陶器の花器。74は備前焼の皿で、塗り土を塗布する。

第2トレンチ土坑1（第75図、図版31）

第2トレンチ内で検出された大型の火災処理土坑。焼土土坑1・2と同様に焼土とともに火災痕のある陶磁器や瓦など多数出土した。方形の土坑とみられ、検出した範囲内での規模は長軸318cm、短軸118cm、深さ28cmである。

出土遺物は第75図75から83である。このうち肥前磁器は75・76・78～81、陶器は77、土師質土器は82・83である。

75は網目文の染付碗。76は草花文の染付碗。77は灰釉陶器碗。78は白磁小杯。79は染付小杯。80は青磁染付の皿で、内面に草花文を描く。81は染付皿。墨弾きの唐草文の文様あり。82・83は焙烙で、83は外面に1孔を有する把手が2か所につく。



第80図 土坑47・49、P70・72出土遺物（1/3）

第2トレンチ土坑6（第75図、図版31）

前述の第2トレンチ土坑1と切り合い関係のある火災処理土坑である。小型の方形土坑で、長軸62cm、短軸55cm、深さ25cm。

出土遺物は第75図84・85である。84は白磁碗、85は青磁碗。

土坑9（第76・77図、図版31）

調査区南側に位置する火災処理土坑群のうちのひとつで、規模は長軸125cm、短軸114cm、深さ40cmをはかる不整形の土坑である。土坑からは多くの陶磁器が出土した。

出土遺物は86から120である。このうち土師質土器が86～90、肥前磁器は91～94、96～105・115・116、陶器は95・106～114・117～120である。

86・87は土師皿。88～90は焙烙。このうち89は外面にタタキ調整がある。91～94は染付碗。94には「大明年製」くずれの銘がある。96は染付蕎麦猪口。97・98は染付大碗。97には「大明年製」くずれの銘がある。98は高台内に葉文が描かれる。99は蛇の目釉剥ぎのある白磁皿。100は蛇の目釉剥ぎのある染付皿。101・102は染付皿。103は染付合子蓋。104は染付碗蓋。105は青磁仏飯具で、胎土は陶質に近い。106～108は唐津焼碗で、106・107は刷毛目、108は鉄釉を施す。109は唐津焼刷毛目鉢。110は唐津焼刷毛目皿、111は刷毛目大鉢で、両者とも蛇の目釉剥ぎをしている。112は唐津焼刷毛目の香炉。113は肥前灰釉の蓋。114は肥前京焼風陶器の香炉。高台内に渦巻きの刻みあり。115は色絵の油壺。116は青磁香炉。高台には鉄錆塗布。117は筒形鉢。備前焼か。118は丹波焼火入れ。119・120は丹波焼播鉢。外面に指頭圧痕がみられる。

土坑10（第78図、図版24・32）

調査区の南側に位置する火災処理土坑群のひとつで、焼土土坑2や土坑9と接する。主軸が東西を向く長方形土坑で、検出した範囲での規模は長軸137cm、短軸85cm、深さ50cmである。火災の痕跡がある陶磁器、瓦などが出土した。

出土遺物は121から129である。このうち肥前磁器は121・122、陶器は123・125～127、土師質土器は124、瓦は128・129である。

121は染付碗。122は色絵碗で、染付のほか金彩、色絵を施す。123は肥前京焼風陶器の皿で、見込みに呉須で山水文を描き、高台内に「綿・千・九」の銘がある。124は土師皿。125・126は柿釉を施す軟質施釉陶器の小鉢。127は丹波焼播鉢。128・129は三巴文軒丸瓦。

土坑11（第69・78図、図版24）

調査区の北側、焼土土坑1の北に隣接する長方形土坑で、主軸が東西を向く。規模は長軸99cm、短軸45cm、深さ67cmをはかる。

出土遺物は130から134である。肥前磁器は133・134、陶器は131、土師質土器は130・132である。130は土師皿。132は焙烙。131は肥前内野山の銅緑釉を施す蛇の目釉剥ぎ皿。133は蛇の目釉剥ぎのある染付皿。134は白磁碗。

土坑19（第79図、図版24・32）

調査区のほぼ中央で検出した長円形の土坑。規模は長径87cm、短径68cm、深さ68cmをはかる。出土遺物は135から138である。135は土製面子。型押し成形で「水」の文字がある。136は備前焼徳利。底面に釘書きが認められる。137は三巴文軒丸瓦。138は均整唐草文軒平瓦。

土坑12（第79図）

調査区の北半、焼土土坑1の西に位置する円形の土坑である。規模は長径68cm、短径60cm、深さ48cmである。底面が二段掘りであるため、柱穴の可能性もある。

出土遺物は139・140である。139は三巴文軒丸瓦。140は菊花文棟込瓦である。

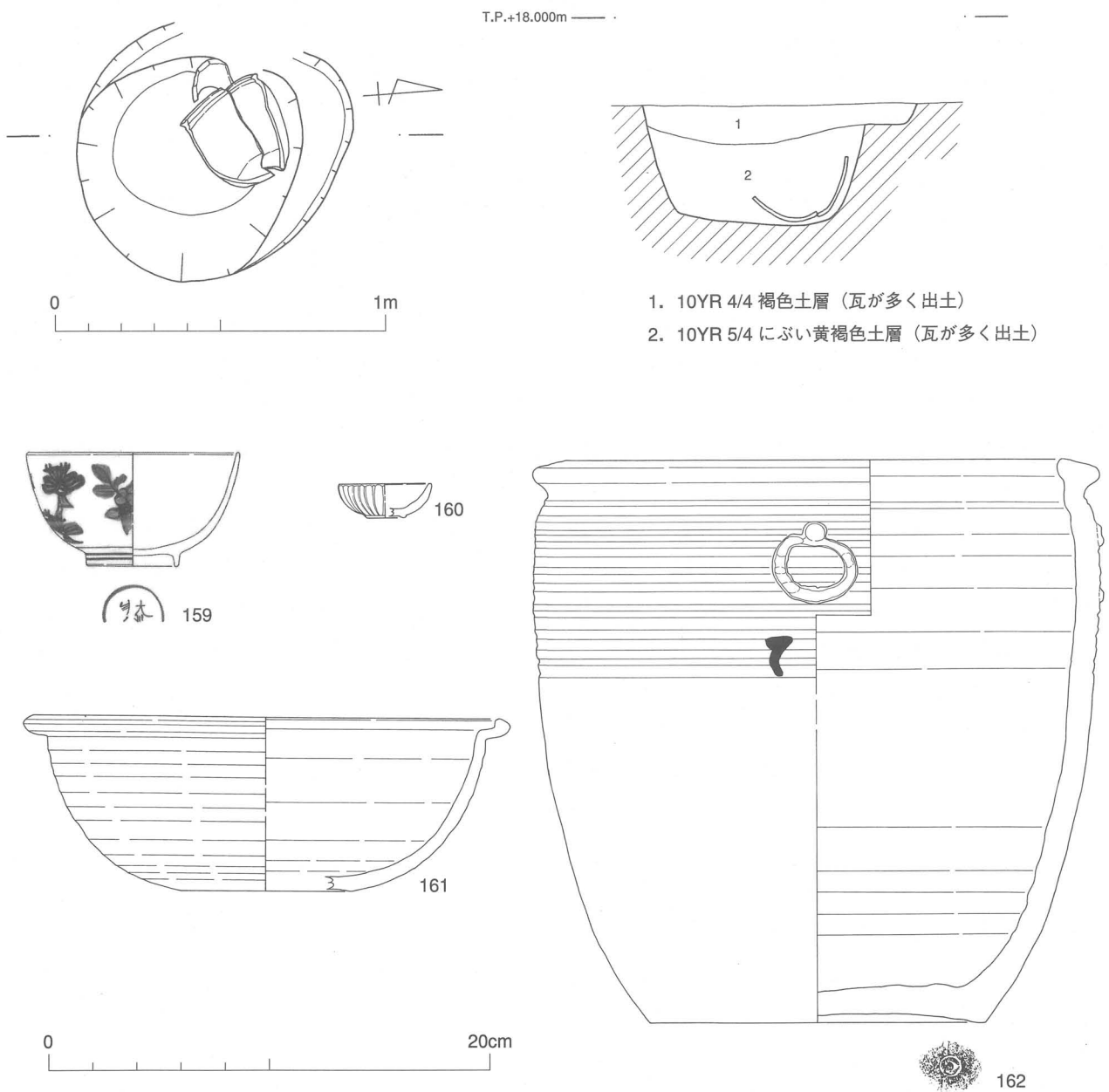
土坑33（第79図、図版24・32）

調査区西端に位置する長方形土坑で、主軸は南北を向く。規模は長軸167cm、短軸100～120cm、深さ46cmをはかる。

出土遺物は141から146である。141は土師皿。灯明皿とみられ、煤が口縁部に付着する。142は肥前白磁染付碗、143は染付小杯。144は唐津焼の灰釉溝縁皿。砂目痕が残る。145は丹波焼播鉢。146は石製品で、五輪塔の空輪部。四面に五大種字を彫り込んでいる。

土坑47（第80図、図版25）

調査区北西端で検出した石積み土坑である。長軸約110cm、短軸50cm（検出部分のみ）の方形土坑の中に、10～20cmの石材を四方の側壁に小口積みに積み上げていた。石積みの高さは60cm。



第81図 P74平面・断面図（1/20）、出土遺物（1/3）



第82図 第1遺構面平面図 (1/100)

出土遺物は147から152である。147は土師皿。148は焙烙。149は染付皿。150は銅製品の煙管雁首。151は菊花文棟込瓦。152は均整唐草文軒平瓦。

土坑49 (第80図)

調査区の西端に確認された不整形土坑で、約1/2を検出した。規模は長軸130cm、短軸52cm (検出部分のみ)、深さ35cmである。なお平面形から2基の土坑が重複している可能性もある。

出土遺物は153・154である。153は染付碗。154は染付皿で、兔文と墨弾きの雲文を持つ。

柱穴

第2遺構面における代表的な柱穴について取り上げ、その他の柱穴については出土遺物を説明する。

P74 (第81図、図版25)

調査区の北西に検出された大型の柱穴である。径80~85cm、深さ37cm。埋土には多くの瓦片が含まれており、底面には備前焼の甕(162)が出土した。

出土遺物は159から162である。159は肥前白磁染付碗。160は肥前白磁紅皿。161は軟質施釉陶器で鉄釉を施す塙。162は備前焼甕で、底部に窯印があり、体部には墨書が認められた。

P70・72

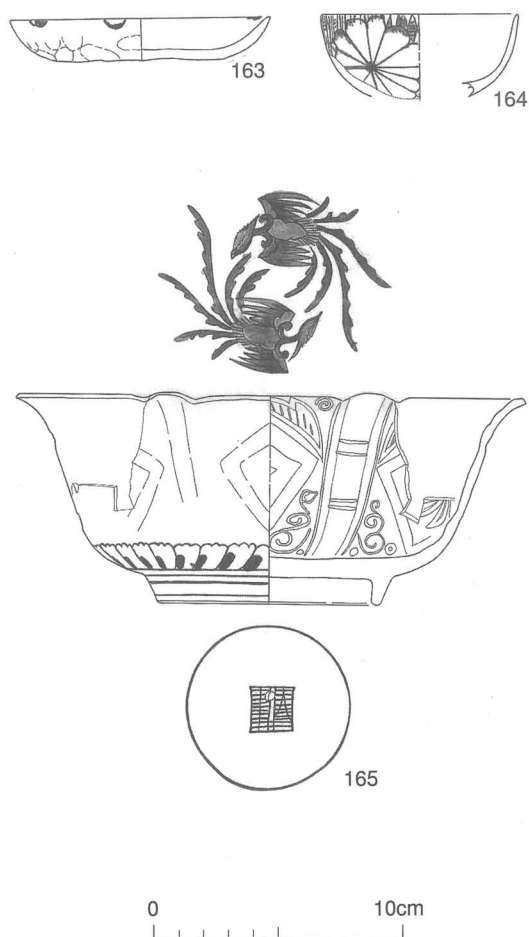
P72から出土した肥前白磁染付碗(155)は高台内に渦福がある。P70から156~158が出土した。156は焼塩壺。輪積み成形で内面に布目痕がある。157は肥前呉器手碗。158は丹波焼甕である。

第1遺構面 (第82図、図版26)

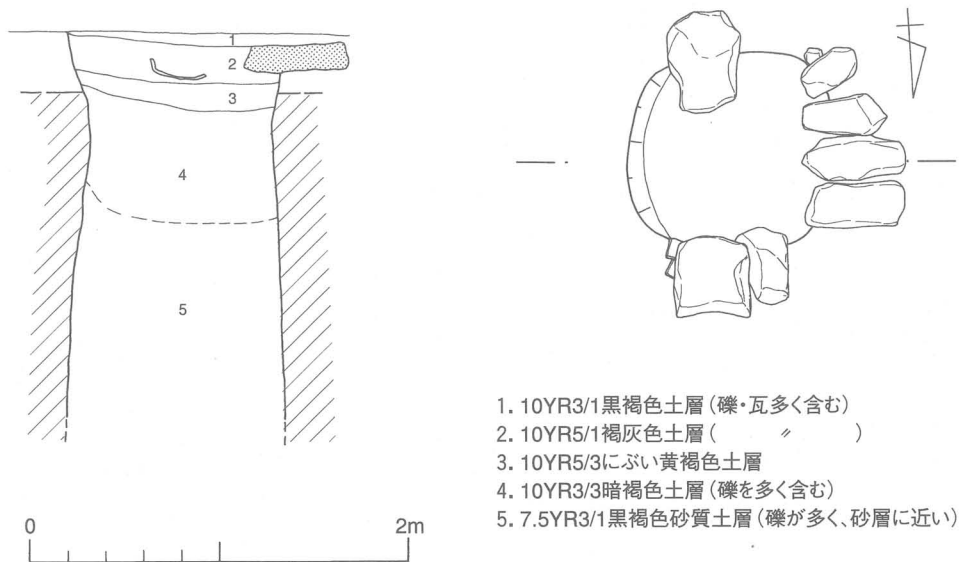
第2遺構面の焼土層上に形成された整地層で、これより上層では火災層が検出されていないことから、正徳元年(1711)に本堂が再建された整地面以降と考えてよいだろう。時期は18世紀から19世紀にかけてのものである。検出された遺構は、建物跡、礎石、土坑、埋桶、池跡、水琴窟、井戸、柱穴がある。調査区南半の建物跡は庫裏で、西側にある南北の石列は庫裏の縁石であろう。北側には本堂とみられる礎石跡が位置する。本堂と庫裏の間には井戸、池、水琴窟があることから、庭であったとみられる。

礎石・柱穴 (第82図、図版27・32)

建物跡の礎石はほとんど残っていないが、径30~50cmの柱穴を掘り、その中に根固めの栗石を入れ、その上部に礫石を敷き礎石を置いて基礎としている。柱穴の配置から調査区南半に南北方向4間、東西方向5間の建物が確認され、一部調査区外に延長する。柱間は平均で約1mである。位置と構造から庫裏とみられ、西端には石列があり、縁石であるとみられる。本堂の礎石柱穴は調査区の北東に位置するが、調査範囲が狭いため、検出した柱穴による建物の構造は明らかでない。本堂と庫裏の柱穴を比べると、本堂のそれは規模が大きく、栗石を厚く埋めている。一方庫裏は概して栗石の量は少ないことか



第83図 礎石建物跡出土遺物 (1/3)



第84図 井戸1平面・断面図(1/40)

ら、本堂が丁寧なつくりをしていることがうかがえる。

代表的な出土遺物は、P11からは第83図163の土師皿がある。煤が付着しており灯明皿とみられる。

164はP13出土の菊花文のある肥前白磁染付碗。165は礎石8出土の肥前白磁染付鉢。型打ち成形で口縁は輪花。見込みに鳳凰を描き、高台内に銘あり。

井戸1(第84図、図版27・32)

調査区の東側、庫裏とみられる建物跡に隣接して位置する。素掘りの井戸で、天端の石組の一部が残存していた。上面径は約110cm。内部は深さ205cmまで掘り下げたが、底面までには達していない。

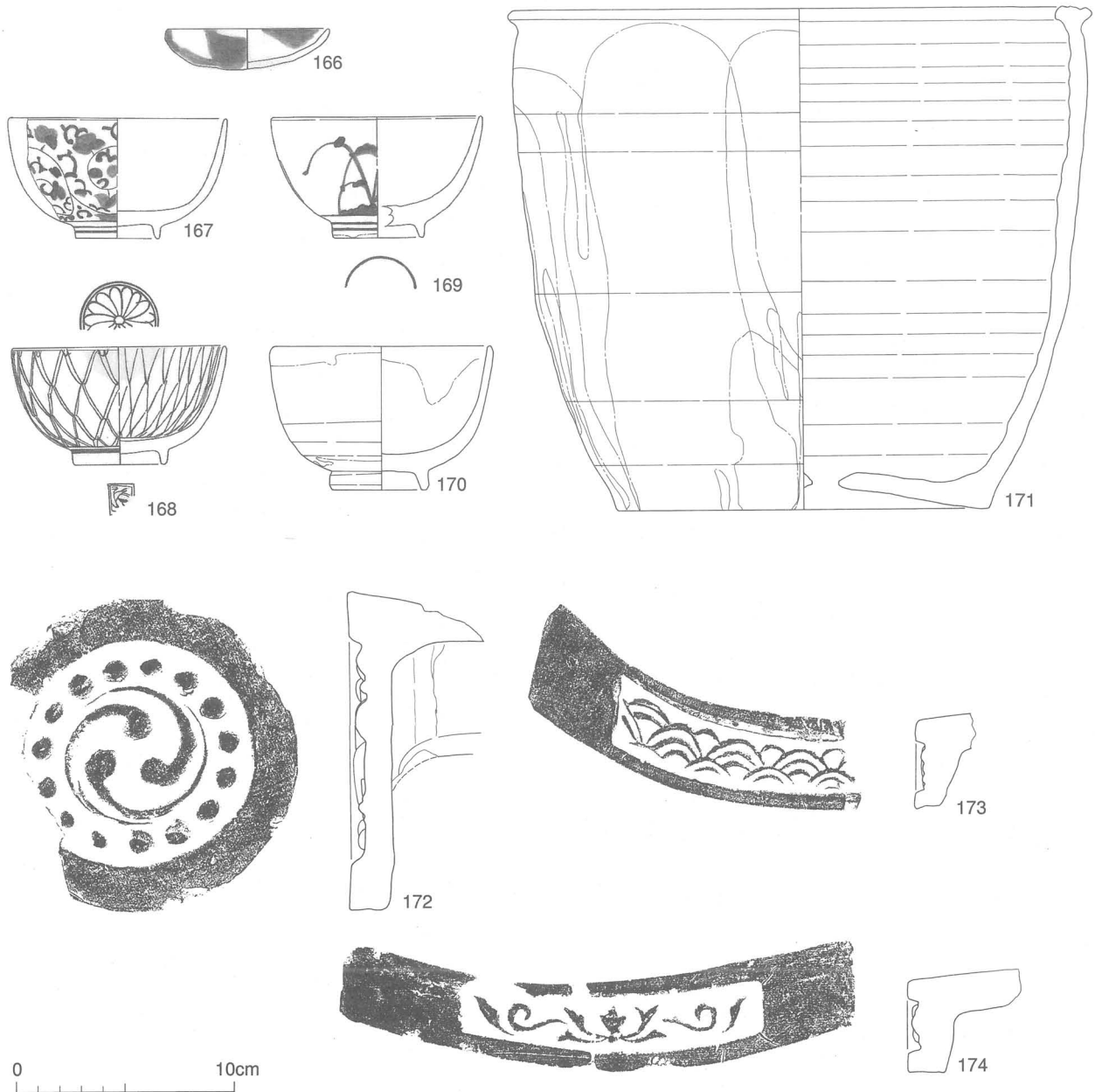
出土遺物は第85図166～174である。166は土師皿。口縁部に煤が付着しており灯明皿とみられる。167～169は肥前白磁染付碗。167は花唐草文、168は二重網目文で、見込みに菊花文を配する。高台内に二重方形杵渦福を持つ。170は唐津焼灰釉碗。

171は丹波焼甕で、外面に灰釉と鉄釉を流し掛ける。内面は灰釉を塗布し、白色付着物が認められる。底部に焼成後の穿孔を有する。172は左巻き三巴文軒丸瓦。巴は内区を半周する長い尾を持つ。173・174は軒平瓦。173の瓦当は青海波文で、脇区が大きく反り上がっている。174の瓦当は均整唐草文で、中心飾りは橘文である。

水琴窟1(第86図、図版28)

寺院本堂と庫裏の間の庭とみられる部分から検出され、池1と池2の間に位置する。ほぼ完全な形で検出され、水琴窟の構造がみてとれる良好な資料である。手水鉢等からの排水の受け場は砂漆喰でつくられ、長径115cm、短径145cm。その下部に径126～130cm、深さ約100cmの土坑を掘り、中央に丹波焼の甕を倒立して設置していた。甕底部には径2.5～2.8cmの水落ちの孔が穿ってある。土坑底面には20～30cmの礫を敷き詰めてあった。

出土遺物は175から178である。175は水琴窟の本体に使用された丹波焼の甕。外面には塗り土が塗布され、肩部4ヶ所に灰釉を流し掛けしている。内面は塗り土をハケ掛けする。口径、器高、胴部最大径が近似値を示す様なズングリとした器形である。甕底部の穿孔は焼成後に行われている。176～178はガラス製のおはじきである。透明な水色・淡緑色を呈している。



第85図 井戸1出土遺物（1/3）

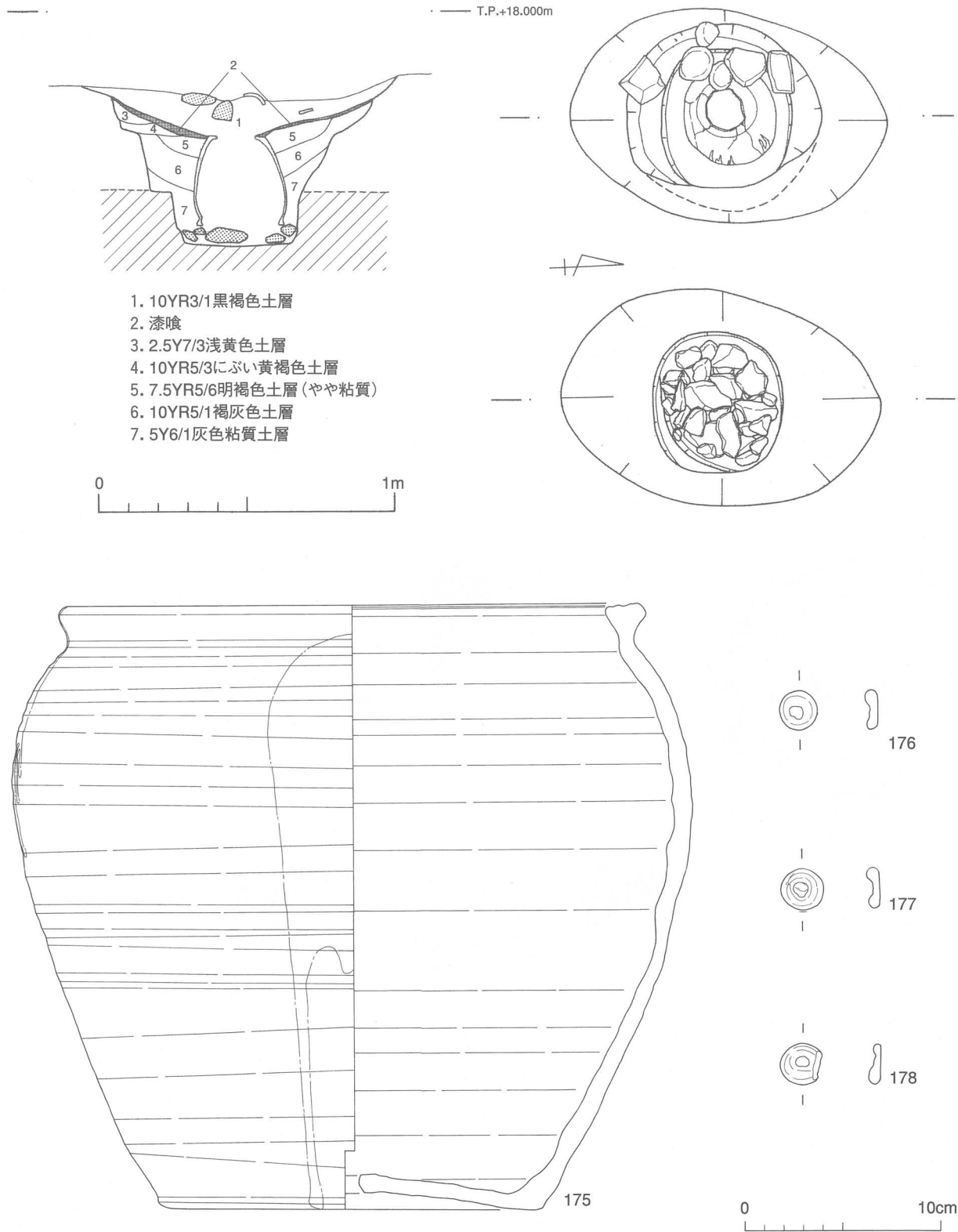
埋桶1（第88図）

調査区南東端に位置する埋桶である。径60cmの円形土坑の中に木製桶を埋置したもので、桶の残存状況は良くないものの径は約25cm程度とみられる。

出土遺物179は中心飾りが三巴文である均整唐草文を持つ軒平瓦である。

池1・池2（第87図、図版28）

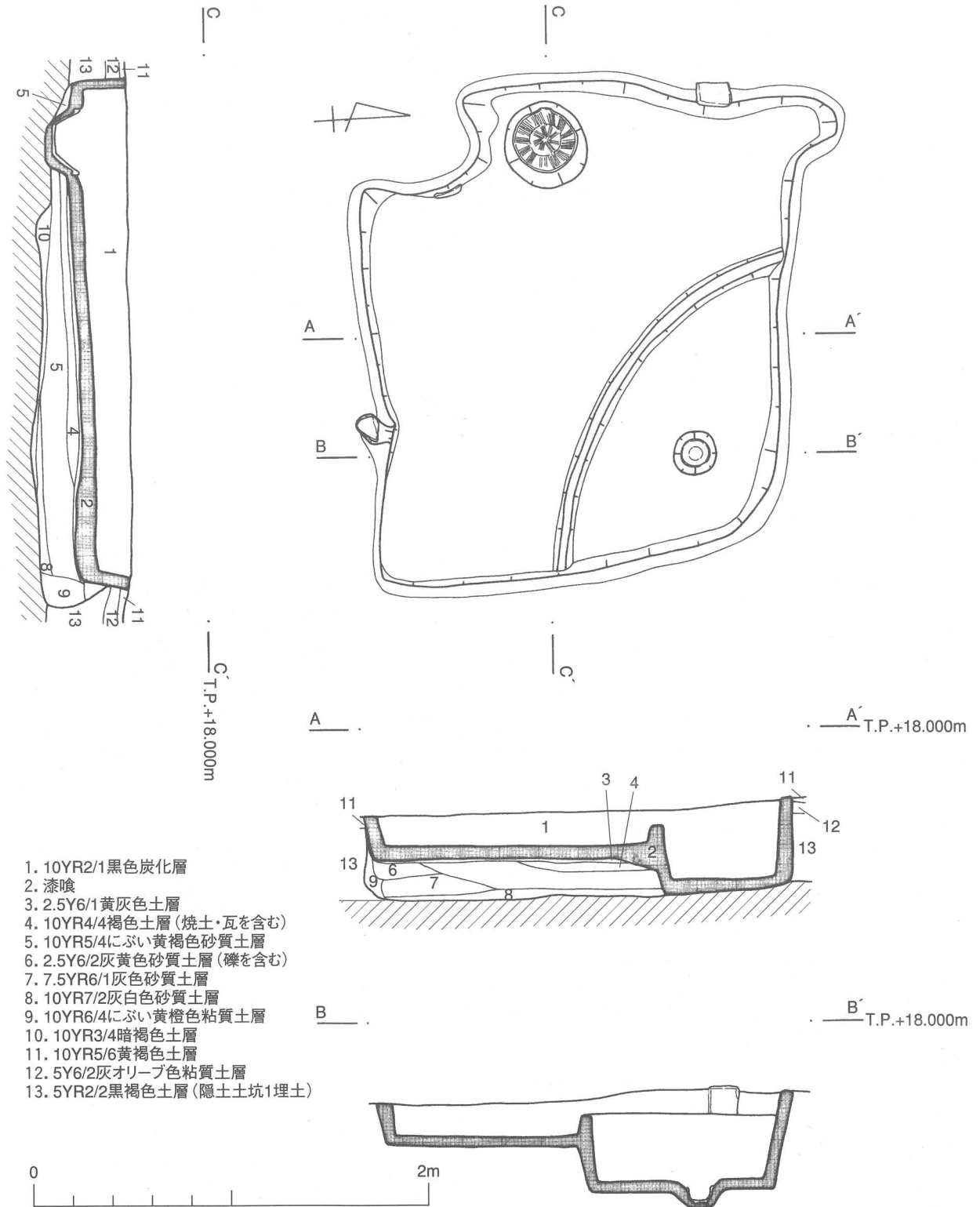
水琴窟同様庭とみられる位置から検出された。池1の遺構はほぼ完全な状態で検出された。壁面と床面は厚さ5～10cmの砂漆喰で構築されていた。平面形は不整な方形で長軸265cm、短軸254cm。北東側は弧状に巡る壁によって区画され、深さは約40cmをはかる。この区画以外の池の深さは約15cmである。区画された部分の中央底面には伊賀・信楽焼片口鉢（180）が埋められていた。同様に西端には明石焼播鉢（181）が埋められていた。池の西辺と南辺の上端には方形の石材があり、上部



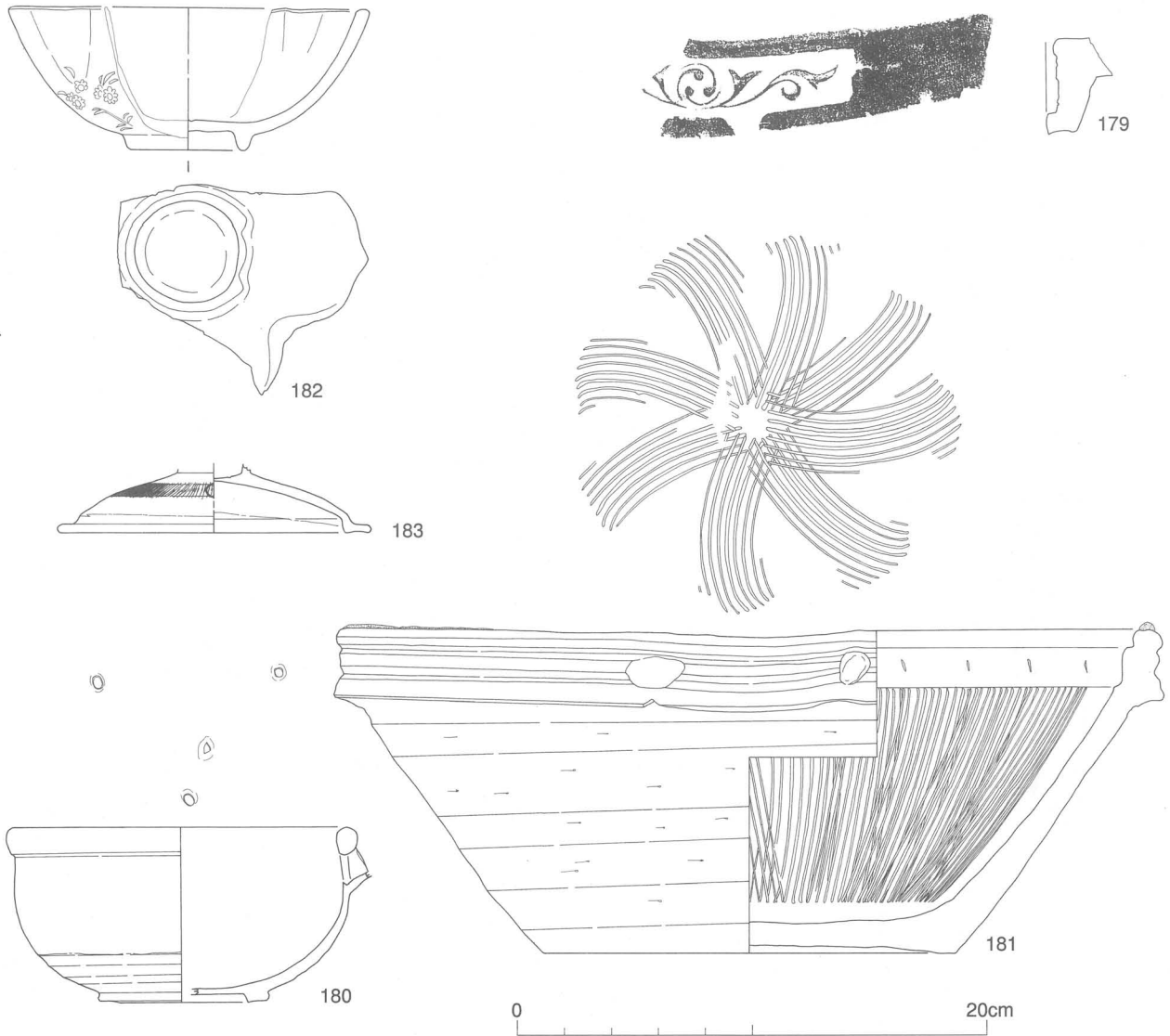
第86図 水琴窟1 平面・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/3)

施設に伴うものかもしれない。なお、池の内部は黒色炭化物で充填してあった。

なお、池遺構は他に池2がある。平面形は不整三角形で、底面と壁面は池1同様、砂を多く含む厚さ2cmの漆喰によって作られていた。長軸155cm、短軸133cm、深さ30cmをはかる。



第87図 池1平面・断面図 (1/30)



第88図 池1・2、埋桶1出土遺物（1/3）

池1の出土遺物は第88図180、181である。180は伊賀・信楽焼の鉄釉片口鉢。注ぎ口を打ち欠いて用いている。181は明石焼播鉢。体部外面はヘラケズリされ、10本一単位のクシ目を密に施している。口縁上端面に漆喰が付着している。

池2の出土遺物は182、183である。182は三田焼の青磁輪花鉢。型押し成形で、体部に菊花文を陽刻している。高台は花卉形を呈している。183は伊賀・信楽焼のイチチン掛けの文様がある塀蓋。外面にトビカンナを施す。19世紀前半頃の所産である。

4. まとめ

今回の調査の成果として第一に、火災による焼土層および火災処理層が検出され、多くの遺物が出土したことである。万徳寺は寺史や『有岡庄年代秘記』によれば貞享元年（1684）、元禄15年（1702）、宝永2年（1705）に火災により焼失している。特に元禄12年（1699）は「元禄の大火」とよばれるもので、寺院6か寺、酒屋16軒ほか多くの家屋が被災したとされる。今回の調査で検出した火災層がいずれの火災に対応するかは定かでないが、17世紀末から18世紀初めの短期間であることから、火災処

理土坑から出土した遺物もほぼその時期のものであるとみてよい。出土した陶磁器の年代観もおおむね齟齬をきたすものでないことから、当該期の陶磁器構成を考える上で良好な資料となろう。

次に第3遺構面では中世期の遺構を確認することが出来た。掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構の多くは東西方向に主軸を向けることから、集落内の規則性を示すものである。出土遺物では最終末の瓦器椀、龍泉窯系青磁椀、羽釜、東播系須恵器などバラエティがあり、これらの遺物から遺構面の時期は13世紀代を中心として一部14世紀にかかることがわかる。調査区より北に約70mのところでは実施された第206次調査^{註3)}では同時期中世遺構が確認されていることから、伊丹市内における当該期の遺跡の広がりや集落の様子を知る上で新たな資料を得ることができた。

また第1遺構面では本堂、庫裏および庭などの施設が検出された。江戸中期から後期にかけての寺院および付属施設を考える上で参考となる。 (谷口)

- 註1) 「有岡城・伊丹郷町遺跡第165次」『平成7年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996年
- 2) 尾上 実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』 1983年「概説 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会編 1995年
- 3) 「第13節 第206次調査」 『伊丹市埋蔵文化財調査報告書—震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—』 伊丹市教育委員会 2002年

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
P120	第67図-1 図版29-1	椀	瓦器	口 径 (13.6) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部ナデ 高台の跡有り 内面上部数条の連続圏線状ミガキ 見込み5~6条の平行線ミガキ	和泉型 20% 13c前半
土坑50	第67図-2 図版29-2	椀	瓦器	口 径 (13.2) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面口縁部ヨコナデ 体部縦方向のナデ	和泉型 10% 13c中頃
	第67図-3 図版29-3	羽釜	瓦質	口 径 (22.2) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部ナデ 内面ハケメ	摂津型 5%
	第67図-4 図版29-4	三足羽釜	瓦質	口 径 (14.4) cm	外面口縁部ヨコナデと細かい指頭圧痕 体部上半部指頭圧痕 下半部ナデ 内面磨耗が著しく調整不明	10%
	第67図-5 図版29-5	三足羽釜	瓦質		脚部	5%
	第67図-6 図版29-6	三足羽釜	瓦質		脚部	5%
	第67図-7	椀	青磁	口 径 (16.3) cm 器 高 6.6 cm 高台径 5.0 cm	外面鑄蓮弁文 見込み陰刻の花文 高台内と畳付露胎	中国(龍泉窯系) 15% 13c中~14c初
	土坑51	第67図-8 図版29-8	三足羽釜	瓦質	口 径 (16.0) cm	内外面磨耗が著しく調整不明
第67図-9 図版29-9		羽釜	瓦質	口 径 (22.8) cm	外面鏝直上に沈線巡る 口縁部ヨコナデ 内面口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	摂津型 5% 13c~14c
第1 トレンチ 土坑1	第68図-10 図版29-10	土師皿	素焼き	口 径 (8.0) cm 器 高 1.4 cm	手捏ね成形 内外面磨耗が著しく調整不明	在地 50%
	第68図-11 図版29-11	土師皿	素焼き	口 径 (9.0) cm 器 高 1.6 cm	手捏ね成形 内外面磨耗が著しく調整不明	在地 60%
	第68図-12	椀	瓦器	口 径 13.0 cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面ヨコナデと連続圏線状のミガキ有り	和泉型 15% 14c前~中
	第68図-13 図版29-13	椀	瓦器	口 径 (14.0) cm 器 高 3.5 cm 高台径 (3.9) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部ナデ 内面口縁部ヨコナデ 体部連続圏線状のミガキ 底部ナデ 貼り付け高台	和泉型 45% 13c前~中
	第68図-14 図版29-14	羽釜	瓦質	口 径 (26.6) cm	内面口縁から外面にかけてヨコナデ	5% 13c初頭
	第68図-15 図版29-15	片口鉢	須恵器	口 径 (25.6) cm	内外面ロクロナデ	東播系 10% 外面口縁部自然軸掛かる 12c末~13c初
	第68図-16 図版29-16	甕	須恵器		外面口縁部ロクロナデ 体部タタキ	東播系 5%
	第68図-17 図版29-17	鍋	石	口 径 (23.0) cm	外面細かな面取り状のケズリ 口縁端部から内面丁寧なミガキ	滑石 5% 外面煤付着
第2 トレンチ 溝5	第68図-18 図版29-18	片口鉢	須恵器	口 径 (23.4) cm	内外面ロクロナデ	東播系 5% 外面口縁部自然軸掛かる 14c初頭
	第68図-19 図版29-19	鉢	陶器	口 径 (13.4) cm	内外面ロクロナデ	備前 10% 外面体部自然軸掛かる
	第68図-20 図版29-20	鍋	素焼き	口 径 (30.6) cm	外面口縁ヨコナデと指頭圧痕有り 体部タテハケ 内面ヨコハケ 口縁端部ヨコナデ	5% 外面煤付着

第15表 第165次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
焼土土坑 1	第71図-21 図版29-21	染付蕎麦猪口	白磁	口径 (7.5) cm 器高 5.3 cm 高台径 4.2 cm	外面風景文 高台内崩れた「大明年製」銘と圏線有り 量付露胎	肥前 50%
	第71図-22 図版29-22	染付碗	白磁	口径 (8.9) cm 器高 3.6 cm 高台径 (5.3) cm	口縁輪花 外面鳥と草花文 内面口縁圏線有り 体 部花文 見込み文様と圏線有り 高台内「大〇年製」 銘と圏線有り 量付露胎	肥前 70%
	第71図-23 図版29-23	染付碗	白磁	口径 10.8 cm 器高 6.1 cm 高台径 4.8 cm	外面雪輪草花文 高台内圏線有り 量付露胎 離れ 砂付着	肥前 70% 17c後～ 18c初
	第71図-24	染付碗	白磁	口径 (9.5) cm 器高 4.8 cm 高台径 (4.6) cm	内面コンニャク印判桐文 見込み二重圏線有り 高 台量付露胎	肥前 25% 18c前半
	第71図-25	染付皿	白磁	口径 (13.6) cm 器高 2.6 cm 高台径 (9.0) cm	外面唐草文 内面墨弾きの波文 見込み文様有り 高台内圏線有り 量付露胎	肥前 70% 17c後半
	第71図-26 図版29-26	染付皿	白磁	口径 12.7 cm 器高 3.6 cm 高台径 7.7 cm	内面草花文 見込み文様有り 高台内圏線有り 量 付露胎	肥前 90% 二次焼成受 ける
	第71図-27	染付皿	白磁	口径 (14.8) cm 器高 3.7 cm 高台径 (8.8) cm	型打ち成形 口縁輪花 外面唐草文 内面丸文と牡 丹唐草文 高台内圏線有り 量付露胎	肥前 25% 17c後半
	第71図-28	染付皿	白磁	口径 (14.0) cm 器高 4.4 cm 高台径 (6.0) cm	口縁端反り 外面文様有り 内面草花文 見込み文 様と圏線有り 高台量付露胎	肥前 40%
	第71図-29 図版29-29	染付皿	白磁	口径 18.9 cm 器高 3.1 cm 高台径 11.0 cm	口縁輪花 口鏤 外面唐草文 内面唐草文とコン ニャク印判桐文 見込み唐草文と二重圏線 高台内 「大明成化年製」銘と圏線 量付露胎	肥前 70% ハリ支え痕 4ヶ所有り
	第71図-30	染付大皿	白磁	口径 (31.2) cm 器高 6.8 cm 高台径 16.8 cm	外面唐草文 内面体部牡丹文 見込み桔梗と草文 二重圏線有り 高台内「大明成〇年製」の銘と圏線 ハリ支え痕4ヶ所有り 量付露胎	肥前 50% 二次焼成受 ける
	第72図-31 図版29-31	染付皿	白磁	口径 (9.8) cm 器高 2.5 cm 高台径 (5.6) cm	口縁輪花 外面唐草文 内面コンニャク印判桐文 見込み幾何学文と手描き五弁花 高台量付露胎	肥前 40% 内外面貫入 二次焼成受ける 17c末～18c初
	第72図-32 図版29-32	染付皿	白磁	口径 9.0 cm 器高 1.8 cm 高台径 5.0 cm	型打ち成形 内面雪輪草花文 千鳥格子と結び紐 外面雪輪草花文 高台量付露胎	肥前 50% 二次焼成受 ける
	第72図-33	染付蓋物蓋	白磁	口径 (7.8) cm 器高 3.9 cm	外面松文 口縁部露胎	肥前 60%
	第72図-34 図版29-34	染付蓋物蓋	白磁	口径 (10.2) cm	外面蛸唐草文 口縁部露胎	肥前 40% 外面貫入 二次焼成受ける
	第72図-35 図版29-35	染付蓋物	白磁	口径 11.6 cm 器高 8.2 cm 高台径 7.4 cm	外面蛸唐草文 内面口縁部露胎 高台内圏線有り 量付露胎	肥前 85% 内外面貫入 二次焼成受ける
	第72図-36	染付碗	白磁	口径 (12.8) cm	型打ち成形 口縁輪花 外面縦に分割し竹と牡丹と 橘文を描く 内面花文	肥前 20%
	第72図-37	鉢	青磁	口径 (18.4) cm	外面口縁部へら彫りの雷文 内面へら彫りの草花文	肥前 40% 17c後半
	第72図-38	染付鉢	青磁	高台径 (8.0) cm	外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 内面風景文 見 込み文様あり 高台内「〇明〇製」銘と二重圏線有り	肥前 40%
	第72図-39 図版29-39	色絵皿	青磁	口径 (19.5) cm 器高 5.2 cm 高台径 (12.2) cm	口縁輪花 内面草花文をへら彫りしその上に色絵で 草花文を描く 高台量付釉刺ぎしその上に鉄銹を施 す	肥前 30% 17c後～ 18c初
	第72図-40 図版30-40	猪口	白磁	口径 7.5 cm 器高 4.9 cm 高台径 3.4 cm	型打ち成形 口縁輪花 内面口縁部に陽刻の如意頭 文 高台量付露胎	肥前 80% 17c後半

第16表 第165次調査遺物観察表 (2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等	
焼土土坑 1	第72図-41	碗	白磁	口 径 (12.4) cm	型打ち成形 口縁輪花	肥前 30% 二次焼成受ける	
	第72図-42 図版30-42	鉢	白磁	口 径 18.3 cm 器 高 8.6 cm 高台径 8.4 cm	型打ち成形 口縁輪花 口錆 高台量付露胎	肥前 70% 二次焼成受ける	
	第72図-43 図版30-43	皿	白磁	口 径 (13.4) cm 器 高 4.5 cm 高台径 (7.0) cm	型打ち成形 口縁輪花 内面陽刻文有り 高台量付露胎 体部2ヶ所孔残存	肥前 40% 17c末～18c前	
	第73図-44 図版30-44	色絵碗	白磁	口 径 (9.9) cm 器 高 6.2 cm 高台径 (4.9) cm	外面文様有り 高台量付露胎	肥前 40% 二次焼成受ける	
	第73図-45 図版30-45	色絵皿	白磁	口 径 (14.0) cm 器 高 4.0 cm 高台径 7.6 cm	型打ち成形 口縁輪花 口錆 見込み草花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 17c後半	
	第73図-46 図版30-46	色絵鉢	白磁	口 径 (19.8) cm 器 高 7.0 cm 高台径 (10.4) cm	八角形 口錆 外面染付山水文 内面色絵染付果木文 見込み色絵五弁花と二重圏線 高台内二重方形 椀渦福と圏線 ハリ支え痕 量付露胎	肥前 70% 二次焼成受ける	
	第73図-47 図版30-47	碗	陶器	口 径 12.2 cm 器 高 5.5 cm 高台径 4.6 cm	外面巻刷毛目文と染付草花文 内面巻刷毛目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 80% 二次焼成受ける 17c末～18c前	
	第73図-48 図版30-48	碗	陶器	口 径 11.9 cm 器 高 5.6 cm 高台径 4.5 cm	内外面体部灰釉と鉛釉の掛け分け 高台内砂目有り 高台量付露胎 離れ砂付着	60% 灰釉部に貫入する	
	第73図-49 図版30-49	鉄絵皿	陶器	口 径 15.0 cm 器 高 5.0 cm 高台径 5.4 cm	灰釉 染付と鉄絵と白泥による草花文 高台周辺露胎	京焼 75% 内外面貫入する	
	第73図-50 図版30-50	鉄絵皿	陶器	口 径 (17.3) cm 器 高 2.8 cm 高台径 (9.6) cm	灰釉 見込み鉄絵と胎土目跡有り 高台量付露胎	30% 内外面貫入する 二次焼成受ける	
	第73図-51 図版30-51	不明	白磁	幅 6.5 cm	型押し成形 体部陽刻による花卉と組紐と染付けによる蝶と花文 内面露胎 布目痕有り	肥前 60%	
	第73図-52 図版30-52	水滴	白磁	幅 4.8 cm 器 高 4.8 cm 厚 み 2.5 cm	型押し成形 鯛を抱える子供 鯛の目に1ヶ所穴が空いている 底部露胎	肥前 100%	
	第73図-53 図版30-53	染付香炉	白磁	口 径 (6.0) cm 器 高 6.0 cm 底 径 2.6 cm	型打ち成形 八角形 外面陽刻と染付けで柴垣文と紗綾形文を描き交互に配する 内面と底部中央凸部露胎 脚2ヶ所残存	肥前 70% 17c後半	
	第73図-54	香炉	陶器	口 径 (12.8) cm 器 高 6.8 cm 高台径 5.8 cm	灰釉 内面下半部と高台周辺露胎 高台内に円刻と刻印有り	40% 釉に貫入する 二次焼成受ける	
	第73図-55	片口小皿	陶器	口 径 (9.2) cm 器 高 3.0 cm 底 径 3.2 cm	内外面口クロナデ 内面一単位6本のクシ目有り	40%	
	第73図-56	水注	青磁	高台径 (6.4) cm	内面と高台量付露胎 把手1ヶ所残存	肥前 40%	
	第73図-57	焼塩壺	素焼き	底 径 4.5 cm	輪積み成形 内面布目痕有り	80%	
	焼土土坑 2	第74図-58	土師皿	素焼き	口 径 (11.4) cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ 内面口縁部ヨコナデ	在地 20%
		第74図-59 図版31-59	染付碗	白磁	口 径 (9.7) cm 器 高 7.0 cm 高台径 4.1 cm	外面文様有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 内外面貫入する 二次焼成受ける
第74図-60 図版31-60		染付碗	白磁	口 径 (10.5) cm 器 高 5.8 cm 高台径 4.3 cm	外面風景文 高台量付露胎	肥前 40% 内外面貫入する 二次焼成受ける 17c末～18c前	

第17表 第165次調査遺物観察表表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
焼土土坑 2	第74図-61	碗	陶器	口径 9.1 cm 器高 6.6 cm 高台径 4.2 cm	呉器手 灰釉 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 60% 内外面貫入 入る
	第74図-62 図版31-62	染付皿	白磁	口径 (15.4) cm 器高 5.0 cm 高台径 (8.2) cm	型打ち成形 八角形 口縁口錆 外面扇文 内面窓 に松文と梅文 見込み鳳凰文 高台内二重方形枠渦 福と圏線有り 畳付露胎	肥前 40% 17c後半
	第74図-63	染付小皿	白磁	口径 (8.5) cm 器高 2.4 cm 高台径 3.7 cm	見込み帆掛け舟文 高台畳付露胎	肥前 60% 内外面貫入 入る
	第74図-64 図版31-64	皿	青磁	口径 (13.5) cm 器高 3.5 cm 高台径 (4.5) cm	見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎 畳付離れ砂付 着	肥前 50% 内外面貫入 入る 二次焼成受ける 17c後半
	第74図-65	鉄絵皿	陶器	口径 (11.8) cm 器高 4.5 cm 高台径 4.8 cm	見込み文様有り 高台周辺露胎 高台内円刻あり	肥前(京焼風) 45% 二 次焼成受ける
	第74図-66	色絵皿	陶器	口径 (12.4) cm 器高 4.4 cm 高台径 (5.1) cm	見込み文様有り 高台周辺露胎 高台内色絵有り	京焼 25% 内外面貫入 入る 二次焼成受ける
	第74図-67	碗	陶器	高台径 5.6 cm	高台周辺露胎 高台内「清○」の刻印と円刻有り	肥前(京焼風) 20% 内 外面貫入
	第74図-68	碗	陶器	高台径 4.1 cm	外面蛸手文 内面打刷毛目文 高台畳付露胎	肥前 25% 17c末～ 18c前
	第74図-69 図版31-69	甕	陶器	口径 (8.4) cm 器高 15.7 cm 底径 8.3 cm	内面口縁部から外面上半部にかけて灰釉掛かる 外面 口クロナデ	丹波 40%
	第74図-70	火入れ	陶器	口径 (14.2) cm 器高 6.3 cm 底径 (10.0) cm	内面口縁部から外面にかけて灰釉掛かる 内外面口 クロナデ	丹波 20% 口縁部敲打 痕有り 二次焼成受ける
	第74図-71	火入れ	陶器	底径 (9.5) cm	内面口縁部から外面上半部にかけて塗り土を施す 内外面口クロナデ 外面底部周辺回転ヘラケズリ	丹波 20% 口縁部敲打 痕有り
	第74図-72	水盤	陶器	口径 (37.0) cm	口縁輪花 端部沈線4条巡る 内外面鉄釉 底部脚 の跡有り	丹波 30%
	第74図-73 図版31-73	花器	軟質施釉 陶器	底径 6.3 cm	柿釉 底部糸切り痕有り(右巻き)	90% 二次焼成受ける
	第74図-74	皿	陶器	口径 (10.3) cm 器高 1.8 cm 底径 (4.8) cm	内面塗り土 内外面口クロナデ 底部糸切り痕有り	備前 30%
第2 トレンチ 土坑1	第75図-75	染付碗	白磁	口径 (9.7) cm 器高 6.6 cm 高台径 (4.0) cm	外面網目文 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 30% 17c後半
	第75図-76 図版31-76	染付碗	白磁	口径 10.7 cm 器高 6.4 cm 高台径 4.8 cm	外面草花文 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 60%
	第75図-77	碗	陶器	口径 (12.8) cm 器高 5.5 cm 高台径 5.0 cm	灰釉 高台畳付露胎 離れ砂付着	40% 内外面貫入 入る
	第75図-78	小杯	白磁	口径 (6.3) cm 器高 4.2 cm 高台径 2.7 cm	口縁端反り 高台畳付露胎	肥前 30% 17c後半
	第75図-79	染付小杯	白磁	口径 (7.4) cm 器高 3.6 cm 高台径 2.8 cm	口縁端反り 外面草花文 高台露胎	肥前 30% 内面貫入 入る 17c後半
	第75図-80	染付皿	青磁	口径 (14.2) cm 器高 3.7 cm 高台径 (7.8) cm	口縁端反り 外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 内 面草花文 口縁部圏線有り 見込み二重圏線有り 高台内二重圏線有り 畳付露胎	肥前 30% 18c前半

第18表 第165次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
第2 トレンチ 土坑1	第75図-81	染付皿	白磁	口径 (21.0) cm 器高 3.3 cm 高台径 (11.6) cm	内面墨弾きの唐草文 見込み文様有り 高台内圏線有り 量付露胎	肥前 30% 内外面貫入 18c後半
	第75図-82 図版31-82	焙烙	素焼き	口径 24.3 cm	底部外型成形 外面体部ヨコナデ 内面体部ヨコナデ 底部ヨコナデ	60% 外面底部煤けている
	第75図-83 図版31-83	焙烙	素焼き	口径 31.0 cm	底部外型成形 外面体部左上がりのカキアゲの後ヨコナデ 内面ヨコナデ 把手2ヶ所貼り付け 孔有り(貫通する)	70% 内外面底部煤けている
第2 トレンチ 土坑6	第75図-84	碗	白磁	口径 (10.5) cm 器高 5.7 cm 高台径 (4.1) cm	高台量付露胎	肥前 40% 内外面貫入 17c後半
	第75図-85 図版31-85	碗	青磁	口径 (9.7) cm 器高 6.9 cm 高台径 (4.2) cm	高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 内外面貫入 17c後半
土坑9	第76図-86	土師皿	素焼き	口径 7.6 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部指頭圧痕内面ナデ	在地 90%
	第76図-87	土師皿	素焼き	口径 (13.3) cm 器高 2.3 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部一定方向のナデ 内面口縁部ヨコナデ 底部ナデ	在地 25% 口縁部煤付着
	第76図-88	焙烙	素焼き	口径 (21.8) cm	底部外型成形 内外面体部ヨコナデ 外面底部との接合部ヘラケズリ	5% 外面煤けている
	第76図-89	焙烙	素焼き	口径 (23.2) cm	底部外型成形 外面口縁部ヨコナデ 底部との接合部に指頭圧痕と僅かに右上がりのタタキ有り 内面口縁部ヨコナデ 底部ヨコナデ	10% 外面と内面底部煤けている
	第76図-90	焙烙	素焼き	口径 (23.6) cm	底部外型成形 外面口縁部ヨコナデ 底部との接合部に指頭圧痕とヨコナデ 内面体部ヨコナデ 底部ナデ	30% 外面と内面底部煤けている
	第76図-91 図版31-91	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 5.0 cm 高台径 (3.6) cm	外面風景文 高台量付露胎	肥前 60% 内外面貫入 18c前半
	第76図-92	染付碗	白磁	口径 (10.2) cm 器高 5.3 cm 高台径 (4.3) cm	外面氷裂文 高台量付露胎	肥前 25% 18c前半
	第76図-93	染付碗	白磁	高台径 (3.8) cm	外面花唐草文 高台内圏線有り 量付露胎	肥前 35% 17c後半
	第76図-94	染付碗	白磁	高台径 (3.9) cm	外面コンニャク印判松文と染付の竹垣文 高台内崩れた「大明年製」銘と圏線有り 量付露胎	肥前 15% 内外面貫入 18c前半
	第76図-95	染付碗	陶胎	口径 (9.8) cm 器高 4.8 cm 高台径 (3.8) cm	外面文様有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 20% 内外面貫入 二次焼成受ける 18c中頃
	第76図-96	染付 蕎麦猪口	白磁	口径 (7.9) cm 器高 5.7 cm 高台径 (3.4) cm	型打ち成形 口縁輪花 外面唐草文と窓絵 高台内「〇明年製」銘と圏線有り 量付露胎	肥前 20% 17c末～ 18c初
	第76図-97	染付大碗	白磁	口径 15.0 cm 器高 8.2 cm 高台径 5.8 cm	外面草花文 高台内崩れた「大明年製」銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 40% 17c後半
	第76図-98	染付大碗	白磁	口径 (17.1) cm 器高 8.4 cm 高台径 (6.7) cm	口縁輪花 外面藤文 見込み松文と二重圏線 高台内葉文と圏線有り 量付露胎	肥前 40%
	第76図-99	皿	白磁	口径 (9.2) cm 器高 2.7 cm 高台径 3.2 cm	見込み蛇の目釉割ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台周辺露胎	肥前 20% 17c末～ 18c前
第76図-100	染付皿	白磁	口径 (13.6) cm 器高 4.0 cm 高台径 (4.6) cm	内面草花文 見込み蛇の目釉割ぎ 高台露胎	肥前 20%	

第19表 第165次調査遺物観察表 (5)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑9	第76図-101	染付皿	白磁	口径 (12.8) cm 器高 3.2 cm 高台径 (8.1) cm	外面唐草文 内面松文 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り 高台内崩れた「大明年製」銘と圏線有り 量付露胎 離れ砂付着	肥前 20% 18c前半
	第76図-102	染付皿	白磁	口径 (13.2) cm 器高 4.6 cm 高台径 (7.4) cm	口縁口錆 外面唐草文 内面梅樹文 高台内圏線有り 量付露胎	肥前 20% 内外面貫入 入る
	第76図-103	染付合子蓋	白磁	口径 (6.1) cm	外面海老文 口縁部露胎	肥前 45% 内外面貫入 入る
	第76図-104	染付碗蓋	白磁	口径 (10.2) cm	外面果木文 つまみ内「大明成化年製」銘と圏線有り	肥前 50% 18c初頭
	第76図-105	仏飯具	陶胎	高台径 (4.9) cm	青磁釉 高台周辺露胎	肥前 50% 内外面貫入 入る 二次焼成受ける
	第77図-106	碗	陶器	口径 (11.4) cm 器高 4.2 cm 高台径 3.6 cm	内外面巻刷毛目文 見込み蛇の目釉剥ぎ 砂付着 高台量付露胎 離れ砂付着	唐津 60% 17c末～ 18c後
	第77図-107	碗	陶器	口径 (10.7) cm 器高 7.0 cm 高台径 3.8 cm	内外面巻刷毛目文 高台量付露胎	唐津 15% 内外面貫入 入る 17c後半
	第77図-108	碗	陶器	口径 (7.8) cm 器高 5.8 cm 高台径 (4.1) cm	口縁若干端反り 鉄釉 高台量付露胎 焼台の痕有り	唐津 40% 17c末～ 18c後
	第77図-109	鉢	陶器	高台径 5.2 cm	外面巻刷毛目文 内面打刷毛目文 高台量付露胎	唐津 40% 17c後半
	第77図-110	皿	陶器	口径 (16.0) cm 器高 3.6 cm 高台径 (8.4) cm	内面巻刷毛目文 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎 脚1ヶ所残存	唐津 15% 内外面貫入 入る
	第77図-111 図版31-111	鉢	陶器	口径 (15.7) cm 器高 6.0 cm 高台径 (7.3) cm	内外面巻刷毛目文 見込み蛇の目釉剥ぎ 重ね焼き痕有り 高台周辺露胎 量付に焼台痕有り	唐津 20% 内外面貫入 入る
	第77図-112	香炉	陶器	口径 (9.2) cm 器高 6.9 cm 高台径 (6.0) cm	外面巻刷毛目文 内面口縁より下と高台周辺露胎	唐津 25% 18c前半
	第77図-113	蓋	陶器	口径 (8.0) cm	灰釉 口縁部露胎	肥前 45% 内外面貫入 入る
	第77図-114 図版31-114	鉄絵香炉	陶器	口径 (10.6) cm 器高 6.9 cm 高台径 (5.2) cm	外面鉄絵有り 内面下半部と高台周辺露胎 高台内に渦巻状の釘書有り	肥前(京焼風) 45% 内外面貫入 入る 二次焼成受ける 17c後半
	第77図-115	色絵油壺	白磁	口径 3.2 cm	外面4条の圏線と帯状の縦縞文 内面口縁より下露胎	肥前 30% 17c後半
	第77図-116	香炉	青磁	口径 (10.9) cm 器高 7.9 cm 高台径 (9.6) cm	内面露胎 高台内鉄錆塗布	肥前 35%
	第77図-117	鉢	陶器	底径 (12.0) cm	内外面塗り土を施す 底部釘書と重ね焼痕有り	20%
	第77図-118	火入れ	陶器	口径 (13.4) cm 器高 5.8 cm 高台径 (11.4) cm	内外面口クロナデ	丹波 20%
	第77図-119	播鉢	陶器	口径 (31.8) cm	クシ目一単位5本 外面口縁部口クロナデ 下半部指頭圧痕とナデアゲ 内面口縁部口クロナデ	丹波 5% 17c前半
	第77図-120	播鉢	陶器	口径 (32.0) cm	クシ目一単位8本 外面上半部口クロナデ 下半部指頭圧痕とナデアゲ 内面口縁口クロナデ	丹波 10% 口縁部灰被り 17c後半

第20表 第165次調査遺物観察表 (6)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑10	第78図-121	染付碗	白磁	口 径 (10.9) cm	外面縦に分割し竹・松・牡丹・梅・菊文を描く	肥前 40% 17c後半
	第78図-122	色絵碗	白磁	口 径 (10.6) cm	外面窓絵を呉須で塗りつぶし金彩で山水文を描く 色絵で牡丹唐草を描き唐草を金彩で塗る	肥前 20% 18c前半
	第78図-123	鉄絵皿	陶器	高台径 4.7 cm	見込み山水文 高台周辺露胎 高台内に線書きによる「綿・千・九」と浅い円刻有り	肥前(京焼風) 30% 内外面に貫入する
	第78図-124	土師皿	素焼き	口 径 (10.2) cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面体部ヨコナデ 底部一定方向のナデ 口縁端部若干削っている	在地 45%
	第78図-125	小鉢	軟質施釉陶器	底 径 3.2 cm	柿釉 内面一単位3本の播目3ヶ所残存 見込み斜格子状の播目 底部糸切り痕有り	30%
	第78図-126	小鉢	軟質施釉陶器	底 径 3.6 cm	柿釉 内面5ヶ所に一単位4本のクシ目有り 見込みクシ目を十字状に施す 底部糸切り痕有り(右巻き)	30%
	第78図-127	播鉢	陶器	口 径 (37.4) cm	クシ目一単位7本 外面口クロナデ 内面口縁部口クロナデ	丹波 20% 内外面一部灰被り 18c前半
	第78図-128 図版32-128	軒丸瓦	瓦	径 14.9 cm 周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 巴の尾部はつながり圏線状を成す 珠文数14個 丸瓦部凹面コビキB	60%
	第78図-129	軒丸瓦	瓦	径 (13.8) cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 珠文数16個	20%
土坑11	第78図-130	土師皿	素焼き	口 径 (9.8) cm 器 高 2.0 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 25% 口縁部煤付着
	第78図-131	皿	陶器	口 径 (12.3) cm 器 高 3.4 cm 高台径 4.6 cm	掛け分け 銅緑釉 高台周辺露胎 見込み蛇の目軸剥ぎ 砂目1ヶ所有り	肥前(内野山) 40% 17c後半
	第78図-132	焙烙	素焼き	口 径 (29.0) cm	内外面体部ヨコナデ	5% 外面煤けている
	第78図-133	染付皿	白磁	口 径 (13.7) cm 器 高 4.2 cm 高台径 (4.9) cm	内面文様有り 見込み蛇の目軸剥ぎ 重ね焼きの痕有り 高台露胎 離れ砂付着	肥前 40% 17c末～18c前
	第78図-134	碗	白磁	口 径 (10.0) cm 器 高 5.7 cm 高台径 3.7 cm	高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
土坑19	第79図-135	ミニチュア製品	素焼き	縦 2.8 cm 幅 3.3 cm 厚み 0.9 cm	面子(文字「水」) 型押し成形	100%
	第79図-136 図版32-136	徳利	陶器	底 径 10.7 cm	外面塗り土 内面口クロ目残す 底部釘書有り	備前 60%
	第79図-137 図版32-137	軒丸瓦	瓦	径 14.0 cm 周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 圏線有り 珠文数16個	20% 二次焼成受ける
	第79図-138	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.0 cm 周縁厚 1.7 cm	均整唐草文	10% 二次焼成受ける
土坑12	第79図-139	軒丸瓦	瓦	径 (13.6) cm 周縁厚 1.4 cm 瓦当厚 1.5 cm	左巻き三巴文 復元珠文数16個	20%
	第79図-140	棟込瓦	瓦	径 8.4 cm 周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.5 cm	菊花文(花卉数8枚)	30%

第21表 第165次調査遺物観察表(7)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑33	第79図-141	土師皿	素焼き	口径 9.8 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ(指頭圧痕残す) 内面口縁部ヨコナデ 底部ナデ	在地 90% 口縁煤付着
	第79図-142	染付碗	白磁	口径 10.1 cm 器高 6.9 cm 高台径 4.5 cm	外面斜格子文と草文 高台壘付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 17c後半
	第79図-143 図版32-143	染付小杯	白磁	口径 6.8 cm 器高 3.8 cm 高台径 2.4 cm	外面草花文 高台壘付露胎	肥前 60% 内外面貫入
	第79図-144 図版32-144	皿	陶器	口径 12.4 cm 器高 2.6 cm 高台径 3.9 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み3ヶ所砂目有り 高台周辺露胎 壘付砂目1ヶ所有り	唐津 80% 17c前半
	第79図-145	播鉢	陶器	口径 (31.6) cm	クシ目一単位8本 外面と内面口縁部ロクロナデ	丹波 30% 外面灰被り 18c中頃
	第79図-146	五輪塔	石	幅 12.4 cm	空輪部 四面に五大種字(キャ)を四転している	砂岩 20%
土坑47	第80図-147	土師皿	素焼き	口径 (10.8) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ(指頭圧痕残す) 内面口縁部ヨコナデ 底部ナデ	在地 20%
	第80図-148	焙烙	素焼き	口径 (23.7) cm	底部外型成形 外面体部ヨコナデ 内面ヨコナデ	20% 外面体部煤けている
	第80図-149	染付皿	白磁	口径 (13.8) cm 器高 2.9 cm 高台径 (7.0) cm	内面文様有り 見込み文様あり 高台壘付露胎 離れ砂付着	肥前 30%
	第80図-150	煙管(雁首)	銅	火皿径 1.5 cm 長さ 4.5 cm 接合部径 1.0 cm		100% 緑青付着
	第80図-151	棟込瓦	瓦	径 8.5 cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.5 cm	菊花文(花弁数8枚)	50%
	第80図-152	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.3 cm 周縁厚 1.7 cm	均整唐草文 瓦当面僅かに雲母粉付着	40%
土坑49	第80図-153	染付碗	白磁	口径 (10.8) cm 器高 6.2 cm 高台径 4.9 cm	外面山水文 内面口縁部圏線有り 見込み文様と二重圏線有り 高台内銘有り 壘付露胎 離れ砂付着	肥前 30% 17c後半
	第80図-154	染付皿	白磁	口径 (12.4) cm 器高 2.6 cm 高台径 (7.6) cm	外面文様有り 内面兔文と墨弾きの雲文 高台内圏線有り 壘付露胎	肥前 10% 17c後半
P 72	第80図-155	染付碗	白磁	口径 9.7 cm 器高 5.3 cm 高台径 3.7 cm	外面草花文 高台内渦福と圏線有り 壘付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 17c末～ 18c初
P 70	第80図-156	焼塩壺	素焼き	口径 6.0 cm 器高 8.2 cm 底径 4.4 cm	輪積み成形 外面頸部指頭圧痕 内面布目痕有り	95%
	第80図-157	碗	陶器	口径 (9.6) cm 器高 7.5 cm 高台径 (4.8) cm	呉器手 高台壘付露胎	肥前 30% 内外面貫入
	第80図-158	甕	陶器	口径 (12.2) cm	内外面塗り土 外面体部横方向のクシ目 内面口クロナデ	丹波 10%
P 74	第81図-159	染付碗	白磁	口径 (9.7) cm 器高 5.3 cm 高台径 (4.1) cm	外面コンニャク印判松文と花文 高台内「大明年〇」 銘と圏線有り 壘付露胎	肥前 50% 18c前半
	第81図-160	紅皿	白磁	口径 (4.2) cm 器高 1.6 cm 高台径 (1.7) cm	型押し成形 外面高台周辺露胎	肥前 50% 18c前半

第22表 第165次調査遺物観察表(8)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
P 74	第81図-161	鍋	軟質施釉陶器	口径 (21.4) cm 器高 8.0 cm 底径 (7.8) cm	内外面鉄釉	30% 17c後半
	第81図-162	甕	陶器	口径 (22.8) cm 器高 26.0 cm 底径 15.4 cm	内面塗り土 肩部不遊環1ヶ所残存 底部刻印有り	備前 60% 体部に墨書有り
P 11	第83図-163	土師皿	素焼き	口径 10.5 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 70% 口縁部煤付着
P 13	第83図-164	染付碗	白磁	口径 (7.9) cm	外面菊花文	肥前 60% 18c前半
礎石8	第83図-165 図版32-165	染付鉢	白磁	口径 20.4 cm 器高 8.4 cm 高台径 8.8 cm	型打ち成形 口縁輪花 外面蓮弁文 内面陽刻竹文で四分割し菱文と蔓草文を描く 見込み鳳凰文 高台内銘と圏線とハリ支え痕 量付露胎	肥前 40%
井戸1	第85図-166	土師皿	素焼き	口径 7.4 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 95% 口縁部煤付着
	第85図-167	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.6 cm 高台径 (3.8) cm	外面花唐草文 高台量付露胎	肥前 30% 18c前半
	第85図-168	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.4 cm 高台径 (4.1) cm	外面二重網目文 内面網目文 見込み菊文と二重圏線有り 高台内二重方形枠渦福有り	肥前 50% 18c前半
	第85図-169	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 5.6 cm 高台径 (4.0) cm	外面草花文 見込み蛇の目軸剥ぎ 高台内圏線有り 量付露胎	肥前 45% 18c前半
	第85図-170 図版32-170	碗	陶器	口径 10.0 cm 器高 6.6 cm 高台径 4.4 cm	灰釉 高台周辺露胎	唐津 95% 17c末~18c後
	第85図-171 図版32-171	甕	陶器	口径 (24.0) cm 器高 23.1 cm 高台径 17.0 cm	外面体部鉄釉と灰釉を交互に流し掛ける 底部灰釉と砂付着 内面灰釉	丹波 60% 内面白色の付着物有り 底部中央孔有り
	第85図-172	軒丸瓦	瓦	径 14.7 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 珠文数15個 丸瓦部凹面コビキ B	30%
	第85図-173 図版32-173	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.1 cm 周縁厚 1.4 cm	青海波文	25% 瓦当面銀化現象
	第85図-174 図版32-174	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.3 cm 周縁厚 1.7 cm	均整唐草文	40%
水琴窟1	第86図-175	甕	陶器	口径 (29.2) cm 器高 31.1 cm 底径 19.8 cm	外面口縁以下塗り土 肩部4ヶ所灰釉流し掛け 底部露胎 外面口縁から内面刷毛で塗り土を施す 底部露胎	丹波 95% 底部中央孔有り
	第86図-176	おはじき	ガラス	径 2.0 cm 厚み 0.7 cm	淡緑色 中央部凹んでいる	100%
	第86図-177	おはじき	ガラス	径 2.2 cm 厚み 0.7 cm	淡緑色 中央部凹んでいる	100%
	第86図-178	おはじき	ガラス	径 2.1 cm 厚み 0.6 cm	青色 中央部凹んでいる	90%
埋桶1	第88図-179	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.1 cm 周縁厚 1.4 cm	均整唐草文 中心飾りは左巻き三巴文 瓦当面に雲母粉付着	10%
池1	第88図-180	片口鉢	陶器	口径 14.4 cm 器高 7.6 cm 高台径 7.2 cm	鉄釉 見込みに3ヶ所目跡有り 高台周辺露胎	98% 外面漆喰付着

第23表 第165次調査遺物観察表 (9)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
池1	第88図-181	播鉢	陶器	口径 34.5 cm 器高 14.1 cm 高台径 17.8 cm	片口有り クシ目一単位10本 外面口縁部ロクロナデ 体部ロクロヘラケズリ 底部ヘラケズリ 焼台痕有り 内面口縁ロクロナデ	明石 100% 外面漆喰付着 18c後～19c前
池2	第88図-182	鉢	青磁	口径 (15.0) cm 器高 6.2 cm 高台径 4.5 cm	型押し成形 口縁輪花 体部に菊花文を陽刻 高台花弁形 畳付露胎	三田 40% 19c前半
	第88図-183	蓋	陶器	口径 (13.3) cm	外面鉄釉 体部トビガンナ部と口縁周辺露胎 イッチン掛けの文様有り 内面灰釉 口縁周辺露胎	伊賀・信楽 40% 18c後～19c前

第24表 第165次調査遺物観察表 (10)

第5節 一乗院の調査—昆陽寺境内遺跡第8次調査—

所在地 伊丹市寺本2丁目159
 調査面積 316m²
 調査期間 平成9年4月30日～6月19日
 調査担当 藤井保夫（和歌山県教育委員会派遣）
 船越重伸（三重県教育委員会派遣）

1. 遺跡の概要

昆陽寺境内遺跡は、天平年間に名僧・行基が昆陽池を築くとともに創建した昆陽寺とその塔頭を含む寺院跡である。

昆陽寺は幾たびかの火災に遭っているが、天正7年（1579）の織田信長の焼き討ちにあい、昆陽寺一帯の堂塔を消失したとされている。現在の昆陽寺は、江戸時代に再建されたものであり、織田信長による焼き討ち以前の昆陽寺の様子については、不明な点が多い。

今回の調査地点は、昆陽寺二十三坊に名を連ねた塔頭の一つとされる一乗院の境内である。

2. 調査の概要

今回の調査は、宗教法人「一乗院」の本堂建設に伴う緊急発掘調査として実施したもので、市教育委員会の要請により震災復旧・復興の市町支援として、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班が調査を担当した。

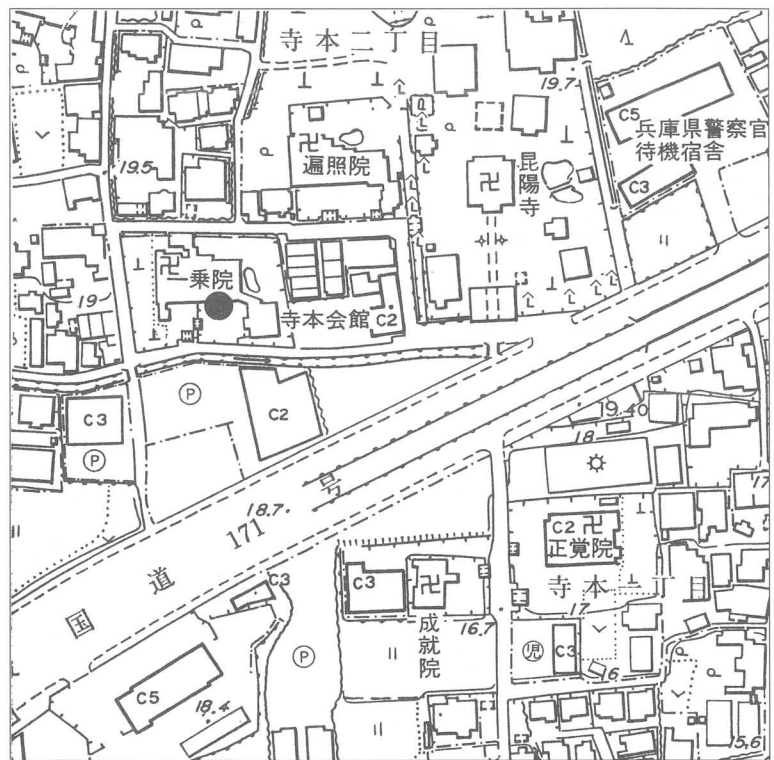
調査は、重機による表土除去を行った後、地山面を遺構検出面として人力により遺構の検出、掘削を行った。

基本的層序は、盛土・褐色土層（第2層）・黄褐色土層（第6層）・褐色粘質土層（第9層）の順で堆積し、黄褐色粘土層（第24層）の地山面に達する。この内、褐色及び黄褐色土層（第2・6層）は一乗院が再建された時の整地層と考えられる。

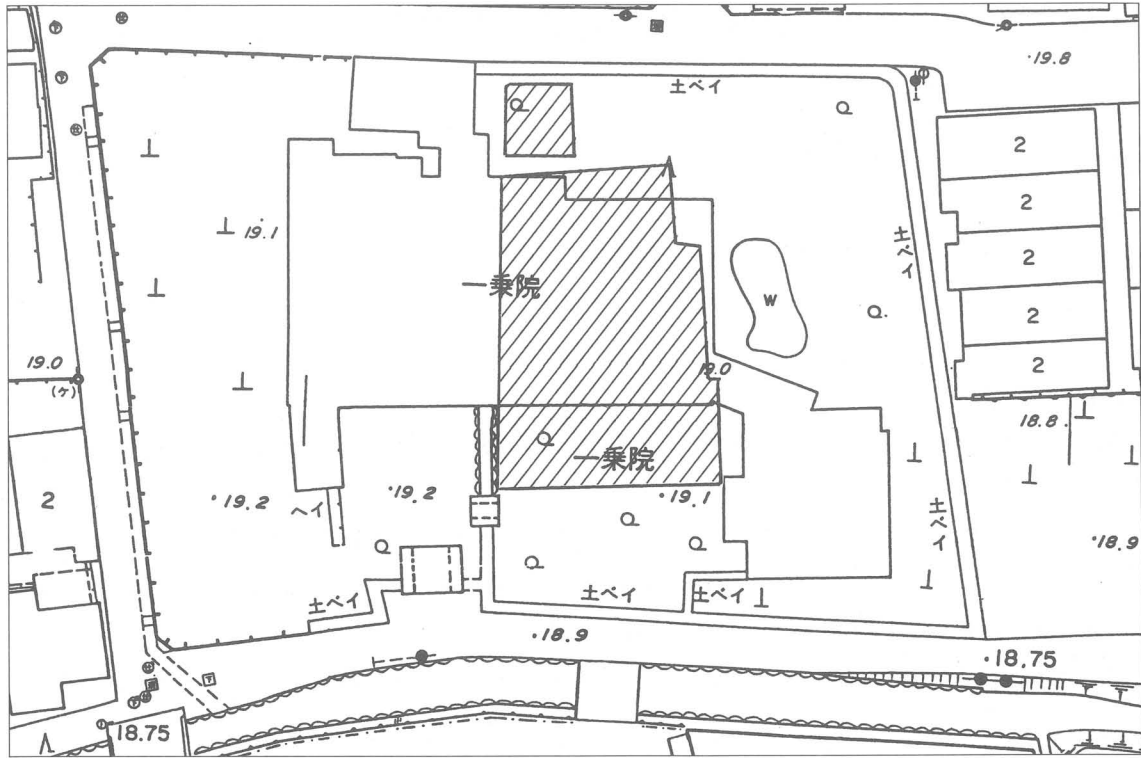
また、調査区の南半分には焼土層が広がっていた。なお、調査対象面積は約350m²であったが、調査時点で現に使用している水道管および下水管が調査地点内に埋設されていたため、この部分を調査対象外とし、最終調査面積は316m²となった。

3. 調査の成果

検出した遺構は、中世から近世にかけての溝3条、土坑178基、ピット



第89図 昆陽寺境内遺跡第8次調査区位置図（1/2,500） 平成4年



第90図 調査区設定図 (1/500) 昭和60年

107基、埋甕遺構1基、水琴窟1基などである。調査区の南東部では土坑、ピットを集中して検出している。また、調査区の南半分で確認した焼土層を挟んで2時期の遺構があるものと考えられる。

土坑29 (第93図)

調査区南西端で検出した1.75m×2m以上、深さ33cmの長方形の土坑である。埋土から土師皿(1)が出土している。

土坑28 (第93図)

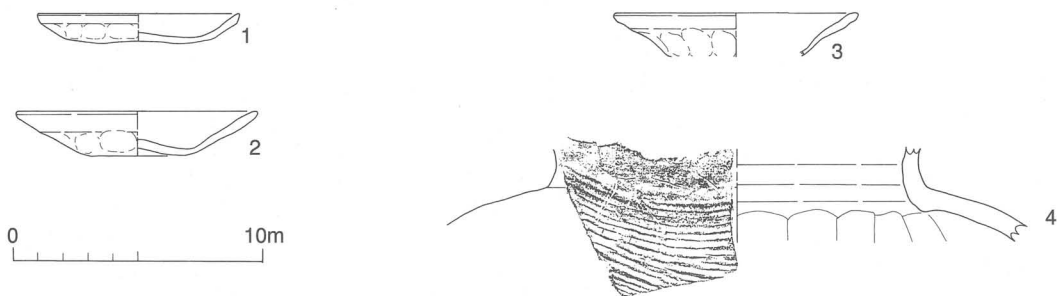
調査区西北側で検出した1m×70cm、深さ30cmの土坑である。土師皿(2)が出土している。

土坑27 (第93図)

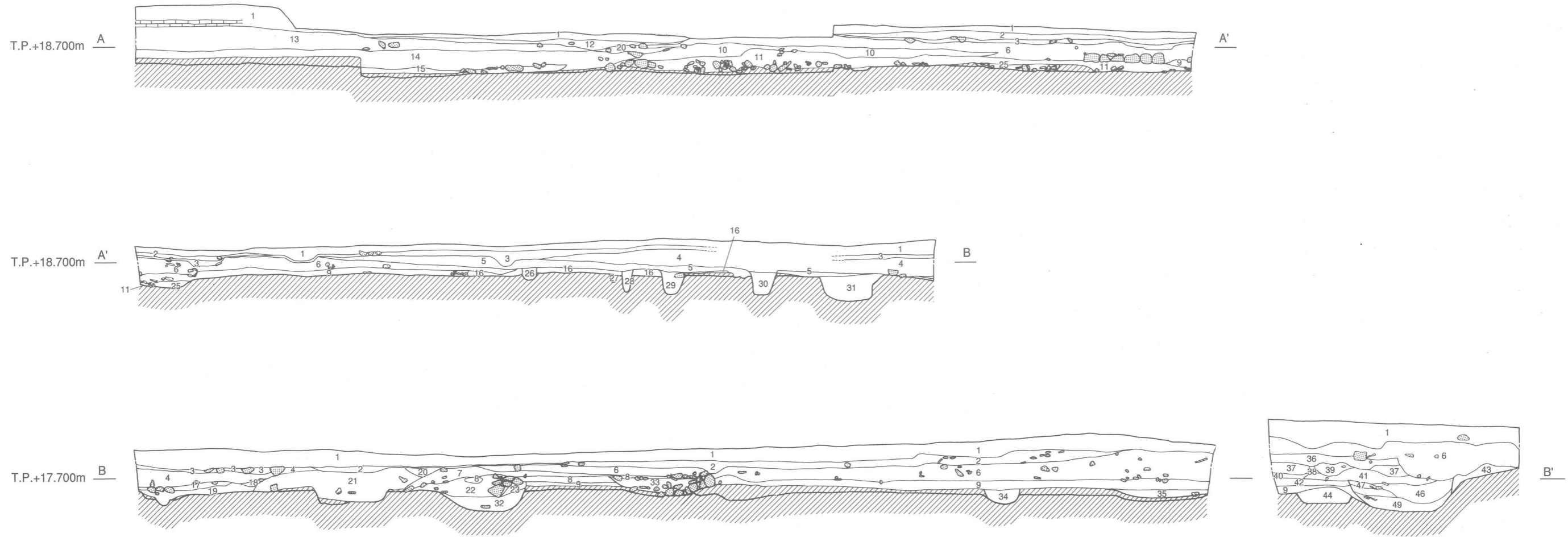
調査区西北隅で検出した径約2m、深さ10cmの土坑で、拳大から人頭大の石を雑然と敷いている。土師皿(3)や東播系甕(4)などが出土している。

土坑1 (第94図、図版37)

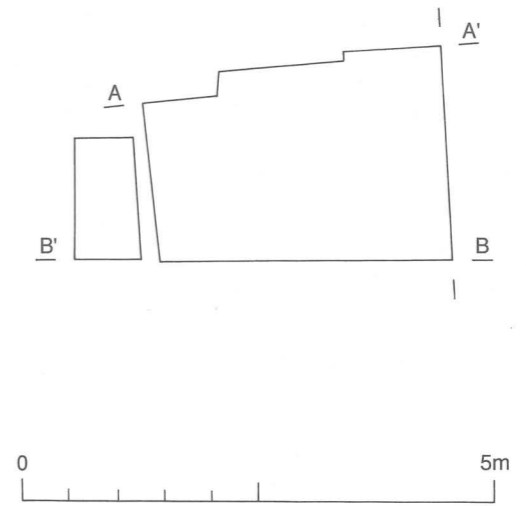
調査区中央東よりで検出した70cm×90cm、深さ45cmの楕円形土坑である。埋土中層から上層で、



第91図 土坑27・28・29出土遺物 (1/3)



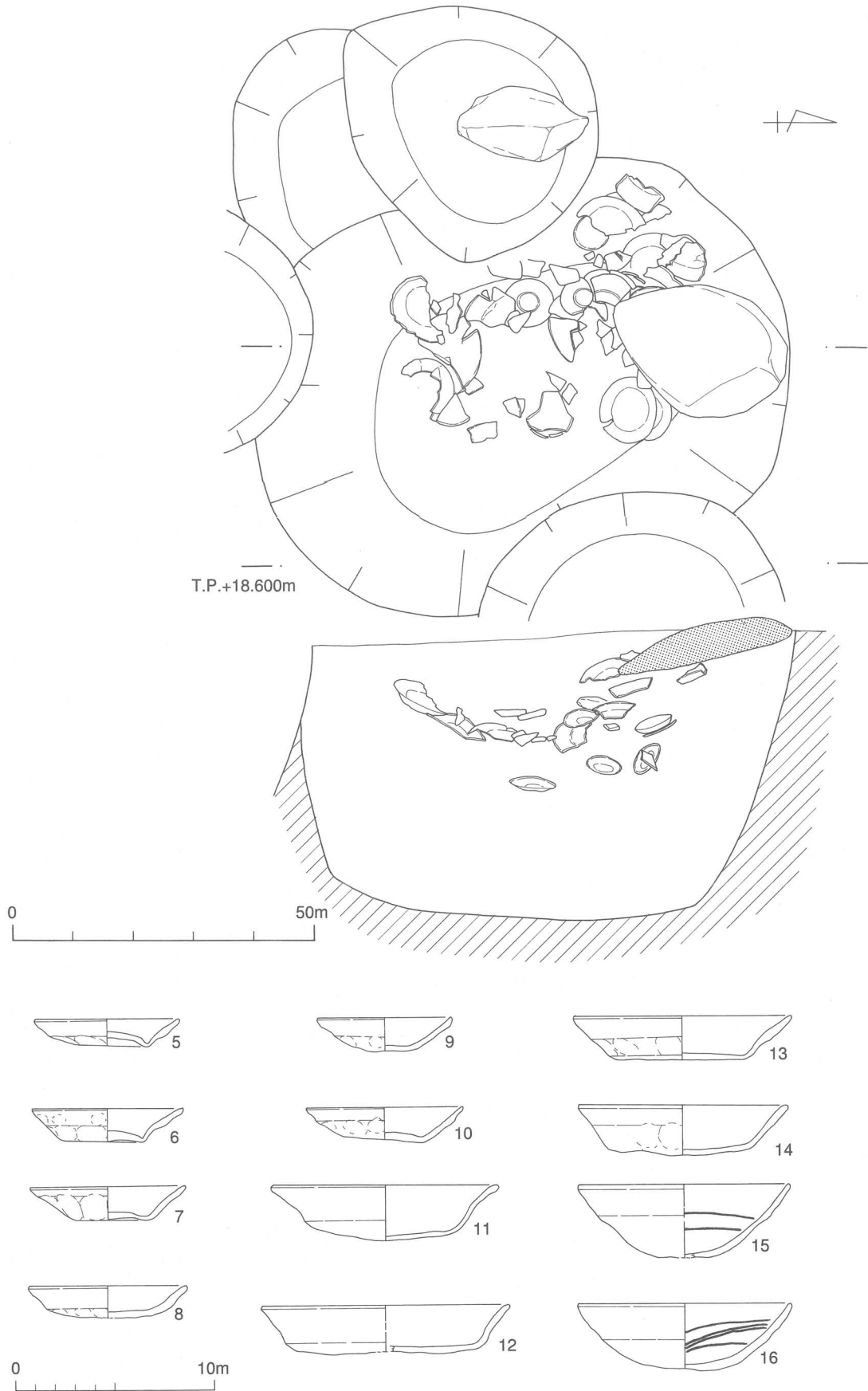
- | | | |
|------------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 1. 盛土 | 18. 5Y6/3オリーブ褐色粘質土層 | 35. 2.5Y6/2灰黄色土層…土坑13 |
| 2. 10YR4/4褐色土層 (瓦・礫を含む) | 19. 2.5Y5/4黄褐色粘質土層 | 36. 灰褐色土層 |
| 3. 2.5Y4/3オリーブ褐色土層 | 20. 2.5Y4/4オリーブ褐色土層 | 37. 暗青灰色土層 |
| 4. 10YR6/6明黄褐色土層 | 21. 2.5Y5/4黄褐色土層 (瓦・礫を含む) | 38. 黄灰色土層 |
| 5. 2.5Y6/6明黄褐色土層 | 22. 2.5Y6/4にぶい黄色土層 | 39. 褐色土層 |
| 6. 10YR5/6黄褐色土層 (瓦・礫を含む) | 23. 2.5Y6/6明黄褐色土層 | 40. 淡灰色土層 |
| 7. 2.5Y5/4黄褐色粘質土層 (炭・瓦・礫混じり) | 24. 10YR5/6黄褐色粘土層 (地山) | 41. 淡灰褐色土層 (礫混じり) |
| 8. 焼土層 | 25. 10YR5/4にぶい黄色粘質土層…溝2 | 42. 暗灰色粘質土層 |
| 9. 10YR4/6褐色粘質土層 | 26. 10YR5/8黄褐色粘質土層 (遺構埋土) | 43. 灰色土層 |
| 10. 10YR5/6黄褐色粘質土層 | 27. 10YR6/6明黄褐色粘土層 (◇) | 44. 青灰色土層 (地山粘土混じり) } 土坑1 |
| 11. 10YR5/4にぶい黄色粘質土層 | 28. 10YR5/6黄褐色粘土層 (◇) | 45. 暗灰色土層 |
| 12. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土層 | 29. 2.5Y6/6明黄褐色土層…P3 | 46. 暗灰褐色土層 |
| 13. 10YR5/4にぶい黄色土層 | 30. 10YR6/6明黄褐色土層 (遺構埋土) | 47. 灰色土層 |
| 14. 2.5Y6/3にぶい黄色粘土層 | 31. 10YR5/8黄褐色粘土層 (◇) | 48. 暗灰色土層 |
| 15. 10YR6/2灰黄褐色粘土層 | 32. 2.5Y6/2灰黄色粘土層…土坑1 | 49. 黒灰色粘土層 } 溝1 |
| 16. 2.5Y6/2灰黄褐色粘質土層 | 33. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土層…土坑2 | |
| 17. 2.5Y5/3オリーブ褐色土層 | 34. 2.5Y6/2灰黄色土層…土坑11 | |



第92図 土層図 (1/80)



第93図 平面図 (1/80)



第94図 土坑1平面・断面図(1/10)、出土遺物(1/3)

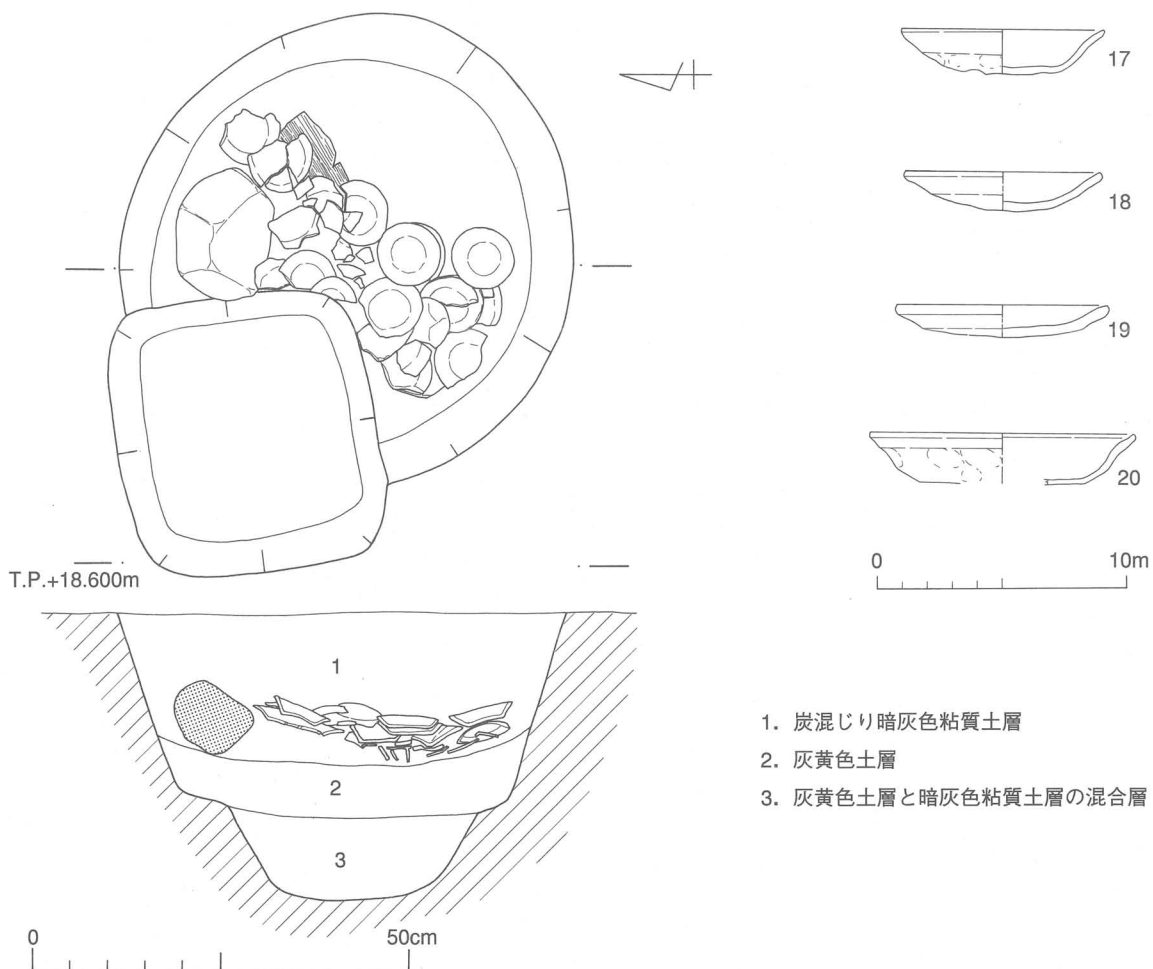
瓦器椀と多量の土師皿（21個体以上）が重なった状態で出土した。土師皿には口径7～8cmの小皿と10.5～12.4cmの皿がある。器形は概ね水平あるいは上げ底の底部と2段ナデにより大きく開く口縁部から成る。何れも在地の土器であるが、にぶい黄橙色を呈するもの（5～8・12～14）と灰白色を呈するもの（9～11）があり、後者の方が胎土は精良である。和泉型瓦器椀（15・16）は高台を持たない、深手の器形を呈す。内面に連続圏線状ミガキを数条廻らせ、外面は指頭圧痕が顕著に残る（尾上編年IV-4期）。14世紀前半頃の所産である。

土坑2（第95図、図版37）

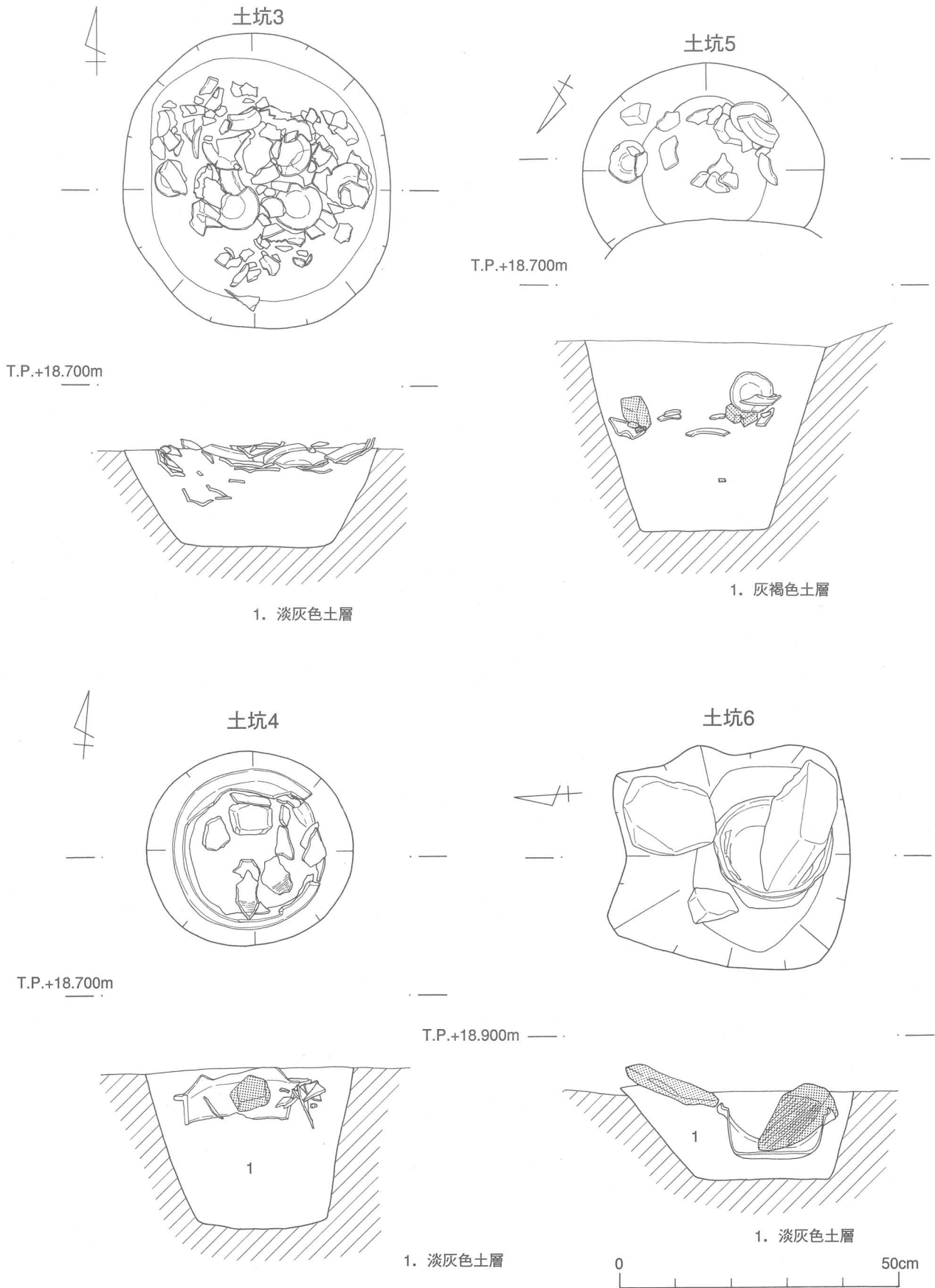
調査区北東側で検出した径約60cm、深さ40cmの土坑である。埋土中層で多量の土師皿（22個体以上）が出土した。出土状態から柱を抜き取った後に完形品を埋納したと考えられる。土師皿には口径8cm前後の小皿と10～12cmの皿がある。器形・色調は土坑1の土師皿と同様であるが、小皿では1段ナデのもの（18）や器高が低い、1段ナデのもの（19）が多い。13世紀後半頃の和泉型瓦器椀が一緒に出土している。

土坑3（第96・97図、図版37）

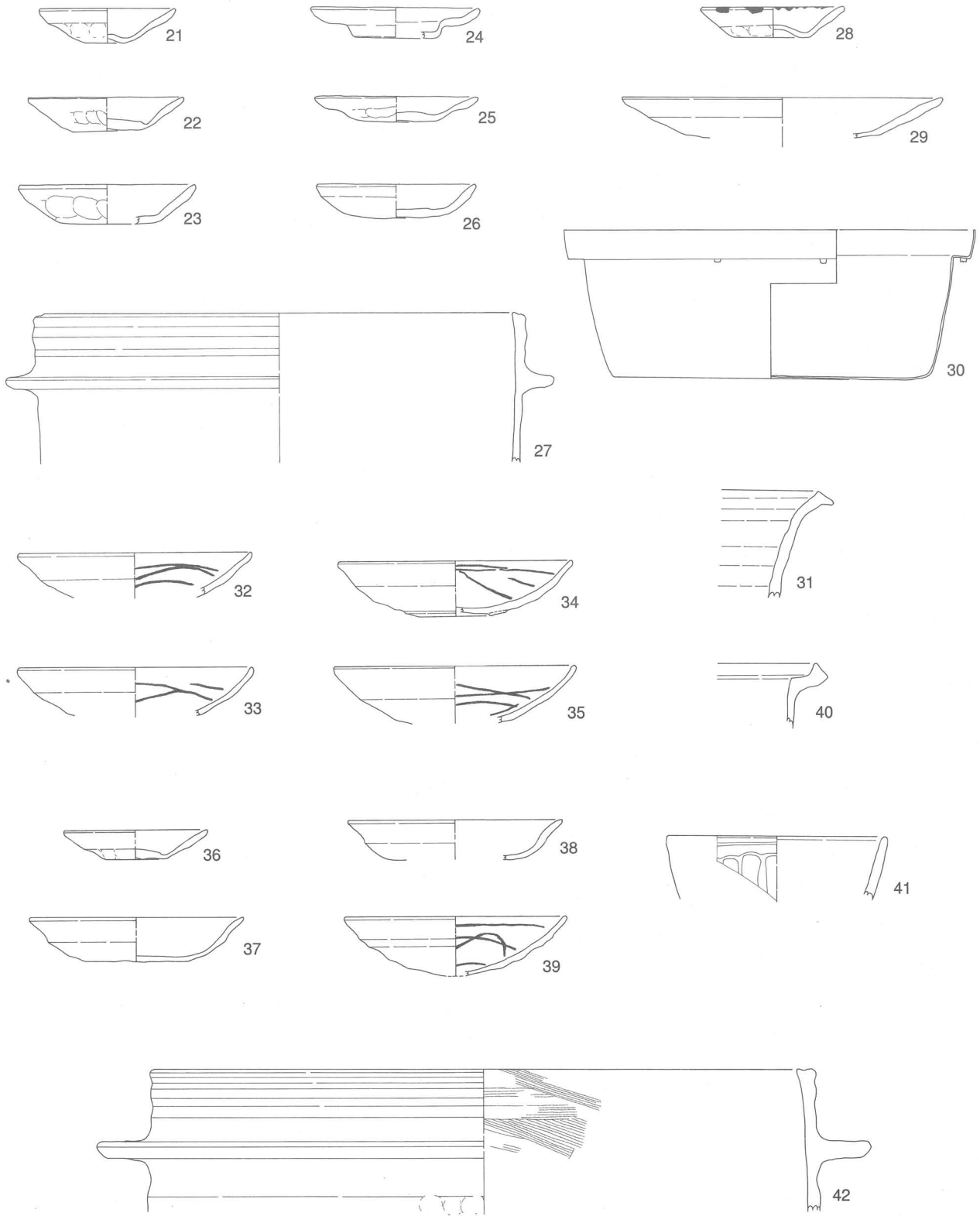
土坑1の北側で検出した径約50cm、深さ18cmの土坑である。埋土上面から炭片と多量の土師皿（27個体以上）が出土している。土師皿には8cm前後の小皿と10cm前後、11cm前後の皿がある。器形は概ね水平あるいは上げ底の底部と2段ナデにより大きく開く口縁部から成るものが中心である。



第95図 土坑2 平面・断面図（1/10）、出土遺物（1/3）



第96図 土坑3・4・5・6遺物出土状況(1/10)



第97图 土坑3·4·5·6·7·8·9·10·12·13·14·19出土遗物(1/3)

小皿ではヘソ皿(21)、受皿状の皿(24)などがある。13世紀中頃の所産であろう。

土坑4 (第96・97図、図版37)

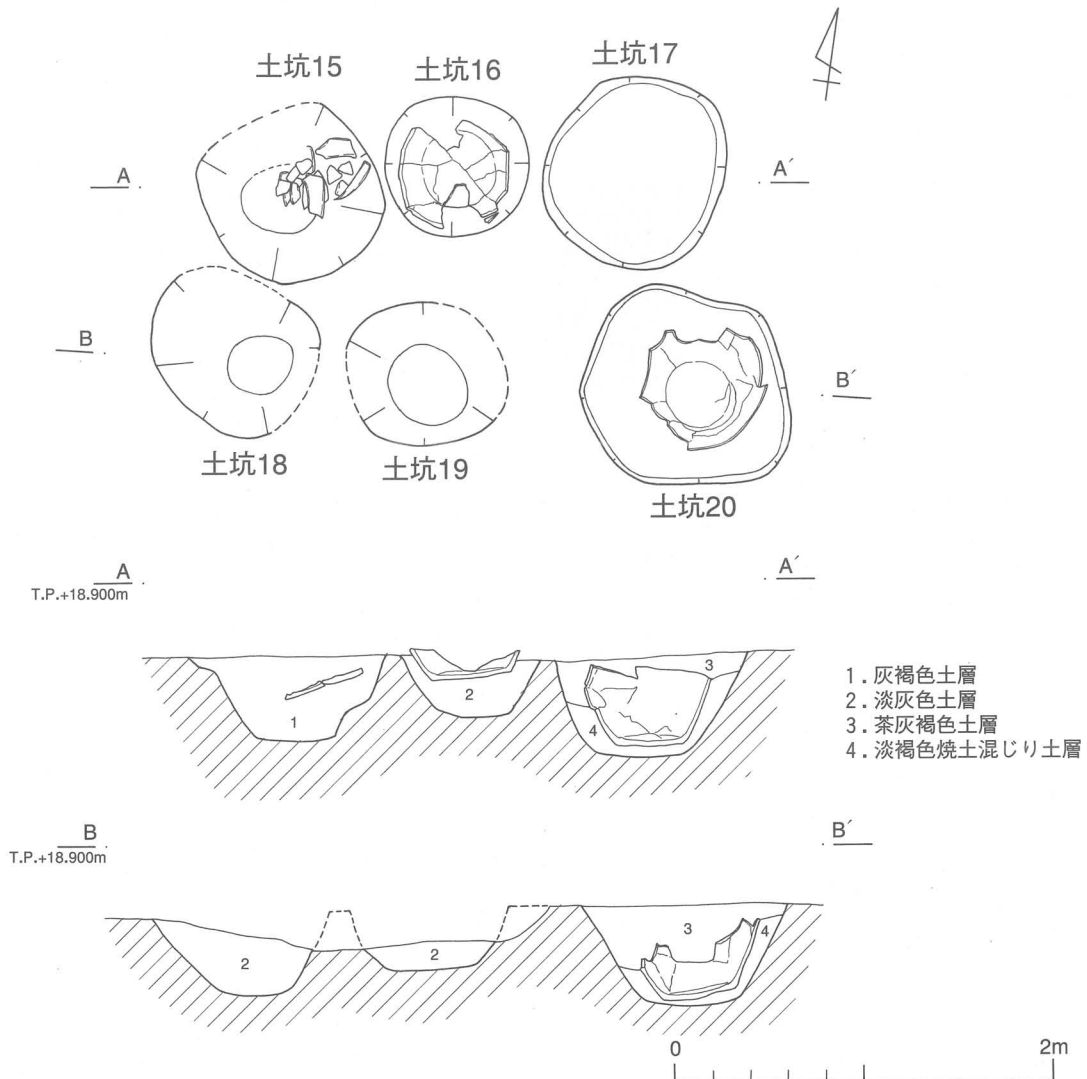
土坑6の西側で検出した径約35cm、深さ30cmの土坑である。底部を欠いているが、瓦質羽釜(27)が倒立状態で置かれている。羽釜は高く直立する口縁部に短い鑊が廻る。摩耗のため内外面の調整は不明瞭である。

土坑5 (第96・97図、図版37)

土坑22を切っている径約40cm、深さ35cmの土坑である。埋土中位から土師皿(28・29)が置かれた状態で出土している。28は上げ底の底部に外反して開く口縁部が続く。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。29は大型の皿である。平底に大きく開く口縁部が続く。何れも口縁部は2段ナデする。

土坑6 (第96・97図、図版37)

調査区中央西よりで検出した一辺約40cm、深さ17cmの方形の土坑である。銅鍋(30)が正立の状態で出土している。上に被せていた石が中にずり落ちた様子が分る。

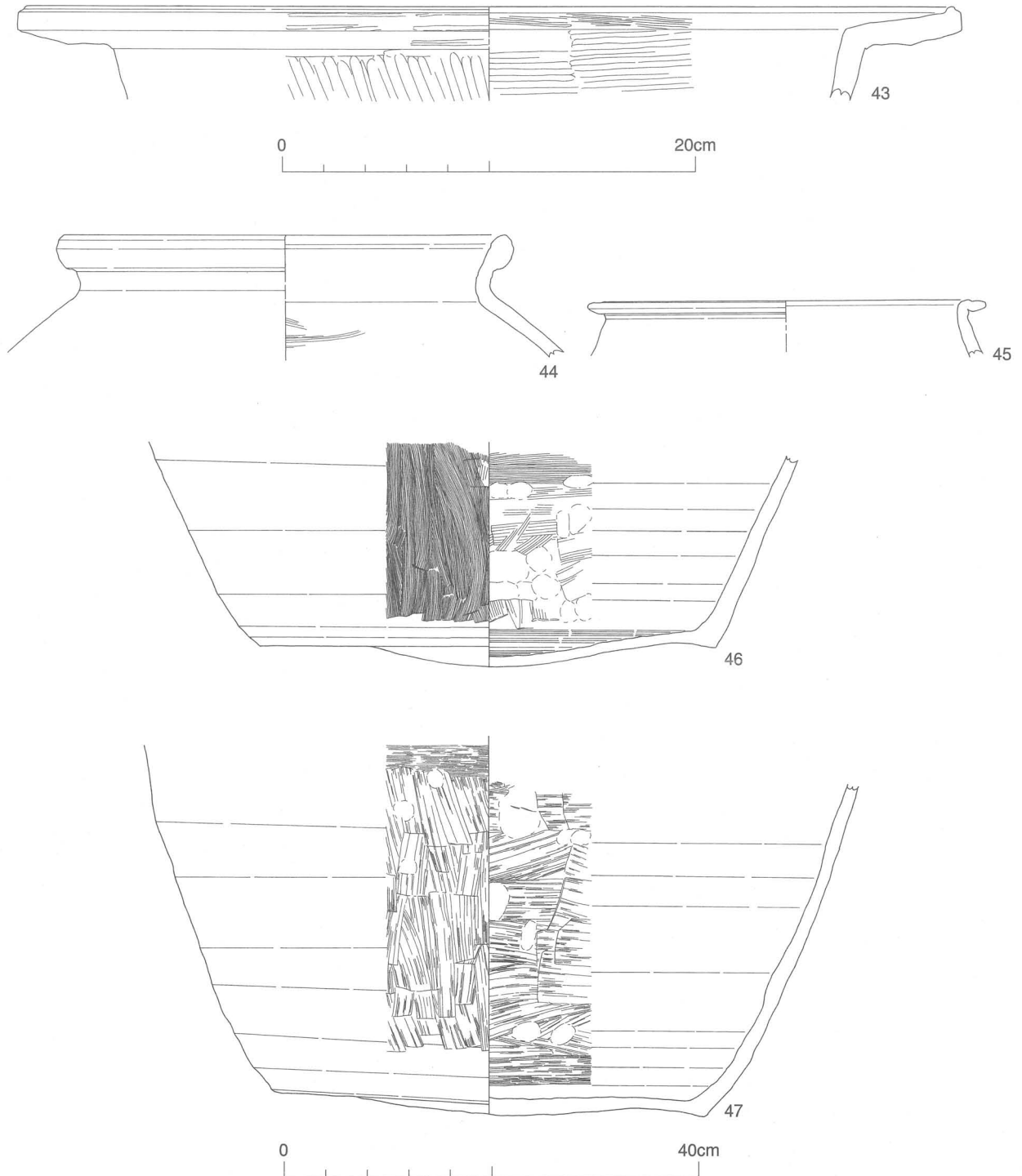


第98図 埋甕遺構平面・断面図 (1/40)

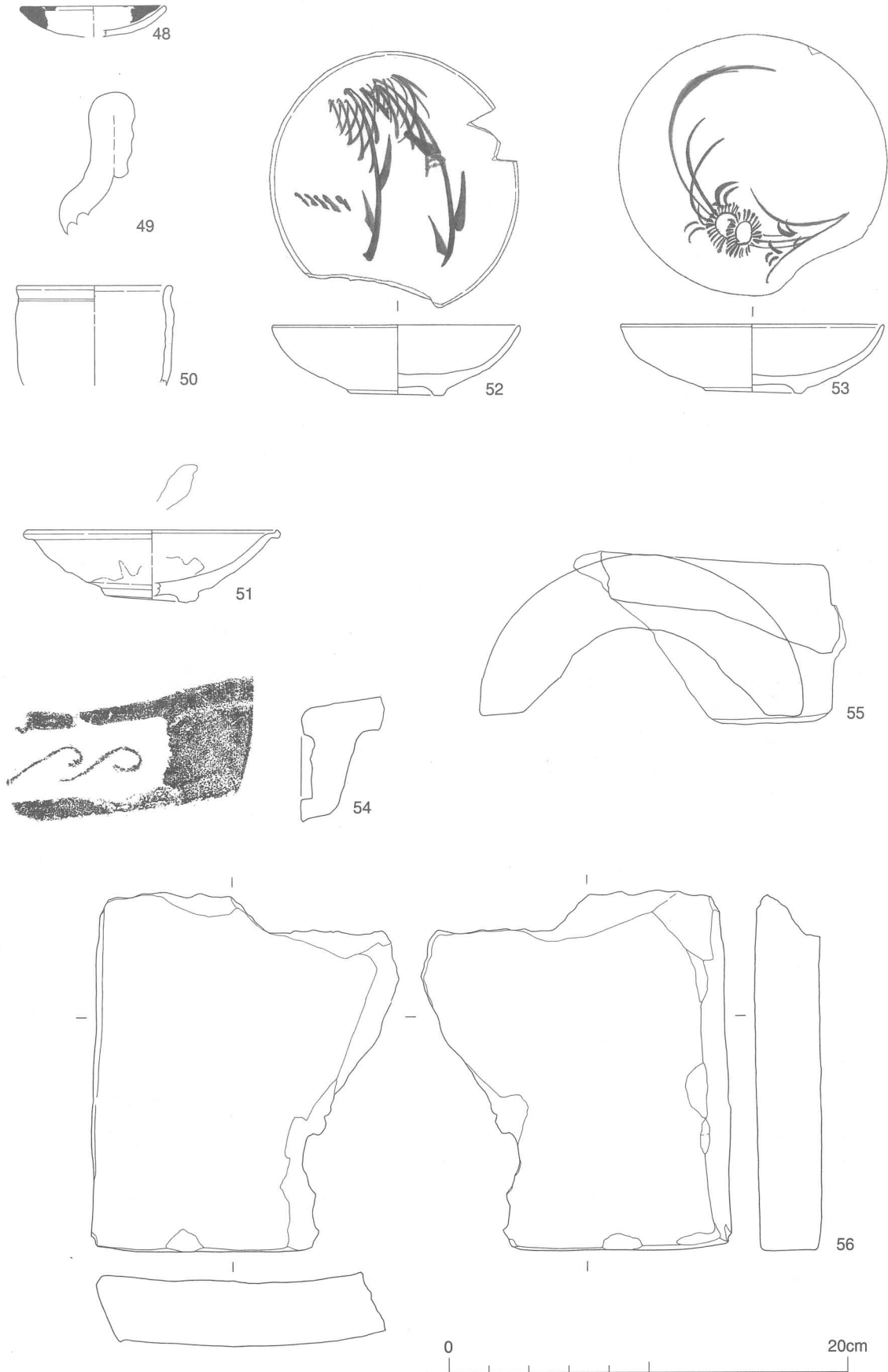
出土した銅鍋は厚さ約1.5mmを測り、体部から口縁に至る屈曲はシャープである。内面に鑿痕が残っていることから、薄い銅板から叩き出したものと考えられる。

土坑7（第97図、図版37）

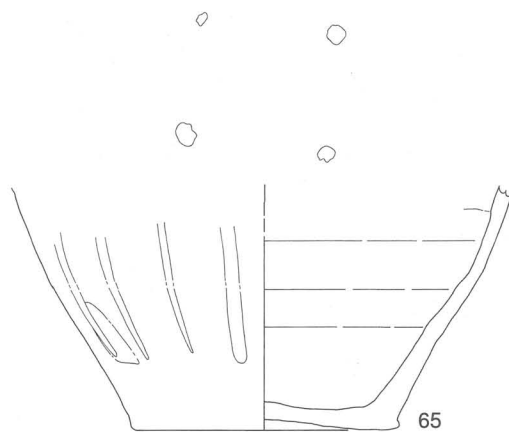
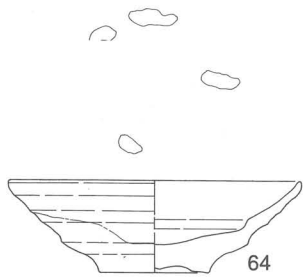
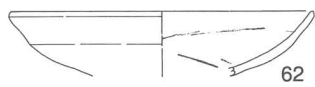
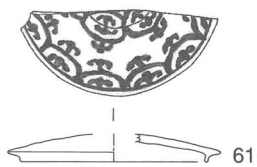
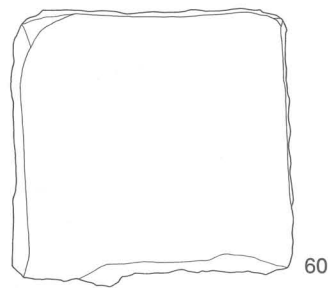
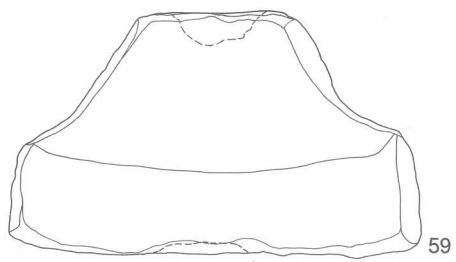
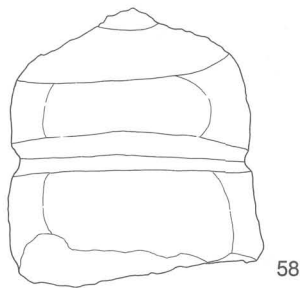
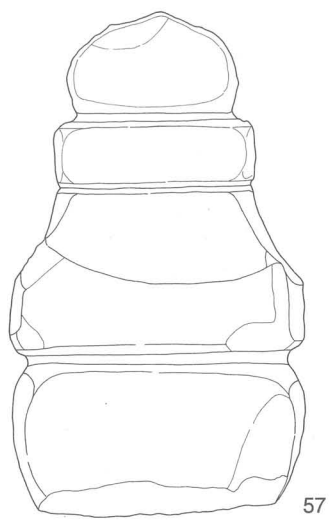
土坑9の東側で検出した径約35cm、深さ13cmの土坑である。13世紀後半頃の和泉型瓦器椀（32）が出土している。



第99図 埋甕遺構出土遺物（1/3・1/6）



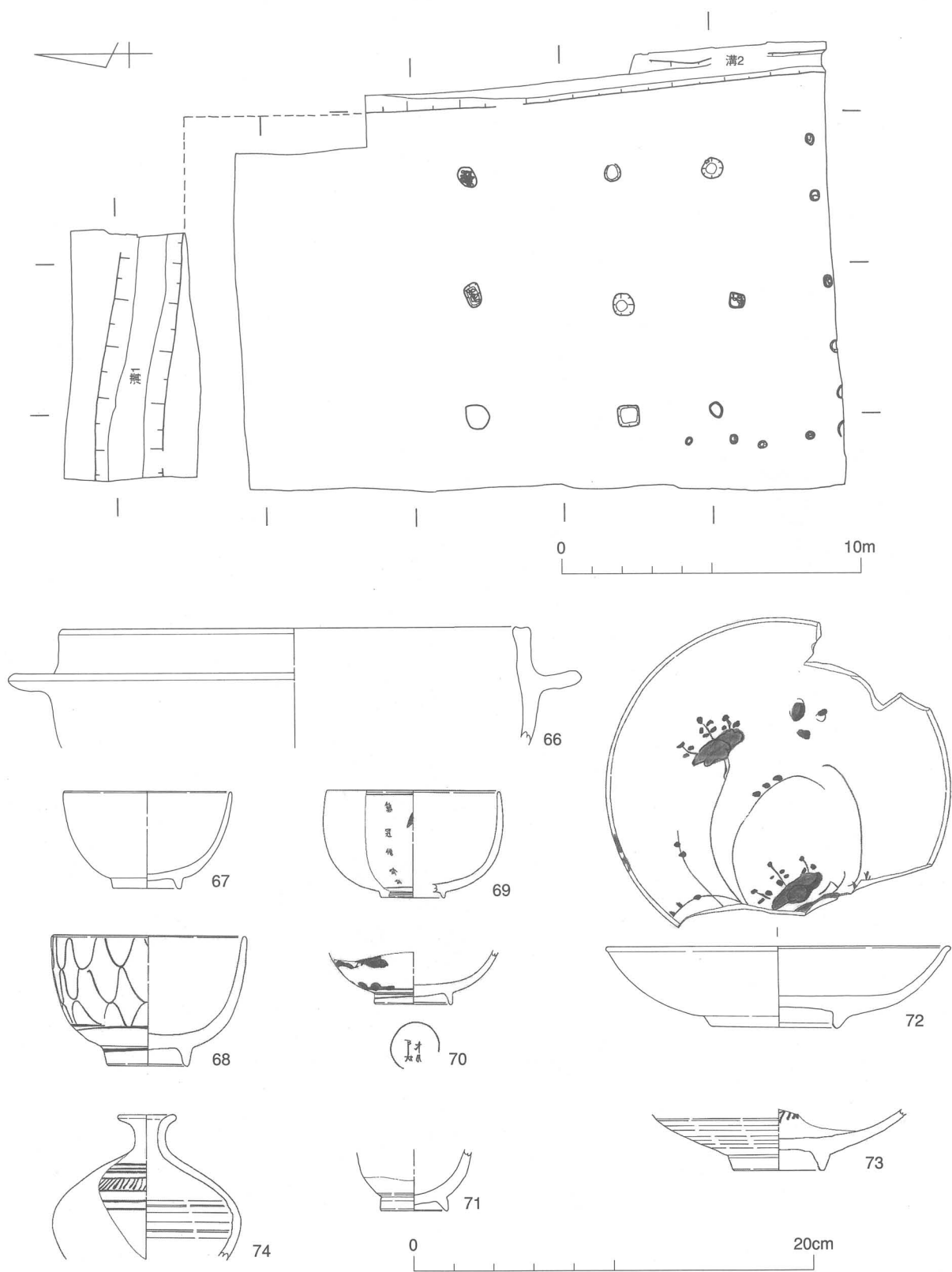
第100図 土坑22出土遺物 (1/3)



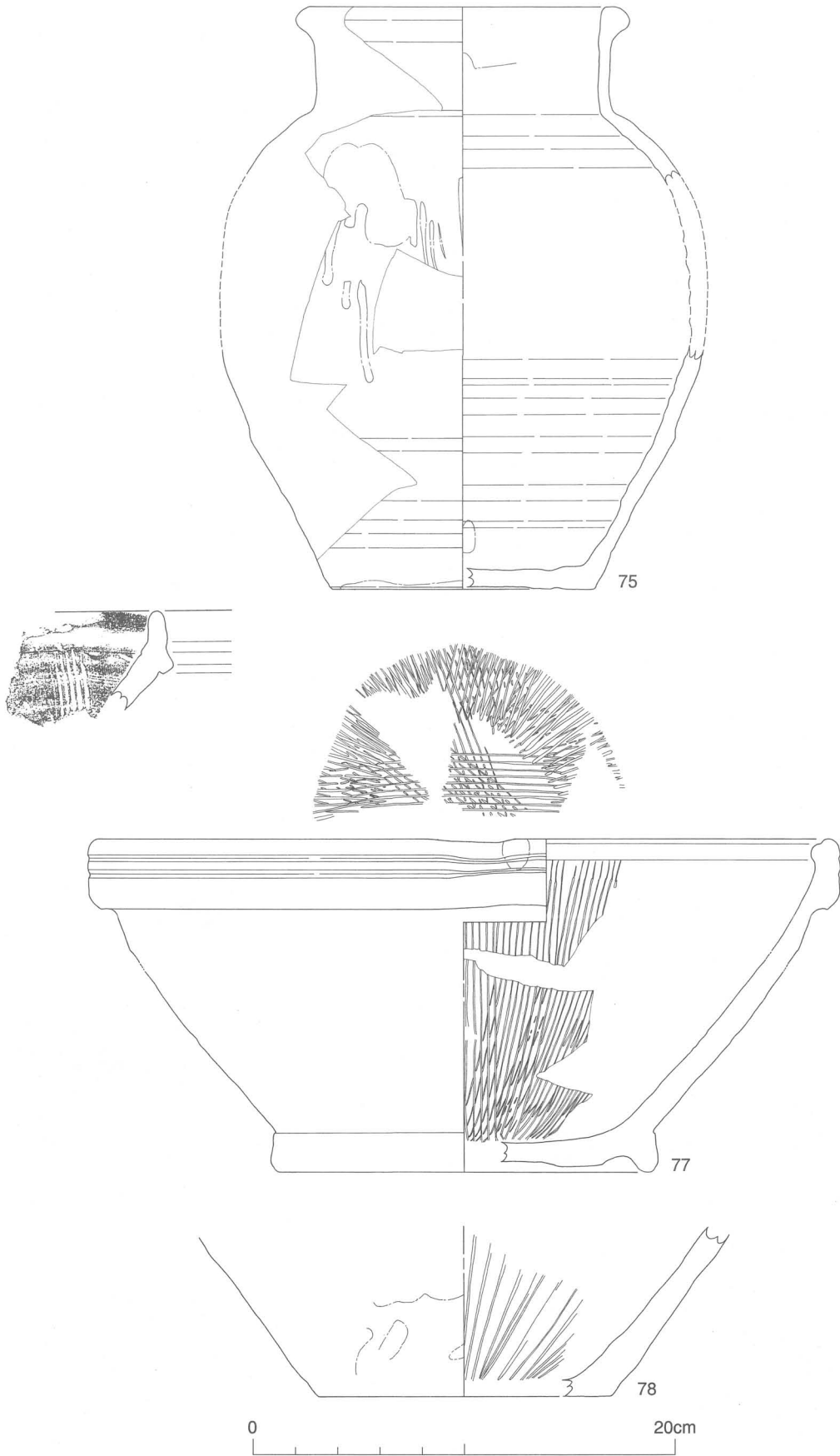
第101図 土坑22・23・24・25・26出土遺物（1/3・1/4）

土坑8 (第97図、図版37)

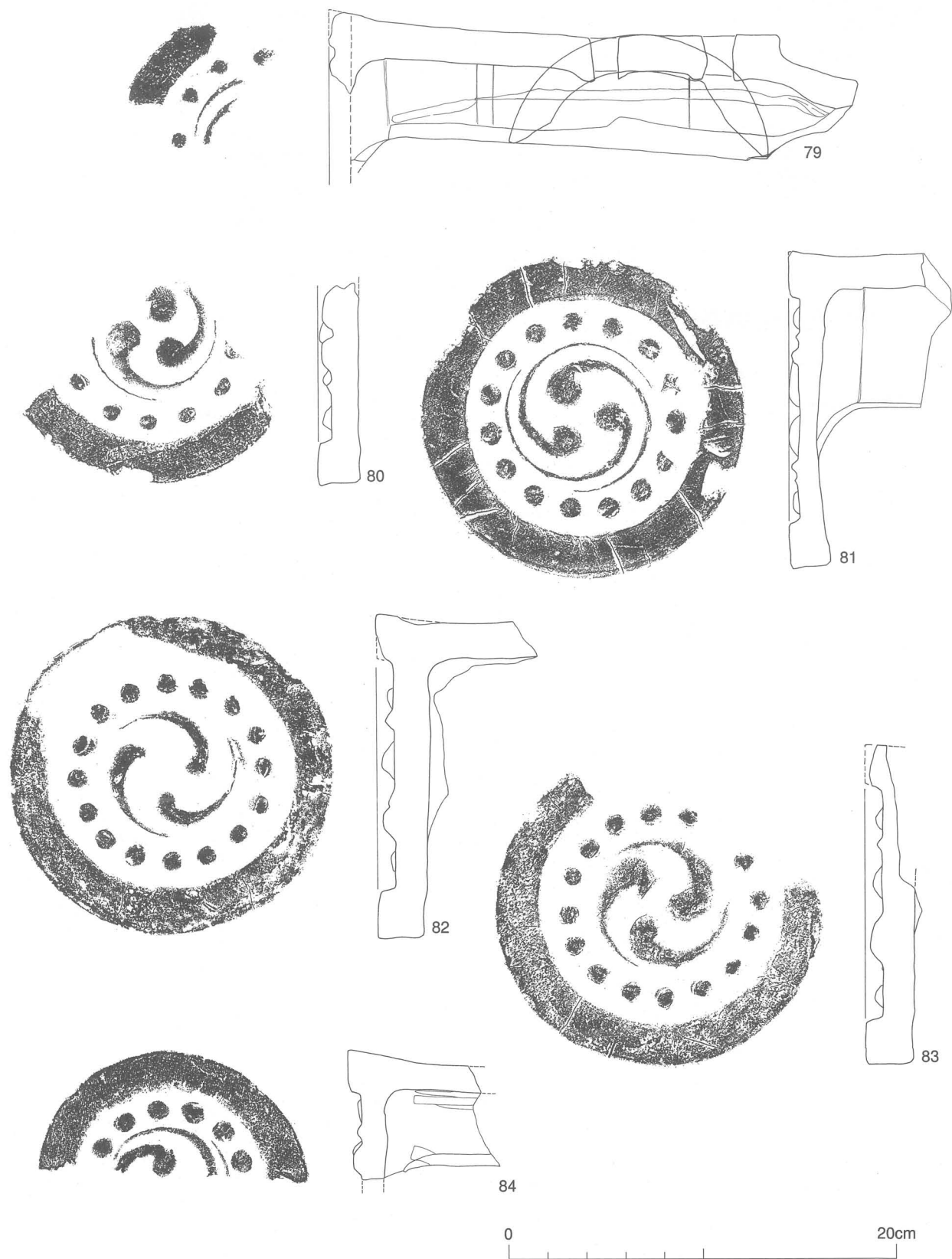
土坑4の東側で検出した径約45cm、深さ32cmの土坑である。中央に径20cm、深さ8cmの柱穴を持つ。土師皿片、13世紀後半頃の和泉型瓦器碗(33)が出土している。



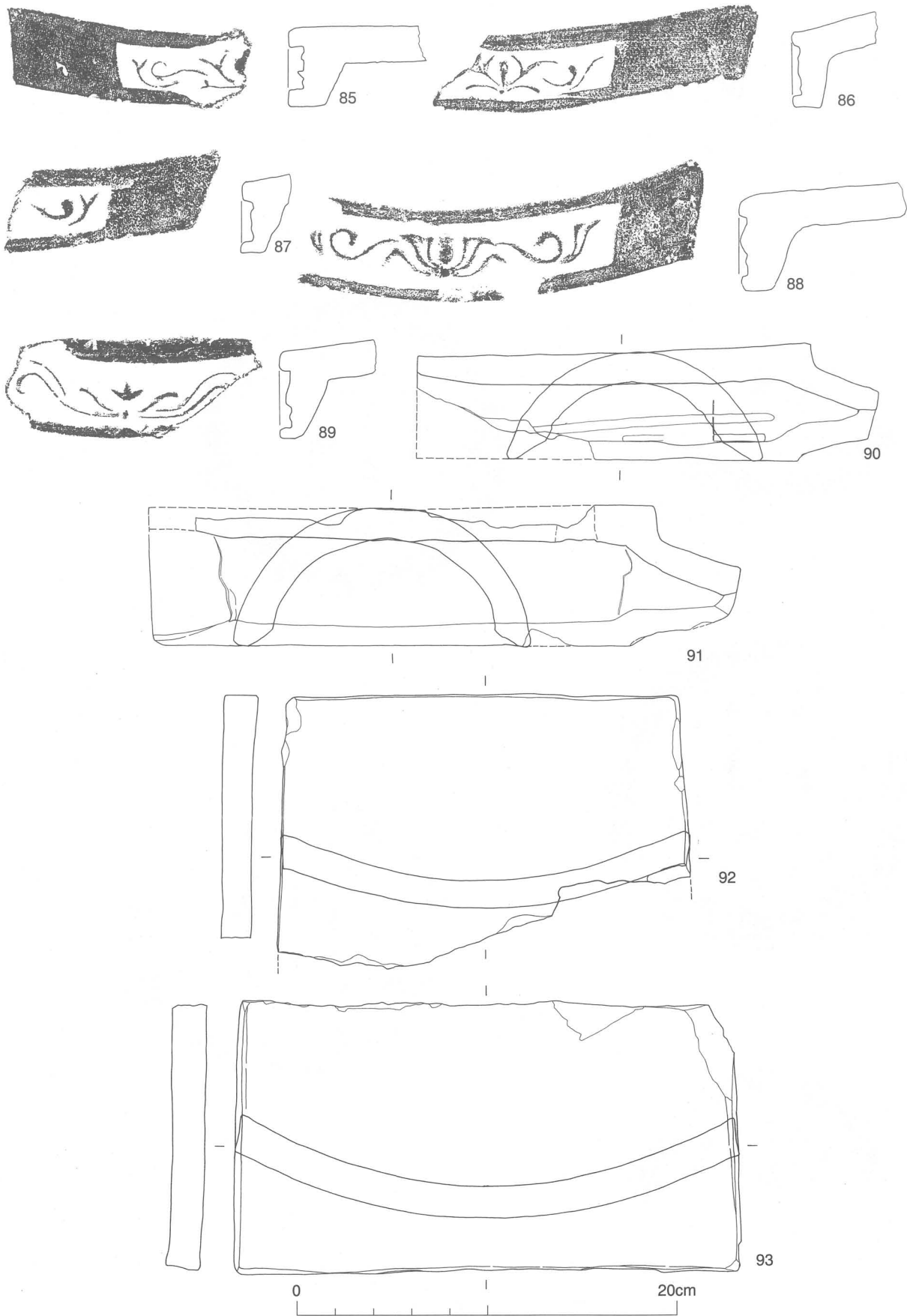
第102図 溝1・2平面図(1/200)、溝1出土遺物(1)(1/3)



第103図 溝1 出土遺物 (2) (1/3)



第104図 溝1出土遺物(3)(1/3)



第105図 溝1出土遺物(4)(1/3)

土坑9 (第97図、図版37)

土坑7の西側で検出した90cm×70cm、深さ12cmの楕円形の土坑である。中央に径25cm、深さ34cmの柱穴を持つ。土師皿、木炭、和泉型瓦器椀(34・35)が出土している。瓦器椀は粘土紐を貼り付けただけの低い帯状の高台を持つ。内面には口縁部に2条程のミガキを、見込みに3条程の平行線状ミガキを施す。外面には指頭圧痕が目立つ(尾上編年IV-3期)。13世紀後半の所産である。

土坑10 (第97図、図版37)

土坑1の南側で検出した1.3m×80cm、深さ45cmの楕円形の土坑である。土師皿、瓦器椀、平瓦片、炭片が出土している。土師皿の器形は、概ね水平あるいは上げ底の底部と2段ナデにより大きく開く口縁部から成り、口径7.4cm(36)の小皿と11cm(37・38)の皿がある。和泉型瓦器椀(39)は高台を持たず、内面に数条の連続圏線状ミガキを施す。外面には指頭圧痕が顕著に残る(尾上編年IV-3期)。13世紀後半～14世紀頃の所産である。

土坑12 (第97図)

土坑2の北側で検出した径50cm、深さ28cmの土坑である。須恵器壺(31)が出土している。

土坑13 (第97図)

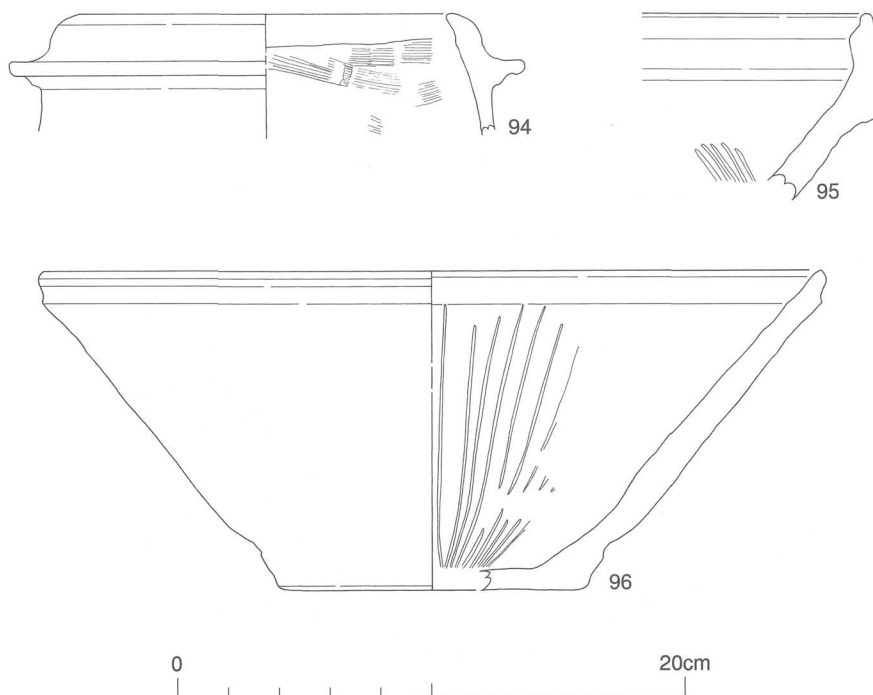
土坑1の南側で検出した径70cm、深さ40cmの土坑である。2段ナデを持つ土師皿、和泉型瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質塼(40)などが出土している。

土坑14 (第97図、図版37)

調査区南西付近で検出した40cm×35cm、深さ20～30cmの不整形土坑である。瓦質羽釜(42)が出土している。

埋甕 (第98・99図、図版37・38)

土坑22の北側に隣接する遺構である。東西に3個、南北2列に6個の土坑が並んでいる。土坑は径約1m、深さ50cmを測るが、中央に位置する土坑16・19は径約80cm、深さ30～35cmと小さく、掘り



第106図 溝2出土遺物(1/3)

方は浅い。土坑16・17・20では据えられた備前焼大甕が元位置で出土している。土坑19から14世紀中～後半頃の丹波焼甕（45）が出土している。埋甕遺構を切っている土坑21からは14世紀後半頃の備前甕（44）が出土している。埋甕遺構の時期をその頃に求めることができよう。

土坑22（第100・101図、図版38）

調査区西端中央で検出した1.8m×2.4m以上、深さ20cmの長方形の土坑である。土坑は拳大から人頭大の礫で埋まっていた。また、東端部の集石については直線上の面を持つような状態が認められた。17世紀前半頃の土師皿（48）、肥前白磁染付皿（52・53）や砂目痕を持つ唐津焼溝縁皿（51）、瓦（54～56）、五輪塔（57～60）などが出土した。

土坑24（第101図）

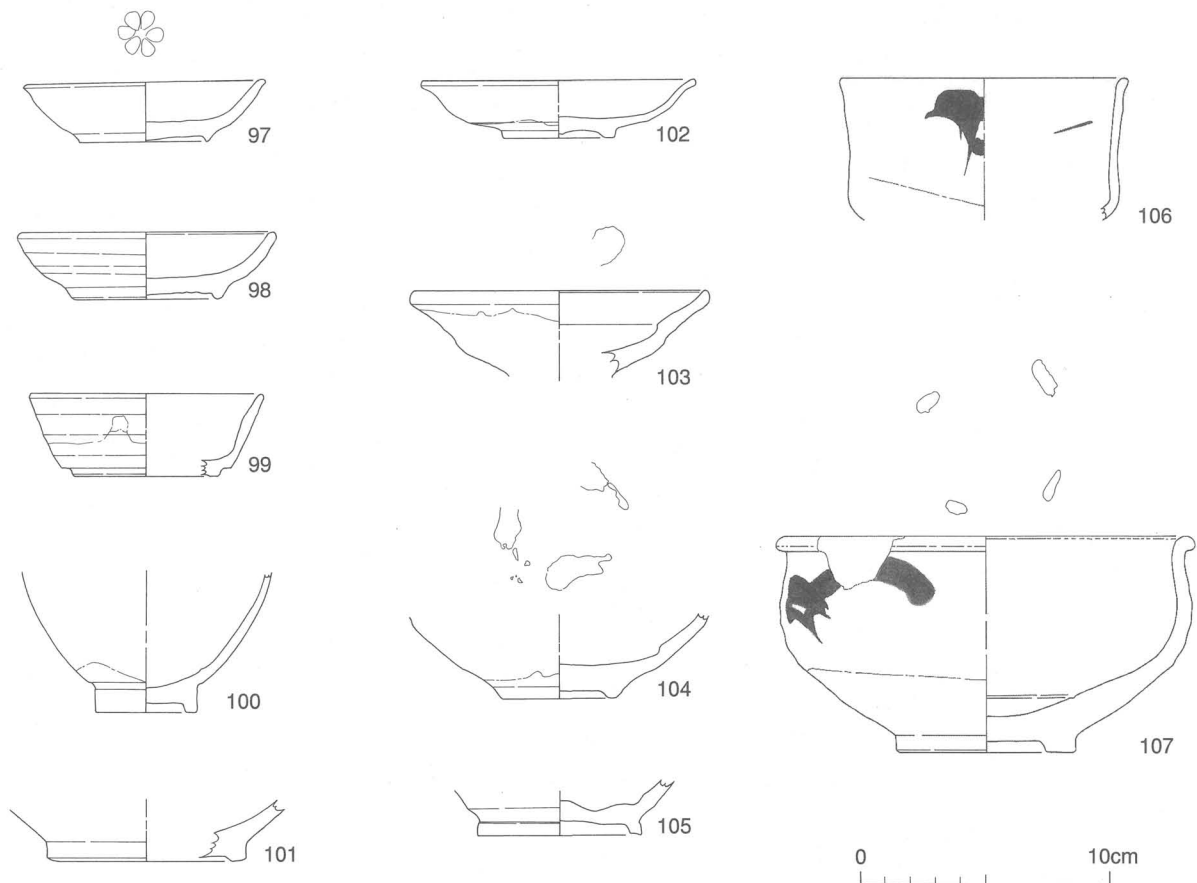
土坑29の東側で検出した一辺70cm、深さ30cmの方形土坑である。遺物では播目をヘラ描きする丹波焼播鉢（63）が出土している。

土坑25（第101図）

調査区中央付近で検出した径30cm、深さ15cmの土坑である。遺物では胎土目痕を持つ唐津焼皿（64）が出土している。17世紀初頭頃のものである。

溝1（第102～105図、図版38）

調査区北端で検出した幅2m、深さ60cmの東西方向の溝である。ほぼ直線上の線形を持ち、断面形は逆台形である。出土遺物には溝の性格上、新旧の遺物の混入が見られるが、主に17世紀前半から18世紀にかけての陶磁器類と多量の瓦がある。67～70・72～74は肥前磁器である。67は白磁碗、68は



第107図 包含層出土遺物（1）（1/3）

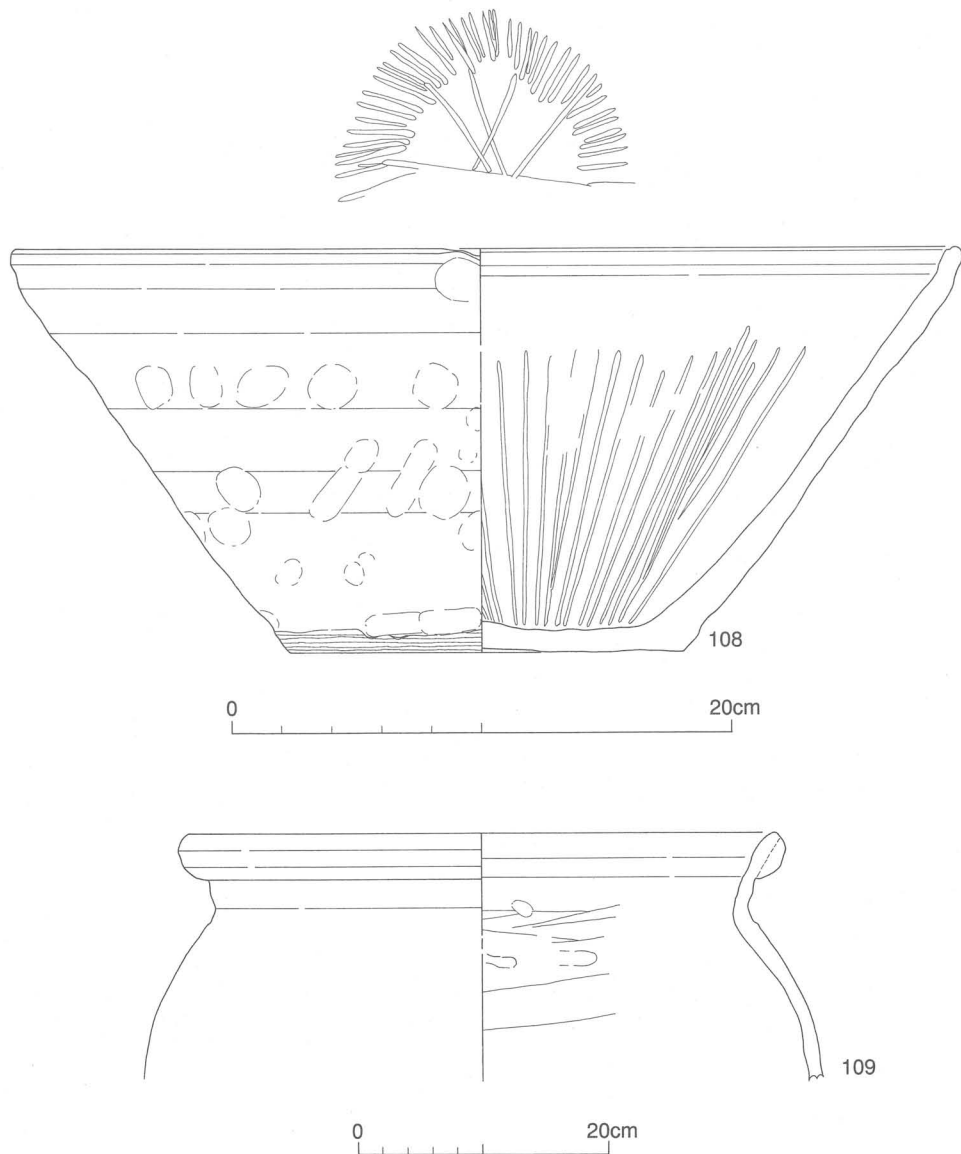
網目文染付碗、72は見込みに端正な草花文を描く染付皿、74は色絵油壺である。77は堺焼播鉢、78は丹波焼播鉢である。75は19世紀中～後半の陶器壺で、混入と思われる。79～84は軒丸瓦である。79は丸瓦凹面に吊紐痕が残る。80・82～84は左巻き三巴文、81は右巻き三巴文である。84は小振りの瓦で、凹面に内タタキを施している。85～89は均整唐草文軒平瓦である。90・91は丸瓦で、90は凹面に内タタキを加えている。84と同様これは18世紀以降の特徴である。91の凹面にはコビキB痕が残っている。

溝2（第106図、図版36）

調査区東端で検出した幅80cm以上、深さ20～30cmの南北方向の溝である。ほぼ直線上の線形で、底には拳大から人頭大の石が敷かれていた。出土遺物には瓦質羽釜（94）、備前焼播鉢（97）、丹波焼播鉢（96）、瓦などがある。

包含層出土遺物（第107・108図、図版38）

包含層からは主に16世紀から17世紀前半の遺物が出土している。97・98は瀬戸・美濃焼灰釉皿・99は灰釉鉢、100は唐津焼碗・102～104は灰釉皿・106は灰釉鉄絵碗・107は灰釉鉄絵鉢である。108は播目をヘラ描きする丹波焼播鉢、109は備前焼大甕である。



第108図 包含層出土遺物（2）（1/3・1/4）

4. まとめ

今回の調査では、織田信長による焼き討ち以前の、特に古代における昆陽寺の様子を物語るような遺構を検出することはできなかったが、中世から近世にかけての昆陽寺の様相の一端が見えてきた。全体像については、今後行われるであろう周辺部の調査も含めて検討する必要があるが、今回の調査で判明した点について簡単にまとめておく。

【ピット群について】

調査では、数多くのピットを検出しているが、一戸の建物としてまとまるものは認められなかった。しかし、ピットの中には根石や集石を持つものがいくつもあり、瓦の出土が目立つことから、瓦葺きの建物が存在したことが容易に推定できる。これらの建物の性格や昆陽寺との関係についてはわからないが、埋甕等との関係から昆陽寺に関係する何らかの施設であろうと思われる。

【土坑群について】

調査区の西端部分において、ほぼ南北に一直線に並ぶ土坑は、全体を検出することはできなかったが、何れも平面形が長方形であり、土坑22・27では、底面に礫を敷き詰めているという共通した特徴を持っている。骨片など何らかを埋葬したような痕跡は認められず、その性格は不明である。

【土師皿を伴う遺構について】

土坑2や土坑3など多量の土師皿が出土した土坑を検出している。遺物は床面ではなく、埋土中層から上層の出土である。土坑を半分埋めた段階で土師皿を上向き状態で、丁寧に置いており、その際に礫と一緒に埋めている場合もある。出土状況から廃棄とは考えにくく、意図的に埋めたと考えるのが妥当であろう。

【焼土層について】

調査区の南側半分には焼土層が認められた。出土遺物から14世紀頃から江戸時代までの間のある時期に形成されたものと考えられる。この焼土層が織田信長による焼き討ちの時に形成されたものかは、今回は特定できなかった。

【埋甕について】

土坑15～19は近接して配されており、土坑17・16・20では14世紀頃の備前焼大甕底部が元位置を保った状態で出土していることから、3個・2列に並ぶ「埋甕」と考えられる。土坑17と土坑22で見られる焼土の混入が他の土坑には認められないことから同時期に存在したかは疑問が残る。また、どのような施設の一部であったかは不明である。

【溝1と溝2について】

調査区の北端と東端で検出した2条の溝は、出土遺物や遺構埋土から同時期に存在したものと考えられる。今回の調査対象外となった調査区北東部分でこの溝はつながるものと推定され、深さはやや浅いが、幅が溝1で2m、溝2で0.8m以上と広いことやこの溝からのみ瓦が多数出土していることから、何らかの瓦葺きの建物を区画するための溝であると思われる。

しかし、溝からの出土遺物には時期差が認められることから、溝の終焉は同時期でなかったようである。溝2からは17世紀初頭頃の遺物が出土しており、この頃には既に埋められていたと考えられる。溝1のみが18世紀後半まで存続していたようであるが、この段階まで区画溝として機能していたかは不明である。

(船越)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑29	第93図-1	土師皿	素焼き	口径 (8.0) cm 器高 1.2 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部ナデ 内面口縁部ヨコナデ 底部ヨコナデとナ デ	在地 20%
土坑28	第93図-2	土師皿	素焼き	口径 (9.6) cm 器高 1.8 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部ナ デ(指頭圧痕残る) 底部ナデ 内面ヨコナデ 底部 ナデ	在地 45%
土坑27	第93図-3	土師小皿	素焼き	口径 (9.6) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面ヨコナデ	在地 10%
	第93図-4	甕	須恵器		外面体部平行タタキ 内面頸部ロクロナデ 体部面 取り気味のナデ	東播系 3%
土坑1	第94図-5 図版37-5	土師小皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.4 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部か ら底部ナデ(指頭圧痕残る) 内面ヨコナデ 底部ナ デ	在地 100%
	第94図-6 図版37-6	土師小皿	素焼き	口径 (7.6) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナ デ(指頭圧痕残る) 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 60%
	第94図-7 図版37-7	土師小皿	素焼き	口径 7.8 cm 器高 1.7 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部か ら底部ナデ(指頭圧痕残る) 内面ヨコナデ 底部ナ デ	在地 90%
	第94図-8 図版37-8	土師小皿	素焼き	口径 7.9 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ(指頭 圧痕残る) 内面ナデ	在地 95%
	第94図-9 図版37-9	土師小皿	素焼き	口径 6.7 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナ デ(指頭圧痕残る) 内面ヨコナデ	90%
	第94図-10 図版37-10	土師小皿	素焼き	口径 7.8 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナ デ(指頭圧痕残る) 内面ヨコナデ 底部ナデ	90%
	第94図-11	土師皿	素焼き	口径 11.3 cm 器高 2.8 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナ デ(指頭圧痕残る) 内面ヨコナデ 底部ナデ	50%
	第94図-12 図版37-12	土師皿	素焼き	口径 (12.4) cm 器高 2.5 cm	手捏ね成形 外面ヨコナデ 底部ナデ(指頭圧痕残 る) 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 50%
	第94図-13	土師皿	素焼き	口径 10.5 cm 器高 2.5 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナ デ(指頭圧痕残る)	在地 95%
	第94図-14	土師皿	素焼き	口径 11.0 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面体部ヨコナデ 底部ナデ(指頭圧 痕残る) 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 60%
	第94図-15 図版37-15	椀	瓦器	口径 (10.6) cm 器高 3.7 cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕とナデ 内面口 縁部ヨコナデ 体部ナデと螺旋状ミガキ	和泉型 30% 14c前半
	第94図-16 図版37-16	椀	瓦器	口径 (10.7) cm 器高 3.3 cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面ナデと螺 旋状ミガキ	和泉型 70% 14c前半
	土坑2	第95図-17 図版37-17	土師小皿	素焼き	口径 8.1 cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナ デ(指頭圧痕残る)
第95図-18		土師小皿	素焼き	口径 (7.8) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ(指頭 圧痕残る) 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 20%
第95図-19 図版37-19		土師小皿	素焼き	口径 (8.4) cm 器高 1.3 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ(指頭 圧痕残る) 内面ヨコナデとナデ	在地 40%
第95図-20 図版37-20		土師皿	素焼き	口径 (10.6) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部ナデ 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 50%

第25表 第8次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑3	第97図-21 図版37-21	土師小皿	素焼き	口径 7.0 cm 器高 1.8 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部ナデ 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 90%
	第97図-22 図版37-22	土師皿	素焼き	口径 8.0 cm 器高 1.8 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面体部指頭圧痕 内面ナデ	在地 70%
	第97図-23 図版37-23	土師皿	素焼き	口径 (9.1) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕	在地 20%
	第97図-24 図版37-24	土師皿	素焼き	口径 (8.6) cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 10%
	第97図-25 図版37-25	土師皿	素焼き	口径 8.2 cm 器高 1.3 cm	手捏ね成形 外面ナデと指頭圧痕 内面ナデ	在地 30%
	第97図-26 図版37-26	土師皿	素焼き	口径 (8.1) cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 25%
土坑4	第97図-27 図版37-27	羽釜	瓦質	口径 (24.2) cm	摩耗のため調整不明	摂津型 40%
土坑5	第97図-28 図版37-28	土師小皿	素焼き	口径 7.3 cm 器高 1.6 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部ナデ 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 100% 口縁部煤付着
	第97図-29 図版37-29	土師皿	素焼き	口径 (16.6) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 底部ナデ 内面ヨコナデ	在地 25%
土坑6	第97図-30 図版37-30	鍋	銅	口径 21.3 cm 器高 7.7 cm 底径 16.2 cm	外面口縁部鐮状下部に一對の突起2ヶ所有り	80% 緑青付着
土坑12	第97図-31	壺	須恵器		内面ロクロナデ	3% 外面自然釉掛かる
土坑7	第97図-32 図版37-32	椀	瓦器	口径 (12.0) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕とナデ 内面口縁部ヨコナデ 体部ナデと螺旋状ミガキ	和泉型 15% 13c後半
土坑8	第97図-33 図版37-33	椀	瓦器	口径 (12.0) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕とナデ 内面口縁部ヨコナデ 体部ナデと螺旋状ミガキ	和泉型 30% 13c後半
土坑9	第97図-34 図版37-34	椀	瓦器	口径 (12.0) cm 器高 2.9 cm 高台径 5.2 cm	貼り付け高台 外面口縁ヨコナデ 体部指頭圧痕 高台周辺ヨコナデ 内面口縁ヨコナデと連続圏線状ミガキ 見込みナデと平行線状ミガキ	和泉型 40% 13c中頃
	第97図-35 図版37-35	椀	瓦器	口径 (12.4) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面連続圏線状ミガキ	和泉型 25% 13c中～後
土坑10	第97図-36 図版37-36	土師小皿	素焼き	口径 (7.4) cm 器高 1.5 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部指頭圧痕 内面ヨコナデ 底部ナデ	在地 35%
	第97図-37 図版37-37	土師皿	素焼き	口径 (11.0) cm 器高 2.3 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ 内面ヨコナデ 底部ナデ	50%
	第97図-38 図版37-38	土師皿	素焼き	口径 (11.0) cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 底部ナデ 内面ヨコナデ	25%
	第97図-39 図版37-39	椀	瓦器	口径 (11.4) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面口縁部ヨコナデ 体部ナデと螺旋状ミガキ	和泉型 45% 13c後半
土坑13	第97図-40	鍋	瓦質		内外面口縁部ヨコナデ	3% 15c

第26表 第8次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑19	第97図-41	椀	青磁	口 径 (11.1) cm	外面蓮弁文	中国製 15% 15c中頃
土坑14	第97図-42 図版37-42	羽釜	瓦質	口 径 (34.0) cm	外面ヨコナデ 内面ハケメ	摂津型 5%
土坑21	第99図-43 図版37-43	甕	瓦質	口 径 45.4 cm	外面体部ミガキ 内面体部ミガキ 傘部上面ミガキ 端部ヨコナデ	20%
	第99図-44 図版38-44	大甕	陶器	口 径 (43.0) cm	外面口クロナデ 内面口縁部口クロナデ 頸部縦方 向のケズリ 体部ハケメ	備前 5% 外面口縁端 部と体部自然釉掛かる 14c後半
土坑19	第99図-45	甕	陶器	口 径 (35.3) cm	内外面口クロナデ	丹波 2% 外面自然釉 掛かる 16c
土坑17	第99図-46 図版38-46	大甕	陶器	底 径 44.3 cm	外面体部縦方向のハケメ 底部周辺口クロナデ 底 部ハケメとミガキ状の縦方向のナデ 内面体部縦・ 横・斜め方向のハケメの後ナデ	備前 25% 底部漆喰付 着
土坑20	第99図-47 図版38-47	大甕	陶器	底 径 42.0 cm	外面体部縦と横方向のハケメ 底部ハケ状工具によ るナデ 内面体部横方向のハケメと指頭圧痕 底部 ハケ状工具による同心円状のナデ	備前 30%
土坑22	第100図-48	土師皿	素焼き	口 径 (7.4) cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 20% 口縁部煤付 着
	第100図-49	大甕	陶器		内外面口クロナデ	備前 1% 口縁端部と 内面頸部自然釉掛かる 16c後~17c初
	第100図-50	碗	陶器	口 径 (7.9) cm	灰釉	唐津 10% 16c末~ 17c初
	第100図-51	皿	陶器	口 径 (12.8) cm 器 高 3.7 cm 高台径 4.6 cm	灰釉 口縁溝縁 外面高台周辺露胎 離れ砂付着 見込み砂目1ヶ所有り	唐津 50% 17c前半
	第100図-52	染付皿	白磁	口 径 12.5 cm 器 高 3.6 cm 高台径 4.7 cm	見込み草文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 90% 17c前半
	第100図-53 図版38-53	染付皿	白磁	口 径 13.3 cm 器 高 3.6 cm 高台径 4.8 cm	見込み草花文 高台量付露胎 周辺に荒い砂付着	肥前 95% 17c前半
	第100図-54	軒平瓦	瓦	瓦当高 5.7 cm 周縁厚 1.9 cm	均整唐草文 瓦当面雲母粉付着	10%
	第100図-55	丸瓦	瓦	幅 16.5 cm 厚み 3.7 cm	凸面磨耗が著しく調整不明 凹面布目痕有り	20%
	第100図-56	平瓦	瓦	厚み 3.3 cm	凹凸面縦方向のナデ 側面横方向のナデ 狭端部横 方向のナデ	40%
	第101図-57	一石五輪塔	石	幅 15.8 cm		花崗岩 50% 空・風・ 火・水輪残存
第101図-58	一石五輪塔	石	幅 13.5 cm		花崗岩 30% 空・風輪 残存	
第101図-59	五輪塔	石	高 さ 13.0 cm 幅 21.8 cm	火輪部 上下面の中央部に窪み有り	花崗岩 100%	
第101図-60	一石五輪塔	石	幅 14.9 cm		花崗岩 30% 地輪残存	

第27表 第8次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑23	第101図-61	染付蓋物蓋	白磁	口 径 7.4 cm	外面瓔珞文 口縁部露胎	肥前 50% 18c後半
	第101図-62	椀	瓦器	口 径 (12.1) cm	外面口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕 内面口縁部ヨコナデ 体部ミガキ	和泉型 15% 13c後半
土坑24	第101図-63	播鉢	陶器	底 径 (13.6) cm	播目ヘラ描き 外面体部ナデ	丹波 5%
土坑25	第101図-64	皿	陶器	口 径 (11.6) cm 器 高 3.7 cm 高台径 4.3 cm	灰釉 外面下半露胎 見込み胎土目4ヶ所有り	唐津 60% 16c末～17c初
土坑26	第101図-65	甕	陶器	底 径 10.2 cm	外面鉄釉 白泥釉を流し掛ける 内面鉄釉 底部砂目4ヶ所有り	丹波 20% 19c
溝1	第102図-66	羽釜	瓦質	口 径 (23.8) cm	磨耗が著しく調整不明	摂津型 10%
	第102図-67	碗	白磁	口 径 (8.4) cm 器 高 5.0 cm 高台径 3.4 cm	高台量付露胎	肥前 50%
	第102図-68 図版38-68	染付碗	白磁	口 径 9.8 cm 器 高 6.7 cm 高台径 4.1 cm	外面網目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 60% 内外面貫入 17c後半
	第102図-69	染付碗	白磁	口 径 8.8 cm 器 高 5.5 cm 高台径 3.2 cm	外面「鶏冠借喙胡」の文字有り	肥前 15% 18c後～19c初
	第102図-70	染付碗	白磁	高台径 3.8 cm	外面松文 高台内崩れた「大明年製」銘と圏線有り 量付露胎	肥前 30%
	第102図-71	小杯	陶器	高台径 (3.4) cm	外面体部と内面鉄釉 高台周辺錆釉	40%
	第102図-72 図版38-72	染付皿	白磁	口 径 17.4 cm 器 高 4.2 cm 高台径 6.3 cm	見込み草花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 17c前半
	第102図-73	染付皿	白磁	高台径 4.6 cm	内面文様有り 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 17c前半
	第102図-74	色絵油壺	白磁	口 径 2.8 cm	外面上半部5条の圏線と帯状の縦縞文 内面体部露胎	肥前 20% 17c後半
	第103図-75	壺	陶器	口 径 (14.8) cm 器 高 28.2 cm 底 径 (12.7) cm	白化粧土 外面肩部灰釉を流し掛け 外面底部と内面口縁以下露胎	20% 釉に貫入
	第103図-76	播鉢	陶器		クシ目一単位6本 内外面口クロナデ	備前 5%
	第103図-77	播鉢	陶器	口 径 (35.3) cm 器 高 16.1 cm 高台径 (18.0) cm	クシ目一単位10本 外面口縁部口クロナデ 体部口クロヘラケズリ 高台周辺口クロナデ 内面口縁部口クロナデ	堺 30% 18c前半
	第103図-78	播鉢	陶器	底 径 (14.0) cm	播目ヘラ描き 外面体部ヨコナデと指頭圧痕 底部周辺ヘラケズリ	丹波 10%
	第104図-79	軒丸瓦	瓦	長 さ 27.7 cm 幅 13.7 cm 瓦当厚 1.1 cm	左巻き三巴文 残存珠文数4個 丸瓦部釘穴2ヶ所有り 凸面縦方向のナデ 凹面コビキBと吊紐痕有り 玉縁部布目痕有り	85%
	第104図-80	軒丸瓦	瓦	径 (16.4) cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 残存珠文数5個	10% 銀化現象

第28表 第8次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
溝1	第104図-81 図版38-81	軒丸瓦	瓦	径 16.7 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.3 cm	右巻き三巴文 珠文数15個 丸瓦部凹面布目痕有り	20% 銀化現象
	第104図-82 図版38-82	軒丸瓦	瓦	径 17.0 cm 周縁厚 2.4 cm 瓦当厚 1.8 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 瓦当面雲母粉付着 丸瓦部凹面コビキB 接合部横方向のカキメ有り	25%
	第104図-83	軒丸瓦	瓦	径 16.7 cm 周縁厚 2.5 cm 瓦当厚 1.8 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 瓦当面雲母粉付着	15%
	第104図-84	軒丸瓦	瓦	径 (14.2) cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 残存珠文数6個 丸瓦部凹面内タタキ	20%
	第105図-85	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.3 cm 周縁厚 2.0 cm	均整唐草文	20% 銀化現象 平瓦部凸面に鉄錆と漆喰付着
	第105図-86	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.1 cm 周縁厚 1.6 cm	均整唐草文 瓦当面雲母粉付着	20%
	第105図-87	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.8 cm 周縁厚 1.3 cm	均整唐草文	10%
	第105図-88 図版38-88	軒平瓦	瓦	瓦当高 5.2 cm 周縁厚 1.9 cm	均整唐草文	20%
	第105図-89	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.7 cm 周縁厚 1.3 cm	均整唐草文	15%
	第105図-90	丸瓦	瓦	長さ 24.7 cm 幅 13.6 cm 厚み 1.7 cm	凸面縦方向のケズリ 凹面コビキB と内タタキ有り 玉縁部布目痕有り	90%
	第105図-91	丸瓦	瓦	長さ 31.7 cm 幅 16.0 cm 厚み 1.6 cm	凸面縦方向のナデ 凹面コビキB と縦方向のナデ 中央1ヶ所釘穴を開けているが焼成時に埋めている 玉縁部布目痕有り	90%
	第105図-92	平瓦	瓦	幅 21.9 cm 厚み 1.6 cm	凸面端部のみナデ 凹面横方向のナデ 端部のみ縦方向のナデ 側面ヨコナデ 狭端部ナデ	40%
	第105図-93	平瓦	瓦	幅 26.2 cm 厚み 1.7 cm	凸面粗い縦方向のナデ 凹面丁寧な横方向のナデ 端部のみ縦方向のナデ 側面ヨコナデ 広端部粗いナデ	45% 焼成時の溶着痕有り
溝2	第106図-94	三足羽釜	瓦質	口径 (14.7) cm	外面ヨコナデ 内面口縁部強いナデ 体部ハケメ	5%
	第106図-95	播鉢	陶器		クシ目単位不明 内外面口クロナデ	備前 10% 16c中頃
	第106図-96	播鉢	陶器	口径 (31.2) cm 器高 12.8 cm 底径 (12.4) cm	播目ヘラ描き 外面口縁ヨコナデ 体部ナデ 底部周辺指頭圧痕と強いナデ 内面口縁部ヨコナデ	丹波 20% 16c後半
包含層	第107図-97 図版38-97	皿	陶器	口径 9.5 cm 器高 2.5 cm 高台径 5.3 cm	灰釉 高台内輪トチン痕有り 見込み印花文 高台量付露胎	瀬戸・美濃 80% 内外面貫入 二次焼成受ける 16c前半
	第107図-98 図版38-98	皿	陶器	口径 10.1 cm 器高 2.7 cm 高台径 5.7 cm	灰釉 高台内輪トチン痕有り 量付露胎	瀬戸・美濃 100% 内外面貫入
	第107図-99	鉢	陶器	口径 (9.3) cm 器高 3.4 cm 高台径 (5.8) cm	灰釉 外面下半錆釉	瀬戸・美濃 40% 内外面貫入 14c後半
	第107図-100	碗	陶器	高台径 (4.0) cm	高台周辺露胎	唐津 30% 内外面貫入 二次焼成受ける 17c後半

第29表 第8次調査遺物観察表(5)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
包含層	第107図-101	碗	白磁	高台径 (8.0) cm	高台周辺露胎	5%
	第107図-102 図版38-102	皿	陶器	口径 (10.9) cm 器高 2.3 cm 高台径 4.4 cm	口縁折れ縁 灰釉 外面下半露胎	唐津 40% 17c前半
	第107図-103	皿	陶器	口径 (11.7) cm	灰釉 外面下半露胎 見込み胎土目有り	唐津 40% 16c末～ 17c初
	第107図-104 図版38-104	皿	陶器	高台径 4.6 cm	灰釉 外面下半露胎 見込みに砂目3ヶ所有り	唐津 30% 17c前半
	第107図-105 図版38-105	杯身	須恵器	高台径 (6.5) cm	内外面口クロナデ 貼り付け高台	20%
	第107図-106 図版38-106	鉄絵碗	陶器	口径 (11.6) cm	灰釉 外面文様有り	唐津 20% 16c末～ 17c初
	第107図-107	鉄絵鉢	陶器	口径 (16.2) cm 器高 8.7 cm 高台径 7.0 cm	灰釉 外面文様有り 口縁端部と外面下半露胎 見込み胎土目4ヶ所有り	唐津 60% 16c末期
	第108図-108	擂鉢	陶器	口径 (37.8) cm 器高 16.2 cm 高台径 (15.8) cm	擂目ヘラ描き 片口 外面ヨコナデ 口縁より下指頭圧痕 体部下半ヨコナデ 底部周辺ヘラケズリ 内面口縁ヨコナデ	丹波 50%
	第108図-109	大甕	陶器	口径 (46.2) cm	外面口縁部口クロナデ 内面頸部口クロナデ 体部ハケメと指頭圧痕	備前 15% 外面自然釉掛かる

第30表 第8次調査遺物観察表(6)

第6節 成就院の調査—昆陽寺境内遺跡第18次調査—

所在地 伊丹市寺本1丁目112番、113番、114番
 調査面積 18m²（南北2m×東西3mのトレンチ3箇所）
 調査期間 平成11年11月22日～11月29日
 調査担当 小長谷正治・細川佳子

1. 遺跡の概要

昆陽寺境内遺跡は伊丹市の西側に位置し、昆陽寺と現在の昆陽寺の塔頭である遍照院、一乗院、正覚院、成就院の境内からなり、遺跡の規模は東西250m、南北350mを測る。遺跡の中央を国道171号線が東西に走っていて、遺跡を南北に分断している。昆陽寺は「行基年譜」によると、僧行基が天平3年（731）に創建した昆陽施院の系譜をひく寺である。寺伝によると、天正7年（1579）、織田信長が有岡城の城主、荒木村重を攻めた時に、昆陽寺の堂塔は信長の兵火にかかり、焼き払われたという。江戸時代の昆陽寺は寛政10年（1798）刊行の「攝津名所圖會」に描かれている。現在の昆陽寺には山門、開山堂、観音堂、鐘楼などの江戸時代の建物と、平安時代の二天立像（広目天・多聞天）などがあり、このうち山門、観音堂、二天立像は兵庫県指定の文化財である。

2. 調査の概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災により被災した寺院本堂及び庫裏再建に伴う確認調査で、震災復旧・復興事業の適用を受け、国庫補助事業として実施した。

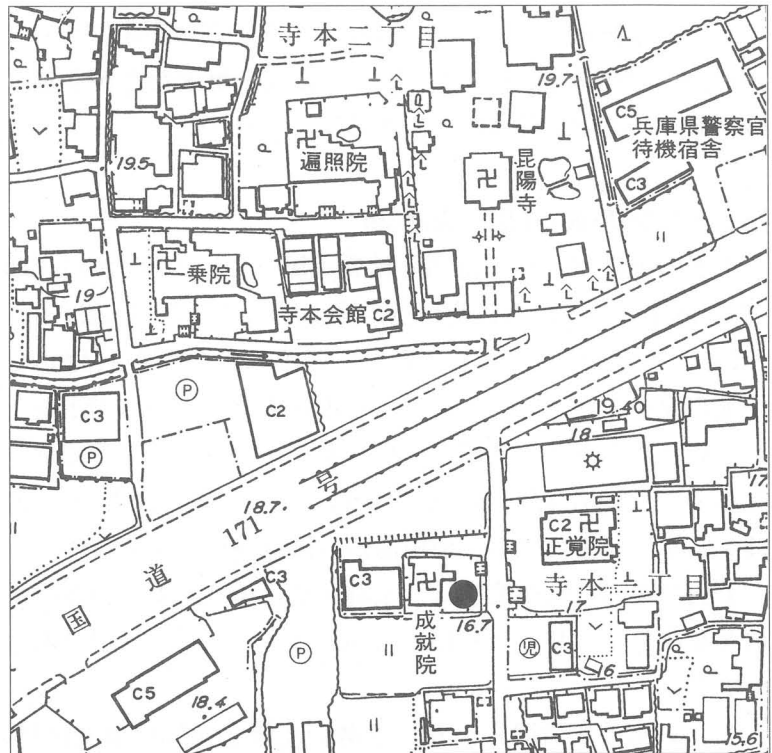
敷地内の寺院本堂及び庫裏建設予定範囲に南北2m、東西3mのトレンチを3箇所設定して、表土は重機により除去し、その後、人力により掘削し、遺構は地山面上とその上層面の2面で確認した。トレンチ名は、南東側を第1、南西側を第2、北西側を第3とした。

3. 調査成果

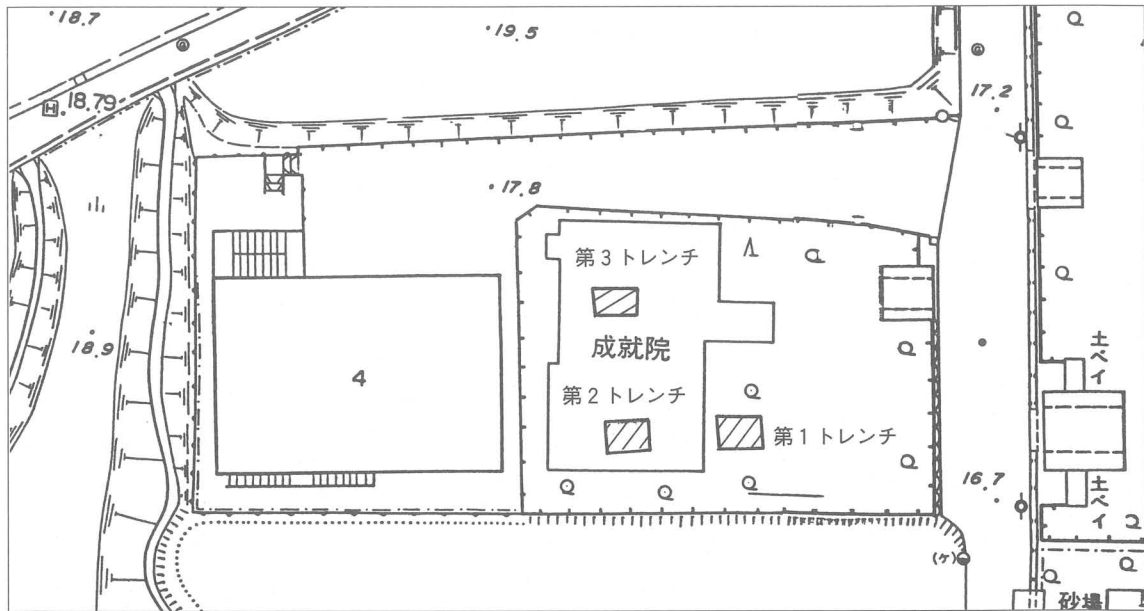
第1トレンチ（第111図、図版39）

土層の堆積状況は黄褐色粘土層（10）の地山の上にオリーブ褐色砂質土層（6）が約10cm堆積し、その上にオリーブ色粘土層（5）が約20cm、さらにその上に黄色粘土層（1）の表土が堆積している。表土から地山までの深さは約40cmを測る。

地山面を下面とし、オリーブ褐色砂質土層（6）の上を上面として2面の調査を実施した。下面で検出された遺構は、小穴（P）が5基である。掘り方は円形を呈し、径15～30cmを測る。遺物は出土しなかった。



第109図 昆陽寺境内遺跡第18次調査区位置図（1/2,500）平成4年



第110図 調査区設定図（1/500） 昭和60年

上面で検出された遺構は、土坑3基、小穴（P）1基、石列1条である。このうち主な遺構について説明する。

土坑1

土坑1は東西検出長2.6m、南北検出長1.8m、深さ1.05mを測り、なお東側と南側は調査区外に延びている。掘り方には20～30cm大の多くの礫を配している。埋土は黄灰色シルト層であり、このことからこの遺構は池状遺構と考えられる。出土遺物の様相から昭和の時代に埋められたと考えられる。この池状遺構は現在敷地の南東側にある築山と関連があると思われる。

土坑2

土坑2は南側を土坑1に切られている。底は平坦になっていて、遺構の規模は東西1.2m、南北検出長60cm、深さ30cmを測る。埋土には炭や焼土などが多量に含まれている。出土遺物には焼けた瓦やヘソ皿タイプの土師皿などがある。

第2トレンチ(第112図、図版39)

土層の堆積状況は、黄褐色粘質土層（12）の地山の上に焼土が混じるにぶい黄褐色砂質土層（13）が5cm程度、その上に黄褐色砂質土層（2）が15～25cm、さらにその上にオリーブ褐色土層の表土が15～25cm堆積している。表土から地山までの深さは約50cmを測る。

地山面を下面とし、にぶい黄褐色砂質土層（13）の上を上面として2面の調査を実施した。

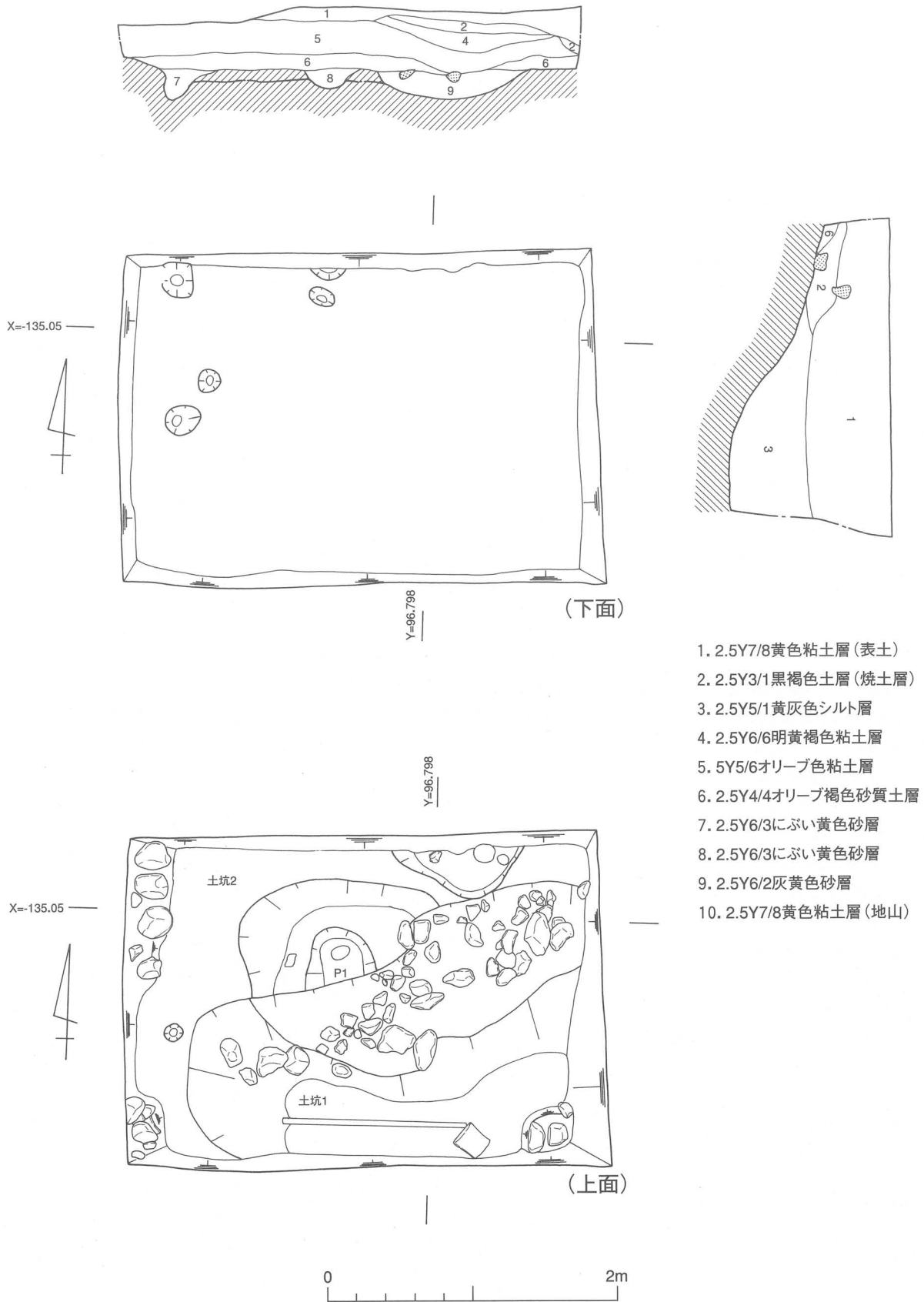
下面で検出された遺構は土坑2基、小穴（P）5基である。P24～P29はトレンチの中央を南北に並ぶように検出された。円形で径は15cm前後、深さ10cm前後である。小穴の形状等からみて杭跡ではないかと考えられる。地山面からは遺物は出土しなかった。

上面で検出された遺構は、土坑2基、小穴（P）21基である。このうち遺物が出土した遺構は、土坑3及びP4・P8・P15・P16・P18・P19・P21である。

土坑3

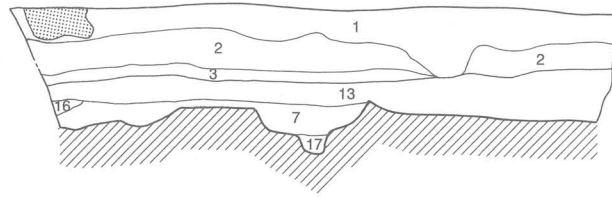
トレンチの北西隅にあり、遺構の北側と西側は調査区外に延びている。遺構の規模は東西検出長1.5m、南北検出長75cmを測る。遺物には焼けた瓦などが出土した。

マンホールと同じ高さ(m)

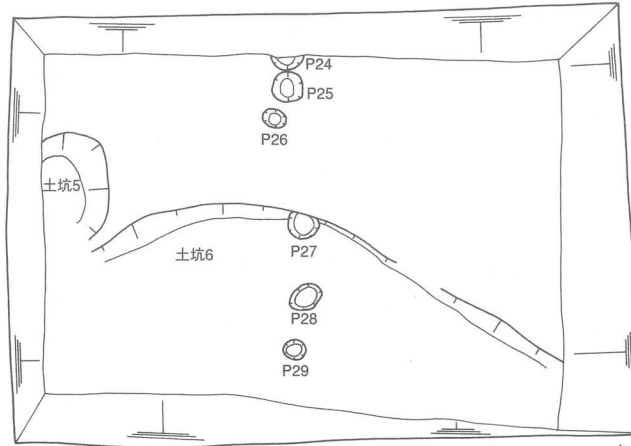
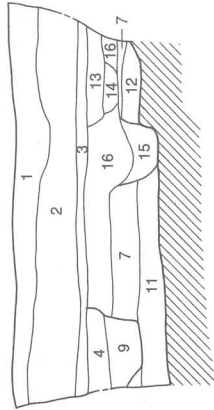


第111図 第1トレンチ上・下面遺構平面図・土層図(1/40)

マンホールと同じ高さ(m) ———

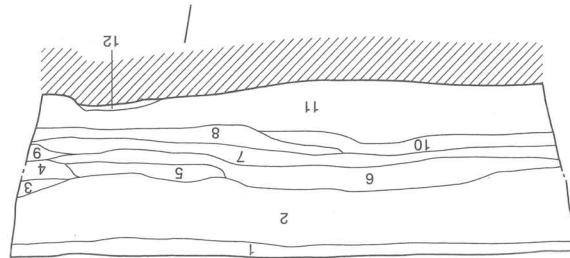


Y=96.790



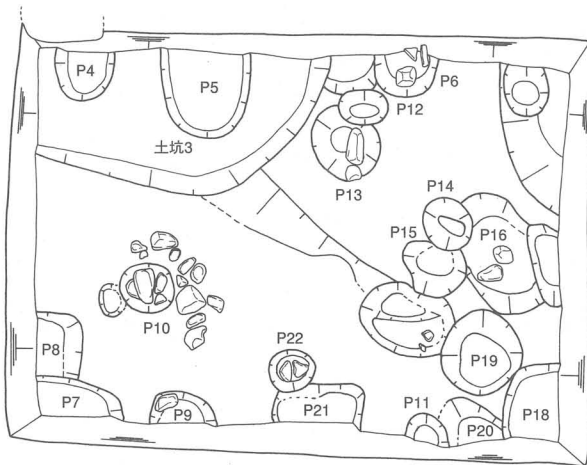
X=-135.05

(下面)



Y=96.790

(W) 測量計画図(1/40)



X=-135.05

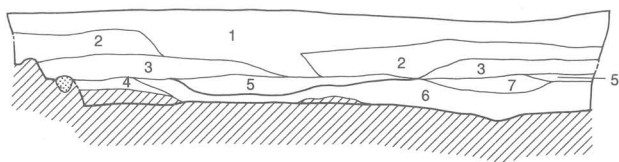
(上面)

1. 2.5Y4/6オリーブ褐色土層(表土)
2. 10YR5/6黄褐色砂質土層
3. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土層
4. 2.5Y5/4黄褐色砂質土層
5. 5Y5/4オリーブ色粘土層
6. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土層
7. 10YR5/1褐灰色粘質土層
8. 2.5Y8/8黄色粘土層
9. 5Y6/3オリーブ黄色粘質土層
10. 2.5Y5/3黄褐色砂質土層
11. 2.5Y7/2灰黄色粘土層
12. 2.5Y8/6黄色粘土層(地山)
13. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土層(焼土混じり)
14. 10YR4/2灰黄褐色砂質土層
15. 5Y6/4オリーブ黄色粘土層
16. 2.5Y5/4黄褐色粘質土層
17. 5Y6/1灰色粘土層

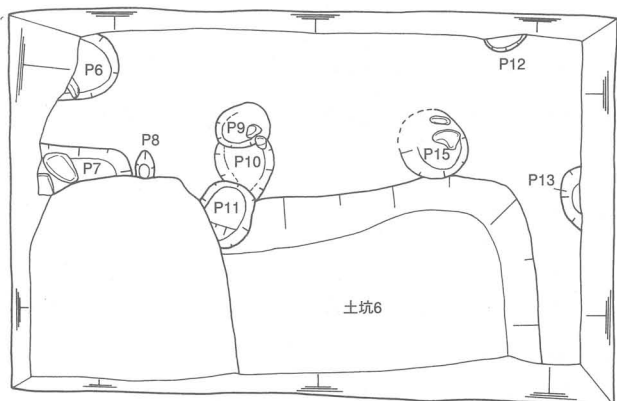


第112図 第2トレンチ上・下面遺構平面図・土層図(1/40)

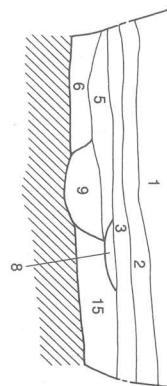
マンホールと同じ高さ(m)



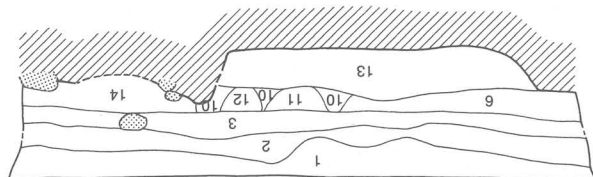
Y=96.790



(下面)

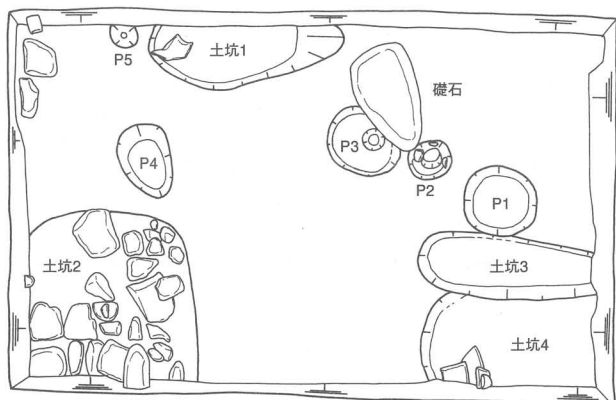


X=-135.13



Y=96.790

マンホールと同じ高さ(m)



(上面)

1. 10YR4/3にぶい黄褐色土層(表土)
2. 10YR5/8黄褐色粘質土層
(炭・遺物片を含む)
3. 2.5Y4/3オリブ褐色土層
(炭・遺物片を含む)
4. 10YR5/6黄褐色土層
(地山の土を含む)
5. 2.5Y5/3黄褐色粘質土層
(炭・遺物片を多く含む)
6. 10YR5/2灰黄褐色粘質土層
7. 10YR6/8明黄褐色粘質土層
8. 10YR5/6黄褐色粘質土層
9. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土層
10. 2.5Y5/4黄褐色シルト質土層
11. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土層
(炭・遺物片を含む)
12. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土層
13. 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土層
14. 10YR4/2灰黄褐色粘質土層
(炭・遺物片を含む)
15. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土層

X=-135.13



第113図 第3 トレンチ上・下面遺構平面図・土層図 (1/40)

小穴（P）は径15～40cmを測り、出土遺物には土師皿、瓦器の小片、瓦などがある。

第3トレンチ(第113・114図、図版40・41)

土層の堆積状況は、地山の上に灰黄褐色粘質土層（6）が10～15cm、その上に炭や焼土を含むオリーブ褐色土層（3）が約10cm、その上ににぶい黄褐色土層（1）の表土が10～20cm推積している。表土から地山までの深さは約50cmを測る。（3）が焼土層である。

地山面を下面とし、灰黄褐色粘質土層（6）の上を上面として2面の調査を実施した。

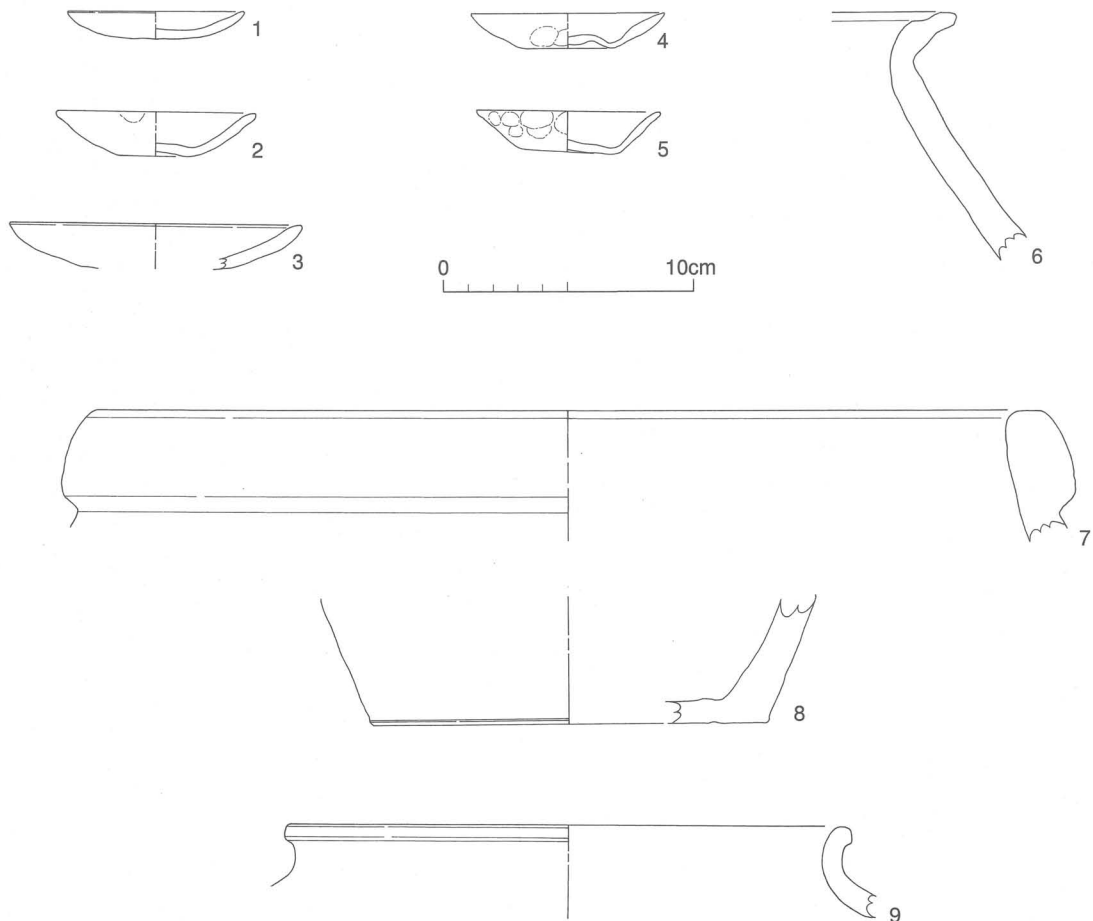
下面で検出された遺構は、土坑1基、小穴（P）8基である。

土坑6

南壁際に位置し、西側は上面遺構の土坑2に切られ、南側は調査区外へ延びる。平坦な底をしていて、埋土は炭が混じるにぶい黄褐色粘質土層である。出土遺物には、備前焼甕の胴部片、土師皿、瓦などがある。

小穴（P）8基のうち土師皿などの遺物が出土したのは、P5・P6・P11・P14・P15であり、このうちP6はトレンチの北西隅に位置し、ここからは底部中央が凹んだヘソ皿タイプの土師皿（4・5）、丹波焼甕口縁部（6）、他に中国製青磁碗（蓮弁文）などが出土し、14世紀代の遺物と考えられる。その他、東側焼土層より瓦質土器甕が出土した。

上面で検出された遺構は、礎石3基、土坑4基、小穴（P）4基である。



第114図 出土遺物（1/3）

礎石3基は表土のすぐ下の層、焼土層の上から検出された。礎石1は長辺60cm・短辺35cm、礎石2は長辺25cm・短辺15cm、礎石3は長辺25cm・短辺20cmを測る。

土坑1

北壁際に位置し、遺構の北側は調査区外へつづく。規模は東西1.05m、深さ10cmを測る。埋土は焼土・炭を多く含む黄褐色粘質土層である。出土遺物には瓦質土器火舎、土師皿片、須恵器片などがある。

土坑2

南西隅にあり、遺構は調査区外に続く。規模は東西検出長90cm、南北検出長90cm、深さ20cmを測る。埋土は焼土・炭を含む灰黄褐色粘質土層で、10~20cm大の角礫が敷き詰められている。このことから礎石の根石部分だけが残っていると考えられる。出土遺物には土師皿(3)、瓦器の小片、焼けた瓦などがある。

土坑4

南東隅にあり、北側を土坑4に切られ、南側と東側は調査区外へ延びている。規模は東西検出長90cm、深さ20cmを測る。出土遺物には、備前焼甕口縁部(7)、丹波焼甕の底部(8)、焼けた瓦などがある。

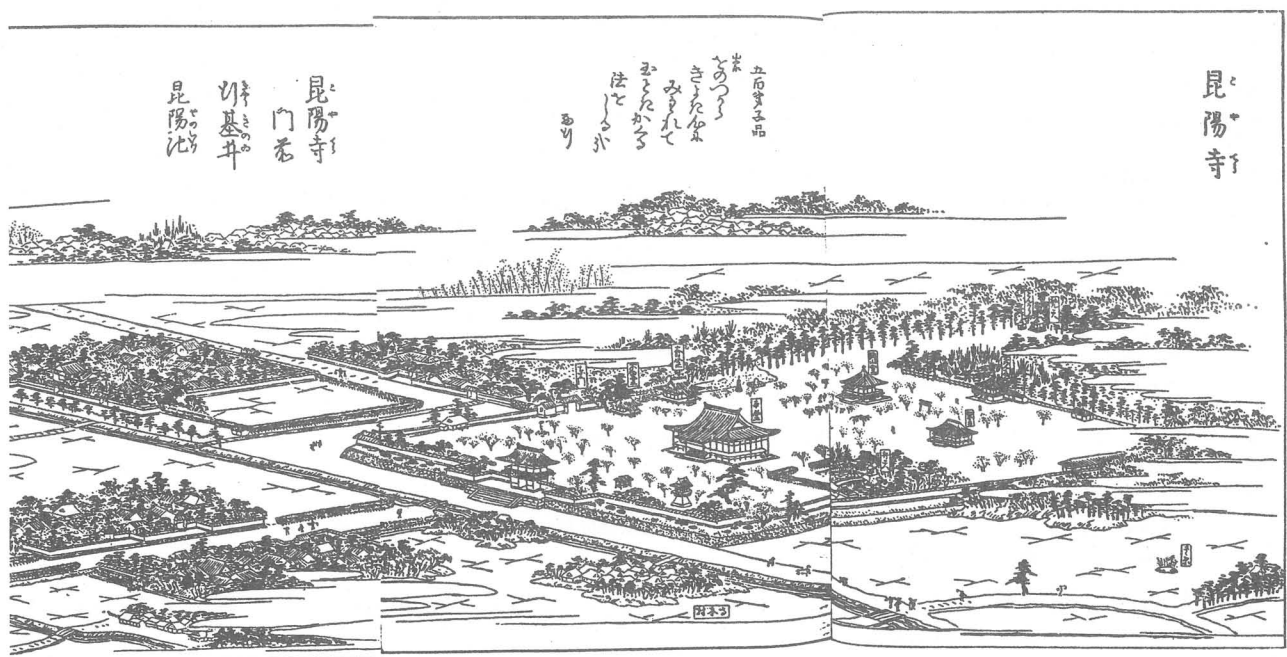
小穴(P)

P2は円形で、径22cmを測り、径10cmの柱痕及び根石をもつ。P3は円形で、径40cmを測り、径10cmの柱痕をもつ。このことから、P2、P3は柱穴だと考えられる。P1・P2・P3・P5からは土師皿片が出土し、このうちP2・P5からは焼けた瓦が出土した。

4. まとめ

調査の結果を時代順にみていこうと思う。

昆陽寺は、僧行基が奈良時代に創建した昆陽施院の系譜をひく寺と考えられている。今回の確認調



第115図 「攝津名所圖會」下巻 臨川書店 1979年

査では3箇所のトレンチから遺構・遺物が検出されたが、しかしながら、昆陽寺の創建に関連する遺構・遺物は検出されなかった。

最も古い遺物では第3トレンチのP6から出土したヘソ皿タイプの土師皿、蓮弁文の青磁碗等があり、これらは14世紀代のものであることから、この時代に何らかの建物の存在が考えられる。しかし、トレンチのみの調査であるので、建物の規模や性格はわからない。

3箇所のトレンチではそれぞれ炭や焼土の混じる土坑や、炭や焼土の混じる土層などを検出し、また、土坑からは焼けた瓦などが出土した。出土遺物の年代は第1トレンチの土坑1（池状遺構）を除き、最も新しいものが16世紀後半のものと考えられる。このことから、炭や焼土の混じる土坑や土層（焼土層）については、天正7年（1579）に織田信長の兵火にあい、昆陽寺一帯は焼失したと言われている時期とほぼ一致することから、この時のものである可能性が高い。この焼土層は第3次調査（遍照院）や第8次調査（一乗院）でも発見されているため、昆陽寺一帯が信長に焼き払われたことがうかがえる。

江戸時代の昆陽寺と塔頭の様子は寛政10年（1798）に刊行された「攝津名所圖會」（第115図）に描かれている。第3トレンチの上面で検出された礎石は、表土のすぐ下の層から検出され、これは焼土層の上にあることから、江戸時代以降に再建された建物の礎石と考えられる。（細川）

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
第3トレンチ P5	第114図-1 図版41-1	土師皿	素焼き	口径 (7.0) cm 器高 1.0 cm	手捏ね成形 内外面磨耗が著しく調整不明	在地 15%
第3トレンチ 土坑6	第114図-2 図版41-2	土師皿	素焼き	口径 (7.8) cm 器高 1.8 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面ナデ（指頭圧痕残す） 内面ヨコナデ	在地 45%
第3トレンチ 土坑2	第114図-3 図版41-3	土師皿	素焼き	口径 (11.6) cm	手捏ね成形 内外面磨耗が著しく調整不明	在地 15%
第3トレンチ P6	第114図-4 図版41-4	土師皿	素焼き	口径 (7.8) cm 器高 1.4 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナデ（指頭圧痕残す） 内面ヨコナデ	在地 60%
	第114図-5 図版41-5	土師皿	素焼き	口径 (7.4) cm 器高 1.7 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 体部から底部ナデ（指頭圧痕残す） 内面ヨコナデ	在地 70%
	第114図-6 図版41-6	甕	陶器		外面口縁部ロクロナデ 体部ナデ 内面口縁部ロクロナデ 体部ヨコナデ	丹波 5% 口縁端部と外面自然釉掛かる
第3トレンチ 土坑4	第114図-7 図版41-7	甕	陶器	口径 (37.6) cm	内外面口縁部ロクロナデ	備前 1%
	第114図-8 図版41-8	甕	陶器	底径 (15.8) cm	外面底部付近ヘラケズリ 内面ヨコナデ	5% 外面自然釉掛かる
第3トレンチ 東側焼土層	第114図-9 図版41-9	甕	素焼き	口径 (22.3) cm	内外面ナデ 磨耗が著しく調整不明瞭	5% 外面体部煤けている

第31表 第18次調査遺物観察表

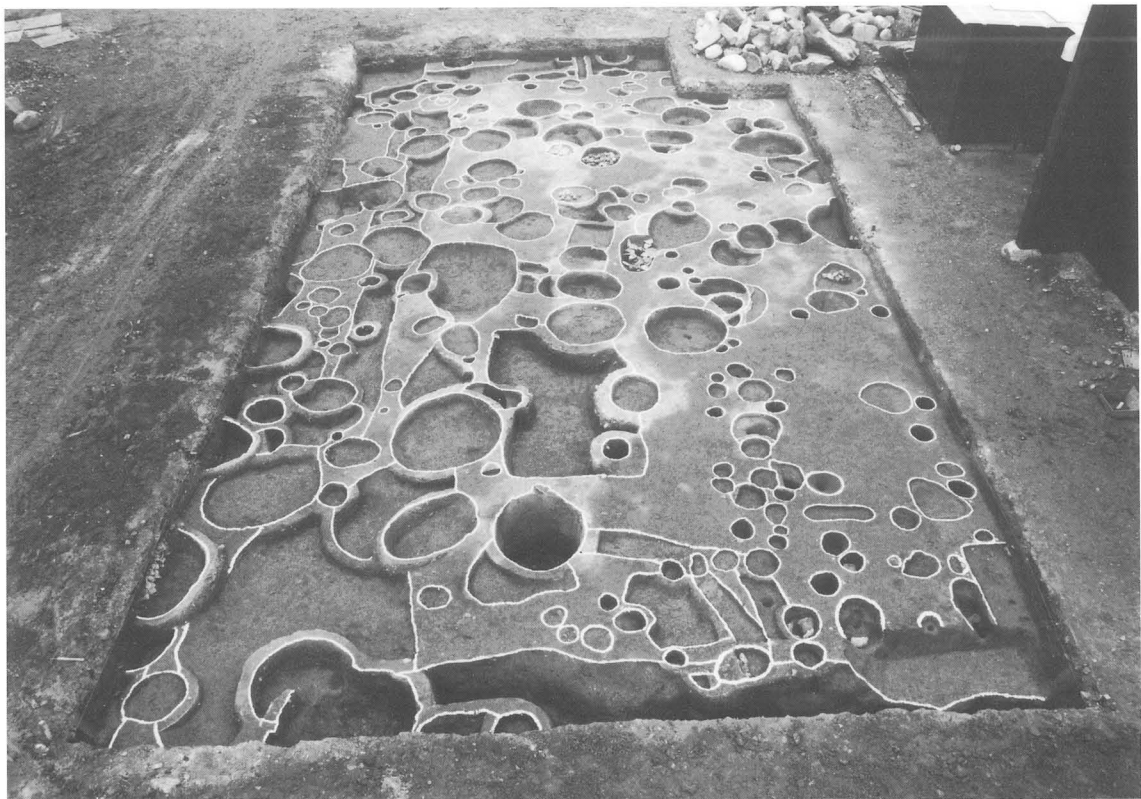
報 告 書 抄 録

ふりがな	いたみしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ							
書名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第26集							
副書名	震災復旧・復興事業に伴う発掘調							
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	小長谷正治							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地							
発行年月日	2003年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
<small>ありおかしやあと</small> 有岡城跡・伊丹郷町 第153次調査	<small>いたみしちゆうおう</small> 伊丹市中央 2丁目6-16	28207	61	34° 46' 44"	135° 25' 05"	19950522～ 19950621	270m ²	庫裏建設
有岡城跡・伊丹郷町 第154次調査	伊丹市中央 2丁目420	〃	〃	34° 46' 44"	135° 25' 07"	19950607～ 19950804	170m ²	本堂建替え
有岡城跡・伊丹郷町 第160次調査	伊丹市中央 2丁目8-24	〃	〃	34° 46' 44"	135° 25' 08"	19951030～ 19951213	100m ²	庫裏建替え
有岡城跡・伊丹郷町 第165次調査	<small>きたほんまち</small> 北本町 1丁目13番地	〃	〃	34° 46' 43"	135° 25' 15"	19951113～ 19960126	290m ²	本堂・庫裏建設
有岡城跡・伊丹郷町 第170次調査	伊丹市中央 2丁目431-1他	〃	〃	34° 46' 44"	135° 25' 06"	19960620～ 19960812	270m ²	本堂再建
<small>こや であけいだい</small> 昆陽寺境内 第8次調査	<small>てらもと</small> 寺本 2丁目159	〃	〃	34° 46' 20"	135° 24' 24"	19970430～ 19970619	316m ²	本堂建設
昆陽寺境内 第18次調査	寺本 1丁目112～114番	〃	〃	34° 46' 15"	135° 23' 25"	19991122～ 19991129	18m ²	本堂建替え
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有岡城跡・伊丹郷町 第153次調査	寺院	近世		土坑 井戸 溝 ピット		土師器・陶磁器 瓦・石造品等 8箱		
有岡城跡・伊丹郷町 第154次調査	〃	近世		礎石 本堂基壇 土坑 井戸 溝 ピット		土師器・陶磁器 瓦・石造品等 14箱		
有岡城跡・伊丹郷町 第160次調査	〃	近世		礎石建物跡 竈 土坑 井戸 溝		土師器・陶磁器 瓦・石造品等 11箱		
有岡城跡・伊丹郷町 第165次調査	〃	中世・近世		池 礎石 水琴窟 土坑 井戸 溝 掘立柱建物跡		陶磁器・瓦等 26箱 土師器・瓦器等 2箱		
有岡城跡・伊丹郷町 第170次調査	〃	近世		礎石 埋壘 瓦溜まり 溝 土坑 井戸 石組遺構		土師器・陶磁器 瓦・石造品等 24箱		
昆陽寺境内 第8次調査	〃	中世・近世		土坑 溝 ピット		陶磁器・瓦等 44箱 土師器・瓦器等 2箱		
昆陽寺境内 第18次調査	〃	中世・近世		土坑 ピット		土師器・陶磁器等 1箱		

図版1



1. 調査区遠景（南から）



2. 遺構面全景（南から）

図版2



1. 溝5 (北から)



2. 溝5 断面 (南から)

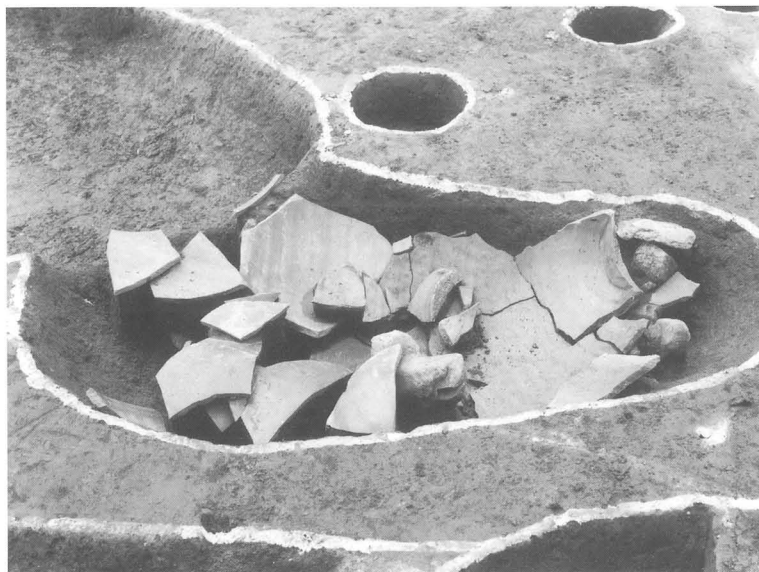


3. 溝11 (西から)

図版3



1. 溝11断面（西から）

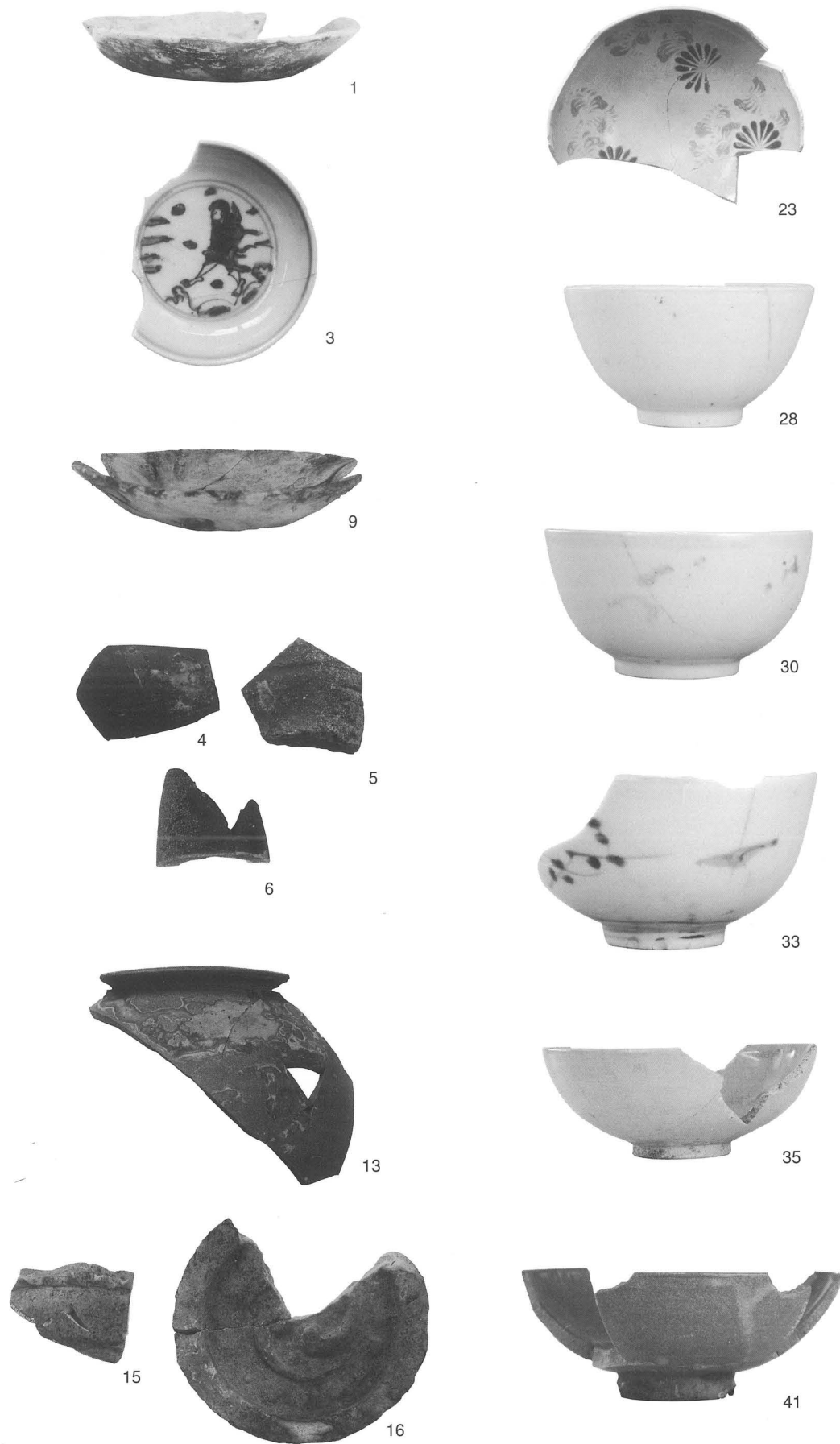


2. 土坑17 甕出土状況（西から）



3. 溝3（東から）

図版4



出土遺物 井戸2 (1・3) 土坑30 (9) 土坑29 (4~6) 土坑17 (13)
土坑5 (15・16) P92 (23) 土坑124 (28)
溝3 (30・33・35・41)

図版5



1. 遺構面全景（南から）



2. 溝7・8（北から）



3. 溝7・8断面（南から）

図版6



1. 溝1、石組遺構（南から）



2. 石組遺構（北から）

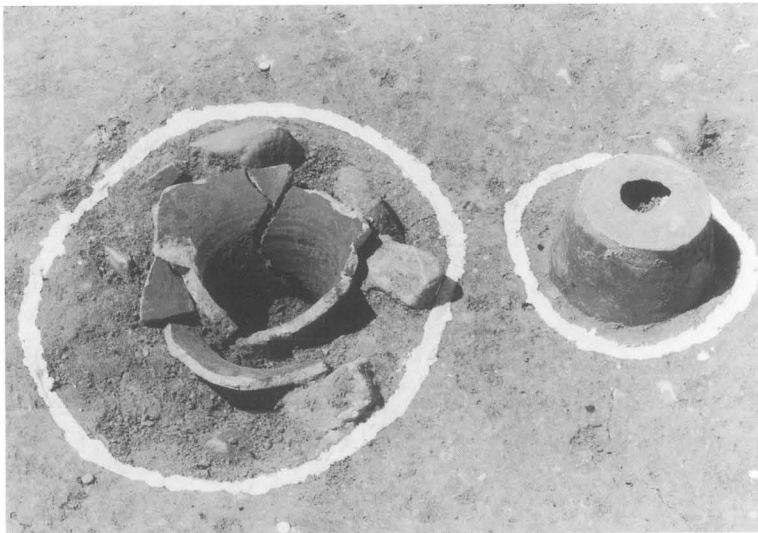


3. 溝1断面（南から）

図版7



1. 埋桶1 検出状況（南から）



2. 埋甕2・水琴窟1 検出
状況（南から）

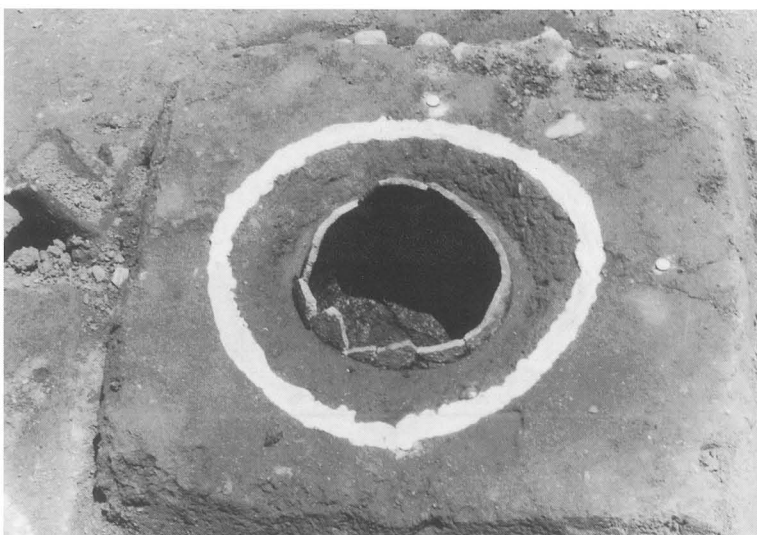


3. 埋甕6 甕出土状
（西から）

図版8



1. 埋甕7 甕出土状
(北から)

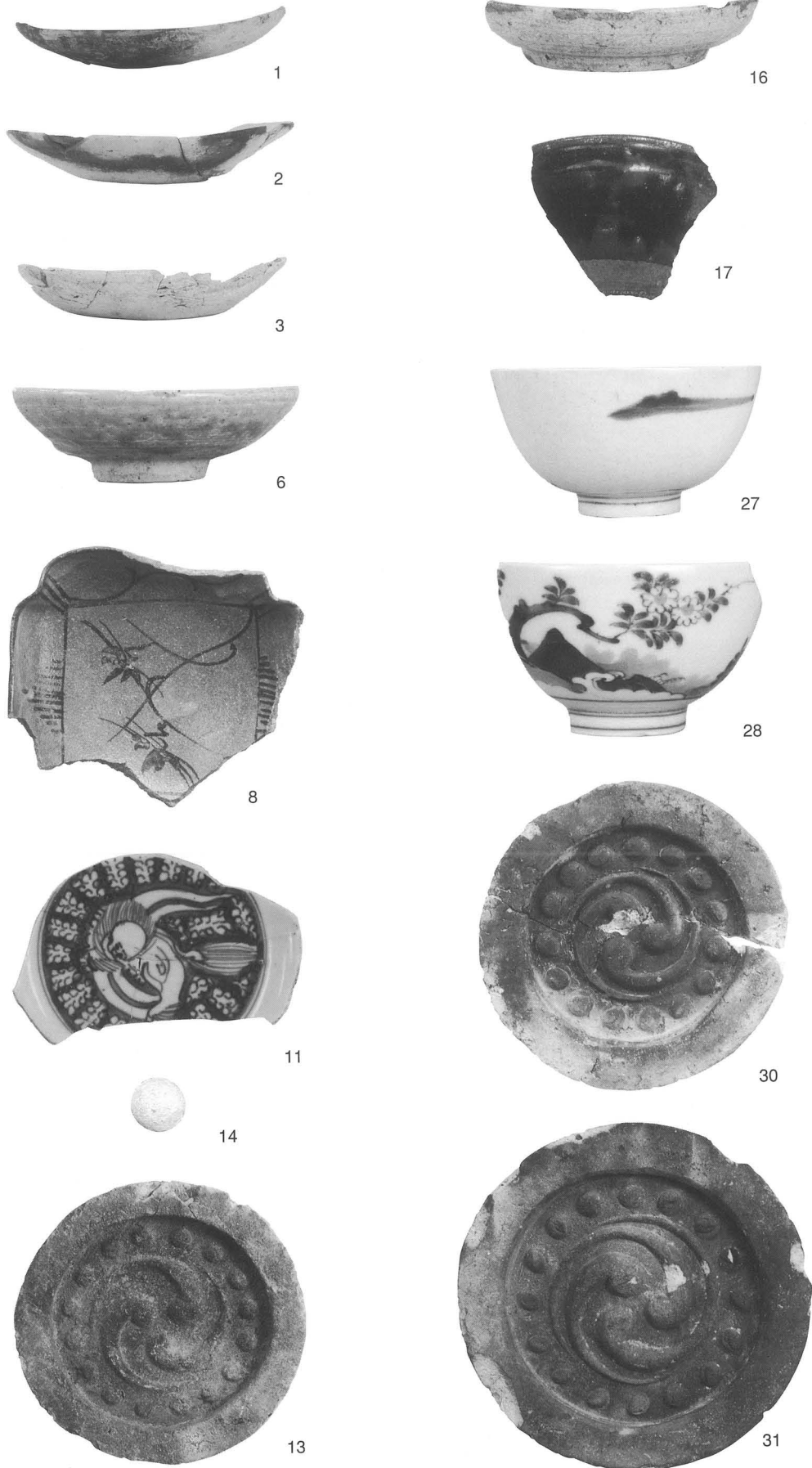


2. 水琴窟2 (北から)



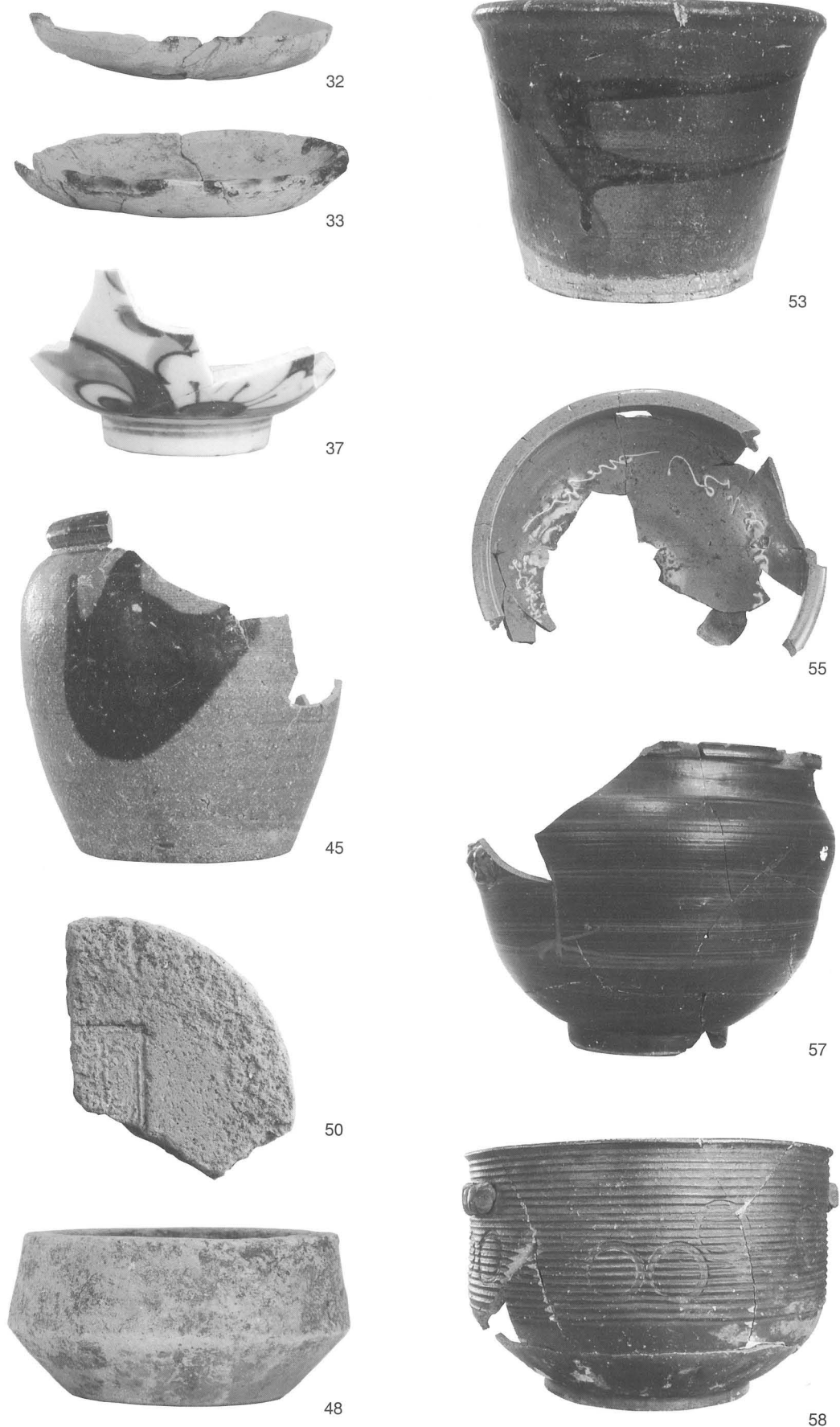
3. 水琴窟3 (西から)

図版9



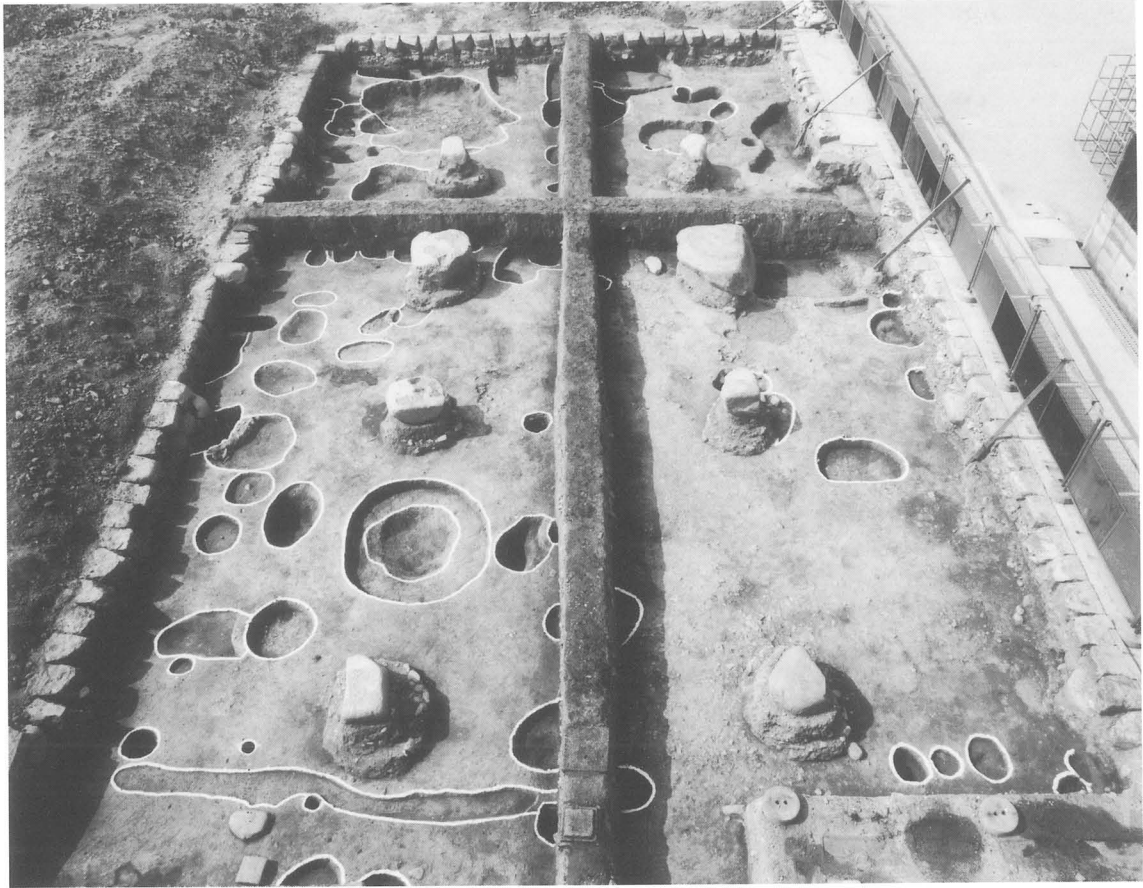
出土遺物 (1) 溝7 (1~3・6・8・11・13・14) 溝8 (16) SXI (17)
井戸1 (27・28・30・31)

図版10



出土遺物 (2) 土坑1 (32・33) 瓦溜まり1 (37) 土坑85 (45) 土坑94 (48)
P34 (50) 水琴窟1 (53) 埋甕2 (55) 埋甕7 (57)
埋甕6 (58)

図版11



1. 第1遺構面全景（南から）



2. 第2遺構面全景（南から）

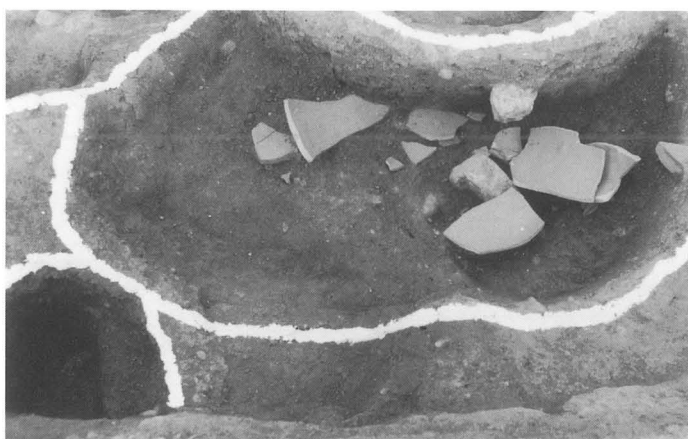
図版12



1. 土坑33（南から）



2. 土坑73断面（西から）



3. 土坑58（北から）

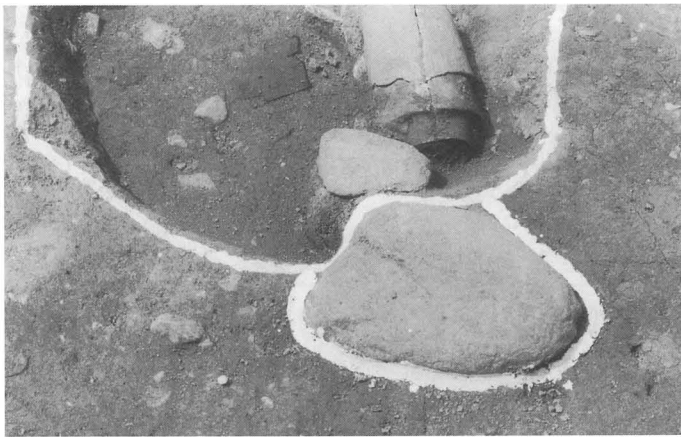


4. 土坑44断面（東から）

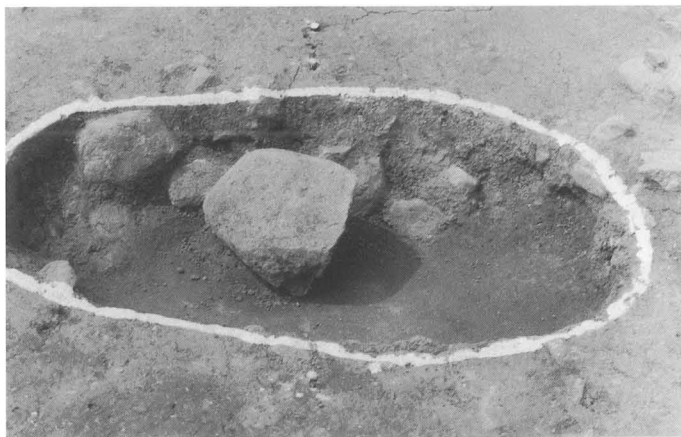
図版13



1. 井戸1 (北から)



2. 土坑1、礎石1 (南から)



3. 礎石5 (北から)



4. 礎石6 (南から)

図版14



1. 土坑11断面（南から）



2. 土坑21（南から）



3. 石仏検出状況（北から）



4. 石仏検出状況（西から）

図版15



4



16



7



17



23



8



11



27



13



29

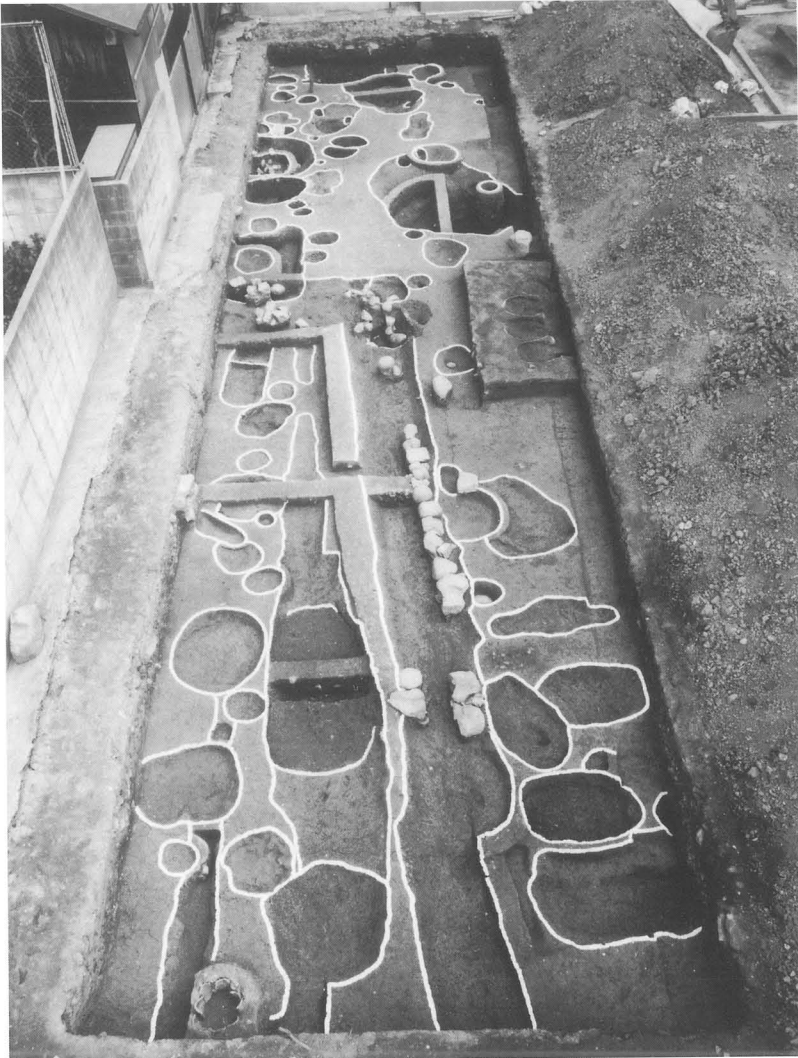
出土遺物 (1) 土坑33 (4・7・8・11・13・16・17) 土坑51 (23)
土坑73 (27・29)

図版16



出土遺物（2） 井戸1（41・42・45・46・49・50・51・55・56・59）

図版17



1. 第1遺構面全景（西から）

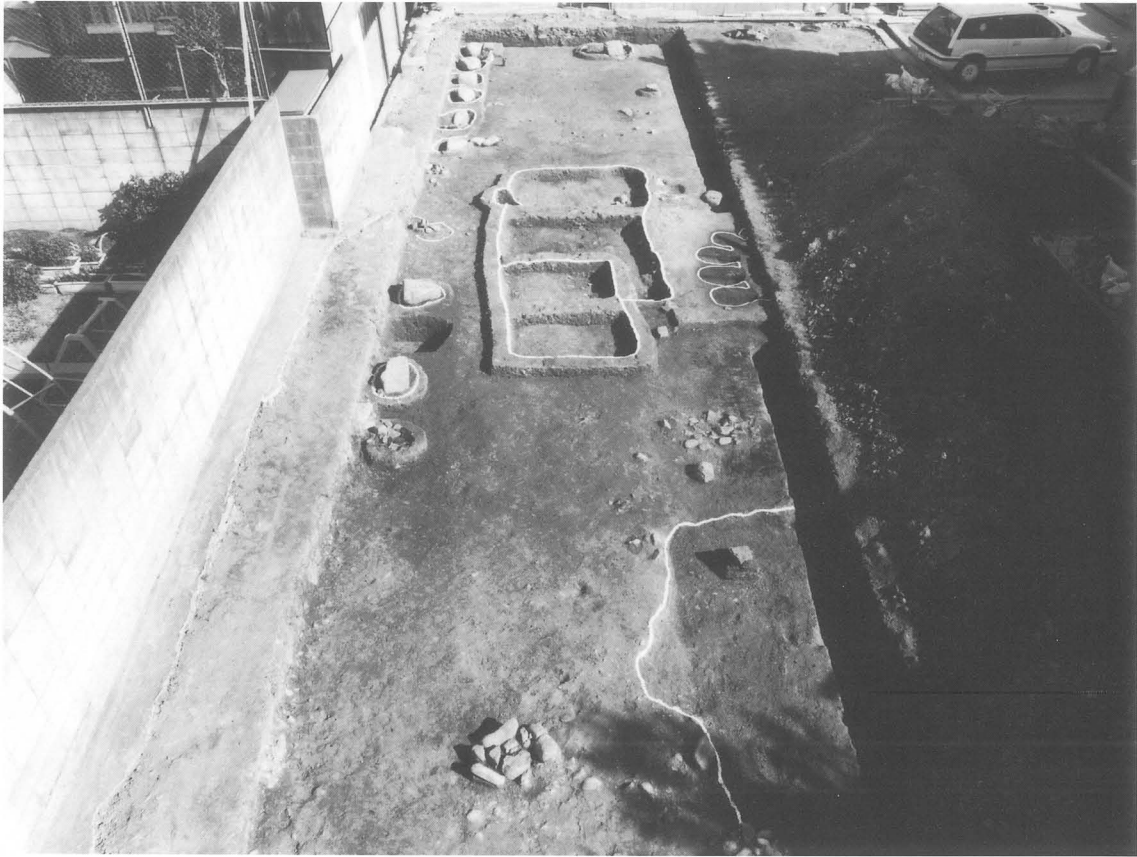


2. 土坑35（西から）



3. 埋甕出土状況（南から）

図版18



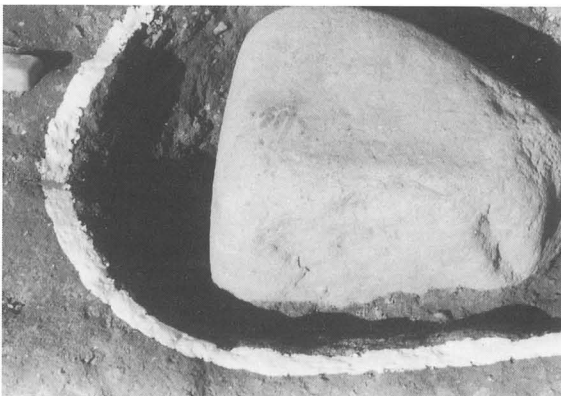
1. 第2遺構面全景（西から）



2. 竈（西から）



3. 礎石1（南から）

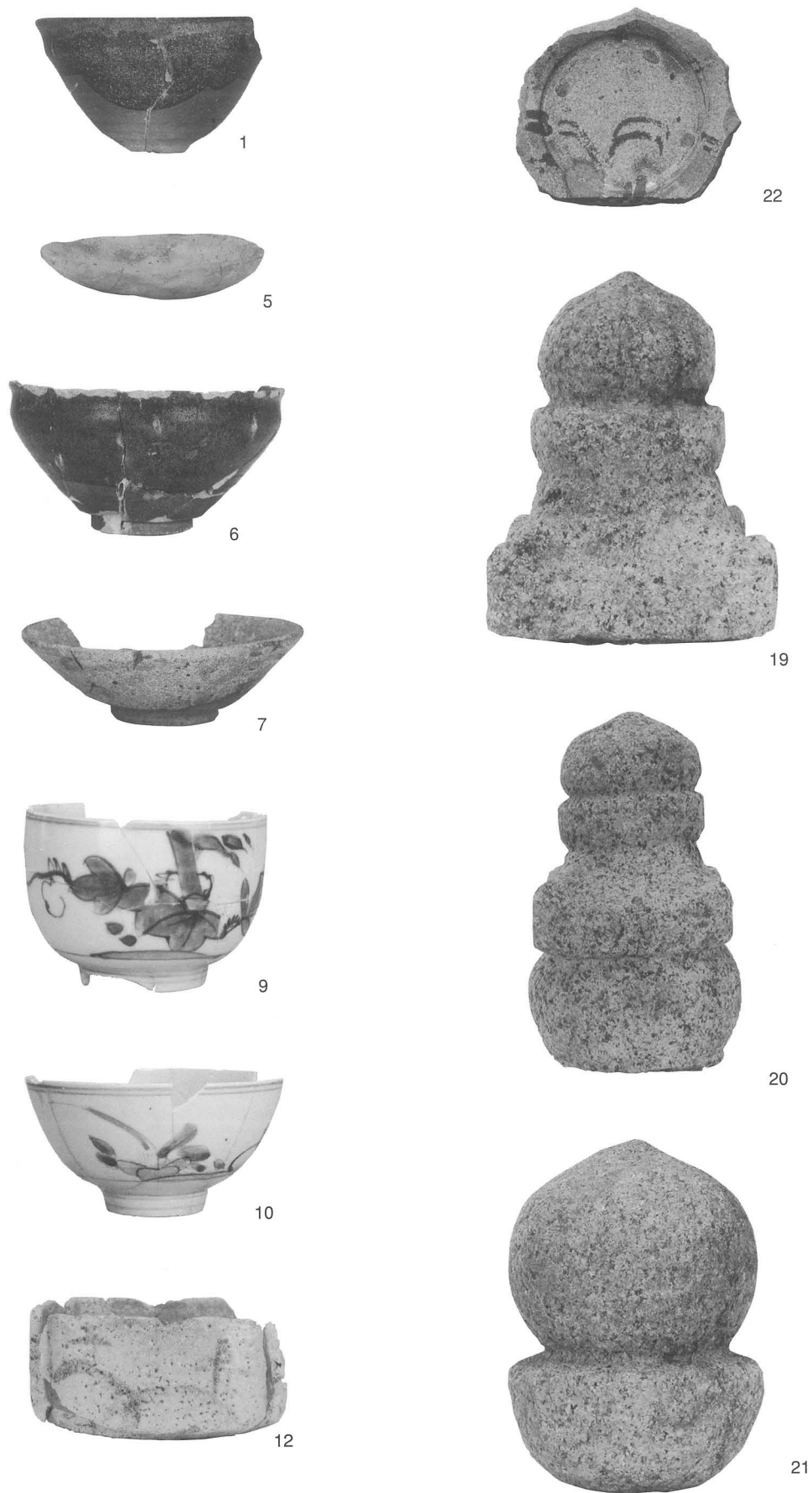


4. 礎石3（南から）



5. 礎石9（南から）

図版19



出土遺物 (1) 土坑21 (1) 土坑37 (5) 土坑38 (6) 土坑45 (7)
土坑35 (9・10・12) 溝1 (19・20・21) 溝2 (22)

図版20



23



32



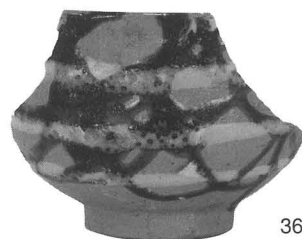
33



25



34



36



26



41



27



42

出土遺物 (2) 土坑 7 (23) 埋甕 5 (25) 土坑 2 (26・27・32~34・36)
焼土土坑 (41・42)

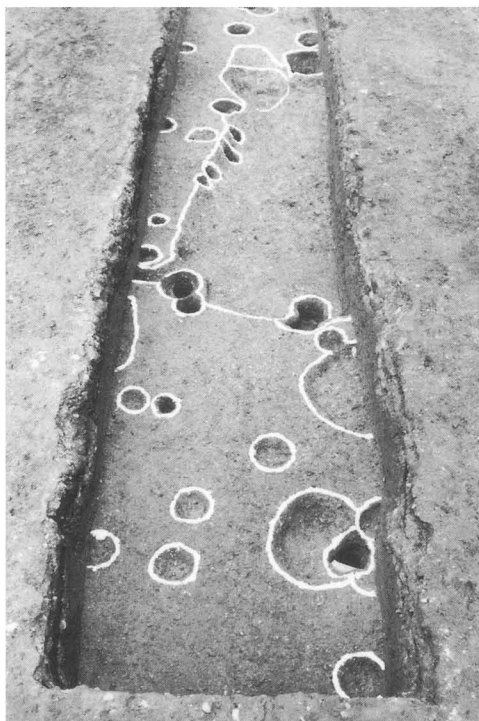
図版21



1. 第3遺構面全景（北から）



2. 第2トレンチ
第3遺構面全景（東から）

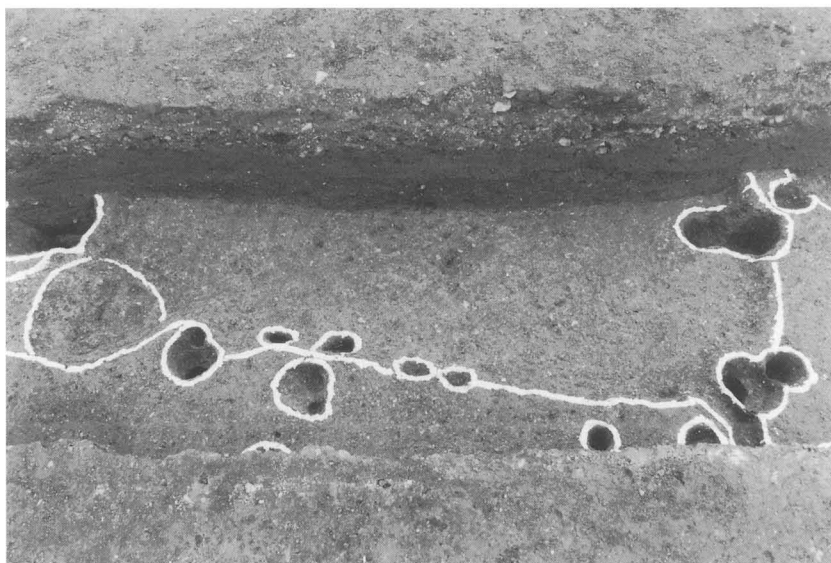


3. 第1トレンチ第3遺構面全景（北から）

図版22



1. 掘立柱建物跡
(東から)

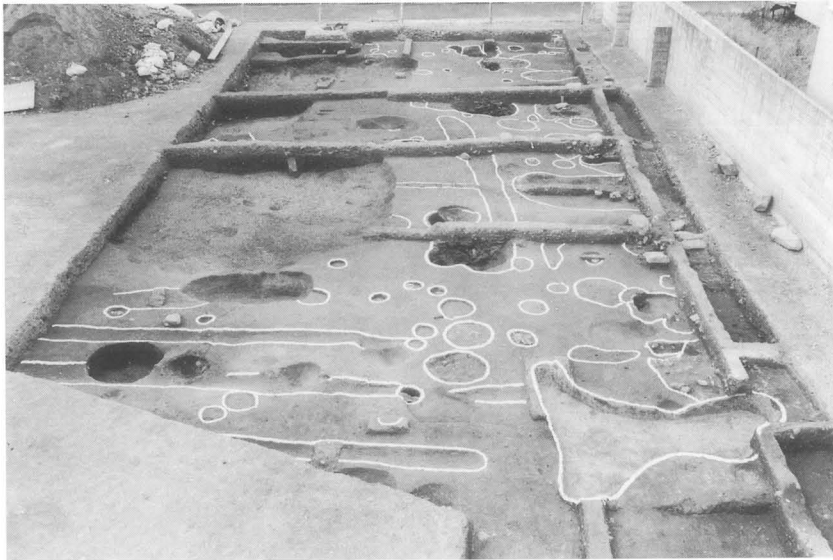


2. 第1トレンチ
土坑1 (東から)



3. 第2トレンチ
溝5 (東から)

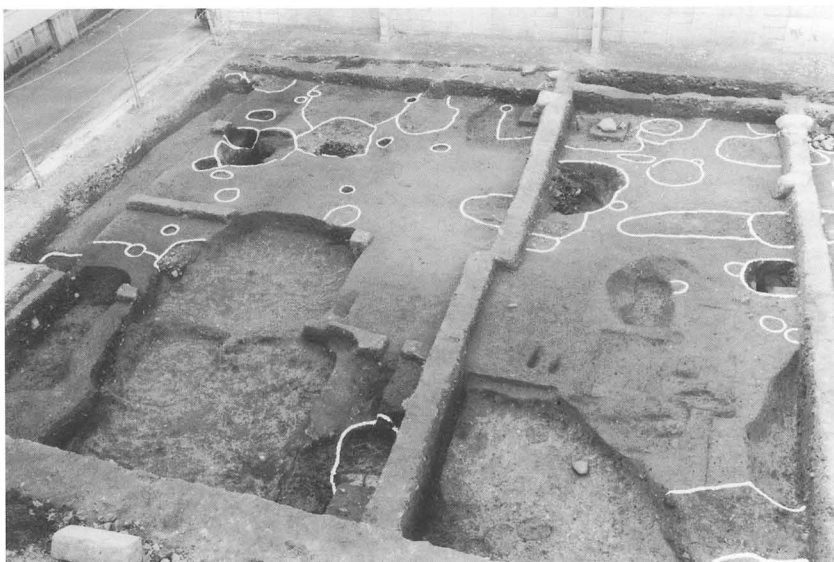
図版23



1. 第2遺構面全景
(北から)

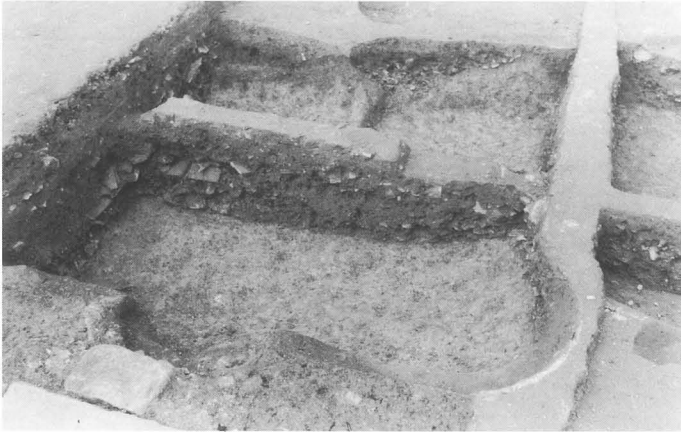


2. 第2遺構面
(東から)



3. 第2遺構面
(東から)

図版24



1. 土坑10（北から）



2. 土坑11断面（西から）



3. 土坑19断面（北から）



4. 土坑33断面（北から）

図版25



1. 土坑47 (西から)



2. P74 甕出土状況 (東から)



3. 丸瓦組み暗渠 (北から)



4. 土坑23 石造品出土状況
(北から)

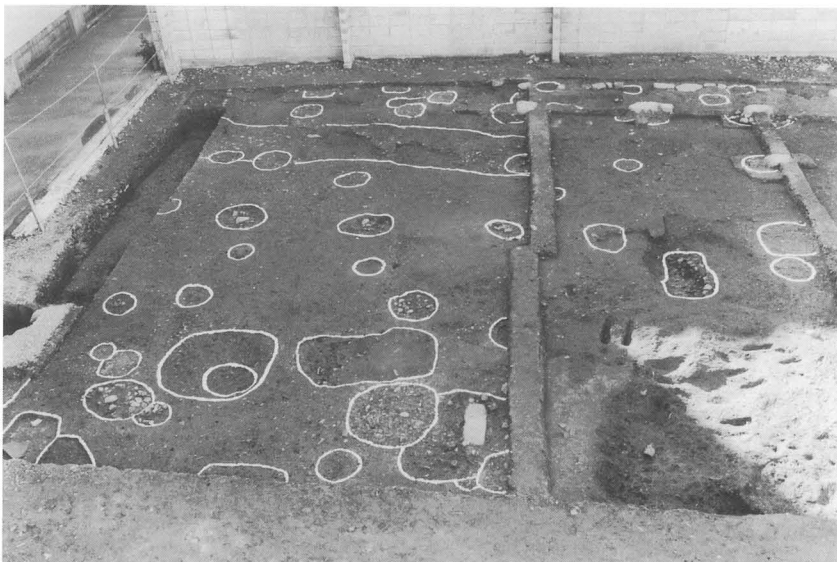
図版26



1. 第1遺構面全景
(北から)



2. 第1遺構面北側
(東から)

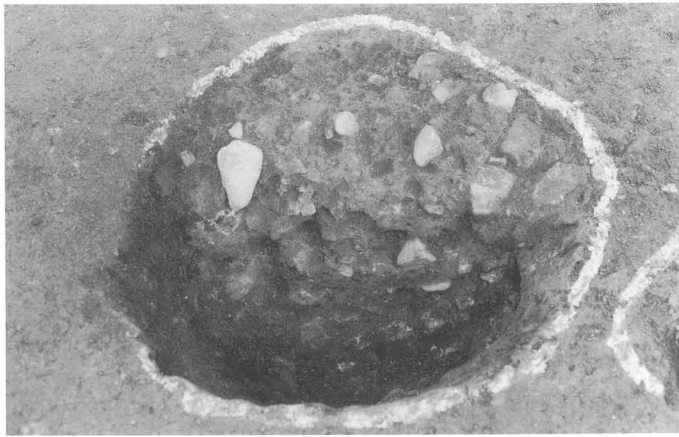


3. 第1遺構面南側
(東から)

図版27



1. 礎石5断面（南から）



2. 礎石3断面（南から）



3. P26断面（南から）



4. 井戸1（北から）

図版28



1. 水琴窟1 断面（西から）



2. 水琴窟2 断面（東から）

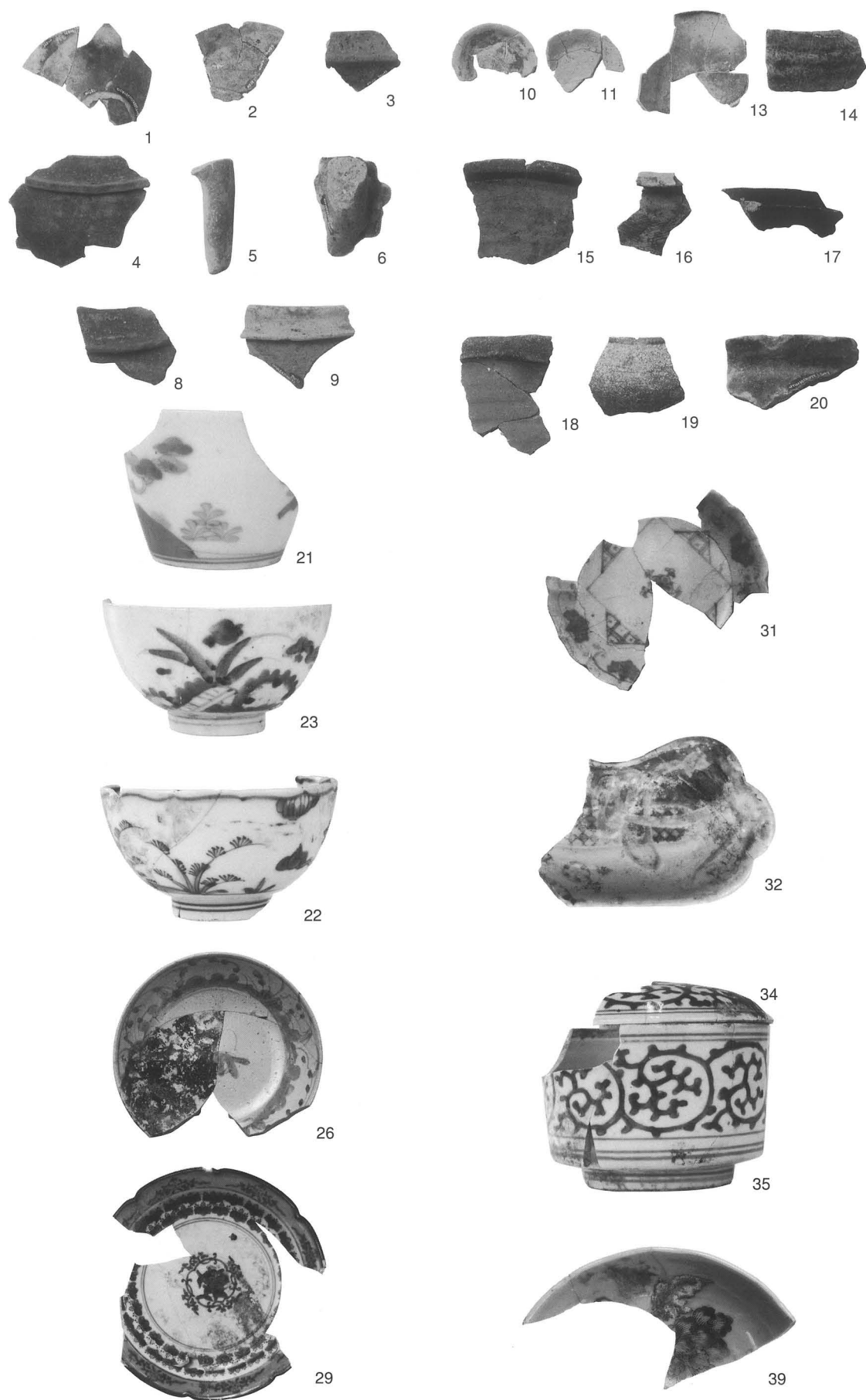


3. 池1（東から）



4. 池2（東から）

図版29



出土遺物 (1) P120 (1) 土坑50 (2~6) 土坑51 (8・9)
第1トレンチ土坑1 (10・11・13~17) 第2トレンチ溝5 (18~20)
焼土土坑1 (21~23・26・29・31・32・34・35・39)

図版30



40



47



43



48



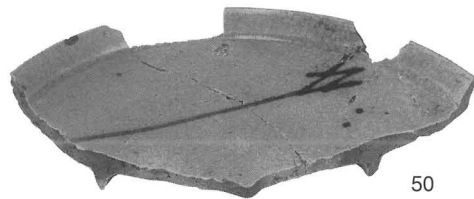
42



49



44



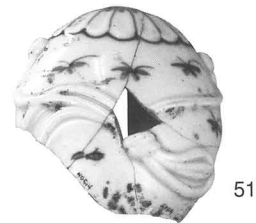
50



45



52



51



46



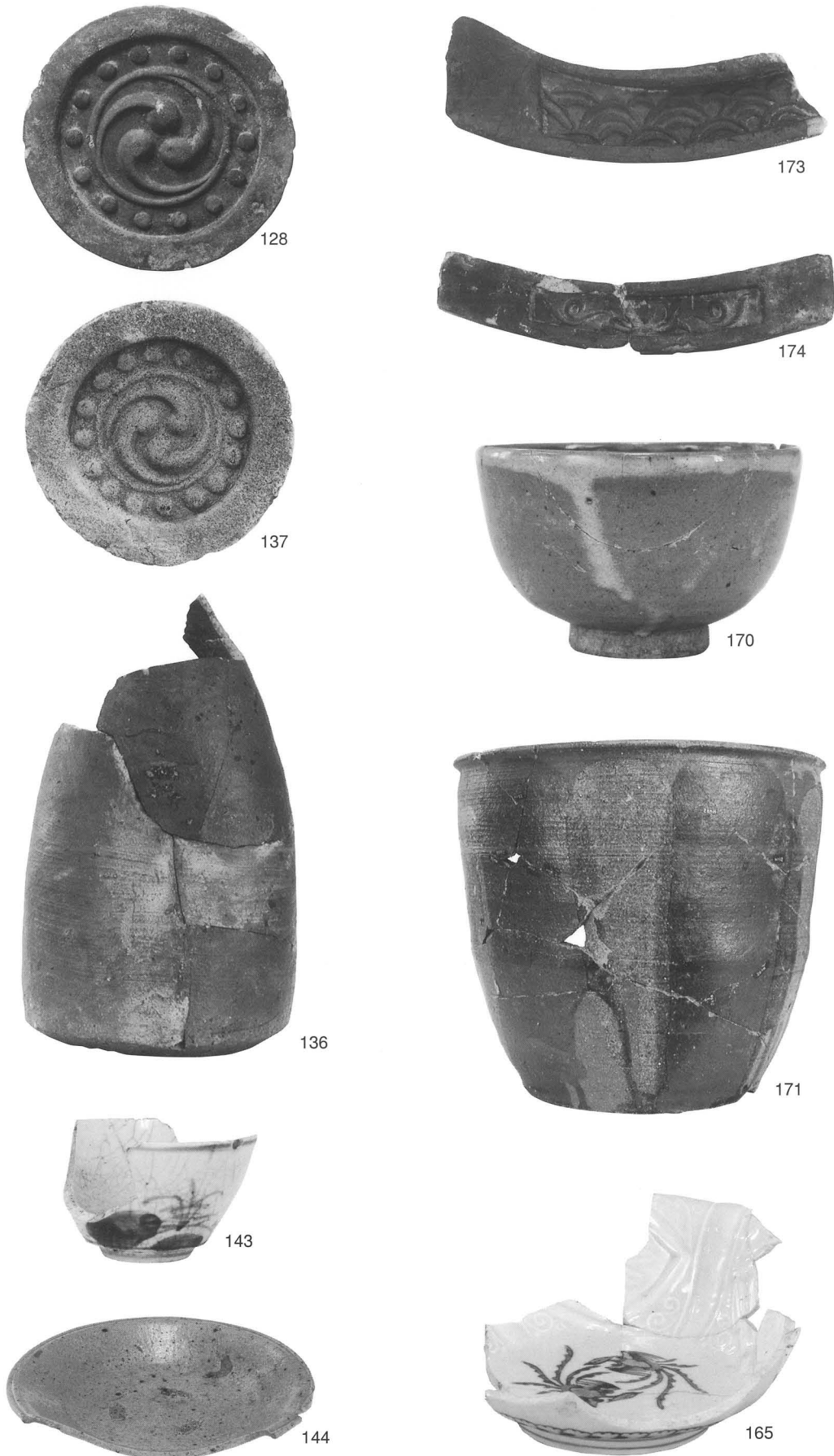
53

図版31



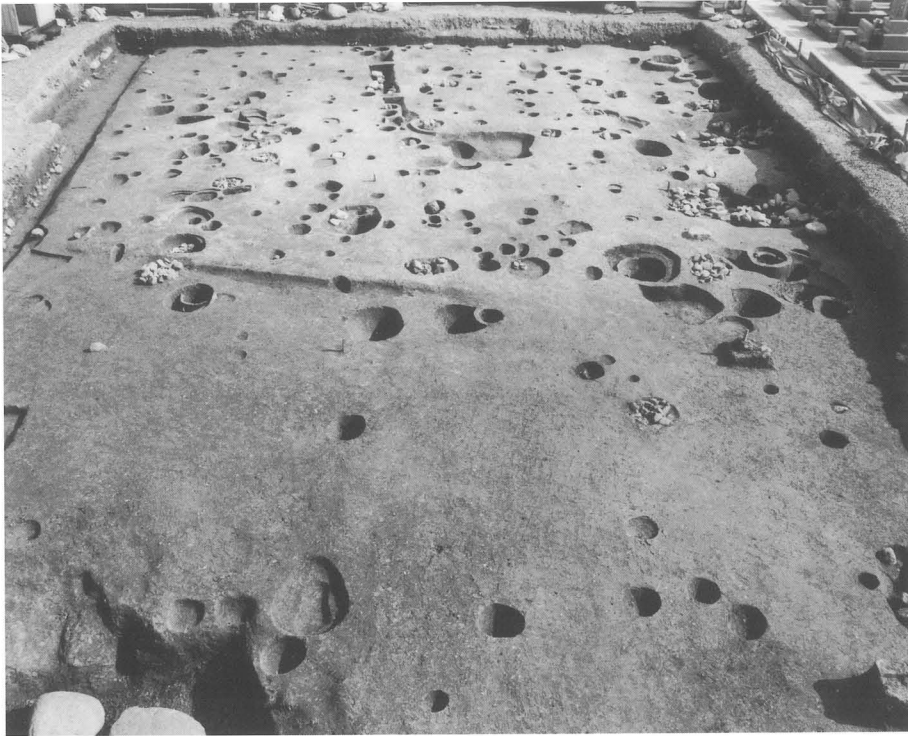
出土遺物 (3) 焼土土坑 2 (59・60・62・64・69・73) 第 2 トレンチ土坑 1 (76・82・83) 第 2 トレンチ土坑 6 (85) 土坑 9 (91・111・114)

図版32

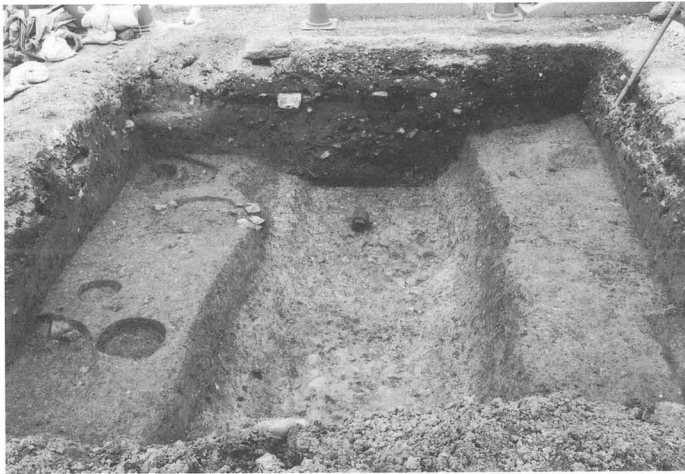


出土遺物（4） 土坑10（128） 土坑19（136・137） 土坑33（143・144）
井戸1（170・171・173・174） 礎石建物（165）

図版33



1. 遺構面全景（南から）



2. 第1トレンチ東側全景
（東から）

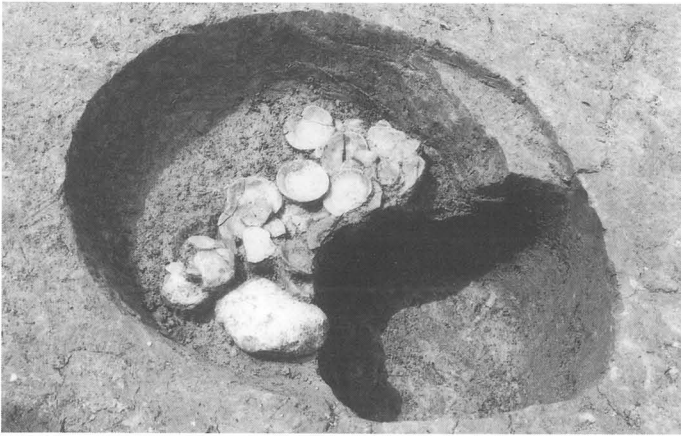


3. 第1トレンチ西側全景
（東から）

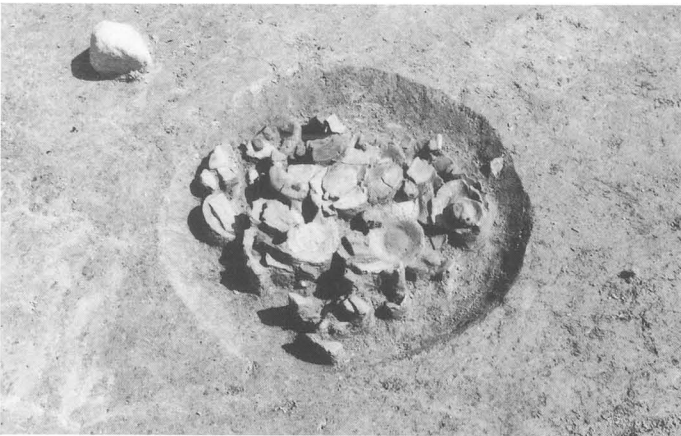
図版34



1. 土坑1 土師皿出土状況
(西から)



2. 土坑2 土師皿出土状況
(北から)



3. 土坑3 土師皿出土状況
(南から)



4. 土坑4 遺物出土状況
(西から)

図版35



1. 土坑7 (西から)



2. 土坑22 (東から)



3. 第1トレンチ東側 溝1断面
(西から)

図版36



1. 溝2 (北から)



2. 溝2断面 (南壁) (北から)

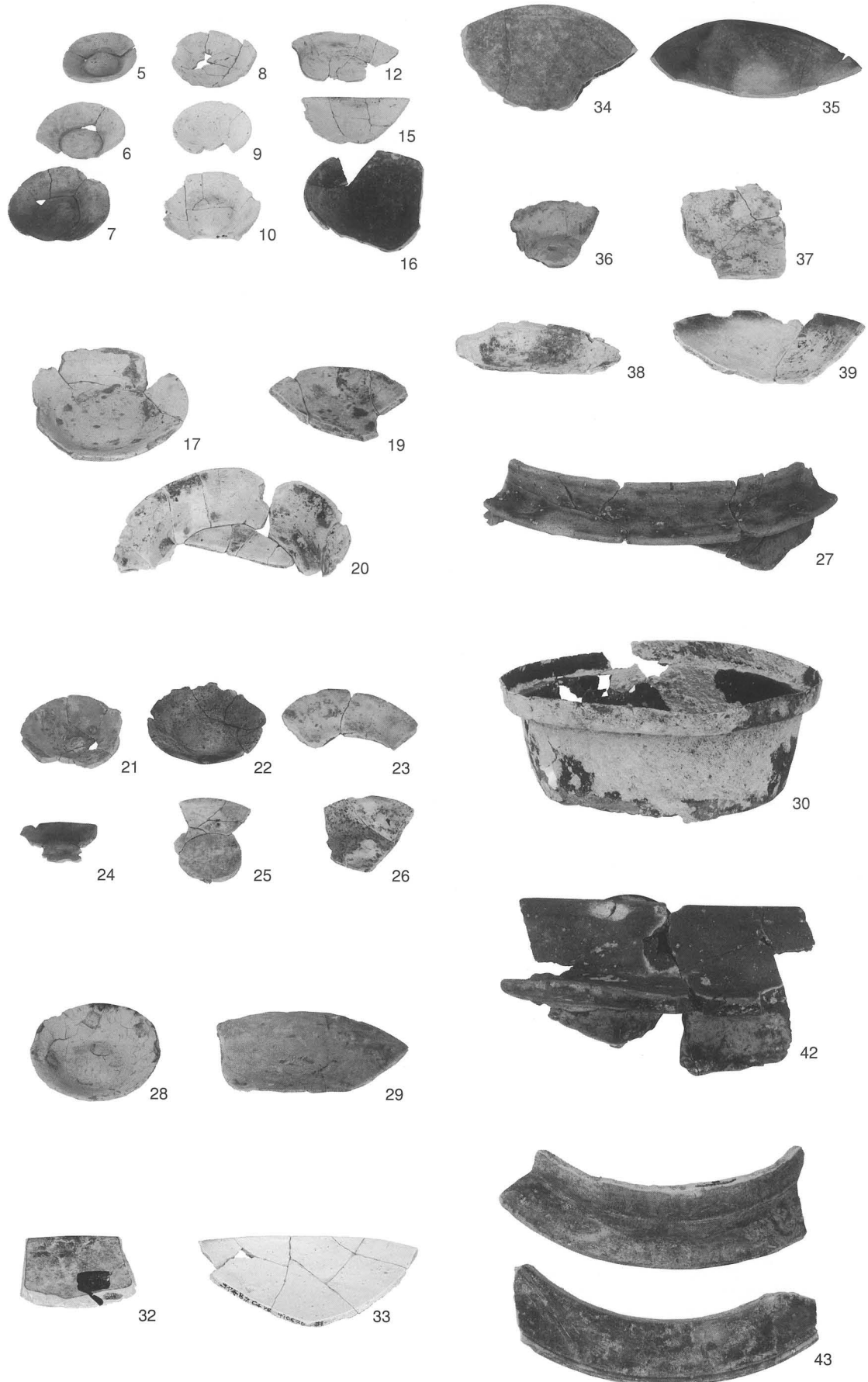


3. 石敷き参道 (西から)



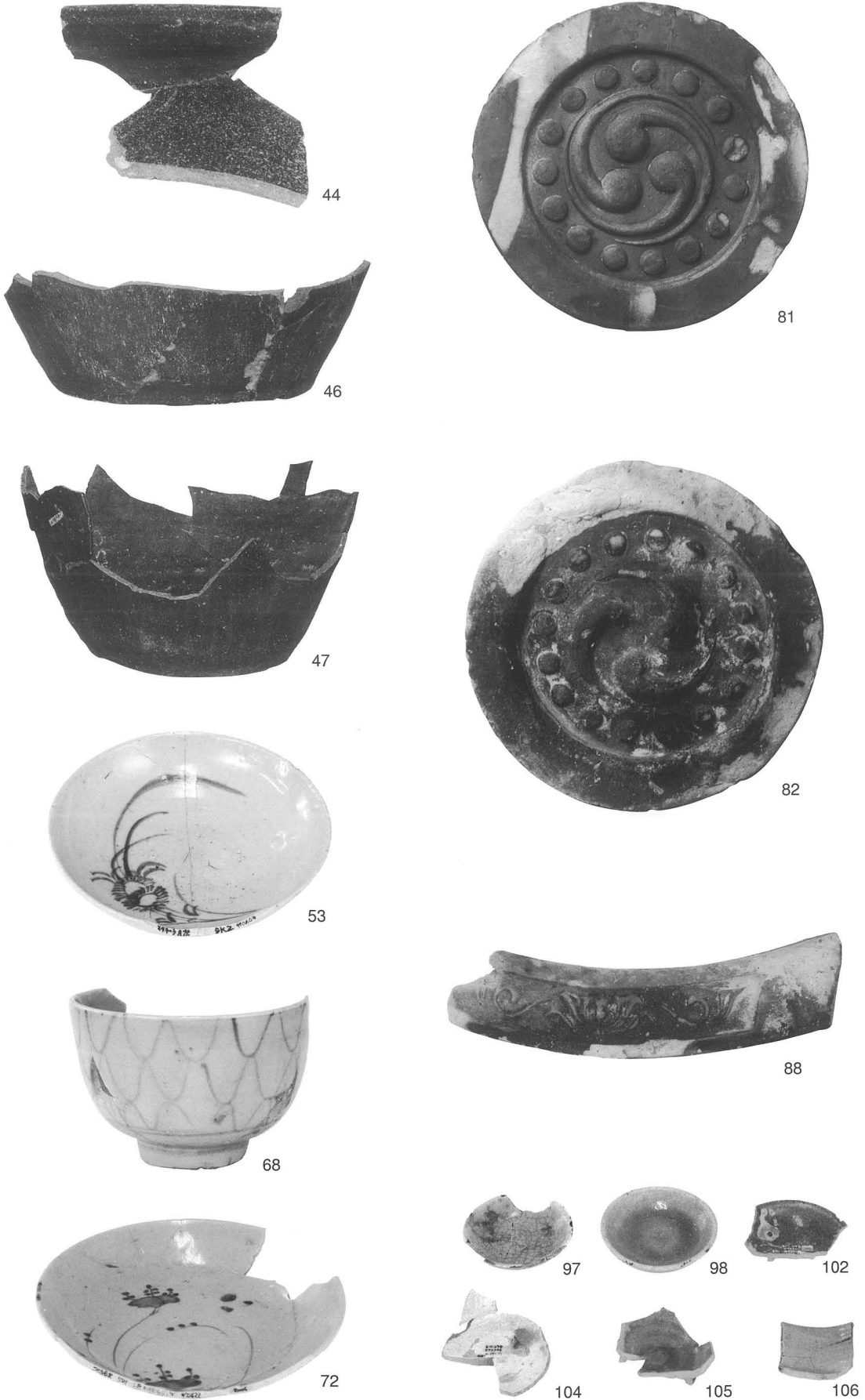
4. 石敷き参道 (東から)

図版37



出土遺物 (1) 土坑1 (5~10・12・15・16) 土坑2 (17~19) 土坑3 (21~26)
 土坑4 (27) 土坑5 (28・29) 土坑6 (30) 土坑7 (32) 土坑8
 (33) 土坑9 (34・34) 土坑10 (36~39) 土坑14 (42) 土坑21 (43)

図版38

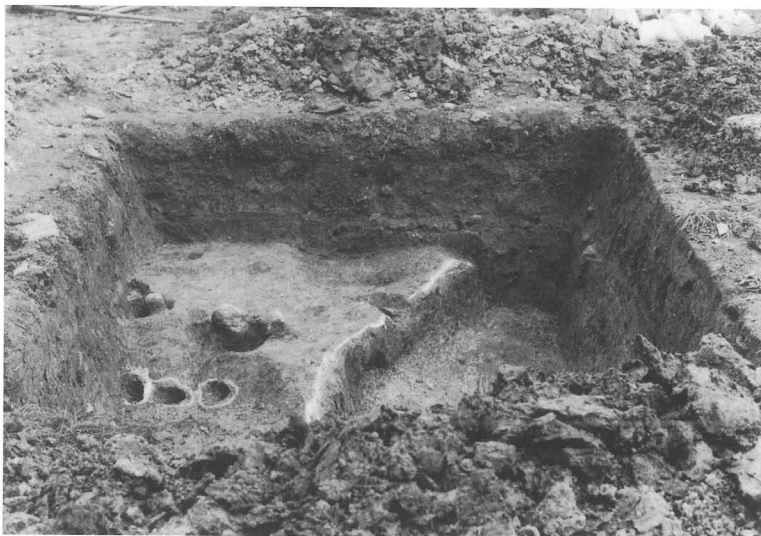


出土遺物 (2) 土坑21 (44) 土坑17 (46) 土坑20 (47) 土坑22 (53)
 溝1 (68・72・81・82・88) 包含層 (97・98・102・104~106)

図版39



1. 第1トレンチ
上面遺構全景（東から）



2. 第2トレンチ
下面遺構全景（西から）



3. 第2トレンチ
上面遺構全景（東から）

図版40



1. 第3トレンチ
下面遺構全景（西から）

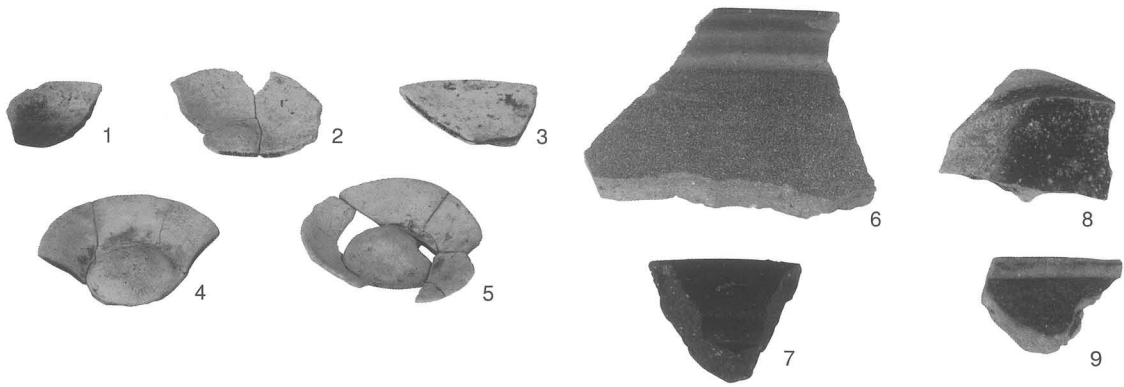


2. 第3トレンチ
上面遺構全景（西から）



3. 土坑2（東から）

図版41



出土遺物 P5 (1) 土坑6 (2) 土坑2 (3) P6 (4~6)
土坑4 (7・8) 東側焼土層 (9)

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第28集
伊丹市埋蔵文化財調査報告書
震災復旧・復興事業に伴う発掘調査
2003年3月

発 行 伊 丹 市 教 育 委 員 会
兵庫県伊丹市千僧1丁目
TEL 072-783-1234
印 刷 関 西 成 光 株 式 会 社

